

2017 年度

東洋大学審査学位論文

YWCA による女子青年教育の研究

—1920～30 年代の東京 YWCA の事業を中心に—

文学研究科教育学専攻博士後期課程

学籍番号 4170100001      中本 かほる

## 目 次

序章 .....	1
第 1 節 研究目的 .....	1
第 2 節 先行研究 .....	6
1. 女性史としての YWCA 研究とその特徴 .....	10
2. 戦争システムとジェンダー論を視点とした YWCA 研究とその特徴 .....	12
3. 書誌分析による YWCA 研究とその特徴 .....	13
第 3 節 研究方法と構成 .....	15
 第 1 章 YWCA の設立 .....	21
第 1 節 19 世紀リバイバル運動・エキュメニカル運動と YWCA の成立 .....	22
第 2 節 英米女性たちの奉仕活動と YWCA .....	25
小 括 .....	29
 第 2 章 日本 YWCA の設立と婦人宣教師の役割 .....	32
第 1 節 日本における YWCA 設立期の女子教育 .....	33
1. 明治期の女子教育 .....	33
2. 明治期キリスト教と婦人宣教師 .....	34
第 2 節 日本 YWCA の設立と婦人宣教師 .....	37
第 3 節 日本 YWCA の設立を支えた日本人 .....	39
小 括 .....	46

第3章 東京YWCAの独立 .....	49
第1節 初期東京YWCAの事業 .....	51
1. 寄宿舍事業 .....	51
2. 教育事業 .....	52
3. 社会事業 .....	52
第2節 東京YWCAの独立 .....	54
第3節 独自の運動を支える財政的自立 .....	58
小 括 .....	62
第4章 東京YWCA有職婦人部による女子教育 .....	65
第1節 女性の労働者化の進行と、YWCAによる職業教育の拡大 .....	65
1. 職業教育 .....	66
2. クラブ活動 .....	66
第2節 東京YWCAにおける「有職婦人部」設立 .....	67
1. 東京YWCAの事業に参加した有職婦人 .....	68
2. クラブ員 .....	71
3. 「一般」の有職婦人部会員 .....	74
第3節 東京YWCA「有職婦人部」労働部 .....	76
1. 「有職婦人部」労働部の設置 .....	76
2. 労働婦人 .....	77
小 括 .....	78

<b>第5章 東京YWCAによる社会事業の展開</b>	82
第1節 東京YWCA社会事業「私共の家」の概要	83
第2節 「私共の家」設置へ	90
1. クリスマス奉仕	90
2. 白山御殿町における「私共の家」の開設	92
第3節「私共の家」の事業展開	96
1. 事業概要	96
2. 事業展開と各期の特色	102
第4節「私共の家」の廃止	109
小 括	112
 <b>第6章 東京YWCAの職員とその養成</b>	119
第1節 1920年代後半～1930年代の東京YWCA幹事職員	119
第2節 職員の養成	123
第3節 女子青年担当職員について	130
小 括	134
 <b>第7章 処女会・女子青年団とYWCAの比較研究</b>	137
第1節 処女会・女子青年団の概容	137
第2節 処女会・女子青年団と東京YWCAの事業比較	139
第3節 処女会・女子青年団の修養とYWCAの修養	147
1. 「女子青年の修養機関」と言われた処女会・女子青年団における修養	149
2. 「修養会」にみるYWCAの修養	150
小 括	153

終章 .....	156
第1節 結論 .....	156
1. YWCA 成立の背景.....	156
2. YWCA 事業の実態 .....	157
3. 日本の女子教育における YWCA の位置付け .....	158
4. YWCA の教育学的な特徴 .....	161
第2節 今後の課題 .....	162
引用・参考文献.....	165
巻末資料.....	180

## 凡 例

- 1 常用漢字、現代かな使いを原則にしたが、引用文は出来る限り原文のままとした。
- 2 年代表記は西暦を原則とした。
- 3 「YWCA」は日本語では「キリスト教女子青年会」あるいは「基督教女子青年会」と表記されるが、本文では引用等で必要な場合を除いて、「YWCA」と表記した。
- 4 「世界 YWCA」は 1945 年頃までは「万国 YWCA」と記されていたが、本文では「世界 YWCA」に統一した。
- 5 「日本 YWCA」は「ナショナル YWCA」であるが、本文では「日本 YWCA」と表記した。
- 6 各地域の YWCA は 1985 年頃まで「市 YWCA」と表記され、その後「地域 YWCA」と記されるようになったが、本文では「ローカル YWCA」と表記した。
- 7 国名については、正式名称ではなくイギリス、アメリカなどの表記を原則にした。ただし、引用文では漢字表記（例：英米）を使用する場合がある。
- 8 女性の宣教師についての表記は、原則として「婦人宣教師」とした。
- 9 人名表記は資料によるが、英文字使用の場合は以下の例を基本とした仕様とする。  
例：パーカスト (H. parkhurst, 1887-1973)  
また、Miss、Mrs. の使用も元資料により、それぞれ「ミス」、「ミセス」と表記する。
- 10 東京 YWCA 機関紙（誌）『地の塩』は、東京 YWCA 機関誌と表記する。ただし文章中では、章の初出以外は『地の塩』のみで表記する。号数及び発行年は（第〇号、〇年〇月）と表記する。
- 11 日本 YWCA 機関誌『明治の女子』及び『女子青年界』も上記と同様の扱いとする。
- 12 「女工」、「看護婦」など、現在使用されない用語に付いては、歴史研究の性格上、引用元資料の表現に倣って使用した。
- 13 本論で引用する資料には多数の人名が出てくるが、すべて機関の公的記録として残されており、すでに 50 年以上を経ていることから、個人情報についての配慮が必要なデータ以外は、そのまま実名を使用した。

## 略記

YWCA (Young Women' s Christian Association : キリスト教女子青年会)

YMCA (Young Men' s Christian Association : キリスト教青年会)

WSCF (World Student Christian Federation : 万国基督教学生連盟～1945、  
世界学生キリスト教連盟 1945～)

## 序 章

### 第1節 研究目的

西洋キリスト教世界で誕生した YWCA (Young Women's Christian Association : キリスト教女子青年会) が日本で正式に設立されたのは 1905 年であった。YWCA は、その設立の前年に女子青年に向けた機関誌を発行した。機関誌の巻頭言には 10 編の聖句と共に「高きに登れ」との理想が掲げられていた。

神の世界に在りて最とも美はしきは、青年の男子女子が高き志を立てゝ世の活動に加はり、靈魂に恥じ之を辱かしむるが如き事を為さず、善き思ひ、善き行ひ、善き境遇の中に生涯を過ごさんと誓ふことは是れなり。日本国民多数の今日急務とする所は高き理想を仰ぐことなり。「高きに登れ」とは神の萬人に命じたまふ所ぞ<sup>1</sup>。

こうした理想を、YWCA はどのような働きかけと具体的事業によって実現しようとしたのであろうか。

日本にも YWCA 設立をという気運は、世界 YWCA の東洋への関心と、1870～80 年代に来日し各地で活躍していた婦人宣教師たちからの要請を背景として、1900 年世界 YWCA 初代総幹事レイノルズ (Miss Annie M. Reynolds、生没年不明) が中国、日本を訪問したことにより一挙に高まったと言われている。翌年、在日宣教師による全国婦人宣教師大会は、紡績女工の現状への危惧と日本の女子教育の可能性を開拓するために YWCA が働きかけようと世界 YWCA に要請した<sup>2</sup>。レイノルズも詳細な報告を世界 YWCA 常任委員会に送っていた。1902 年ジュネーブで開催された第 2 回世界 YWCA 大会において、中国、日本への取り組みをすることが決議され、1903 年アメリカ YWCA 幹事モリソン (Theresa Morrison、生没年不明)<sup>3</sup> が最初の外国人幹事として日本 YWCA 創設援助のため来日し、1905 年 12 月まで滞在した。1904 年日本 YWCA 創立委員会が組織され、最初の仕事として『明治の女子』<sup>4</sup> を創刊した。また、同年 12 月にはカナダ YWCA 幹事マクドナルド (Miss A. Caroline Macdonald、1874 年－1931 年)<sup>5</sup> が派遣された。1905 年日本 YWCA 委員会が発足し日本 YWCA が設立され、『明治の女子』は日本 YWCA 機関誌となった。

創立から 1912 年頃までの事業の大部分は、学生に向けてのものであり、学生 YWCA の組

組織化が促進された。最初の学生 YWCA が組織されたのは、横浜の共立女学校だと言われているが、必ずしも順調だったとはいえないようだ。河井道子<sup>6</sup>は機関誌に次のような一文を寄せている。

同校教授のウェルスの述懐談を聴きますと、当時生徒に自由組織を許すことを人々は危険視し、又生徒がたつて司会したり、高壇より意見を述べる事等に対する反対の叫は教員の中からも起こったとの事であります<sup>7</sup>。

1907 年には学生 YWCA は専門学校、高等女学校 14 校に広がり、1925 年には 28 校 4,000 名有余の会員を有していた<sup>8</sup>と言われている。一方、ローカル YWCA<sup>9</sup> は、日本 YWCA 設立の翌月に東京 YWCA が設立され、最初の事業として高等女学生の寄宿舎事業を開始している。その後、工女、看護婦、職業婦人、移民女性など若い女性を対象とする事業は各都市で展開され、横浜（1916 年）、大阪（1918 年）、神戸（1920 年）、京都（1923 年）、名古屋（1933 年）の 6 都市にローカル YWCA が設立されていった。1925 年、日本 YWCA は第 1 回全国総会を開催し、この総会をもって、日本 YWCA は日本 YWCA 同盟（基督教女子青年会日本同盟）となり、ローカル YWCA 及び学生 YWCA からなる全国組織としての形が整った。

本研究は、東京 YWCA が実施した、1920～30 年代の青年期女子への社会教育事業について論じるものである。YWCA は理想とする青年像へ向け女子青年を育成するという目標を掲げ、YWCA に集った青年期女子への教育的働きかけを行った。その理想とする青年像はどのようなものであり、またどのような方法をもって実現しようとしていたのか、それらを実証的に解明することを通して、戦前期の青年期女子の社会教育史研究における位置づけを明らかにしようと試みるものである。

戦前期、青年期女子の社会教育をテーマとした研究としては、処女会・女子青年団研究が知られている。青年期女子の組織化や、教育の歴史的経緯やその背景及び意図を解明した処女会・女子青年団に関する研究は量的には少なく、内容的にも多様な研究があるとは言いが、主なものとしては、表序 - 1「処女会・女子青年団に関する先行研究」に示した通りである。

大別すると、1. その成立史や団史に焦点を当てた女性史としての研究、2. 処女会・女子青年団の理念及びその事業内容に焦点を当てた実践史、3. その他として雑誌の変遷、身体に関する研究、団体調査に関するものがあつた。



序表-1 処女会・青年団についての先行研究		
1. 女性史		
2015年	松田澄子	「山形県における女性団体の成立過程について：母の会、母姉会から婦人会・処女会へ」山形県立米沢女子短期大学付属生活文化研究所報告(42)、1-15
2012年	肥田正巳	「静岡県の女子青年団史：処女会から女子青年団へ」静岡県近代史研究(37)、30-44
1997年	渡邊洋子	『近代日本女子社会教育成立史－処女会の全国組織と指導思想』明石書店
1996年	渡邊洋子	「戦前・戦中青年女子団体に関する研究：処女会中央部の設立と事業展開」暁星論叢38, 1-32
1993年	中島純	「戦時下農村女性の自己形成と『満州移民』（前）：元飯島女子青年団長の証言から」教育学研究年報12、77-90
1988年	福西信幸	「戦前農村社会教育と女子青年団」梅花女子大学文学部紀要 人文・社会・自然科学編(23、) 35-55
1965年	堀口知明	「地域婦人団体5本の成立と展開2－とくに処女会（女子青年団）を中心にして」福島大学学芸部論集17（第3分冊）、19-28
2. 理念と事業の実践史		
2003年	渡邊洋子	「1930年代の女子青年団と男子青年団－『公共的精神』と『結婚』－」橋本紀子他編『ジェンダーと教育の歴史』川島書店
2002年	渡邊洋子	「1940年代前半期の女子青年団運動の指導理念と事業（Ⅰ）－『国民化』とジェンダーの問題を考える手がかりとして－」京都大学 生涯教育学・図書館情報学研究Vol. 1
1997年	平川景子	「処女会組織化の理念－セクシャリティの装置」明治大学社会教育主事課程年報6、1997年3月20日、47-59
1991年	平川景子	「処女会及び女子青年団組織化の理念－近代的『母性』観と『国民としての自覚』の関係を中心に」早稲田大学教育学部学術研究 教育・教育心理・体育編(40)、33-47
1990年	井上恵美子	「ドキュメント社会教育実践史（戦前編）9－処女会」月刊社会教育34(2)、70-77
1985年	野田久美子	「天野藤男の処女会構想（女性史－家族・親族と女性＜特集＞）」歴史評論(419) 67-82
1982年	岡田洋司	「農村社会における女子青年団活動の実態とその倫理－愛知県下の一地域女子青年団の事例を通して」日本史研究(234)、30-60
3. その他		
2008年	神田より子	「日本における第一次大戦から第二次大戦勃発に至る女子青年団とその雑誌の変遷」人文社会科学研究所年報(6)、13-32
2003年	竹中理恵	「大正中期から昭和初期（1918-1941年）における『非就学青年女子』の身体に関する議論について：機関誌『処女の友』『女子青年』から」日本体育学会大会号(54)、182
1954年	吉田昇	「女子青年団に関する調査」日本教育学会大会研究発表要項13、119

処女会・女子青年団研究の先行研究において渡邊洋子は、従来の「教育＝学校教育」と

いう学校教育中心主義は、「女子教育」という領域を「男子に準ずる」ものと副次的に扱う方向で免罪符化し研究されてきたと述べている<sup>10</sup>。女子社会教育の史的把握については、千野陽一の『近代日本婦人教育史』（ドメス出版、1979年）を引き、「婦人」が全女性を包括する言葉として用いられている。その大半は、上流・中流の「既婚家庭婦人」で、青年女子層は、たまたまその一部に組み込まれていた存在に過ぎず、また従来の「青年団史研究」においては女子青年団を中心とした女子の動向はほとんど取り上げられなかったことを示し、「女性」と「青年」の両カテゴリーの狭間に位置するものとして「青年女子」を捉え、「女子教育」「女子社会教育」に見る、「青年女子」の置かれた研究史的位置付けを概観している<sup>11</sup>。渡邊は女子教育史研究の課題は、史実の発掘を重ね、通史としての女子教育史を表し、それをもって「男女の二元的体系を明らかにし、そのイデオロギー、論理と実態を明らかにするアプローチ」を成立させ、ジェンダー視点に立つ教育史研究を展開することであると述べた<sup>12</sup>。

戦前期西洋キリスト教を背景として誕生したYWCAによる青年期女子を対象とした社会教育事業の発掘解明を行うことは、通史としての女子教育史の一端を明らかにする作業であると考えている。1920～30年代、東京YWCAでの社会教育事業研究は、処女会・女子青年団と同じ青年期女子教育領域での研究である。この二つの女子青年組織は、その歴史的経緯や目指された目的と背景としての思想、その実現のための方法など、大きな違いがあると考えている。と同時に共通した言語や活動形態（修養、交流、集团的諸活動など）も存在している。同時代に展開された二団体の実態が解明されることは、通史としての女子教育史の厚みを増し、ジェンダー視点に立つ教育史研究の幅を広げる一歩となり得るといえよう。本論では、「女性」と「青年」の両カテゴリーの狭間に位置する青年期女子への社会教育事業を通して、YWCAが実現しようとした教育を実証的に解明するアプローチを試みる。

本研究では戦前期のYWCAを対象とするが、その資料は戦中期の消失などにより乏しく、また機関としての議事録など一部を除き公表されていないという現状であった。第一資料となり得るものには日本YWCA『明治の女子』・『女子青年界』（1904年～1944年）と東京YWCA『地の塩』（1926年～1939年）の機関紙誌とがある。両機関誌とも現在復刻版が刊行され<sup>13</sup>、YWCA事業の実像を機関誌記事から解明できる状況となり、研究資料として活用され始めている。

本論では 1920～30 年代の東京 YWCA の事業の解明を通し、その時代、東京 YWCA が取り組んだ青年期女子への社会教育の実態を明らかにしたいと考えている。それは 1920～30 年代が日本 YWCA の創立時代を経て、外来の YWCA が、日本社会の中で女子青年に向け展開しようと試みた事業が一定の定着と発展を見せてきた時代であったからである。またそれは大正デモクラシーの余波の残る比較的自由な時代であり、その後教化団体として国家主義的体制の中に組み込まれ、団体の性質を変えざるを得なくなる時代の一步手前であったなど、YWCA が持っている本質的な姿を示していた時期であったと考えるからである。

先に述べたように青年期女子は研究対象として十分な位置づけがなされてこなかったと言われているが、日本の YWCA も青年期女子を対象とした事業であるという点において、論じられることが少ない研究分野であった。また、日本基督教矯風会に代表されるキリスト教婦人運動の分野においても、研究対象として論じられることは少なかった。それは YWCA が、その時代を象徴する事象や課題を中心に婦人運動を牽引した組織というより、実践を通し「善き思ひ、善き行ひ、善き境遇の中に生涯を過ごさん」と表現されるような、人格や精神の育成という抽象的課題を迫及した組織であったからだと言えよう。そうした特徴は、宗教的信仰として捉えられ、研究対象となり難いと考えられていたのではないかと推測する。日本の YWCA は、青年期女子という対象者と、その事業の目的が人格や精神の育成という抽象的課題であったことにより、客観的研究対象になり難い団体であったと言えよう。

では YWCA が言う人格や精神の育成の内実はどのような言葉に置き換えられるのであろうか。18 世紀から 19 世紀にかけて欧米社会でのリバイバル（信仰復古運動）や産業革命、市民革命、独立運動などの社会変革の波は、前近代社会からブルジョアジーの社会へと社会構造を変革する大きな流れとなった。その新しい体制は「自由、平等、博愛」という言葉に象徴される新しい価値観を生み出し、近代民主主義思想を形成させる歩みを始めていた。YWCA はそうした時代を背景に設立された。「人格の育成」という言葉で表現される内実は、明確な表現や意識としての未成熟さを持ちつつも、近代民主主義社会を構成し、その社会を支える一個の人格としての育成、言い換えるならば、一人の女性の生涯に及ぶ主体者としての育成が目指されていたのではなかろうか。それは、YWCA の思考する理想の社会、すなわち神が求める社会であり、「神の国」を実現実体化させる取り組みへとつながるものとして存在していたのではないかと考える。こうした意識は YWCA 運動の中にあらわれる自律性に見る事が出来る。欧米キリスト教女性たちの社会活動の歴史を団体の成立背景

に持ち、初期の運動の担い手たちは、権力に与せず独自の意思を貫く力量（思考力、経済性、社会性など）がある程度担保されていた人々であった。1920～30年代にかけての東京YWCAでは、女子青年の自律性を求め、その基礎力として、女子青年たちへ彼女らの知らない社会を見せ、異質な人々との共労を経験させ、多元的な思考を認め合うといった近代民主主義を内実化させる女子青年教育が実践されていたのではないかと考えるからである。女子青年の自律を可視化させるような教育が、また制度化には戦後を待たねばならなかった男女平等という女子教育がこの時代に思考されていたとも考えられる。本論は以下の4点からその実態解明と検証に取り組むものである。第1に、YWCA成立の背景を明らかにする。第2にYWCA事業の実態を明らかにする。第3として、日本の女子青年教育におけるYWCAの位置付けを明らかにする。そして、第4にYWCAの教育学的な特徴を明らかにする。

## 第2節 先行研究

子ども期から成人期の間にある青年期<sup>14</sup>にある人を青年と呼ぶ。青年期は近代化の社会構造の中から生まれ、日本においては明治期に登場したといわれる。用語としての「青年」は、YMCAの「Young Men」の邦訳とされ、唐詩選の一節から青雲の意に因み「青年」と命名<sup>15</sup>された「小崎弘道の造語」<sup>16</sup>であるとする説が社会教育史上の通説になっている<sup>17</sup>。YWCAが「Young Women」を「女子青年」と邦訳するに付いては、「婦人青年会」との案もあったが、「当時女学校の名前を見ると青山女学院とか女子学院とあるのに鑑みて、遂に基督教女子青年会に落ち着き、今日に至ったのである」<sup>18</sup>とYWCA内では記録されている。「婦人」ではなく「女子」を使用したのには、高等女学校に通う女子学生が目の対象者として認識されていたことが考えられ、女性全体を指す「婦人」に対し「女子」が選ばれたのではないかと推測する。そこに既に使用されていたYMCAの「青年」を結合させ「女子青年」としたのではないだろうか。またそこでは、YMCAが描いた「青雲の志」という理想的な青年像をYWCAにおいても共有していたものと考えられる。それは、先に挙げた日本YWCA機関誌創刊号『明治の女子』巻頭言「高きに登れ」において、「青年の男子女子が高き志を立て」と記しているように、「青雲の志」とも通じるイメージを描く事が出来る点と、日本YWCA創立委員会はYMCA主事グレン・M・フィッシャー（G. M. Fisher 生没不明）宅で開催

され、その夫人は創立委員の一人でもあったように、YMCA との深い関係性があり、YWCA 設立に向けての具体的な動き方には YMCA を参考に押し進められた点も多くあったからである。

矢口徹也は「明治期における青年概念の登場—兵学寮青年学舎を中心に—」『東京都教育史年報』第2号<sup>19</sup>において、小崎説以前の用語として「青年」が存在したことを示しつつ、「明治以降の『青年』はむしろ基督教青年会とは別の姿で発展していく。戦前の教育史の中で『青年』を考えた場合、『青雲の志』というさわやかなイメージで捉えきれない部分が多い」と兵学寮青年学舎の「青年」像を明らかにする中で「近代的な徴兵制を視野に置いた青年学舎は、主に20代前半の年齢層を対象としている。」「ここでの『青年』は陸軍が作り出した新しい年齢区分」であり「青年の背景に軍事、教育両面からの国家的意図が見えてくる」と、「青年」と云う用語の持つ概念はその対象年齢をも含め一様では無い事を示している。

矢口悦子は「女子青年」という用語の持つ問題性を「『女子』という表現は学校教育における『男子』と『女子』を連想させるため、生徒、学童の時期を超えた若い成人を指すには不適切であると言える。また『女、子ども』という表現の差別性も批判されている」と指摘しつつ<sup>20</sup>、「自己の確立に向けて戦う『疾風怒濤』の時代」である青年期が戦前期の女性に存在し得ていたのかを問い、「青年」と言う呼称に対応する言語は見当たらず「あえてあげれば『女子青年』と表現するしかない。」<sup>21</sup>としている。

YMCA、YWCA が用いた用語としての「青年」「女子青年」は、西欧キリスト教社会の中で培われた青年像を理想的に表現した言語として位置付けられていると言えるが、その理想的青年像は、東京 YWCA の「女子青年」事業においてどのように追求され実践展開されていたであろうか。

日本の YWCA は、これまで研究対象として論じられることは少なかった。日本の YWCA は創立以来百有余年の歴史を持ち、これまでその歴史と事業は、当団体及びその関係者により自らの団体史としてまとめられてきた。また多くの回想や手記が公表されてきている。団体自身による通史は、日本 YWCA による『水を風を光を 日本 YWCA80 年 1905-1985』<sup>22</sup>、『日本 YWCA100 年史 女性の自立を求めて 1905-2005』<sup>23</sup>や、東京 YWCA を始めとする各地域 YWCA の通史がある。東京 YWCA は、『50 年の歩み』<sup>24</sup>、『七十年のあゆみ』<sup>25</sup>、『80 年の歩み』<sup>26</sup>、『東京 YWCA の 100 年』<sup>27</sup>などがまとめられている<sup>28</sup>。しかしそれらを対象とした研究は限られている。日本 YWCA の機関誌『明治の女子』（1904～1912）及び『女子

青年界』(1912～1944) が 1992 年に復刻刊行され、武田清子によって「日本 YWCA の使命と特質」と題する解説がなされ、それが本格的な通史であった。

日本 YWCA の機関誌『明治の女子』が発行された 1904 (明治 37) 年は、日本 YWCA の発足の一年前であり、その内容は聖書研究を中心とするものであった。1905 年、日本 YWCA 発足後は、それを会の機関誌と位置付けた。発刊初期の値段は、1 年分 12 冊送料込みで 50 銭と第 1 巻第 8 号(1905 年 1 月)には記されているが、初期の発行費用はピッツバーグ YWCA の援助によっていたといわれる<sup>29</sup>。1912 年明治天皇逝去、「大正」への元号改正などを境に機関誌を『女子青年界』と改題し、敗戦直前の 1944 年 3 月 25 日、第 41 巻 2 号を以て廃刊した<sup>30</sup>。戦後は 1946 年 3 月 1 日より『女性新聞』を発行、旬刊で最盛時 1947 年には発行部数 3 万部に達し、朝日新聞販売ルートで一般に配布された。第 1 号には 1 部 30 銭と記載されている。財政的には赤字続きで 1950 年 12 月 21 日終刊となった。翌 1951 年からは会員対象の機関紙『YWCA』(月刊) が刊行され現在に至っている<sup>31</sup>。日本 YWCA の機関誌『明治の女子』及び『女子青年界』、『女性新聞』の復刻版は不二出版社より 1992 年～1994 年に配本されている。また、2014 年には東京 YWCA 機関誌『地の塩』が同じく不二出版社より復刻刊行された。YWCA そのものに関する研究それ自体必ずしも豊富な蓄積があるとは言えないが、機関誌の復刻刊行の効果もあり、今僅かながらその状況が変わりつつある。とりわけ東京 YWCA 機関誌『地の塩』は、筆者が本研究に着手した時には、創刊号から最終号まで一揃いのみが東京 YWCA 内に保管されていたが、経年による紙面の劣化は閲覧に耐え得るものではなかった。筆者は東京 YWCA の了解のもと複写を行い、閲覧希望者には複写本を提供することと、復刻版刊行の可能性を探るよう提案を行った経緯があり、『地の塩』全 7 巻+別冊 1 の復刻刊行を機に今後の YWCA 研究の蓄積がより進むことを期待している。

YWCA に関わる先行研究は、およそ 27 本確認される。その特徴をもとに分類すると以下のような変化が確認できる。まずは女性史全般の中で研究が始まり、その中でも具体的な視点としては戦争とジェンダーの角度から研究が広まり、やや遅れて書誌分析による基礎研究が始められたところであると言えよう。この経緯に沿って 3 領域の研究内容と研究結果を概要すると、表序-2「YWCA についての先行研究」に示したようになる。

表序-2 YWCAについての先行研究		
1. 女性史として		
2016年	中本かほる	「日本におけるYWCA運動受容の背景に関する考察」東洋大学大学院紀要第53集
2014年	樽松かほる、影山礼子	『地の塩』解説『地の塩解説・総目次・索引』、不二出版
2013年	堤 稔子	「木村雪子とYWCA-‘国際人’の誕生」ジュリエスコンサルタス(22)71-86,2013-01、関東学院大学法学研究所
2013年	中本かほる	「戦前の東京YWCA有職婦人部による女子青年教育」日本社会教育学会紀要No.49-2
2012年	中本かほる	「日本女性教育史におけるYWCAの位置付け」東洋大学大学院紀要第49集
2011年	中本かほる	「女子青年教育機関としてのYWCAの定着過程—1920年代の日本YWCAと東京YWCAの動きを中心として—」東洋大学大学院紀要第48集
2011年	北脇実千代	「日本人移民女性を教育すること:1910年代における横浜YWCAの試み」カリタス女子短期大学caritas(45)
2010年	中本かほる	「1930年代東京YWCA「私共の家」における社会活動と教育活動の展開」東洋大学大学院紀要第47集
2003年	横田睦子	『渡米移民の教育—葉で読む日本人移民社会—』大阪大学出版会
1998年	マーガレット・ブラング、鳥海百合子訳	『東京の白い天使』、教文館
1994年	武田清子	「解説—日本YWCAの使命と特質」『女子青年界 解説・総目次・索引』、不二出版
1988年	ゆのまえ知子	「女性史における矯風会とYWCA」『婦人新報』
1986年	伊藤康子	「名古屋における婦人セツルメントのころみ—YWCA「友の家」をめぐる—」中京女子大学紀要第20号
2. 戦争システムとジェンダー		
2010年	磯村美穂子	「百年史に見る自己像—日本キリスト教婦人矯風会と日本キリスト教女子青年会」金城学院大学論集人文科学編6(2)
2007年	新保淳乃	「戦時下キリスト教女性運動のジェンダー的考察—日本基督教女子青年会(YWCA)と機関誌『女子青年界』について—」平成17-18年度科学研究費基盤研究(C)「家父長制世界システムにおける戦時の女性の差別の構造的な研究」
2005年	石川照子	「日本の大陸政策と上海日本人YWCA—『文化政策』への協力と『国際主義』」、高網博文編『戦時上海—1937～45年』研文出版
2003年	石川照子	「日本近代国家の成立とジェンダー第2章日本YWCAの国際主義・ナショナリズム・ジェンダー—加藤タカの経験と言説を手がかりとして」KASHIWA学術ライブラリー05
2002年	荒井英子	「植村環—時代と説教」富坂キリスト教センター編『女性キリスト者と戦争』第3章、行路社
3. 書誌分析		
2011年	影山礼子	「昭和戦前期のキリスト教社会・キャリア教育の一側面—東京YWCA機関誌『地の塩』の書誌分析」関東学院教養論集(21)
2010年	樽松かほる	「日本YWCA機関誌『明治の女子』の書誌分析」、桜美林論考、心理・教育学研究1

4. その他		
2010年	竹本英代	「戦前日本における宣教師に対する日本語教育—松宮弥平を中心に—」同志社大学人文科学研究所『キリスト教社会問題研究』第59号
2003年	久佐賀真里、俵恭子、大草理美子	「思春期・青年期保健への若者の参画—若者ボランティアの育成と主体化に向けた支援の在り方について—」The Journal of Kyushu University of Nursing and Social Welfare Vo15.No1.117-127
1989年	山形政昭	「カフマン女史とYWCA 東京YWCA会館・大阪YWCA会館」『ヴォーリスの建築 ミッション・ユートピアと都市の華』、創元社
1981年	国枝タカ子	「竹内菊枝研究」日本体育学会大会号(32)
1978年	澤本淳、澤本和子、国枝タカ子	「東京YWCA体育部の指導者に関する研究:河合道について(1. 体育史 I. 一般研究)」日本体育学会大会号(29)
1977年	国枝タカ子、澤本和子	「東京YWCA体育部の創設に関する研究」日本体育学会大会号(28)
1976年	国枝タカ子、澤本和子	「東京YWCAの体育的諸活動に関する歴史的研究」体育学研究20(6)

#### 1. 女性史としてのYWCA研究とその特徴

愛知女性史研究会に属する伊藤康子は「名古屋における婦人セツルメントの試み—YWCA『友の家』をめぐる」<sup>32</sup>において、愛知女性史の研究空白であった戦前昭和期を、愛知女性の自覚史という視点で捉え、その事例として1930年日本YWCAが名古屋において実施した「友の家」について論じた。伊藤は事業を中心的に進めてきたキリスト者である職員、加藤ちょうに焦点を当て、この事業を『家』と社会に流されるままの女性が、人間らしい自主的な営みを取り戻していく場」として捉え、「保守的で排他的な名古屋で、『友の家』は女子労働者が自ら向上しようとする力を引き出し、その姿勢を支えた。その意味で、婦人セツルメントの一つの在り方を示した」と評価している。と同時に女性の主体的力量の弱い名古屋で『友の家』が根を伸ばそうとした時、行政の力を借り、行政に連なる社会事業と共に発展した」と捉えた。「友の家」は読書サークルから「愛知県共産党 2.25 事件」<sup>33</sup>に関連で検挙者を出したことが決定的な打撃となり、名古屋YWCAに合併され「第二の歩み」を始めた。その方向転換が自主性をそぐ形で行われた過程は運動体としては挫折と呼ぶざるを得ないと評した。そうした経過から「友の家」は、「愛知の女性たちの一つの青春であった」と結んでいる。またキリスト者としての加藤の誠意と体当たりの実践が「友の家」



事業の成功をもたらしたが、「友の家」の力には限りがあり、困難な問題に直面すると、結局は個人の努力と「祈り」に行きつくと言った。伊藤のこれらの指摘や評価については、事業の多様性をキリスト者の「祈り」に帰着させるまとめ方や、国家権力との関係を対立軸でのみ捉える点に、固定的な分析の視角があるのではと思える。また伊藤は、職員加藤ちように焦点を当て「友の家」を論じたが、YWCA の活動の基本は自治的集団（グループ）であり委員会が大きな影響力を持っている。職員の言動の背景には、委員会の合意が存在しており、その合意のもとに担当幹事の仕事は進められていく。加藤個人の人間性による働き方の特徴はあるとしても、そこに焦点を置くと YWCA 事業としての考察には不足が生じてしまうと考える。

ゆのまえ知子<sup>34</sup>は、明治期から現在に至るまで、同じように継続するキリスト教女性団体である矯風会と YWCA を、女性運動史として比較研究した。ゆのまえは両団体の共通性と各団体の運動の特徴を示し、具体性をもって女性解放と女性の人権に寄与した課題解決型運動の矯風会、集団形成の中に個の確立を試行錯誤した思想運動の YWCA と、それぞれの団体像を示した。YWCA を、女性解放や人権の確立といった具体的課題解決を最終目的とせず、課題解決の過程での自己の確立や人格の形成に重点を置く「思想運動」と位置付けるためには、「思想運動」という抽象的な事象をどのように可視化するのが求められる。そのためには、YWCA の実施した事業の詳細を明らかにし、検証することが必要となる。「女子学生」「有職婦人」「女子労働者」などに向け実施された事業には、宗教教育、社会的事業、グループワークの実践など、多様な教育と実践の形が存在している。この多様な教育についての検証を積み重ねることにより、どのような思想が、「自己確立」や「人格の形成」の基礎として位置付いたかの考察が可能となると考える。

横田睦子<sup>35</sup>は、1885 年から 1924 年の日本渡米移民史を初期、全盛期、排日対応期と時期区分し、大多数が男性単身の労働者や留学生であった初期を経て、彼らの配偶者と家族、また配偶者となる女性が数多く渡航した全盛期の女性に対して実施された横浜 YWCA 移民教育事業に着目した。横田による『渡航婦人講習所要覧』、『渡米婦人心得』、日本 YWCA 機関誌『女子青年界』移民関連記事（11 片）からの横浜 YWCA 渡航婦人講習所事業実態の再構成は、日米関係、排日問題など重要な外交問題であった移民問題を、国でなく民間女性による社会奉仕団体（YWCA）が、日米双方の移民局や自治体の公的機関において移民女性の教育、保護のために尽力していたという興味深い事実を示した。日本人移民女性の暮らしをつぶさに観察し、日本人移民社会の助言も受け考案された講習内容は、渡米婦人に必

要な準備教育であり異文化圏における暮らしの実際を手助けする生活教育であった。また講習所は娯楽としての楽器なども備え付けられた恵まれた異文化教育施設であったと横田は述べている。横田は記事やリーフレットによる限られた文字資料から多くの情報を読み解き、生き生きとした移民教育事業の姿を現して見せた。それは横田の日本移民史また移民教育への理解と認識の深さから導き出せたものであると言えよう。

筆者の限られた認識の範疇ではあるが、明治期から敗戦期の日本のYWCAは総体として論じられることが多く、個別の事業について論じられることは少なかったといえる。伊藤と横田の論文は、共に時代的要請によってYWCAが実施した事業を再構成し分析考察する中で、その時代のYWCAをより実像に近い姿で見せたと言える。今後の課題としては、多様で抽象的なYWCAの運動組織の特徴とその思想的背景が、より明らかな形で検証される必要がある。

## 2. 戦争システムとジェンダー論を視点としたYWCA研究とその特徴

石川照子<sup>36</sup>と新保淳乃<sup>37</sup>は国際主義の精神を備えたYWCAが、妥協から戦争協力へとその立場を変えた様を示し、石川は加藤タカの認識の中に、新保はYWCAの階級性の中に「帝国のフェミニズム」の姿を見てとった。またそれは指導的女性にあてがわれたジェンダー役割であったと言明した。荒井英子<sup>38</sup>は植村環の行動と説教を分析する中で、女性キリスト者の「戦争責任」に対する自覚について厳しい評価を下した。磯村美穂子<sup>39</sup>は、「近代」を求め実践的な社会事業を行った矯風会は、天皇制の本質を「近代」と見間違え「忠君愛国」を自らの像となし、YWCAはキリスト教を通じた自己修養、社会教育団体であるが故に自己防衛として行った偽装が本質にとって代わったと分析した。

日本のキリスト教界においての「戦争責任」議論は敗戦直後から継続され、キリスト教女性団体においても、描き出や総括の仕方はそれぞれであるが、活動の根底に存在し続けた「重い課題」であった。「戦争の世紀」といわれた20世紀を、「戦争責任」「戦後責任」として総括する「重い課題」を、戦争システムとジェンダー論の視点で明快に論じたのがこれらの論文といえる。妥協から戦争協力へと変容するYWCAを、指導者層の有す階級性を示し、欧米中心主義的差別主義と植民地主義の帝国のフェミニズムを内在させる一方、侵略と支配の中での主観的な「親善」意識を持った団体だと新保と石川は特徴づけた。こうした明快な分析は、戦中期のYWCA像を表したと言えると同時に、それがYWCAの全てであったのかという疑問にも行き着く。筆者は、歴史の検証は時代の不足をその時代の人々に帰するのではないと考えている。ここで見た論文もそうした視点であることは言うまでも

ない。15 年戦争期の YWCA 研究は、戦争システムとジェンダー論の視点から始まったと言えるが、時代の検証は更なる多次元からの追及が必要であり、これからの課題として残されていると考える。

### 3. 書誌分析による YWCA 研究とその特徴

東京 YWCA 最初の機関誌であった『地の塩』は、1926(大正 15)年～1939(昭和 14)年の間発行された。1 号から 64 号までは A3 タブロイド版、65 号以降最終 113 号までは B5 冊子版である。その紙面は、当初 7～8 面であったが、徐々にその枚数は増し、冊子版においては 70 ページを越している。値段は、第 2 号には 1 部 4 頁金 5 銭と記されている。冊子版となった第 66 号からは 1 部 10 銭と記され、東京 YWCA 会員には無代配布、駿河台女学院生徒、会関係者には実費にて頒布とされている。機関誌の内容は、会員の近況から広く世界の動きまでが掲載され、その執筆者も幅広いものであった。発行は年 10 回程度で、機関誌の名称である『地の塩』は聖書の「汝等は地の塩なり」に由来する。創刊号には以下のように記されている。

キリストの聖言「汝等は地の塩なり・・・」よりその名を得たるものにして、これにより当会はその事蹟、事業、抱負を語り、会員相互の親善を計り、霊・智・体の円満なる発達を遂げ奉仕の精神を養ひ、持って女性の地の塩たらん事を期す<sup>40</sup>。

樽松かほる<sup>41</sup>と影山礼子<sup>42</sup>による日本 YWCA 機関誌と東京 YWCA 機関誌の書誌分析は、共に近代化の中の女性のキャリア形成について言及する基礎的研究として行われた。また、同じ研究過程の中で行われた書誌分析であるため、組織的には全国組織と支部組織の関係である日本 YWCA 機関誌『明治の女子』と東京 YWCA 機関誌『地の塩』が同項目で整理分析されていることが特徴と言える。この特徴は各 YWCA を解明する素材であると同時に、両 YWCA の関係性の実像を読み解く素材の一つにもなると考えられる。

この書誌分析は、機関誌を極めて客観的な事実で分類することで、研究の基礎的な素材を提供した。現時点は基礎的な整理の段階であるが、今後は影山の課題にみるように、記事内容など詳細な研究展開を促すものであるといえる。筆者による「1930 年代東京 YWCA 『私共の家』における社会活動と教育活動の展開」<sup>43</sup>と「女子青年教育機関としての YWCA の定着過程—1920 年代の日本 YWCA と東京 YWCA の動きを中心として—」<sup>44</sup>、「戦前の東京

YWCA 有職婦人部による女子青年教育」<sup>4 5</sup>は、東京 YWCA 機関誌『地の塩』の書誌分析の後、関係記事を主たる資料として、その時代の実践を再構成し考察したものである。樽松の言う等閑視されてきた「社会教育の分野に属する YWCA の活動」を、影山の言う「グループに焦点を当て」言及したものである。多様で抽象的な運動の性格や実像に迫るには、個別の事象を実証的に跡付けていく必要があり、このような書誌分析及びその記事の内容分析を基礎とした研究が潮流となることで、YWCA 研究が本格化の時代に入ったといえる。

2014 年に刊行をみた既述の『地の塩』全巻に付された別冊での樽松と影山による解説は、こうした流れを加速するものである。

本論で取り上げてきた論文中、伊藤とゆのまえを除く他の論文は、すべて日本 YWCA 機関誌復刻版出版後に著されたものである。復刻版別冊には、日本を代表する思想家の一人でもあり日本 YWCA の職員経験を持つ武田清子が、解説「YWCA の使命と特質」を著した。その解説は YWCA 理解を助け研究を進める手助けともなっている点が概観した論文の中にも現れていた。こうしたことも含め復刻版出版は、YWCA 研究に弾みをつけ、その数を増やしたという大きな変化をもたらした。動き始めた YWCA 研究は、先にも述べたとおり、大枠で見れば女性史としての研究の中で発展し、具体的な視点としては戦争責任とジェンダー論という角度からの研究が広がり、それらにやや遅れて書誌分析による基礎的研究が組み込まれ始めた段階にある。基礎的な研究が深まることによって、これまで多く見られた団体としての YWCA を捉える視点がより実証的なものとなり、新たな視座を開く種子となると考えられる。こうした年史や機関誌による分析の広がり、YWCA の存在と、その実態の理解を広げる YWCA 研究を促したと同時に、こうした分析が持つ文字からの理解の困難さがあることも示した。

以上の先行研究は、女性団体としてのジェンダーや社会的事業の中における階級性、日本のキリスト教の持つ特質など、YWCA をどのような視座で論じるのかの具体的な事例を知るものであり、YWCA 分析には多様な視点があることを実感させられた。筆者も含め YWCA での職員経験を持つ論者の論文には、「人格形成」「自己確立」という共通ワードがある。筆者はこの内実をどのように言語化し明らかにするのかに試行錯誤してきた。ゆのまえの「思想運動」との括りは、YWCA の日常の活動実践の中に目指す思想を内実化させる過程があり、そうしたことを推し進める運動であったという点に思いを到らせてくれた。

YWCA はキリスト教という宗教に位置している。YWCA はキリスト信仰をベースに置きつつも、キリストの教えの実践に軸足を置いた運動であると言い表す事ができると考える。な

らば YWCA はキリストの教えとも係わりを持つ思想の一つである自由主義 (Liberalism) を実践する運動であったとも言えよう。大正デモクラシー (Democracy: 民主主義) 期に創設され動き始めた YWCA 活動の一つひとつは、そこに集う女性たちが自由主義的思想を身につけ、主体者として民主主義を追求する運動として存在していたのではないかと考える。社会の矛盾に向き合い働く中で、人格の形成や自己確立をめざす運動体である YWCA は、全体主義へとその勢いを強めていく社会の片隅で、その目的をどのように実現させようとしたのであろうか。動き始めた基礎的研究を土台として、YWCA を社会教育の視点から検証し、日本女性教育史における YWCA の位置づけを捉え直していきたいと考えている。

### 第3節 研究方法と論文の構成

#### 1. 研究方法

本研究では、日本で最初に設立されたローカル YWCA である東京 YWCA を取り上げ、その組織としての定着過程及び活動実態を、現存する 1 次資料や年史などを詳細に分析することで明らかにする。続いて、その定着と発展を支えた活動原理について究明する。まずは第2節でとりあげた機関誌を中心として分析を加えた。さらに、当時の 1 次資料を収集した。特に当団体の事務局に残されている未刊行ファイル類<sup>46</sup>や当時作成された冊子<sup>47</sup>、世界 YWCA と日本 YWCA との書簡<sup>48</sup>、個人所蔵のメモ類<sup>49</sup>、主にアメリカ YWCA による外国人への働きをまとめたレポートや書籍<sup>50</sup>などを分析の対象として用いた。個人情報に配慮しつつ、50 年以上経った資料については、実名で扱うこととした。

#### 2. 論文の構成

本論は①YWCA 成立の背景を明らかにする。②YWCA 事業の実態を明らかにする。③日本の女子青年教育における YWCA の位置付けを明らかにする。④YWCA の教育学的な特徴を明らかにするという 4 つの研究目的を基本に構成されている。

①YWCA 成立の背景を明らかにする。

第1章から3章は、欧米での YWCA 成立の背景、そして日本での設立における背景と経

緯及び本研究の対象とした東京 YWCA 設立と独立について述べていく。

第 1 章においては、YWCA の設立を促したと言われる、19 世紀欧米キリスト教社会で発生したリバイバル運動・エキュメニカル運動の概容を示し、この運動が宗教内での変革やキリスト教の地理的拡大をもたらしたと共に、社会に及ぼした影響について概観する。これらの運動による社会的な変革すなわち、それまで家庭の中で存在する善き母としての欧米女性が、自らの社会的領域を超える働き方を始めることとなった経緯を見ていく。こうした背景の中で、若い女性に向けた事業の取り組みが開始され、それらが YWCA として形作られていったという YWCA 誕生の経緯を明らかにする。

第 2 章においては、欧米で設立された YWCA が、どのような経緯をもって日本にもたらされたのか、その働きへ大きく係ったのはどのような人々であったのかについて述べる。日本に YWCA がもたらされ設立を迎える明治期、日本の女子教育はどのような状況であり、YWCA が受け入れられる素地がどのようにして形成されたのかを、明治期キリスト教と婦人宣教師の働きに見る。また宣教師と共に YWCA 設立のために働いた日本の女性たちはどのような人々であったのかについても明らかにしていく。

第 3 章では、東京 YWCA に焦点を当て、その初期の事業（寄宿舍事業、社会事業、教育事業）から、団体の概容を見ていく。また設立当初は日本 YWCA とローカル YWCA は混然一体となり動いていたが、各ローカル YWCA 事業の進展と共に、各組織が法人格を持ち独立していく経緯を述べる。

## ②YWCA 事業の実態を明らかにする。

第 4 章から第 6 章では、1920～30 年代の東京 YWCA で実施された 2 つの特徴ある事業として、有職婦人部による活動と文京区に設立された「私共の家」の事業を取り上げ、それらを通して、東京 YWCA が実施した青年期女子への社会教育事業の実態を解明していく。また、こうした事業を推進し支えた職員について、その役割の実状と出身学校や養成について言及する。

第 4 章は東京 YWCA が働く女性に焦点を当て実施した、職業教育やクラブ活動という事業から、働く女性たちを組織した有職婦人部が成立したが、その名称の意味、そこに参加した働く女子青年たちについて、また実施された事業内容を詳細に解明していく。次に第 5 章への導入として、有職婦人部の中に設置された労働部について概観する。

第5章は、労働部が設立した東京YWCAによる「私共の家」について、設立背景と共に、その事業内容の詳細を見ていく。「私共の家」は社会事業として文京区白山地域で展開されたものであるが、その活動は女工たちのクラブを軸とした事業であった。その詳細について解明していくほか、母の会や地域事業及び職員についての説明と「私共の家」廃止に至る経緯を述べる。

第6章は東京YWCAの職員とその養成について述べていく。1920年代後半～30年代に東京YWCAの職員として働いた人々を、『地の塩』掲載記事より抽出し、幹事・職員・外国人幹事のカテゴリーに分類した。この資料を基礎に、幹事に焦点を当てていく。どのような人材を幹事としたかを調べたのち、東京YWCAが実施した、職業として女子教育に取り組む幹事育成の実態を明らかにする。

#### ③日本の女子青年教育におけるYWCAの位置付けを明らかにする。

第7章では、YWCAと処女会・女子青年団との比較研究を行う。二つの女子青年会(団)は事業や修養を通して、女子青年の主体性を培うことにおいて共通性を持っている。YWCAと処女会・女子青年団の比較の中から見えてくる特質は、日本の女子青年教育におけるYWCAの位置付けを示すものと言えよう。

#### ④YWCAの教育学的な特徴を明らかにする

終章において、YWCAという組織の実施した事業の教育学的な特徴を示し、日本の青年期女子に対する社会教育におけるYWCAの果たした役割と本研究によってどのような新たな知見が青年期女子教育に追加されうるか、本論文の結論を述べ、残された課題を示すことで論を閉じる。

---

<sup>1</sup> 日本YWCA機関誌『明治の女子』第1巻第1号、1904年、「巻頭言」。

日本YWCA機関誌『明治の女子』『女子青年界』『女性新聞』は復刻版として不二出版社より1992年～1994年に出版配本されている。その詳細については3節に記述している。

<sup>2</sup> 日本YWCA80年史編纂委員会『水を風を光を 日本YWCA80年』日本キリスト教女子青年会、1987年、pp. 23-24には、以下の決議が採択されたと記されている。

「東京および横浜の婦人宣教師大会は、(略)日本でYWCAの仕事を開始する必要性がますます高まりつつあることを確信する。(略)各都市ならびに学校内にYWCAを組織する

ため、(略) 幹事を派遣することが重要である (略)」。

- <sup>3</sup> 石橋/梶編『職員版東京 YWCA 年表』東京 YWCA、1986 年を参照。テレサ・モリソンは、第 2 回世界 YWCA 大会 (1902 年) での決議によって、カリフォルニア、オレゴン、ワシントン 3 州 YWCA の支援により最初の外人幹事として日本 YWCA 創立を援助する為来日。在任期間：1903 年～1905 年。日本 YWCA 創立委員会の指導の下に、日本語の習得に努めると共に、聖書の組を開くなどして、女学生に近づく努力をした。一方小雑誌『明治の女子』(Young Women of Japan) の刊行を企てた。健康の理由でアメリカに帰国した。
- <sup>4</sup> 『明治の女子』は 1904 年に創刊され、翌年の日本 YWCA 設立からは日本 YWCA 機関誌として発刊された。詳細については、序章 第 2 節にて言及している。
- <sup>5</sup> 日本 YWCA の初代総幹事。トロント大学で数学と物理学を学んだ後、カナダ YWCA の市部幹事、オタワ YWCA 幹事を務め、世界 YWCA 大会決議を受け 1905 年日本に派遣された時は 30 歳であった。10 年後日本 YWCA を辞し、日本の刑務所改善運動などの社会事業に従事した。マクドナルドの詳細については、M. プラング著、鳥海百合子訳『東京の白い天使ー近代日本の社会改革に尽くした女性宣教師キャロライン・マクドナルド』教文館、1998 年、に詳しく記されている。
- <sup>6</sup> 河井道子 (1877-1953) は、日本 YWCA 設立の当初よりその活動に関わり、日本人初の総幹事に就任し、日本の YWCA 運動を推進した人物。スミス女学校 (後の北星学園) で学び、その後新渡戸稲造夫妻に伴われフィラデルフィア州アイビーハウスで学び、プリンマー大学に入学、1904 年帰国した。YWCA 辞任後は、恵泉女学園を創立した。
- <sup>7</sup> 前掲 日本 YWCA 機関誌『女子青年界』第 22 巻 10 号、1925 年、河井道子「創立の頃を思ひ出て」、p. 49。
- <sup>8</sup> 同上、第 22 巻 10 号 p. 11、p. 14。
- <sup>9</sup> 市町村 YWCA との表記もあるが、本論ではローカル YWCA と表記する。
- <sup>10</sup> 渡邊洋子『近代日本女子社会教育成立史ー処女会の全国組織と指導思想』明石書店、1997 年、pp. 12-13。
- <sup>11</sup> 同上、pp. 27-29。
- <sup>12</sup> 同上、p. 22。
- <sup>13</sup> 日本 YWCA 機関誌復刻版『明治の女子』『女子青年界』『女性新聞』不二出版社、1992 年～1994 年配本。東京 YWCA 機関誌復刻版『地の塩』不二出版社、2014 年。
- <sup>14</sup> G. S. ホールは子ども期から成人期への過渡期として青年期が存在することを公言、また青年期を「新生の時代」であり「疾風怒濤の時代」と位置付けた。Granville Stanly Hall, *Adolescence*, New York, D.Appleton & Company, 1904。
- <sup>15</sup> 奈良常五郎『日本 YMCA 史』日本 YMCA 同盟、1959 年、p. 5。ここで指摘されたのは以下 (注 16) の文献である。
- <sup>16</sup> 小崎弘道『七十年の回顧』警醒社書店、1927 年、p. 61。  
「青年会なる名称を始め、規則万端は米国青年会の夫に倣ひ私の草案したものである。『青年』と言ふ語は今でこそ普通用語となつたれ、私の発案した頃には『ヤングメン』の適当なる訳に窮し『若年』『壮年』又は『少年』などと言う語を用いて居った」。
- <sup>17</sup> 国立教育研究所編『日本近代教育百年史 第 7 巻 社会教育 1』(財)教育研究振興会、1974 年、p. 252。
- <sup>18</sup> 前掲、『職員版東京 YWCA 年表』、p. 6。  
渡辺半次郎 (当時 YWCA バイブルクラスを手伝っていた人物) 1936 年 9 月 8 日手記より。
- <sup>19</sup> 矢口徹也「明治期における青年概念の登場ー兵学寮青年学舎を中心に」東京都立教育研究所『東京と教育史年報』第 2 号、1993 年。
- <sup>20</sup> 矢口悦子「地域青年集団における女性の位置と学問の展開その (1)ー青年団の女性活動 (女子活動) のあゆみを中心にー」『山脇学園短期大学紀要』38 号、2000 年、p. 10。



- 
- <sup>21</sup> 同上、p. 1。
- <sup>22</sup> 前掲『水を風を光を』。
- <sup>23</sup> 日本YWCA100年史編纂委員会『日本YWCA100年史 女性の自立を求めて 1905-2005』日本キリスト教女子青年会、2005年。
- <sup>24</sup> 東京YWCA写真文庫『東京YWCA50年の歩み 1905-1955』東京基督教女子青年会、1955年。
- <sup>25</sup> 渡辺松子監修『東京YWCA創立七十周年記念 七十年のあゆみ』東京キリスト教女子青年会、1975年。
- <sup>26</sup> 東京YWCA80周年記念行事委員会『東京YWCA80年のあゆみ 1905～1985』東京基督教女子青年会、1985年。
- <sup>27</sup> 東京YWCA100周年記念委員会『東京YWCAの100年』東京基督教女子青年会、2005年。
- <sup>28</sup> 当会の年史作成時に資料として活用されたものとして、元職員石橋宮子責任編集で作成（1972）され、元総幹事梶美津保により完成（1986）した「年表」が東京YWCA内に保管されている（本論では石橋/梶編『職員版東京YWCA年表』東京YWCA、1986年と表記）。その他年史に付随し作成されたものとしては以下のものがある。  
東京YWCA90周年委員会『会員が綴る九十年 東京YWCA90周年記念「YWCAと私」』東京キリスト教女子青年会、1995年。  
塩野幸子編『カフマン讃歌ーエマ・R・カフマンに捧げるー』東京YWCA80周年記念行事委員会、1985年。
- <sup>29</sup> 前掲、『日本YWCA100年史』 p. 4。
- <sup>30</sup> 発行部数については現在調査中であるが、1915年の中央委員会報告（『女子青年界』第12巻第3号、1915年3月1日、p. 31）には「現在千五百部を出版」「米国加洲サクラメント女子青年会は毎月百部宛を購読す、二千部を出版するに至らば独立をなし得べし」との掲載があった。
- <sup>31</sup> 前掲、日本YWCA100年史編纂委員会、pp. 86-87。
- <sup>32</sup> 伊藤康子「名古屋における婦人セツルメントのころみーYWCA『友の家』をめぐるー」『中京女子大学紀要』第20号、1986年。
- <sup>33</sup> 1934年労働運動活動家、共産主義者が検挙された事件、検挙者157人内女性は7人。その一人が読書会メンバー。検挙者中起訴はわずか13人という実行行為というより封じ込めを目的とした検挙と言われている。
- <sup>34</sup> ゆのまえ知子「女性史における矯風会とYWCA」日本キリスト教婦人矯風会機関誌『婦人新報』4月号、1988年。
- <sup>35</sup> 横田睦子『渡米移民の教育ー葉で読む日本人移民社会ー』大阪大学出版、2003年。
- <sup>36</sup> 石川照子「日本YWCAの国際主義・ナショナリズム・ジェンダーー加藤タカの経験と言説を手がかりとして」kashiwa学術ライブラリー05氏家幹人他編『近代国家の成立とジェンダー』柏書房、2003年。
- <sup>37</sup> 新保淳乃「戦時下キリスト教女性運動のジェンダー的考察ー日本基督教女子青年会（YWCA）と機関誌『女子青年界』についてー」平成17-18年度科学研究費基盤研究(C)『家父長制世界システムにおける戦時の女性の差別の構造的な研究』2007年。
- <sup>38</sup> 荒井英子「植村環ー時代と説教」富坂キリスト教センター編『女性キリスト者と戦争』行路社、2002年。
- <sup>39</sup> 磯村美穂子「百年史に見る自己像ー日本キリスト教婦人矯風会と日本キリスト教女子青年会」金城学院大学『金城学院大学論集 人文科学編6(2)』2010年。
- <sup>40</sup> 東京YWCA機関誌『地の塩』第1号1926年7月。
- <sup>41</sup> 樽松かほる「日本YWCA機関誌『明治の女子』の書誌分析」2008-2011年度科学研究費基盤研究(C)『日本の近代化と女性キリスト者の知的形成・文化貢献』『桜美林論考 心理教育学研究1』2010年。

- 
- <sup>42</sup> 影山礼子「昭和戦前期のキリスト教社会・キャリア教育の一側面－東京 YWCA 機関誌『地の塩』の書誌分析」2008 - 2011 年度科学研究費基盤研究(C)『日本の近代化と女性キリスト者の知的形成・文化貢献』『関東学院教養論集 (21)』2011 年。
- <sup>43</sup> 東洋大学『東洋大学大学院紀要』第 47 集、2010 年。
- <sup>44</sup> 同上、48 集、2011 年。
- <sup>45</sup> 『日本社会教育学会』紀要 No. 49-2、2013 年。
- <sup>46</sup> 戦前期東京 YWCA 幹部委員会記録 (1923 年 9 月～1944 年 4 月但し 1926 年 11 月欠) 当幹部委員会記録は、東京 YWCA 内に現物及びデーターでの保存がなされている。幹部委員会は当団体の中心的な運営執行機関。『基督教女子青年会指導者讀本』pp. 43-45 では、「新年度に於ける女子青年会のあらゆる動向を決すべき全責任と権利を依嘱する自分たちの代表」である「幹部委員」は、市町村 YWCA の最高意思決定機関である年会(総会)で選挙によって選出される。幹部委員は互選により会長、副会長、書記、会計の役員を決める。会長は各部署委員長を任命する。各部署委員長は各部署幹事(職員)と合議の上、委員会を組織するのに必要な人数の委員を会員中から任命し職務を遂行すると記されている。
- <sup>47</sup> 基督教女子青年会日本同盟編纂『基督教女子青年会指導者讀本』1937 年。  
日本 YWCA によって「現在及び来るべき新進の指導者諸姉が基督教女子青年会の本来の使命を感得し、其機構と活用との基準を把握せられる様に」と発行された冊子である。会の目標、沿革、組織、事業、指導法、財政全般に亘り記述されている。オーストラリア YWCA の寄付金で作成された 150 頁、30 銭の冊子である。現在国立国会図書館等での閲覧が可能である。
- <sup>48</sup> 日本 YWCA・世界 YWCA 間の書簡類  
日本 YWCA 創立時から太平洋戦争に至る間の書簡類を、世界 YWCA 事務所(ジュネーブ)資料の中より、元日本 YWCA 常任委員エリザベス・クラークが選び出し、日本 YWCA 100 年史編纂委員会が翻訳し、100 年史編纂の資料としたもの。日本 YWCA 事務所にて保管されている。
- <sup>49</sup> 元総幹事の渡辺松子、庄田さだの残したメモや記録の一部を筆者が保管している。  
1929 年に完成した東京 YWCA 駿河台会館土地購入に関する書簡(長尾半平-カフマン、1924 年 2 月 21 日及び 26 日付け)や、戦中時の財務報告他多様な資料がある。未整理の為その全容は判明していない。
- <sup>50</sup> Compiled by Elizabeth Wilson, *A Record of the Foreign Work of the American Associations 1866-1292*, YWCA of the United States of America, 本記録の発行年は不明だが、Elizabeth が著した *Fifty Years of Association Work Among Young Women 1866-1961* (NY 1916) を基にまとめられた記録であることから、1916 年としても不具合は無いと考える。その他同種の書籍としては、Nancy Boyd, *EMISSARIES: The Overseas Work of The American YWCA 1895-1970*, The Woman's Press, New York, 1986、がある。世界 YWCA については、ANNA V. RICE, *A History of the World's Young Women's Christian Association*, The World's YWCA, 1947, (The Woman's Press New York にて復刻刊行されている) を主に参照した。

## 第1章 YWCA の設立

19 世紀中期から後半にいたる時期、イギリスは「世界の工場」として繁栄を誇った時代であり、都市では多くの若い女性が労働者となった。YWCA (Young Women' s Christian Association: キリスト教女子青年会) は、その時代にロンドンで活動した二つの団体に起源をもつと言われている。一つは、「プレイヤーユニオン (Prayer Union)」である。ロンドンにおいて、産業化の波にさらわれる若い女性たちの状況を憂い、彼女たちがキリスト教の信仰生活を全うできるようにとの精神運動を推進した団体であった。もう一つは、「ホームズ・アンド・インスティテュート・オブ・ロンドン (Home' s and Institute of London)」と呼ばれる団体である。この団体は、クリミア戦争に看護婦として赴くために、地方から集まってきた女性や工場労働者としてロンドンに働きに来た若い女性が、安心して宿泊できる宿舎を提供し、そこで聖書クラス、教育プログラム、クラブ活動、カウンセリング、ライブラリーの開設など、働く女性のための事業を展開した。宿舎を提供して事業を行う活動は、ホステル事業<sup>1</sup>と呼ばれていた。この二つの団体は、共に「YWCA」と名乗っていたと言われており、1876 年に両者が一つとなり YWCA が誕生したとされている<sup>2</sup>。同じような動きはアメリカやその他の国でも始まっており、1894 年には世界 YWCA が組織され、1898 年第 1 回世界 YWCA 大会では 17 カ国 326 名が出席し、会の名称、会則を採択した。以後、世界各国で YWCA は組織され、加盟国は広がっていった<sup>3</sup>。

日本の YWCA は 1905 年に設立され、翌年には、世界 YWCA に加盟した。YWCA の起源とされる二つの団体がロンドンで行った事業、すなわち若い女性労働者のための精神運動と、各種プログラムを備えたホステル事業は、その後世界で展開される YWCA においても共通する事業となり<sup>4</sup>、日本においても同様であった。

YWCA 運動誕生の背景を、1947 年発行の『世界キリスト教女子青年会の歴史』<sup>5</sup>においてアンナ・ライス (Anna Virena Rice : 1880-1966) は、19 世紀後半、英米で顕れた一連のキリスト教リバイバル (Revival: 信仰復興) 運動が YWCA の誕生を促したと記している<sup>6</sup>。ここでいうキリスト教リバイバルとは、宗教心や信仰が再び燃え上がる現象を指し、宗教と信仰に再び立ちかえらせることを目的とした、大衆伝道である。武田清子は日本 YWCA 形成の背景として、19 世紀後半、英米で顕れたリバイバル運動の中で主張された「世界にキリスト教を宣べ伝えよう」とのプロテスタント諸教会の福音宣教活動、すなわちミッシ

ヨナリー・ムーブメント(Missionary movement)があったとする<sup>7</sup>。二人が述べるように、YWCA 誕生を促した一連のキリスト教リバイバル運動は、福音派<sup>8</sup>的な日常生活での神への献身と言う生活と実践を特徴とし、直接的・間接的に社会改良や改革運動<sup>9</sup>を更に飛躍させると共に、運動を支え働き手であった女性たちの意識と行動を社会へと向かわせ、女性の社会的位置付けの変革を促していくこととなったとみられている。

## 第1節 19 世紀リバイバル運動・エキュメニカル運動と YWCA の成立

YWCA 設立の基礎として、ライスと武田は「19 世紀後半のリバイバル運動」、「プロテスタント諸教会の福音宣教活動」、「ミッシヨナリー・ムーブメント」を挙げているが、こうした運動に女性たちはどのように関わっていたのかをみていくことにする。

一般にリバイバル運動は、以下のように規定されている。

近代キリスト教（主にプロテスタント）において、情緒的高揚を引き起こすような集会を開いたり、メディアを用いるなどして、多くの人々が一体感を持ちながら、それを支えとして強い信仰覚醒を起こすことを目指す運動。信仰復興運動とも言う。18 世紀のアメリカ、イギリスに始まり、20 世紀には世界各地に広まり、とりわけ近代化の途上にある地域で大きい成功を収めて今日に至っている<sup>10</sup>。

18 世紀から 20 世紀にかけてイギリス・アメリカで発生したリバイバルの影響はキリスト教国にとどまらず、日本をはじめとする近代化の途上にある国にも影響を及ぼしたことが記されている。例えば、外村は次のように述べる。

日本では 1883 年横浜で開かれた祈りの集会が数週間続いた後リバイバル化し、東京、京阪神にもおよびキリスト教会は活気づき、翌年には同志社大学（京都）でリバイバルが起こり、200 人の学生が入信したという。こうした動きは当時、全国に波及した<sup>11</sup>。

本節では先行研究に依拠し、YWCA 誕生の背景となるリバイバル運動の特徴を見てみる。

18 世紀中葉から 20 世紀初頭かけて、繰り返し発生した信仰復興運動は大覚醒<sup>12</sup>と呼ばれ、英米の社会や政治にも大きな影響を与え、住民の宗教的自覚を高め、教会の教義や制度に変革をもたらす動きであったと言われている。歴史学者フスト・ゴンサレス（Justo L Gonzalez : 1937-）は、18 世紀の終わりにニュー・イングランドで始まった第二次大覚醒について、この期の特徴を著しい感情的表現よりも、突然、人々が信仰生活に熱心になることにあった、また似たような他の運動が特徴としていた反知性的な色合いがなかったと記し、運動の始めから、「福音を広めることを目的とした協会がいくつも設立された」と述べている<sup>13</sup>。具体的には以下の協会がその例として示されている。

① 「福音を広めることを目的とした協会」

アメリカ聖書協会（1816 年）、アメリカ外国宣教理事会、通称「アメリカンボード」（1810 年）の例を示し、こうした宣教活動に対し個々の教会では「女性宣教会」が組織され、その一部は後にいろいろな女性組織に発展した。

② 「社会問題と取り組むための協会」

アメリカ植民協会（奴隷を買い取り、解放してアフリカに送り返す目的で 1817 年設立）、アメリカ禁酒推進協会（1826 年）を示し、禁酒推進の運動は女性が中心となり、19 世紀後半に女性キリスト者禁酒連盟は、女性の権利を擁護する最大の団体になった。

小檜山ルイは、18 世紀末から 19 世紀初頭の第二次大覚醒による宗教的高揚は、アメリカが海外伝道に乗り出す気運を準備したと記し、その要因を、「疑いなく、教会の女性たちが海外伝道に対して特に深い関心を示したことであった」と分析している<sup>14</sup>。二人の記述では、19 世紀前半のリバイバルによって、福音宣教や、社会問題への取り組みがなされ、実施する組織として各種の協会が設立された。そこでは女性たちの働きがあり、このことが後に各種の女性団体の形成につながったという解釈が共通している。イギリスにおいても、こうしたリバイバル運動から生み出されたエネルギーは、宣教活動の活性化と人道主義的な社会活動を生み出していた。

アメリカの教会歴史家ウィリストン・ウォーカー（Williston Walker : 1860-1922）はその著書<sup>15</sup>において、人道主義の新しい精神の覚醒を示すものとして、「牢獄改革の父」と呼ばれたジョン・ハワード（John Hward : 1726-1790）のイギリス議会での告発（1774 年）や、国教会内の福音派の裕福な人々による奴隷制度撤廃（1833 年）の運動について記している。また福音宣教については、諸教派協力の「宗教文書協会」（1799 年）や福音派による「英国及び海外聖書協会」（1804 年）の設立を挙げ、キリスト教文書の流布に努め

広範な聖書普及を可能としたことが記されている。また、貧しさゆえに教育を受けられない人々に対するキリスト教的訓練の場として福音派の国教会信徒による日曜学校の創立（1780年）が非国教会にも波及し「英国領全体に日曜学校を普及する協会」が組織された（1785年）ことを示している。彼はこの期のリバイバル運動で最も重要なこととして、近代におけるプロテスタント海外伝道の勃興を挙げている。イギリスでは、1649年の国会法令により最初の海外伝道組織「ニュー・イングランド福音宣教会」の設立後、いくつかの海外伝道組織が設立されてきたが、1795年超教派の「ロンドン宣教協会（London Missionary Society）」が創立され、19世紀になると、アメリカやヨーロッパ大陸においても教派また超教派による宣教協会が大規模に組織されるようになったと記している<sup>16</sup>。

このような時代を、「19世紀はキリスト教の地理的拡張の時代」だとゴンサレスは表現している。19世紀前半の福音宣教や人道的な社会問題への取り組みという特徴は、19世紀後半期に継承され、プロテスタント各教派の発生と分派を生じながら、社会を変える取り組みと共に、福音宣教の推進という活動は広がっていった。こうした多義多様な教会各派の拡張は、19世紀後半になると、主要な教派の説教的な協力的活動や超教派的連盟に始まり、20世紀に入って国際的宣教会議から継続委員会の組織となり、第2次世界大戦後、世界教会協議会（WCC：World Council of Churches）の組織を結成するに至る教会一致の方向が推進されたとキリスト教史学者の石原謙は述べている<sup>17</sup>。

このような教会一致を目指す運動は「エキュメニカル運動」と呼ばれた。ウォーカーは、その中に19世紀の教会一致を目指すプロテスタントの生活と思想の6つの領域（①伝道活動分野、②青年の間での働きとキリスト教教育分野、③キリスト教的奉仕と共同の倫理的行動のための組織の形成分野、④教義分野、⑤有機的教会合同分野、⑥世界的規模の教派内の一致と交わりの強化分野）があると分析している。第2領域の「青年の間での働きとキリスト教教育分野」については、以下の記述がなされている。

第2の分野は青年の間での働きとキリスト教教育のそれであった。前者で高度にエキュメニカルな先駆的役割を果たしたのは、1844年にジョージ・ウィリアムズ（George Williams：1821-1905）がロンドンで創設し、その後全世界に広まった非教派的なYMCA（Young Men's Christian Association：キリスト教青年会）の運動である。世界YMCA連盟は1855年に設立されたが、同じ年にはロンドンでYWCAも始められ、1894年には世界YWCAが発足した。青年の間での働きでもう一つ重要なのは（略）外国伝道のための学

生ボランティア運動であった。(略) 1895 年万国基督教学生連盟 (World Student Christian Federation : WSCF) が発足した。(略) 世界的な学生の交わりは圧倒的に信徒運動であったが、世界キリスト教教育運動も信徒運動的性格を強く持っていた<sup>18</sup>。

ここでは、青年への働きかけとキリスト教教育の分野でのエキュメニカルな役割を果たした運動の一つとして YWCA を位置付けている。石原も YMCA、YWCA、WSCF を挙げこれらの運動は、「世界各国のキリスト教青年を宗教的社会的事業を通して接近させ相互協力の機会を作った」のみでなく、競合対立しがちな教派間の関係を緩和し教会一致への道を準備し、教会的合同への気運を促進したと評価をしている<sup>19</sup>。

キリスト教会の歴史は拡張と統合により彩られ、「19 世紀には、ことにプロテスタント世界においては拡張が支配的であったが、20 世紀に入ると統合への動きがより鮮明となった」<sup>20</sup>と言われた。YWCA の登場はそうした歴史の中に位置付けられている。リバイバルに影響を受けた女性たちは、「福音派的な日常生活での神への献身」を、都会に出てきた若い女性への、キリスト教信仰による精神運動とホステル (宿舎) 事業として具体化した。また、ホステルにおいては彼女らに向け文化的・社会的事業や宗教教育事業を展開し、若い女性の経験や視野を広げ、彼女らの自律的生活の基盤を培おうとした。YWCA は拡張の時代に発足、統合の時代に、女子青年の分野でその役割を果たすべく世界組織としての活動を形成させていた。19 世紀後半キリスト教リバイバルを背景として創立された YWCA は、世界の都市に広がり、女性たちによる女子青年のための事業を通し、直接的・間接的に社会改良や改革を自らの問題とする女性を育成し、その層を広げたのである。

## 第2節 英米女性たちの奉仕活動と YWCA

次にリバイバルの中で運動を支え推進した女性たちの姿に焦点を当ててみたい。19 世紀イギリスのヴィクトリア朝社会は、社会階級と性差による二重の区別が前提となる時代であったとされる。こうした社会環境の中で、中流階級の女性たちに求められたのは「淑女 (レディ)」、労働者階級の女性たち求められたのは「善良な女」であったと言われている。イギリス近代女性史では、ミドルクラス層の広がりを基礎に「男女の領域分離」、そこから

くる「家庭の天使」、裕福な層の女性が、資本主義的家父長制の下で「家庭道徳」を逸脱しない範囲で許された唯一の「公的」な活動が、キリスト教的な慈善、博愛活動であるチャリティだったと言われている<sup>21</sup>。

金澤周作はイギリス近現代女性史研究<sup>22</sup>の中で、「チャリティと女性—レディの天職」において、1830～40年代頃からイギリスの女性たちはチャリティの領域へさかんに関与し、「チャリティはレディの天職だ」<sup>23</sup>という認識が定着したと述べ、その誕生のプロセスを以下のように記している。

イギリスでの産業革命の進行（1780年代～1830年代）は、新たな支配層として都市の産業ブルジョアジー（ミドルクラス）を誕生させた。彼らは、個人のモラルを厳しく問う福音主義の宗教思潮を支持し、貴族的大地主の頹廃や、都市貧困労働大衆の怠惰を批判するようになった。福音主義は、家父長として外界に立ち向かい、公的活動に従事する「男」、敬虔で愛に満ちた温かな場所を主人のためにしつらえる「女」という、男女領域の公私分離の固定的な家庭道徳観を持っていた。こうした家庭道徳観は、1840年代までには形成されていたと金澤は述べている。また、家庭道徳を逸脱しない範囲で女性に許される唯一の「公的」な活動それがチャリティであったとも述べている。

次に金澤は、サマーズらの代表的な見解（Summers, 1979）を引き、支持している。新しく生まれた富者と貧者の関係性は構築されておらず、社会は不安定であった。家庭道徳にもとづいてチャリティに携わるミドルクラスの女性には、「チャリティはレディの天職だ」と言わしめる公的な役割が与えられた。女性特有の相手を和らげる力は、貧者の心を開き提供される支援も歓迎されるはずだ。上品で慈しみ深い態度は、救済対象の貧困家庭に良い道徳的影響を及ぼし、上の階級への敬意と模倣欲求を涵養すると考えられた。余暇を利用した女性の自発的な無給の奉仕は、階級を超えたいわば対等な友情関係をつくる。社会を一つの家族、富者を親、労働貧民を子あるいは使用人と考えるならば、その家庭の平和を達成できるのは、個々の家庭を切り盛りする模範的な女性（レディ）をおいてほかにないと、サマーズはその実態を解き明かしている。こうして金澤は、「レディの天職」としてのチャリティについての認識が定着したことを示し、「チャリティは有閑女性の偽善的で自己満足的な暇つぶしでは決してない意味を持っていた」と論を結んでいる。また、ミドルクラスの女性たちによる19世紀のチャリティ実践の重要な部分は訪問活動と募金活動であったとし、具体的には2,000人のボランティアが4万世帯を月2回訪問（1853年断片的データ 会衆派クリスチャン教導協会）、教会での献金の呼びかけ、寄付者への訪問と集



金、資金集めの晩餐会や音楽会の実施、バザーなどの例を金澤は示している。

次に、第2次大覚醒とも呼ばれた時代のアメリカ女性についての研究を紐解いてみる。エレン・キャロル・デュボイス (Ellen Carol DuBois) とリン・デュメニル (Lynn Dumenil) はその著書<sup>24</sup>で、19世紀のアメリカ女性像は、「真の女性らしさ (true womanhood)」「男女の領域分離」「家庭性」といったジェンダーイデオロギーで捉えられるとしている。また女性の家庭性と存在そのものの中心は母性であるとし、母性は他者のために完全に滅私奉公的に行動することを期待された。女性の自己犠牲的な母性は国の安寧の源と見なされ、新国家の市民が有徳で、社会のために勤勉な自己規制のきく人間を育てることが期待されていたと記している<sup>25</sup>。

また、女性の母性的な天職は深いところで宗教とかかわっていたとされる。真の女性らしさは熱狂的なプロテスタント信仰と結びつき、そのことが女性的な献身と私利私欲のない犠牲とに救いの力を与えていた。真の女性は日々の生活の中でキリストの代理としての機能が与えられており、女性が支配する家庭環境はある種の聖なる領域となり、悪魔や世俗的な影響を浄化すると考えられ、18世紀末から19世紀初めにかけてのアメリカ社会を席卷した新しい信仰復興運動と深く結び付いていたと述べている。信仰復興運動は、南部においても拡大した。猛烈な勢いで宗教に回帰しようとするこの文化現象は、革命期に政治に夢中になりすぎたこととアメリカの経済体制の変革があまりに早すぎたことに対する反発とによるものであるとも述べられている<sup>26</sup>。

19世紀アメリカにおいてもイギリスと同様に、女性には家庭内の「領域」が任され、滅私奉公的な行動が期待される母性が求められていた。その家庭の理想像は「クリスチャンホーム」でその中心は女性であり、女性的な献身と私利私欲のない犠牲をもって、キリストの代理として家庭内道徳を体現する者であった。家庭内「領域」に閉じ込められた女性が家庭の外で活躍できる場所は教会であり、教会出席者の多くは女性で、教会は女性の活躍が認められた唯一の公的な場所であった。小檜山は南北戦争後、多くのアメリカの中流白人女性は、家事の合間をぬって実質的に家庭の外に出、大規模・全国的な婦人団体を形成し、主に家庭と言う私的空間の中で発揮されていた女性の「道徳的影響力」を、より強く社会的な形で行使し始めたと述べ、その一つの例としてアメリカにおける婦人伝道局の設立を挙げている<sup>27</sup>。女性たちは、宣教師の旅支度を整え、グループを作り、献金を大勢で行っていた。こうした活動が拡大発展したのが婦人伝道局と呼ばれるものであるとした。婦人伝道局の成立は、女性の海外伝道の参加を本格化させ、主な婦人伝道局のほとんどが

南北戦争後、1860年代末から1870年代に設立されている。婦人伝道局は女性が集めた資金によって、異国の女性のために、婦人宣教師を派遣したが、特に独身婦人宣教師の派遣に目的意識を持ち、婦人宣教師の旅支度と旅費を整え、給料を支払い、婦人宣教師のプロジェクトが要する資金を準備し、婦人宣教師の選定をも専ら行っていたと記している<sup>28</sup>。

そもそもアメリカのプロテスタント海外伝道においての宣教師の派遣は、基本的に夫婦を一組として任地に送っていた。宣教師の妻の役目は、夫の世話、子供の養育、家庭内の家事雑事などクリスチャンホームの維持であり、余力があれば夫の伝道の手助け、現地人学校を開く、現地女性の家庭訪問などが求められるというものであった。婦人宣教師には異教徒の女性の地位をクリスチャンの女性が保持する地位にまで高めるという目的意識が与えられていたが、家庭維持の優先性は、それを困難にしていた。伝道の成功には女性への布教が重要であり、特にアジアでは女性の社会に男性は軽々に近付けない現実から、伝道に活力を注げる独身の女性が求められていた。言い換えれば「宣教師の妻の仕事の延長線上に」独身婦人宣教師の働きはあったと小檜山は述べている<sup>29</sup>。

19世紀リバイバルを背景として、イギリス・アメリカの女性に求められていたのは、キリスト教的価値観をベースとする母性であり、限られた領域の中での社会性であった。彼女らにとっての社会性は、社会の必要性に応答するという奉仕活動の中で培われた。それは困難を抱える人を訪ね世話をすることであり、それに必要となる資金をつくる事であった。女性たちは、献金を捧げ資金を生み出す取り組みを展開、その活動を支え広げ、職業人としての女性を派遣し、その活動を保証するまでの社会的位置を確立した。

このチャリティや宣教師派遣への奉仕活動に邁進していく女性たちの姿には、ステレオタイプのジェンダーに押し込められた姿とはいささか異なって見える部分がある。奉仕活動の始まりとその背景には、女性に求められたジェンダー性を見るが、奉仕活動が動き出すことにより、彼女らの社会性は広がり、設定されたジェンダー領域を超える結果を生み出していた。時代により理想とされたジェンダー的女性像の中に女性は存在し、生き方の多くの部分がその理想像と自らを比較、他者からも比較されながらの日常であることは現在までも続く女性を覆う現象であるが、ボランティアな活動が持つ波及力は女性自身を変容させ、そのことによって社会をも変革しうる力を持っていた。こうした現象は19世紀のチャリティや婦人伝道局の奉仕活動に留まらず、現在におけるボランティア活動の中にも同様に存在している。また、同様に現在にも存続する事例をもう一つ挙げる事ができる。宣教や社会事業を支えるために実施した女性たちの生活の中から生み出された奉仕の形で

ある。「世話を焼く」という形で、貧困者や宣教師たちへの手助けする姿や、献金を捧げ集める行動、バザーなどによる資金作りの方法などの奉仕活動の実際の方法や形態が、19世紀から現在に至るまで、ほとんど変わりなく継承されているという現象である。ミドルクラスの女性たちの奉仕活動の形態は、100年後のYWCAの中にも同様に継承されている。

## 小 括

19世紀前半、欧米でのキリスト教リバイバル運動は日常生活での神への献身という生活と実践を特徴としていた。そこから生み出されたエネルギーは、キリスト教宣教活動の活性化と人道主義的な社会活動の原動力となっていた。宣教活動と人道的な社会活動を実施する組織として各種の協会が設立され、そこでは女性たちの積極的な参加があった。19世紀リバイバルを背景として、欧米女性に求められていたのは、キリスト教的価値観をベースとする母性であり、限られた領域の中での社会性であった。しかし彼女らの社会性は、社会の必要性という奉仕活動の中で培われ成長した。彼女らは困難を抱える人を訪ね、世話をやき、教育的な働きかけをし、そのために必要な資金をつくった。自ら献金を捧げ、資金を生み出す様々な方法を考え、奉仕活動の財政を担った。奉仕活動の始まりとその背景には、女性に求められたジェンダー性を見るが、奉仕活動が動き出すことにより、彼女らの社会性は広がり、設定されたジェンダー領域を超える結果を生み出していた。ボランティアな活動が持つ波及力は女性自身を変容させ、そのことによって社会をも変革しうる力を持っていた。そして女性たちは奉仕活動を支え拡大し、職業人としての女性を派遣するなど、その活動を人的にも財政的にも保証できるまでの社会的な位置づけを確立した。リバイバルを通し欧米女性たちは彼女らに設定された社会的自律の領域枠を拡張してきた。このリバイバル運動を背景にYWCAの設立は促されていた。

19世紀後半、世界へ拡張したキリスト教界では、教会再一致を目指すエキュメニカル運動が推し進められていた。その流れの中でYMCA、YWCA、WSCFは、世界各国のキリスト教青年を宗教的社会的事業を通して接近させ、相互協力の機会を作り、世界的ネットワークとして機能していた。働く若い女性及び女子学生に向けて展開されたYWCA運動は、直接的・間接的に社会改良や改革を自らの問題とする自律的女性の育成を目指した世界運動となっ

た。それはミドルクラスの女性たちが実施した奉仕活動の理念を、また生活の中から生み出してきたその方法を国と時間を越えて継承していくことでもあった。

- 
- <sup>1</sup> Anna Virena Rice *A History of The World's Young Women's Christian Association* Literary Licensing, 1947, LIC (2012/9/8). の記述には、創設当初よりホステルという用語が使用されている (p. 58)。東京 YWCA では寄宿舍、宿泊所、宿舍、寮、寝室部 (1929 年建築の駿河台会館) などと呼び方が異なっているが、戦後、『女性新聞』第 115 号、1949 年、p. 4。東京 YWCA 会館図上で、寝室部をホステルと表記している。ここでは大きな括りとして世界の YWCA で使用されているホステルを使用し、ホステル事業と表記した。
- <sup>2</sup> 日本 YWCA80 年史編集委員会『水を風を光を 日本 YWCA80 年史』日本キリスト教女子青年会、1987 年、pp. 14-15。
- <sup>3</sup> 日本 YWCA100 年史編纂委員会『日本 YWCA100 年史 ―女性の自立を求めて』日本キリスト教女子青年会、2005 年。  
現在の YWCA は、世界事務局をジュネーブに置き、国連の諮問機関 (国際 NGO) として位置付けられている。125 以上の国と地域で 2500 万人の女性たちが活動する各国 YWCA は、様々な分野において、各国独自の課題と共に多義にわたる活動を展開している。
- <sup>4</sup> 前掲、『水を風を光を』p. 15。
- <sup>5</sup> 前掲、Anna Virena Rice.
- <sup>6</sup> 同上、Introduction, pp. 1-5。
- <sup>7</sup> 武田清子「解説・総目次・索引 解説―日本 YWCA の使命と特質」日本 YWCA『復刻版 女子青年界』別冊、不二出版、1994 年、p. 5。
- <sup>8</sup> 福音主義 (evangelicalism) とは、「16 世紀初頭のフランスにおいて、教会の権威や既成のスコラ神学の枠にとらわれず、聖書そのものに聴き、この基礎の上に立って教会改革を目指した人々を福音主義者あるいは聖書主義者 (bibliens) と呼ぶ。一般にはキリスト教人文主義者を指す。大貫隆他『岩波キリスト教辞典』岩波書店、2002 年、用語 No. 072 より。
- <sup>9</sup> 前掲、『水を風を光を』p. 13 には以下のように記されている。  
「19 世紀はまた、キリスト教に立つと否とを問わず、博愛主義、人道主義の運動の世紀でもあった。奴隷制度撤廃運動、セツルメント活動、白い奴隷 (強制売春) 取締り等地 道な社会活動が根付いたのがこの時代である。」
- <sup>10</sup> 前掲、『岩波キリスト教辞典』用語 No. 019 「リバイバル・ムーブメント」より。
- <sup>11</sup> 外村民彦『キリスト教を知る事典』教文館、1996 年、p. 353。
- <sup>12</sup> 前掲、『岩波キリスト教辞典』には以下の様に記されている。  
ニュー・イングランドで起こったのが、J. エドワーズを先導者とする 1740 年代の第 1 次大覚醒である。大きな信仰復興の波は 18 世紀末から第 2 次、第 3 次と数えられるようになる。
- <sup>13</sup> Justo L. Gonzales / 石田学・岩橋恒久訳 原題 “*The Story of Christianity* “『キリスト教史 下巻 宗教改革から現代まで』新教出版、2003 年、p. 241。
- <sup>14</sup> 小檜山ルイ『アメリカ婦人宣教師 来日の背景とその影響』東京大学出版会、1992 年、pp. 17-18。
- <sup>15</sup> ウィリストン・ウォーカー (Williston Walker) / 竹内寛 監修/野呂義男他訳 キリスト教史 4『近現代のキリスト教』ヨルダン社、1986 年。

- 
- <sup>16</sup> 同上、pp. 122-128。
- <sup>17</sup> 石原謙『キリスト教の展開ーヨーロッパ・キリスト教史 下巻ー』岩波書店、1972 年、p. 14。
- <sup>18</sup> 前掲、ウィリントン・ウォーカー、pp. 257-271。
- <sup>19</sup> 前掲、石原謙、pp. 610-611。
- <sup>20</sup> 前掲、ウィリントン・ウォーカー、p. 257。
- <sup>21</sup> 金澤周作「チャリティと女性」、河村貞枝／今井けい編『イギリス近代女性史研究入門』青木書店、2006 年、p. 208。
- <sup>22</sup> 同上、pp. 207-208。
- <sup>23</sup> 金澤周作『チャリティとイギリス近代』（京都大学学術出版会、2008 年）において金澤は、18 世紀半ば以降 19 世紀を通じて、英国では空前の規模で慈善・博愛活動がなされ、様々な救済が存在した事、こうした活動全般を通例公的な救済行政と区別してチャリティ (charity 慈善) ないしは包括的にフィランソロピ (philanthropy 博愛活動) という言葉で表現していたことを示し、チャリティないしフィランソロピを、「民間非営利の自発的な弱者救済行為」と広く定義、歴史的 position 付けと共にデータに基づく詳細な研究を展開している。
- <sup>24</sup> エレン・キャロル・デュボイス (Ellen Carol Dubois) / リン・デュメニル (Lynn Dumenil) 石井紀子他訳 世界歴史叢書『女性の目から見たアメリカ史』明石書店、2009 年。
- <sup>25</sup> 同上、p. 180。
- <sup>26</sup> 同上、p. 183。
- <sup>27</sup> 前掲、小檜山ルイ、p. 5。
- <sup>28</sup> 同上、p. 20。
- <sup>29</sup> 同上、p. 19-20 参照。

## 第2章 日本 YWCA の成立と婦人宣教師の役割

18 世紀末の第 2 次大覚醒による宗教的高揚は、プロテスタント諸教会の福音宣教活動、ミッシヨナリー・ムーヴメントを背景に、アジア諸地域にもプロテスタント教会を成立させていった。その推進の役割を担ったのは青年キリスト者たちであったと言われており、YMCA、YWCA、WSCF<sup>1</sup>の創設もこうしたミッシヨナリー・ムーヴメントと連動している<sup>2</sup>。日本では 1880 年に東京 YMCA（東京基督教青年会）が結成されている。また 20 世紀第一年目にちなんだ全国的規模の大挙伝道活動（1901 年）などもおこり、学校教師や学生、実業家などの都市部知的階層および中産階級を中心に、日本のプロテスタント信者数は二倍<sup>3</sup>となる一種のリバイバルが起こっていた。こうした情勢の中、YWCA 設置の気運は高まっていた。当時日本に派遣されていた婦人宣教師の中には、母国で YWCA 運動に接していた者もあり、赴任先で「YWCA」を名乗り、少女たちの集会を開く者や、過酷な労働を強いられている紡績、製糸工場の「女工」のために働く人材を、母国の YWCA に派遣するよう働きかけを行なう者がいた。こうした動きを受け、1900 年世界 YWCA 初代総幹事（General Secretary 事務局長）レイノルズ（Miss Annie M. Reynolds 生没不明）が視察のため来日した<sup>4</sup>。これを機に、日本の YWCA 創立の準備が開始され、創立委員会は 1904 年若い女性のための聖書研究を中心とする機関誌『明治の女子』を創刊した。日本 YWCA の最初の仕事はこの機関誌の発刊であったとされている<sup>5</sup>。1905 年日本 YWCA は正式に発足し、その 1 ヶ月後ローカル YWCA<sup>6</sup>として東京 YWCA が発足した。1906 年には世界 YWCA 加盟、国際団体の一員としての確立を見た。同年加盟した中国 YWCA と共に、キリスト教国以外に YWCA が設立された最初のものとなった<sup>7</sup>。

西洋キリスト教社会において形成された YWCA 運動は、単に宗教的な行動として日本社会に位置付き継承されたのであろうか。日本の YWCA も教会や宣教団体に準ずる宗教組織であるが、その活動の中身を詳細に見てみると、日本の女子青年一般を対象とした活動を展開し、社会教育関係団体として長く位置付けられてきている。とはいえ、キリスト教を磁場とする西洋社会でのありかたと、日本におけるそれとはやや異なるのではないだろうか。社会教育的な事業展開の中で、YWCA 運動はどのような方法で、どのような人々により継承されたのだろうか。1905 年に日本の YWCA は設立されたが、その時代の女子教育、キリスト教や婦人宣教師たちの状況を概観することから始める。

## 第1節 日本におけるYWCA 成立期の女子教育

### 1. 明治期の女子教育

明治維新後、政府は日本の近代国家としての成立を目指し、1871 年教育行政の府として文部省を創設、翌年学校教育制度を示す学制を公布し、四民平等で女性をも対象とした近代的教育理念を示した。しかし急激な教育体制の改革は混乱を生み、学制実施に当たり文部省が重視した小学校の就学率は低いものであった。学制公布の後、「欧米流の知識技術に重点を置く実学主義的な、また主知主義的な傾向は、民衆の実生活そのものからは遊離し、明治政府の意図する文教政策からも逸脱するところがあるかのような観」<sup>8</sup>に対し、東洋道德に基づく教育の基本思想の必要性が説かれ、「教学聖旨」（1879 年）に基づく教学の根本方針即ち「知識才芸よりも先に仁義忠孝に基づくいわば儒教的な道德教育」<sup>9</sup>を教学の要として文部省は教育令（1879 年）・改正教育令（1880 年）により教育制度全般の改革を実施し、教育政策の刷新を図った。この流れは国民道德および国民教育の基本とされ、国家の精神的支柱として重大な役割を果たすこととなる教育勅語（1890 年）発布へと進展することとなった。

こうした流れの中で女子教育は、教育令によって「女子ノ為ニハ裁縫等ノ科ヲ設クヘシ（第三条）」と教育内容の相違がつけられ、男子の高等、専門学校、大学に女子の入学を許可しない根本法となる「凡学校ニ於テハ男女教場ヲ同クスルコトヲ得ス但小学校ニ於テハ男女教場ヲ同クスルモ妨ケナシ（第四十二条）」において、男女 7 才にしてという封建的な男尊女卑の思想を持つ国家の女子教育の根本原理が確立されていた<sup>10</sup>。

その一方では、「近世以来の私塾、寺子屋のような教育機関はたくさん存在し、また新しい時代に応じて生まれ続けたという事実」<sup>11</sup>があり、キリスト教系の学校成立史においても、宣教師の渡来を機に 1870 年（明治 3 年）頃より多くの教育機関が設立されたことが見えてくる<sup>12</sup>。東京都都史紀要 9『東京の女子教育』においては、東京の女子教育施設成立の経過を萌芽期（1870 年～1879 年）、委縮期（1880 年～1884 年）、開花期（1885 年～1889 年）とし、開花期に成立した女子教育施設の特徴を、①プロテスタント系のミッションスクールに専門コースが新設、②ミッションスクールに対し日本人がイニシアチブをとるクリスチヤンスクールのスケールが大きくなったもの、③社会事業に集中していたカトリック系の団体が女子教育の開拓を始めたもの、④仏教関係が女子教育に着目、⑤一般の女子教育に極めてハイカラなものが成立した反面、実利を重視した裁縫、手芸を中心とした高

等女学校が増加した、と分類している。

新たに設置された女子教育施設の多くは、尋常小学校卒業若しくは高等小学校卒業程度の入学資格で、英語や数学を始めとする教養教育や、裁縫編物などの実利的な教授を行う教育施設で、通称は「女学校」と呼ばれていた。その教育内容は多様であったが、キリスト教を背景とした宗教教育など、主催者の意図する教育内容が実施されるなど、ある種の自由さがあったと言える。同書は、東京の女子教育が、もつとも活発になったのは、1899年の高等女学校令の公布以後であったとも述べている。同時に高等女学校令以降の各府県公立高等女学校の設立など、女子教育が活発な動向を示した時期は、1880年代から進められてきた国の教育政策の変更により、高等女学校令では家事・裁縫の必修と英語・欧米文化理解の時数限定という形で女子教育の内容を狭め、文部省訓令 12 号（1899 年）では宗教教育の禁止により宗教的儀式、聖書に関する授業の禁止など、キリスト教による欧米的な教育への抵抗を示し始めた時でもあった。

以上をまとめると、明治政府設立時の近代的教育制度の導入は、教育勅語に象徴される国家主義的な教育制度へと変遷を遂げ、女性への教育は封建的な男尊女卑の思想を根本に持つものであった。その一方、庶民の中の教育熱は高く、市井には各種の教育機関がつくられ、宣教師らによっても多くの学校が設立されていた。自由闊達に展開されていた教育活動ではあったが、20 世紀に入り欧米的なキリスト教的人間観を持つ教育への抵抗が政府によって少しずつ示され始めていた。そうした時代に日本の YWCA は設立されたのである。

## 2. 明治期キリスト教と婦人宣教師

日本におけるキリスト教宣教は、1549 年フランシスコ・ザビエルによって開始されたとされている。以後、織豊政権から徳川政権へと続く約一世紀の間、日本での宣教活動は展開されたが、鎖国の完成のなかで発せられた禁教令によりその動きは終わった。近代における日本宣教の契機といわれる 1837 年モリソン号事件後、1858 年日米修好通商条約の締結による居留地での外国人の信教の自由が認められた頃より、キリスト教各派の日本再布教が展開され始めた<sup>13</sup>。アメリカのプロテスタント教会は、1859 年宣教師たちの派遣に当り、①長崎と江戸に常駐させ日本青年に英語教育を実施、②宣教医を派遣し施療を行う、③宣教師は忍耐・温和・親切そして学問的傾向にある人々という特質を持つ人材をとの提案を在中国の宣教師から受けていた。来日した初代プロテスタント宣教師たちは、東洋伝道経験者の医師ヘボン (James Curtis Hepburn : 1815-1911)、中国伝道経験者の教育者ブラ



ウン(Samuel Robbins Brown : 1810-1880)、公用外国語のオランダ語が出来るフルベッキ(Guido Herman Fridolin Verbeck : 1830-1898)などであった。「居留地内での外国人の信教の自由」という枠の中での再布教の対象地域は、英語を学びたい青年が集まり、医療奉仕が評価される都市部であり、知識階層がそのターゲットであった<sup>14</sup>。

明治政府は不平等条約改正交渉を進める中で、1873年切支丹禁制の高札撤去を断行した。これを契機に欧米の諸教会からの宣教師の派遣が急増し、盛んな伝道が開始された。各地に伝道所が開かれ、日本における各教派の教会組織化が進んだこの時代、キリスト教の伝道者養成を目的とした学校や家塾的な小さな学校などのキリスト教主義学校が創立された。キリスト教伝道の目的は、神の言葉を伝え、現地の人々による教会をつくることであり、聖書の翻訳、現地人聖職者の養成(男子普通一般教育および神学教育)などが主たる宣教事業としてあった。それらは聖職者としての男性宣教師の仕事であった。そうした中で現地の人々との接点を作る補助的事業を担ったのが婦人宣教師である。女性は神学教育から排除され、按手礼を受けた牧師となることは認められておらず、既婚の婦人宣教師は異国の地でのクリスチャンホームの維持、独身の婦人宣教師の場合は伝道の機会をつくる慈善・社会事業・教育事業・医療事業・家庭訪問など、「文明伝播的」事業に関わる「アシスタント・ミSSIONナリー」としての存在であった<sup>15</sup>。明治初期に来日したプロテスタント婦人宣教師の大半を占めたのはアメリカ系の婦人宣教師であった。先にも述べたように、伝道の成功には女性への布教が重要であり、特にアジアでは女性に向けての伝道に力を注げる独身の女性が求められた。こうした状況に沿って来日した独身婦人宣教師たちは、「文明伝播的」事業を展開した。特に彼女たちが実施した近代的女子教育への着手が日本においては広く認知されている。

戸田徹子は明治期日本におけるプロテスタント系高等女学校の設立がアメリカの女性セミナリー拡張運動の一環を為すことは、比較教育研究や各個ミSSION・スクールの百年史において既に指摘され<sup>16</sup>、そこでの教育は、男女性別役割分業を前提とした、女性教師と教養ある良妻賢母の養成であった<sup>17</sup>と述べている。アメリカでは建国期に現れた「共和国の母」という発想が、女子教育への社会的関心を呼び起こし、適切な教育の場として多くのセミナリーが各地に設立されたと言われている。19世紀におけるアメリカプロテスタント・キリスト教の主たる担い手は中流以上の白人女性で、彼女たちの宗教体験の中核となっていたのは女子セミナリーにおける教育だったと小檜山は述べている。

一般にセミナリーとは中等教育機関を示し、女子を対象とした教育は、音楽、フランス

語、ダンスなど典雅な「お嬢様教育」であったが、この期の女子セナリーは、技芸より良識を備えること、実用的で一般教養の育成に適った学問の重視とともに宗教教育を強調し、「公德心」はキリスト教道徳と不可分の関係にあったと小檜山は言う。この時期は、リバイバル多発の時期でもあった。小檜山は女子セナリーの典型の一つとしてマウント・ホリヨーク・セナリーを紹介している。

寄宿料も含めて年間学費 60 ドルという安さで、共和国の一般市民にも手の届く良質な女子中等教育を提供した。ここでは「ドメスティック・システム」が採択され、生徒が掃除などの生活維持のための雑用も自ら行った。これは、学校の運営経費を節減するとともに、学校が「ホーム」として運営されることを狙ったものである。

主婦として必要な家事能力をこのシステムの中で学ぶ。教科は、後に大学に昇格したことからもわかるように、男子カレッジに比肩する程度のもので目指していた。

何にも増して重視されたのは宗教教育であった。マウント・ホリヨーク・セナリーでは、結婚しない卒業生のために、教師、宣教師となって母校のシステムと精神を伝播する役目を追うというストーリーが準備されていた。実際多くの卒業生がアメリカ各地、世界各地にマウント・ホリヨーク魂を携えて一宣教師的教師として一赴任した<sup>18</sup>。

婦人宣教師にとって、女子セナリーでの教育とキリスト教伝道の間に距離はなく、むしろセナリーで受けた教育こそが伝道の実態であった。女子セナリー教育の宗教的高揚を確信すればこそ、婦人宣教師は女子教育事業に多大なエネルギーを注ぎ、女性の経験に適った伝道方法の実践として女子教育事業が推進され、「婦人伝道局」の女性独自の資金調達成功が女子教育事業の大成功を支えた<sup>19</sup>。

## 第2節 日本YWCAの設立と婦人宣教師

1905年、日本にYWCAが設立されるに至ったのは、この婦人宣教師らによる世界YWCAへの熱心な働きかけがあったと言われている。

日本YWCA80年史によると、世界YWCAの記録の中で日本が登場する最も古い文書は、1891年11月英国YWCAコロニアル・ディビジョン (colonial division) 委員会の記録で、そこにはバハマ、インドその他の英国植民地やニュージーランド、オーストラリアからの報告と並び、日本からの通信があったことが記されている。その後の日本についての言及は、1889年～93年にかけて夫と共に世界視察旅行に出たYMCA学生部指導者ルーサー・W・ウイシャード夫人 (Mrs. Luther W. Wishard 生没不明、米国YWCA国際委員会創立メンバー) の報告書で、その内容は日本について、「女子教育の発達がめざましく、すでに二か所でYWCAの活動が始まっている」「若い女性のための特別な活動分野が日本には開かれています。本国で成功した活動は、ここでも必ず成功するでしょう<sup>20</sup>」と書き送られたものであった。その後、1898年世界YWCA第1回大会報告書中に、1896年度常任委員会記録 (“First Annual Report of the Executive Committee of the World’s Young Women’s Christian Association 1896”) として、ルーシー・M・ムーア (Lucy Moor 生没不明：プレイヤー・ユニオン中心メンバー、英国YWCA創立者の一人) が行った報告が掲載されている。

現在日本には三つの支部がある。大阪ではビショップ・プール・メモリアル学校と協力して、ミス・トリストラムの下で支部が出来た。会員は英国人約12名、日本人80名。日曜学校と宣教活動を行っている。徳島も英国人と日本人の混合。福山はすべて日本人。メンバーはみなクリスチャンで、集会には新しい信者を必ず連れてくる<sup>21</sup>。

また翌年の常任委員会記録にも、同じく大阪、福山、徳島の他、函館、岐阜、松江、福岡、熊本にYWCAに連なるグループがあると伝えている他、工場で働く女工の問題に触れ、YWCAがなすべき仕事があると記されている。これら日本での動きは、本国でYWCAに加わっていた婦人宣教師たちが実施していたのではないかと80年史は推測している。大阪にいた婦人宣教師ジャーミ・ホランド (Miss Holland 生没不明) は、この地域の紡績女工の悲惨な労働実態を数度にわたり世界YWCAに報告し、「働き人」を派遣してほしいと訴えているが、世界YWCA第1回大会では時期尚早として提案は受理されなかった。しかし、繊維工

場で働く女工たちの実情を憂い彼女らのために働く人材の派遣など、直接間接の提案や訴えは、世界 YWCA 初代の総幹事レイノルズ<sup>22</sup>の日本視察へとつながる経緯となった<sup>23</sup>。レイノルズは YWCA が日本で活動対象とするのは女学生とミッションスクール卒業生、そして女子工場労働者であると示した報告（“*Sixth Annual Report of the Executive Committee of the World's Young Women's Christian Association 1900*”）を世界 YWCA に書き送っている<sup>24</sup>。以下はその内容を筆者がまとめたものである。

#### 第1の分野：女学生

目下のところ YWCA の組織的活動は何もない。高等女学校はたくさんあり、いくつもの組織がそれぞれ独自に活動しているようだ。男子のミッションスクールは YMCA としてよく組織されており、女子の方も遅かれ早かれ同じ方向でまとまる運動が起きると期待される。

#### 第2の分野： ミッションスクール卒業生

ミッションスクール卒業生の一部は、卒業後もキリスト教の規範に従った生活を継続するが、そのほとんどは、学校を出て結婚するとキリスト教から離れている。バイブルクラスなど卒業生のための仕事の要請がある。

#### 第3の分野：女子工場労働者

東京、大阪その他の産業都市の工場で働く女子労働者を対象にした仕事がある。日本の女工は全く新しい存在で、何もかも未知の生活、体験にさらされている。寮のある工場が多く、従業員はその外へ出ることを禁じられるなど状況はさまざまである。一步外へ出ると誘惑も多く、彼女たちは真の友人を必要としている。伝道会社の中で彼女たちに働きかけているところはどこにも見当たらない<sup>25</sup>。

レイノルズが活動対象に挙げた女学生、ミッションスクールの卒業生、女子工場労働者は、学校・家庭・社会という各分野に位置する青年期女子であった。言い換えるならば青年期女子の人間形成を培う教育分野を網羅し、各分野における特徴的な青年期女子に対する働きかけを提案したといえよう。こうした報告書は、日本独自の課題を含みつつも、英国での女子労働者へのプログラム、米国での学生 YWCA の組織<sup>26</sup>など、既に YWCA が実践してきた経験の蓄積により導き出された提案とも考えられる。と同時に、青年期女子を取り巻く状況は、世界に共通する課題として存在しており、世界 YWCA ネットワークの一員とし

て、青年期女子への世界的運動の一端を日本のYWCAも担い動き出したとも解釈できよう。

1900年のレイノルズの訪日を機に、創立委員会が米バプテスト教会婦人宣教師M. A. ホイットマン (Miss Marie, Antoinette, Whitman : 1856-1917) を委員長に、多数の婦人宣教師と津田梅子らのキリスト教や女子教育に係わりのある日本婦人によって組織された。1903年、北米YWCAの支援を受けた幹事テレサ・モリソン (Theresa E. Morrison : 生没不明) が、また第2回世界YWCA大会の決議により、1904年カナダYWCA幹事キャロリン・マクドナルド (A. Caroline. Macdonald : 1874-1931) <sup>27</sup> が派遣され、いよいよ1905年に日本YWCAは設立され、翌1906年世界YWCAへの加盟が認められ、日本でのYWCA運動が本格的に動き出したのである。

### 第3節 日本YWCAの設立を支えた日本人

日本YWCAの運営の責任を持つ初期中央委員会は以下の人々で構成された<sup>28</sup>。なお、生没年については、現段階で部分的にしか把握できていないため省略した。

委員長：ホイットマン (Miss M. A. Whitman)：米国バプテスト教会宣教師、東京駿河台女学校副校長 (1911年より校長)

会計：エリス (Miss S. Ellis) フレンド校長

ウエスト (Miss A. B. West) ミッションナリー

委員：ワイコフ (Miss H. J. Wyckoff)、ワージントン (Miss H. J. Worthington)、フィッシャー夫人 (Mrs. G. M. Fisher: 日本YMCA同盟協力主事)、ヘルム夫人 (Mrs. V. W. Helm)、

ソーパー (Miss E. M. Soper)、フェリプス夫人 (Mrs. G. S. Phelps)、

ハミルトン (Miss L. Hamilton)、トリストラム (Miss A. K. Tristram)、

ザーフル (Miss L. Zurfluh)、

花井夫人、平野はま、河井道子、津田梅子、小崎千代<sup>29</sup> (弘道氏夫人)、

佐藤錦子

萬国YWCA日本支部幹事：モリソン、マクドナルド

この委員会は、世界 YWCA から派遣された有給の職員（幹事）2 名と、他は全てボランティアの委員で構成されていた。中央委員会の多くは宣教師または宣教師の妻、キリスト教界の指導者またはその妻たちであり、特に婦人宣教師は日本 YWCA 設立への働きかけと、設立後の運営にも大きな役割を担っていたことが見えてくる。また日本人の委員たちは、婦人宣教師による教育や、欧米での教育機会を持った人々であった。

前節で述べたように、小檜山は婦人宣教師が普通一般女子教育に多大な努力を注いだのは、彼女らに適った宣教形態として女子教育事業があり、それを支える婦人伝道局の働きがあった。と同時に日本の状況は、近代的女子教育、女性像の創出まで手の回らない日本政府が、多くの場合婦人宣教師の女子教育事業を支援した。また、婦人宣教師の学校に学んだ日本女性の大半は、士族、裕福な商家、裕福な農家といった「中流の上」の階層の出身者で、西欧文化の吸収と自己研鑽に積極的で真面目な教え易い少女たちであった。婦人宣教師は、様々な困難にもかかわらず、比較的安易に仕事に着手し、それを拡大発展できた<sup>30</sup>からだと述べている。

そうした婦人宣教師による女子教育事業に参加した一群の人々の中に、YWCA の会員や職員となった女子青年の姿もあった。YWCA に関わった女学生の多くは婦人宣教師が影響を与えた学校を始めとする西洋キリスト教思想を何らかの形で教育に反映させた学校に学んだ生徒であり、職員もそのほとんどがそうした学校の卒業生であった。日本 YWCA 創立にあたり、世界 YWCA 総幹事は日本視察調査報告を世界 YWCA に提出しているが、そこに記述された内容の一つにも、ミッションスクールの卒業生たちに対する働きかけの必要が説かれていた<sup>31</sup>。

以下の表 2-1「東京 YWCA における邦人幹事出身校一覧」は、東京 YWCA の職員の出身校を示したものである。時期的には多少ずれるが、職員の多くはキリスト教や婦人宣教師の教育的影響を持つ学校の出身者であったことが理解される。

中でも多くの職員を出しているのは日本女子大学校、女子英学塾、東京女子大学であった。そこで実施された教育は、欧米キリスト教社会での教育が念頭に置かれたものであり、そうした教育を受けた会員と職員が日本 YWCA 設立を支えた人々であった。

表 2-1 「東京 YWCA における邦人幹事出身校一覧」

幹事出身校	人数	出身学部学科	就任先
日本女子大学校	13名	社会事業学部（女工保全科、児童保全科）、家政学部、英文科	有職婦人部2.5労働部1家政部3英語部1家庭婦人部1実学部社会部4.5
女子英学塾	13名		英語部3体育部2商工部1学院庶務1商業部2少女部2家政部1語学部1
東京女子大学	17名	英語専攻部、大学部英語科、国語専攻部	体育部5キャンブ部2英語部4商業部3 体育師範部2会員庶務1
神戸女学院	2名	大学部	少女部2
青山学院	2名	家政部、神学部女子部	食堂部1宗教事業部1
活水女学校	1名	専門部家政科	家政部1
明治学院	1名	神学部	宗教部1
宮城女学校	1名	音楽部	音楽部1
同志社女子専門学校	1名	英語	商業部1
日本体育会体操学校	1名	女子部	体育部1
日本女子体育専門学校	1名		体育部1
カリフォルニア大学	1名	体育専攻 *二世	体育部1
紐育ナショナルレクリエーションズ	1名	*二世	体育部1
加洲大学	1名	*二世	家庭婦人部1
米国コロラド州実業学校	1名	*二世	国際友好部1

（東京 YWCA 機関紙『地の塩』No. 1～No. 113（1926 年～1939 年）より作成）

表 2-1 を補う意味で、主な学校についても触れておきたい。日本女子大学校は、成瀬仁蔵（1858-1919）により家政学部・国文学部・英文学部からなる大学校として 1901 年に創立され、その後 1921 年に社会事業学部が開設された。学校自体はキリスト教を標榜しないが、成瀬自身はキリスト教への係わりが深く、牧師としての伝道活動の経験を持つ人物である。日本女子大学校設立之趣旨には「吾人が執る所の教育上の主義方針たるや、第一に女子を人として第二に婦人として第三に国民として教育するに在り。」と教育方針を示し「抑も人たるの教育とは、心身的能力を開展せしめ、圓滿完備の人となし、器械に非ず又藝人に非ず、優に高尚有為の人となし、如何なる境遇に處し如何なる職業に従ふも、人として必ず缺くべからざる資質を修養せしむるを云ふ。而して是れ女子教育上必須の要素なりと雖も、未だ其至れる者となす可らず<sup>32</sup>。」と女子教育の要素を示し、成瀬の理想とする学校組織及び教育法による大学校が設立された。また、学生の中にはアメリカの宣教団からの援助による寮や奨学金などによって学ぶ機会が得られた学生もいた<sup>33</sup>。

女子英学塾は津田梅子（1864-1929）によって 1900 年に創立された。津田は 6 才でアメリカに渡り、8 才の時自らの申し出によりキリスト教の洗礼を受け、現地の初等・中等教育を受けた。帰国後、華族女学校に職を得たが、そこでの教育に飽き足らず自分で学校を

つくることを希望し、自らが高等教育を受けるためアメリカのプリンマー・カレッジに留学、帰国後「男性と共同して対等に力を発揮できる女性」の育成を目指し、女子に専門教育を与える学校という先駆的な女子高等教育機関を創設した。1905年には英語科教員無試験検定取り扱い許可を女子の学校としてはじめて受けるなど、レベルの高い教育が実施されていた。津田は英学塾をミッションスクールにする気はなかったが、「基督教の精神に基づいて行うことは自明の理である」と在米の援助者モリス夫人に書き送っている。塾生に基督教を強制するつもりはないが、基督教が日常生活に溶け込んでいたと言われている<sup>34</sup>。

東京女子大学は基督教世界宣教大会（1910年エジンバラ）の決議により、北米プロテスタント6教派の援助を得て、1918年「基督教の精神に基づいて女子に高等教育を施すことを目的とする」という建学の精神のもと、リベラル・アーツ・カレッジ「私立東京女子大学」として創立された。小檜山は、明治の初め以来、アメリカから派遣された宣教師が多くの努力と資金を投入した女子教育事業の、いわば集大成として企図された学校であると述べている。初代学長は新渡戸稲造、その後を受け1923年安井哲子が学長となった。安井は文部省の留学生としてイギリスで学び教育を通して国家に奉仕することを決意した愛国者であった。基督教は愛国の精神と相容れないと固く信じていたが、新渡戸との出逢いが、信仰に基いた人間形成の重要性に新しい信念を持たせることとなったと武田清子は記している<sup>35</sup>。

日本のYWCAを支えた人々には、海外での留学経験を持つ女性たちもいた。

表2-2「海外渡航者（女子）」1861年～1912年は、官費（政府機関）、地方公共機関、幕府、藩、企業以外の海外渡航者の内の女性7名と、自主渡航者の内の女性34名を示したものである。この時期は、日本にYWCAが設立され、定着にむけた試行錯誤の時であった。ここに掲載した数名は、設立と定着を支えた人物であった。二つの表には、YWCAで担った役割を記入した。また確証不明の為記載はしていないが、限られた海外渡航者であったこの時期の彼女たちは、強弱はあるとしても何らかの関係性を持ち、YWCAへの協力者として存在していたのではないかと推測する。



表 2-2 海外渡航者（女子）1861 年～1912 年

官費(政府機関)、地方公共機関、幕府、藩、企業以外の海外渡航者（1861年～1912年）							
①その他の機関（156名中女性7名）							
名前（期間）	留学期間		留学先	専攻	帰国後職	出身校	YWCA関連
拝志(林) よしね	1877-1899	英	セント・トーマス病院看護婦学校	看護	東京慈恵医院看護婦教育所	女子高等師範	
那須セイ	1887-1889	英	セント・トーマス病院看護婦学校	看護	東京慈恵医院看護婦教育所		
三谷民子 (1873.2.16～ 1945.4.1)	1897-1899 1907-1908		ノースフィールド大、 オックスフォード		女子学院教師、 院長	女子学院	
*1 安井てつ (1870.2.23～ 1945.12.2)	1897-1900 1904-1907 1907-1908		公費留学、公費視察、私費留学		東京女子師範学校教授兼舎監、 東京女子大学長	東京女子高等師範学校	機関誌執筆、 講師他
星野あい (1884.9.19～ 1972.12.5)	1906-1912	米	プリンマー大学理学部		女子英学塾、津田塾大学長	女子英学塾	1927学生部委員長
山田千代子	1906-1908	米		教育	捜真女学校	共立学校	
井上秀 (1875.1.6～1963.7.19)	1908-1910	米	コロンビヤ大、シカゴ大		日本女子大教授、日本女子大 学校長	日本女子 大 学校	

②自主渡航（1750名中女性34名）							
名前（期間）	留学期間		留学先	専攻	帰国後職	出身校	YWCA関連
津田梅子 1864. 12. 31～ 1929. 8. 16)	1871-1882 1889-1892	米	公費 私費：プリンマー大学				1905東京Y初代会長
井上武子	1876		井上馨に同行				
武田錦子	1879-1884 1886, 1889		セーラム師範、ウエスタン女子大(公費)		東京女子師範学校助教授		
山下りん	1880-1883	露	ペテルブルグ	絵画			
岡見京子	1884-1889		ペンシルバニア女子医科大		東京慈恵医婦人科主任		
甲賀ふじ（1856～ 1937. 11. 16）	1887-1890 1904-1906	米	保育修学		頌栄幼稚園保母 ⇒日本女子大付属豊明幼稚園初代主任	神戸英和女学校	
渡辺つね	1889-1891		カールトン大学	理学系	神戸女学院	神戸女学院	
森島(斉藤)美根	1889-1892	米	カリフォルニア幼稚園訓練校		横浜私立幼稚園 ⇒野口幽香と共に双葉幼稚園を設立	東京下谷小学校	
平田(宮川)敏子	1890-1893	米	マウント・ホリヨーク大学	英文学	神戸女学院英文学講師	神戸女学院	
中村安子	1891-1897		ペンシルバニア女子医科大	歯科		横浜仏和学校	
上代淑（1971～ 1959. 11）	1893-1897	米	マウント・ホリヨーク大学		出陽英和女学校教師、校長	梅花女学校	
桜井ちか1855. 4. 4 ～1928. 12. 19)	1893-1895 1896, 1906	米	留学、視察		桜井女塾開校、校長	芳学舎	
前田(今村)茂	1893-1901	米	ミルス・カレッジ		華族女学校教師	高知英和女学校	
井上友子（1870～ 1960. 4. 30）	1896-1901		クリーブランド医大、ミシガン大		東京で開業、女子学習院校医	長崎活水女学校	1919訪中、中国YW視察
井深(大島)花 （1865. 3. 1～ 1945. 9. 13）	189? -1895	米	マウント・ホリヨーク大学		神戸女学院理化学教授	神戸英和女学校	1910-27中央委員会委員長
河合道 （1877. 7. 29～ 1953. 2. 11）	1899-1904	米	プリンマー大学		日本YWCA総幹事 恵泉女学園創立者	北星女学校	日本YW日本人初の総幹事
荒木いよ	1900-1902		オールドドミニオン病院、ジョンズ・ホプキンス病院		聖路加病院		
鈴木濱子	1900-1910		ベルギー	洋裁			
柏井園 （1870. 7. 22～ 1920. 6. 25）	1903-1905	米	ユニオン神学校		東京神学社教師、教頭	同志社普通学部	日本YW機関紙執筆者
久布白(大久保)落実（1882. 12. 16～ 1972. 10. 23）	1903-1914		太平洋神学校		婦人矯風会会頭、都民教会牧師	女子学院	講演者、機関紙執筆者

長谷場(鎌原)政子 (1872～?)	1904-1906	米	ミルス・カレッジ		神戸女学院教師	梅花女学校	1920神戸Y創立 初代会長
石原キク	1905-1910 1917-1920		シンシナティ大学師 範科、ウエストン大 学、コロンビア大学 教育学部		東京保姆伝習所 長彰栄幼稚園長	東京保姆 伝習所	
福井繁子	1905-1908	独	産婦人科学		日本初女性医学 博士		
山田(川島)よし	1906-1908	米	ミモンズ・カレッジ		梅花女学校教員	梅花女学 院	
相沢(曾根) みさ ほ	1906-1910		ペンシルバニア女子 医科大		同志社経営博愛 病院		
明山(中川)もと	1906-1910		ペンシルバニア女子 医科大		同志社経営博愛 病院		
萩原タケ	1907-1909		仏、英で看護学		日本赤十字社看 護婦監督		
城戸順子	1907-1909	米	ダクタホワイト神学 校 (NY)		共立神学校講 師、教師	共立女学 校	
原口鶴子 (1886. 6. 18～ 1915. 9. 26)	1907-1912		コロンビア大学	心理		日本女子 大学部	
河野三千代	1909-1911	独	ゲッチンゲン大学	医学	佐々木病院	千葉医学 専門学校	
上代タノ (1886～ 1982. 4. 8)	1911-1917		ウエルズ女子大学		日本女子大 学校	日本女子 大英文科	
植村環 (1890. 8. 24～ 1982. 5. 26)	1911-1915 1925-1929	米 英	ウェルズレー大学 ニューカレッジ		女子英学塾教 師、 柏木教会牧師	女子学院	日本YW会長
山本(弘中)ツチ (1887. 10. 25～ 1981. 9. 11)	1912-1914	米	ビブリカルセミナ リー (NY)		梅光女学院教 師、 女子学院長	女子学院 高等部	
安井てつ (*上記記載)	1897-1900 1904-1907 1907-1908		公費留学、公費視 察、私費留学		*上記記載	*上記記 載	*上記記載

\*手塚晃 国立教育会館編『幕末 明治 海外渡航者総覧』第3巻検索編(1992) 柏書房により作成

\*手塚晃、石島利男共編『幕末明治期海外渡航者人物情報事典』CD-ROM、金山工業大学、2003年 参照

\*1 安井は公費私費共に渡航あり

\* (生没年)は判明した者のみを掲載、出身校・職業に付いては上記事典の他、各学校年史・日本キリスト教教育史人物編他を参照した。

\*YWCA関連欄には、YWCAへの係わりを記した。出身校や留学先の同窓生等、彼女等の多くはYWCAと何らかの関係性を持っていたと推測するが、ここでは確証あるもののみを記載した。

19世紀後半、英米におけるリバイバルの高まりの中、日本のYWCA設立に当たり在日婦人宣教師は、設立への要請や設立時の委員としての働きで、その設立を支えた。と共にYWCA会員や職員となる得る女性を輩出する役割も果たしていた。また海外留学経験という特異な経験を持つ女性たちが日本YWCAの事業に会員としてまた協力者として関わっていたことも見えてきた。

## 小 括

アジアの女性へ、キリスト教による欧米のよき文化を伝えようとした婦人宣教師や、海外での先進的な教育を身につけた女性たちの存在は、この時代（1920年代～30年代）の日本では限られた女性達であり、世界とつながる先端的な女性であった。彼女たちは、自らの学び、経験した知識を日本のYWCA設立と継続のために提供した。それは、理念をどのように実践するのか、誰をどう組織すれば良いのか、取り組むべき事業の具体的姿、すなわちYWCAを動かす理念・組織・事業方法、それらを支える理論など、日本のYWCA設立を委員として直接的に支え、協力者として日本社会の中にYWCAを定着させる役割を担うというものであった。また、彼女たちが身につけた英語をはじめとする語学力は、欧米のYWCAや他の機関とのネットワークを可能としていた。当時の日本における理想の女性像とは異なる自立した女性像など、ネットワークから得られる数々の情報も、日本のYWCA組織の見識を高め充実を図るものであったといえよう。

日本YWCAの設立を支えた人々は、欧米から来た婦人宣教師と彼女らの教育を受けた女子青年、留学生として欧米で学んだ女性達であった。日本のYWCAは、彼女らのダイレクトな指導により、日本の既存の組織とは異なる女子青年組織として出発したのである。

---

<sup>1</sup> 日本YWCA100年史編纂委員会編『日本YWCA100年史－女性の自立を求めて』（財）日本キリスト教女子青年会、2005年、pp. 5-7。

1895年創設、初代総幹事ジョン・R・モットが1896年に第1回世界宣教旅行の中で来した事が契機となり、翌1897年日本学生YMCAが発足した。1907年にはアジア初の大会が東京で開かれた。25カ国700名の学生・関係者のうち日本女性70余名を含む100余の女性であった。この大会は女性の会員が認められた最初の大会であった。YWCA会員はマクドナルドの指導で、日本で初めての国際会議運営の仕事に携った。日本人初代の総幹事（1912）となる河井道子の通訳などの働きも大きな評価を受け、YWCAの国内外での注目度も高まった。

<sup>2</sup> 武田清子『女子青年会 解説・総目次・索引 解説－日本YWCAの使命と特質』不二出版、1994、p. 5。

<sup>3</sup> 日本YWCA80年史編纂委員会編『水を風を光を 日本YWCA80年』（財）日本キリスト教女子青年会、1987年、p. 29には、キリスト教信者数が37,000人（1900）から78,000人（1910）と成ったことが記されている。工藤栄一『近代日本社会思想史研究』教文館、1989年、p. 97の表5「明治年間プロテスタント信徒数の変遷」上からもそのことがよみ取れる。

<sup>4</sup> 前掲、『日本YWCA100年史－女性の自立を求めて』、pp. 2-3。

<sup>5</sup> 前掲、『水を風を光を 日本YWCA80年』、p. 32。

- 
- <sup>6</sup> 市町村 YWCA との表記もあるが、本論ではローカル YWCA と表現する。
- <sup>7</sup> 「支那と日本とに基督教女子青年会事業が初められた事は、基督教国以外に吾会の進出した最初でした（レーナルド女史手記より）原文ママ」『女子青年界』第 28 卷 11 号、1931 年 11 月。なを、1912 年「大正」への元号改正を境に機関誌は『明治の女子』から『女子青年界』と改題された。
- <sup>8</sup> 文部科学省ホームページ (<http://www.mext.go.jp> 2015.2.2)「学制百年史/教学聖旨の起草」
- <sup>9</sup> 同上、「学制百年史/六 教学聖旨と文教政策の変化」
- <sup>10</sup> 生活科学調査会編『講座・日本の社会教育第 IV 巻婦人教育』医歯薬出版、1960 年、pp. 6-7。
- <sup>11</sup> 土方苑子編『各種学校の歴史的研究 明治東京・私立学校の原風景』東京大学出版会、2008 年、p. 10。
- <sup>12</sup> 阿部義宗編『日本におけるキリスト教学校教育の現状』基督教学校教育同盟、1961 年、pp. 5-8、pp. 119-120。
- <sup>13</sup> 岡部一興「明治キリスト教史における需要と変容」、キリスト教史学会編『宣教師と日本人—明治キリスト教史における受容と変容』教文館、2012 年、序章 pp. 13-29。  
モリソン号事件とは：1832 年伊勢鳥羽港を出帆した宝順丸が遠州灘で難破。14 か月後米国ワシントン州フラッター岬に漂着。助かった岩吉、久吉、音吉はハドソン汽船会社の船長に救出されロンドンに移動。その後 3 人はマカオで日本語訳聖書の翻訳に関わり『ヨハネ福音書の傳』『ヨハネ上中下書』を完成。1837 年宣教師、医師などの他に 3 人を含めた 7 名の日本人漂流者を乗せたモリソン号が鹿児島、浦和に到着。異国船打ち払い令による砲撃で入国できず、この事件が米国政府に報告された。その後『モリソン号の日本航記』として出版されたこともありアメリカで世論を沸かせ、ペリー来航の先駆けとなった事件であると記述されている。
- <sup>14</sup> 中島浩二「「改革・長老教会」キリスト教史学会編『宣教師と日本人—明治キリスト教史における需要と変容』教文館、2012 年、pp. 140-142 参照。
- <sup>15</sup> 小檜山ルイ「婦人宣教師の女子教育事業」キリスト教史学会『キリスト教史学 第 48 集』キリスト教史学会、1994 年、pp. 72-73 参照。
- <sup>16</sup> 戸田徹子「「ロールモデルとしてのメアリー・ライオン—『メレイライオン一代記』を中心として—」、キリスト教史学会『キリスト教史学第 48 集』キリスト教史学会、1994 年、p. 67。
- <sup>17</sup> 前掲、戸田徹子、p. 71。
- <sup>18</sup> 前掲、小檜山ルイ、pp. 74-78。
- <sup>19</sup> 同上、p. 77。
- <sup>20</sup> 本文は日本 YWCA80 年史上の記述によるが、第 1 章にて前掲した Anna Virena Rice *A History Of The World's Young Women's Christian Association* Literary Licensing, 1947, LLC (2012/9/8), p. 45 にも同様の記述がある。
- <sup>21</sup> 前掲、日本 YWCA80 年史編纂委員会、p. 21、翻訳は日本 YWCA80 年史編纂委員会による。
- <sup>22</sup> 世界 YWCA の総幹事選出は、YWCA の本部が置かれる国以外の国籍を有する者と定められており、ロンドンに本部が設置されたことを受け、アメリカ国籍のレイノルズが世界 YWCA 最初の総幹事（在任期間 1894-1904）となった。  
Elizabeth Wilson *FIFTY YEARS OF ASSOCIATION WORK AMONG YOUNG WOMEN 1866-1916 A History of Young Women's Christian Association in the United States of America* National Board of the YWCA of the United States of America, 1916, pp. 182-183. レイノルズはウェズリー女子大学に入学した最初の学生の一人であった。米国 YWCA 幹事。ヨーロッパの数か国語に通じ、数カ国の YWCA を国際的組織へと纏めるためその行政手腕を発揮したと言われている。マーガレット・プランク（訳：鳥海

---

百合子)『東京の白い天使』教文館、1998年、p. 35。

- <sup>23</sup> 前掲、日本YWCA80年史編纂委員会、pp. 20-24。
- <sup>24</sup> 同上、pp. 22-23。「1900年度世界YWCA常任委員会年次報告14頁」翻訳は日本YWCA80周年史委員会による。
- <sup>25</sup> 同上、pp. 22-23。翻訳は日本YWCA80年史編纂委員会による。
- <sup>26</sup> 前掲、『水を風を光を』pp. 17-18より「1872年イリノイ州師範学校で最初の学生YWCAが創設され、その後全米各地のキャンパスに広がった(1893年米国YWCA加盟数307団体の内255団体が学生YWCA)」。
- <sup>27</sup> トロント大学入学(1897年)後、学生YWCAに属しトロント大学YWCA会長、全国YWCA常任委員会の学生代表の一人となる。大学卒業後、ロンドンのYWCAに3か月勤務の後、1901年よりオタワYWCA総幹事就任。その後カナダYWCA本部の市部幹事となる第2回世界YWCA大会の決議を受け日本に派遣され、日本YWCA最初の総幹事となる。彼女の父親は国会議員、母親はウィンガム長老教会の婦人外国宣教協会(Woman's Foreign Missionary Society)の創設者の一人で、子どもたちが海外で働く宣教師に関心を持ち小遣いを献金できるようなグループを組織するなど海外宣教への強い関心を持っていた。1916年日本YWCAを辞任し、免囚保護事業、児童保護事業に取り組み、震災後は「親隣館」を建設し、労働者の成人教育と授産事業、セツルメント事業に専念した。前掲、『東京の白い天使』pp. 21-37。
- <sup>28</sup> 日本基督教女子青年会機関誌『明治の女子』1904年第1巻8号p. 1(日本YWCA『女子青年界』復刻版、不二出版、1992年)及び石橋/梶編『職員版東京YWCA年表』東京YWCA、1986年、p. 6の記載事項を参照した。
- <sup>29</sup> 小崎千代は救世学校(青山女学院の前身)に学び、津田仙(津田梅子父)宅に寄宿。矢島らの婦人矯風会設立にかかわる。夫の小崎弘道は、熊本洋学校で洗礼を受け、その後同志社で学ぶ。YMCA創立に加わり会長となる。新島襄の後を受け同志社社長の他日本組合教会会長や日本基督教連盟会長を勤めた。
- <sup>30</sup> 同前、p. 267。
- <sup>31</sup> 前掲、『日本YWCA80年史』、pp. 22-23。
- <sup>32</sup> 中村政雄編『日本女子大学校四十年史』日本女子大学校、1942年、pp. 39-40。
- <sup>33</sup> 赤司道雄編『同仁キリスト教伝道百年史』キリスト教同仁社団、1990年、pp. 20-21。  
同仁キリスト教会宣教師ミス・アズバン(Catherin M. Osborn 日本女子大英文科で教鞭もとっていた)からの要請で、アメリカの教会員ブラックマー(Lucean Blackmer)が多大な寄付をし建設された寮。当初は貧しい少女たちの家であったが、日本女子大学校の近くにあったため、同校の学生の入寮希望者が増え、当初の性格に加え「女子大生の寮」のようにもなった。  
日本女子大学社会事業部卒業生会編『めじろ路—日本女子大学校社会事業部卒業生のあゆみ—』日本女子大学、1978年、山野井ゆき氏記事。  
入寮者にはワシントンの教会から学資が支給され、卒業後働いて返金する義務付がなされていた。
- <sup>34</sup> 武田清子編『世界教育選集29 日本プロテスタント人間形成論』明治図書出版、1963年、p. 21。  
江尻美穂子「創立者津田梅子の建学の基礎」津田塾からし種の会編集『津田塾大学創立110周年記念 もうひとつの津田スピリット』津田塾からし種の会、2010年、pp. 6-8。  
津田塾大学ホームページ(2017. 8. 29閲覧)における津田梅子についての記述も参照した。
- <sup>35</sup> 小檜山ルイ『「帝国」のリベラリズム—『ミッドル・グラウンド』としての東京女子大学』、駒込武/橋本伸也編『叢書・比較教育社会学 帝国と学校』昭和堂、2007年、p. 297。同上、『世界教育選集29 日本プロテスタント人間形成論』pp. 21-22。

### 第3章 東京 YWCA の独立

日本 YWCA は、マクドナルドを総幹事とし創立委員会を中央委員会と改称、その後ローカル YWCA としての東京 YWCA の組織に着手した。東京 YWCA は 1905 年 11 月 25 日発会式をもって創立され、その様子は東京朝日新聞に次のように報じられている。

本日午後 1 時 大隈伯爵邸に於いて発会式を挙ぐ 次第次の如し  
祈祷 △開会の辞 津田梅子 △挨拶 矢島揖子 ミス・マクドナルド  
△基督教女子青年会に就いて 元田作之進 △演説弁士 伯爵大隈重信 江原素六  
成瀬仁蔵 フィッシャー<sup>1</sup>

大隈伯爵邸庭園での開催の経緯を記したものに行き当たらず、キャロライン・マクドナルドの伝記『東京に白い天使』の記述が、現時点での唯一のものであった。

大隈は自由主義者で、キリスト教に寛容であった。キャロライン、津田梅、河井道が大隈に助力を求めたとき、彼はこの園遊会の主人役を務めることを喜んで引き受け、彼自身が客を迎えることにも賛成した。残念ながら病気のために彼はその役目を果たせず、祝辞をおくるだけになった<sup>2</sup>。

大隈の好意により開催された発足会は、津田梅子の開会の辞、マクドナルドの挨拶、矢島揖子の推薦の言葉の後、立教中学校校長の元田作之進（日本聖公会初代邦人主教）の演説と、東京 YMCA 理事長の江原素六（衆議院議員/麻布中学校創立者・校長）、と日本 YMCA 同盟協力主事フィッシャー（夫人は日本 YWCA 初期中央委員の一人）らの祝辞が述べられたようである。大隈が YWCA とこのような関係性を持っていたことを示す資料もなかなか見いだせない状況であるが、職員記録版の年表に、日本 YWCA 創立委員会の発起委員の関係者の中に、子爵青木周三氏、同夫人、鳩山春子、山本達雄（日本銀行総裁）夫人、らの名前と共に伯爵大隈重信の名が記されている<sup>3</sup>。津田梅子や友人である大山捨松などの人脈であるのか、大隈自身は成瀬の日本女子大学校の創立委員長を務めるなど、女子教育への関心を少なからず持っていたといえ、その大隈が、アメリカや、カナダから派遣された YWCA 幹事と、津田や河井を始めとする新しき事業に立ち向う、先進的な女性たちが掲げる新し

い女性像に関心を持ち、庭園を提供することで、YWCA を支援する意思を表したのではと推測するが、この経緯に付いては今後の課題とする。

華々しいスタートを遂げた東京 YWCA であったが、その最初の委員<sup>4</sup>は以下の人々であった。

会長：津田梅子

副会長：バック (Mrs. Buck) 米公使夫人

会計掛：小畑統枝 (久五郎<sup>5</sup>夫人)

記録通信掛：河井道子

委員：岡田みつ子 (東京女子高等師範教授)、本多貞子 (庸一<sup>6</sup>夫人、青山女学院教師)、鈴木うた子 (女子学習院教授)、長尾みな子 (半平<sup>7</sup>夫人)、川島芳子、新渡戸万里子 (稲造夫人)、岡見けい子、今西糸子 (鎌三夫人)、小室美恵 (三吉<sup>8</sup>夫人)

東京 YWCA の運営方針を定め事業を推し進めた委員は、津田梅子とつながりを持つ女性教育者や、キリスト教界の指導者、政財界で活躍する夫を持つ婦人たちであった。日本 YWCA はホイットマン委員長を始めとした外国人主導による運営であったことはすでに述べたが、これに対し東京 YWCA は日本人女性による運営であったといえる。日本 YWCA はナショナル YWCA として機関誌の刊行と学校 YWCA の組織を担当、発足の翌年には第 1 回学生夏期修養会を開催 (28 校 165 余名の参加者) するなどの活動を展開した。一方、東京 YWCA はローカル YWCA として、地域課題へ対応する事業に取り組んだ。まず手始めの事業として、借家での学生寄宿舎を開設、その後土地を購入しての、寄宿舎事業を展開した。当初、日本 YWCA と東京 YWCA は共にマクドナルド (A. Caroline. Macdonald) が総幹事 (事務局長) を務め、事務所も麹町土手三番町十五にあったマクドナル宅内に併置されており、外部からはほとんど一つのものと見られていた<sup>9</sup>。しかし、当初の混然一体とした状況は徐々にそれぞれの役割を追求していく過程で整えられていった。東京 YWCA は、ローカル YWCA として地域的課題に向き合い、学生、家庭婦人、有職婦人を対象とした①寄宿舎事業、②社会事業、③教育事業などを展開していったのである。



## 第1節 初期東京 YWCA の事業

### 1. 寄宿舍事業

日本の20世紀は女子教育で始まるといわれるように、津田梅子の女子英学塾(1900年)、成瀬仁蔵の日本女子大学校(1901年)を始めとする女子の高等教育が盛んとなり、地方から多くの女学生が上京していた。学校が腐心していた安全な住まいとしての寄宿舍の不足に対し、東京 YWCA は自らの最初の仕事として寄宿舍事業をおこなった。1906年に小石川区水道町28(現在の春日辺り)に二軒家を借り、学生の寄宿舍を開設したのである。その後、英米加 YWCA の寄付により、牛込区納戸町45(現在の新宿区納戸町)に土地を購入、第1寄宿舍を設置(1908年)、翌年には小石川区水道町の土地を購入、寄宿舍を改築し第2寄宿舍とした<sup>10</sup>。納戸町の寄宿舍の落成式には、文部大臣小松原英太郎、大隈伯爵、新渡戸稲造らが来賓として祝辞を述べたと記録されている<sup>11</sup>。こうした動きは、海外からの寄付のみで実施されたわけではない。マクドナルド総幹事や外国人委員による実践的な指導としてキリスト教関係者や篤志家への寄付を依頼する行動や方法に戸惑いながらも、日本の委員たちは募金活動の方法を学び、積極的に取り組み事業を展開していた。

1915年、国内で集められた募金と米国大学生、英国女教師会、カナダ YWCA からの寄付金とによって、東京 YWCA は自前の会館を神保町に建設したのである<sup>12</sup>。東京 YWCA 神保町会館は、東京 YWCA 事務所のほか、体操場を兼ねた集会場や教室、日本間、図書館、食堂などがあり、会館の3階部分には一般女性のための寄宿舍<sup>13</sup>が設置されていた。また会館内には日本 YWCA 事務所も移転してきた。その他、夏の期間、避暑のため1泊20銭で宿泊できた鵜沼海岸での女子休養所(1916年)や職業婦人のための夏期休養所を鎌倉に設置(1919年)するなど、青年女子や婦人の休養や会合場所としての施設を作り、学生や働く若い女性たちの休息の場とした。事務所と事業のための会館、女子学生から一般女性にまで対象が広がった寄宿舍、そして日常生活を離れひと時の休息をとる場所としての休養所は、学びの場として、また学業や労働に向かう若い女性の安全な生活の場、休養の場であった。寄宿舍では、「規則を厳しくして束縛するようなことはせず、出入時間その他二、三のほかは、友愛的共同生活に導く」<sup>14</sup>精神の基に運営がなされていた。彼女たちが個としてまた社会人として学び成長する機会がそこにはあり、施設は教育的な意図を持って運営される事業であった。同時に施設は自営を原則とし、東京 YWCA の財政を担う役割も持つ事業として展開されていた。

## 2. 教育事業

1915年、東京YWCAは自前の会館を持つに至り、商業簿記、珠算、実務などの女子計算員養成科の新設のほか、体育部、宗教部、教育部の新設、女中夜学校の開講など、会館での教育事業を広く展開していった。こうした教養教育や専門的職業教育は学校的な教育事業であったが、もう一つの教育事業が開始された。それはグループワークを基礎とした自治的集団活動である「クラブ」と呼ばれるものである。クラブの実践を通し、若い女性たちの人格形成、人間教育を培うことを目的としていた。1915年学生を対象としたクラブが開始され、1919年働く若い女性の最初のクラブであるBG（ビジネス・ガール）クラブが発足した。これは鉄道局勤務の女子従業員たちのクラブで「勇泉クラブ」と呼ばれた。引き続き、女子学生に至らぬ年齢の少女たちには少女部クラブ、学校卒業後、職業に付かず家にいる「家庭青年」と呼ばれた女子青年のクラブが作られた。グループワークを基礎とした自治的集団活動である「クラブ」の実践を通し、若い女性たちの人格形成、人間教育はどのように培われたのであろうか<sup>15</sup>。少女、学生、BG、家庭青年と年齢や所属の違いによってクラブは構成されている。クラブはクラブ毎の活動と、全クラブの連合体としての活動がある。各クラブの活動はクラブ員の興味や関心によりプログラムが企画運営される。それはクラブ員の話し合いが基礎となり決定される。クラブ全体としての活動は、聖書研究や各種講座、レクリエーションなど年齢に応じたプログラムへの参加や、東京YWCA全体で実施される社会奉仕活動とその資金づくりなどがある。

こうした取り組みは各クラブで話し合いを重ね、各クラブ代表はクラブで出された意見を元に全会での協議を重ね、内容を決め運営の責任を持ち実施に向き合う。クラブ員は、話し合いと協力による自治的集団活動の経験に含まれる人間教育的な影響を受け、その人格形成を促すことになる。YWCAの委員会や会議においても自治的集団活動による組織運営がなされている。クラブの活動を通して成長するクラブ員は、YWCA運動を担う「会員」としての育成が同時に実施されているとも言える。

## 3. 社会事業

日露戦争から第1次世界大戦にかけての日本の近代産業の目覚ましい発展は、その背後に過酷な労働と貧しさの中に閉じ込められた労働者を生み出していた。特に「女工」と呼ばれた女子労働者の状況は大きな社会問題となっていた。東京YWCAはこうした問題に取り組

むために工場や病院で、キリスト教について語ることから事業を開始した。本所富士紡績会社工場では、1800 人の女工が雇われていた。彼女らが入寮していた会社の寮長の依頼を受けた東京 YWCA は、経営者の中の一人のクリスチャンを通じ集会開催の同意を会社から得る事ができた。会場には 1,000 余名の女工が集まった<sup>16</sup>といわれている。また看護婦に向けての事業も開始した。看護婦という仕事は女性の職業として急速に成長しつつあったものの一つで、多くの看護婦が厳しい労働環境の中で精神的にも追い詰められ、患者を粗末に扱うなどその対応が問題視されるような状況であった。そうした看護婦のためのバイブルクラスが開始された<sup>17</sup>。そうした動きの中で 1912 年、東京 YWCA は労働婦人部を組織した。

翌 1913 年には、東北大飢饉による家出人に対し、上野駅での案内相談と宿泊の世話をする「旅行者の友」事業を開始した。この事業は日本 YWCA の緊急になすべきこととして取り上げられ、東京 YWCA が担当した。

予てより本会に於いては地方より上京せる年若の女子の中には種々の誘惑に陥り墮落の境遇に沈むもの少なからざるを以て何とかして此れを未然に防ぐ方法を講ぜんとになりしが右は停車場に於いて地方より出京する若年女子が誘惑者の手に落ちざる前に救済保護するの一策なる<sup>18</sup>。

上野に一軒の家を借り上野停車場で開始され、1 年後は東京中央停車場でも始められた。この事業経費は年額千円以上が必要であったが、新渡戸まり子停車場事業委員長をはじめとする委員たちは YWCA 内外へ向け広く寄付を訴えるなど尽力した。

昨年中我が「旅行者の友」に於いて取り扱った人数は数え切れぬ程多数であります、就中一夜以上二週間の間旅行者之友宿泊所に止宿せしめて保護を加え、夫々適宜の方法によつて其の身の振方をつけてやつたものは百十八人でありました<sup>19</sup>。

と示し、出立地、月次人数、年齢、上京理由、対処分別、その他の世話など詳細な報告が、機関誌に掲載されている。事業は 1923 年まで継続された<sup>20</sup>。

1914 年、東京 YWCA は小石川区金富町（現在の文京区）の福岡子爵邸内の一部に、「労働者の家庭よりの幼児童を集むるを以て主意となす<sup>21</sup>」とする隣保事業「好友園」の開園。

その後、YWCA 会員からの要望などもあり女中夜学校（1916 年）、保健婦の先駆けである巡回産婆を王子、滝野川地区に派遣し産助と看護をする<sup>22</sup>巡回産婆看護婦事業（1918 年）などを実施した。関東大震災（1923 年）時には、会館は全焼したが無事であった寄宿舍に仮事務所を置き、罹災または失業の婦人に和洋裁縫材料を与え 1 日賃金 80 銭余を得る授産所の設置や、奨学金の給付、職業紹介、廉売など震災救護事業を展開し、東京府から依頼された月島方面罹災者調査及び配給物配布などの事業も実施された<sup>23</sup>。こうした地域社会の必要性に応える社会事業は拡大していった。社会事業は委員として事業を推し進める者、ボランティアとして協力する者など多くの会員が共に係わり、その係わりの中から育てられるという教育的意味を持つ事業でもあった。

## 第2節 東京 YWCA の独立

YWCA の事業は会員によって推進される。YWCA の会員とは「基督教婦人運動に携る一員として奉仕し貢献し得る事にあり。故にその責任は会の一員としての自覚を以て自らその会を負ふ者たる事<sup>24</sup>」と記され、恩恵の受益者ではなく、運動の推進者、支援者としての会員であり、そうした自覚を持つ会員であった。YWCA 会員の自覚は、会の運営や財政にも反映されていた。会員は委員会を構成し、専門職である職員と共に事業運営に当たり、その財政においても、会費、寄附、事業や催物等の収入を自ら生み出す独立採算の原則を堅持しながら関わった。こうした自立的な運営を維持しようとする自覚は、活動の細部に亘り貫かれていた。東京 YWCA の事業はこうした自覚を持つ会員と、委員会とによって成立していたといえよう。

初期の東京 YWCA の会勢は、1913 年会員数 187 名（うち維持会員 74 名、普通会员 113 名）、寄宿舍生 104 名、学生聖書研究会 241 名（平均出席者）などであり、以後 1918 年 650 名、1921 年 923 名と会員数は拡大を見せた。また会館出入は 1918 年 11 月には 1,050 名、1920 年 6 月 4,155 名との記録があり、1926 年には月平均 3,550 名<sup>25</sup> を数えるようになっていた。

1924 年、日本 YWCA は、拡大する組織の整理のためか「本部、市部に如何なる援助を与えるや<sup>26</sup>」との問いかけを、各ローカル YWCA に出している。そうした動きの一方、東京

YWCA 年会（総会）では「本会会員の一致団結の為会報を発刊しては如何につき議論百出」とされ、「現在の雑誌『女子青年界』に本会の報告を尚一層詳細に記載する事<sup>27</sup>」などが議されている。各ローカル YWCA による事業の拡張は、日本 YWCA 同盟と各ローカル YWCA 組織の関係のあり方に対して再検討を迫ることとなっていた。

1925 年、東京 YWCA は高等女学校の認可を取ろうと動いていた。その経緯を東京 YWCA 幹部委員会記録（1925 年 12 月 9 日付）から見ると以下のようであった。

#### 四、協議

##### （一）本会単独ノ財団法人組織トナスノ件

現在ニテハ本会ノ不動産ハ日本基督教女子青年会同盟財団コレヲ保管ス

独立ノ財団法人組織ノ必要ナル理由

（イ）本会教育部の私立女学校組織トナスノ必要切迫ス、是ガ為メ個人経営、財団法人経営種々アリ 本会トシテハ前事ニ於テ後ヲ選ブヲ可トス。然ルニ現在ノ財団寄付行為第一条ニハ教育事業云々ノ項目ナキ為現在ノママニテハ経営不可能ナリ。依テ女学校設立ノ願書ハ今モッテ空ニ迷フテ居ル次第

（ロ）本会トシテハ貧乏トハイエ不動産ヲ有スルコトニテ今後複雑ナル恐アルコトナレバ今ノ際変更シテハ如何？（「ママ」）現在ノ寄附行為項目中ニ教育事業云々ノ新項目ヲ加ヘル方法ヲ講ジテ学校経営ヲ開始スルカ又コノ際独立ノ法人組織トナスカニ就キ協議ス。

独立ノ財団法人ニ変更スルコトニ異議ナシ。

右ノ件ヲ会長志立氏ヲ通ジテ同盟委員ニ申出デルコト。同時ニ弁護士ニ手続き其他ノ内相談ヲナスコト<sup>28</sup>

YWCA の運営は委員会によってなされていた。各ローカル YWCA もそれぞれに幹部委員会を持ち独立した運営を行っているが、社会的には日本 YWCA 同盟の財団法人格の中に位置した組織であった。各ローカル YWCA はそれぞれの運営、財政に責任を負っているが、不動産など所有権などの人格を必要とする事柄においては、財団法人格をもつ日本 YWCA 同盟がその役割を担っていた。日本 YWCA は、1914 年財団法人認可を受け、東京 YWCA を始めとする各 YWCA はその寄付行為の中に位置付き、不動産を始めとする財産は日本 YWCA が保管していた。東京 YWCA は高等女学校許可を財団法人として取ろうと考えるが、日本 YWCA 同盟の

寄附行為上には教育事業の記載がなく、高等女学校事業実施には、寄附行為の変更もしくは新たな財団の設立かとするかが議された。

東京 YWCA が東京府より「駿河台女学院」の許可を取ろうと考えた背景には、専門的職業教育分野において英語商業科新設、タイプ事務実習（1918 年）などが始まり、専任者を置いた英語や商業タイプが盛んとなり、商業部には速記科、オフィーストレーニング科が、また商工部には夜学科が設置（1921 年）されるなど、教育事業の成長拡大があった。社会的位置付けを持った学校として経営していく事は、事業の信頼と浸透に繋がり、財政の確保確立にもなる。そのような方向を東京 YWCA が望むことは充分考えられる。また、東京 YWCA は、当時既に神保町に会館（1923 年関東大震災で消失、仮会館設置）の他に、学生用寄宿舎、職業婦人のための夏期休養所、低収入職業婦人宿泊所（関口）なども有し運営していた。それらは幹部委員会記録にもある通り、日本 YWCA が不動産を保管している形が取られていた。こうした状況は、今後複雑な事態を生む可能性もあるとの懸念もあった。事業の拡大、それに伴う組織体としての確立への要望、こうした現実的な必要から、東京 YWCA は独立した財団法人となることの選択を行ったと考えられる。

翌 1926 年 2 月の幹部委員会記録には、東京 YWCA が独立した財団法人格を取得する件について、日本 YWCA の了承が得られたと記録されている。

## 協議

### (1) 財団法人組織の件報告

同盟にて財産を分かち事を理事会にて決定す。依って其手続き中なり<sup>29</sup>。

実務的な手続きを経て、1927 年、東京 YWCA は財団法人として社会的にも独立した組織となった。法人設立を準備していたこの時期、併せて機関誌発刊の件が議されていた。既に独自の会報発行が 1925 年の年会（総会）で議論されていたが、その折は日本 YWCA『女子青年界』への報告掲載を充実させることで収められた。しかし、東京 YWCA 独自の機関誌発行の意見は根強くあったようで、翌年の幹部委員会にて議論が再燃していた。

## 八．月報発刊の件

詳シキ報告及感想ヲノセテ本会ノ事<sup>判読不明</sup> ○ 来ヲ一般ニ知ラシメ相互ニ連絡ヲトル為  
メ一部五銭位ニテ発刊スルコト 丈モ同盟ノ雑誌ニ本会会員新旧七十名程ノ購

読者ナリ 内容意義ヲ異ニスルモ誤解ナキ様志立氏同盟ノ係ノ方ニ諒解ヲ求メ  
ラルベキコト 宮城、内池両姉編集相談委員ウケラル<sup>30</sup>

同盟への誤解が生じないように配慮をしつつ、月々の報告紙として会員や一般に発行することが議され、編集委員も決められ具体的な動きが始まった。翌月には同盟の承諾も得られ、名称や事務方についての報告とともに、「内容ハ会員ノ所感及報告ニ止メル事」<sup>31</sup> が確認されている。こうして1926年7月、東京YWCA機関誌『地の塩』創刊号が発行された（以下同誌は「地の塩」と表記する）。この『地の塩』の記事内容については、すべて読み込んだうえで、独自の方法で記事内容一覧を作成し、巻末資料として添付した。

設立初期にみられた日本YWCAと東京YWCAの組織が混在していた関係は、「日本全国ニ於ケル市町村基督教女子青年会及学生基督教女子青年会ノ統一ヲ図リ、コレ等ト萬国基督教女子青年会トノ連絡ヲ取り、尚本会未設市町村及諸学校ニ基督教女子青年会ノ設立ヲ奨励<sup>32</sup>」する日本YWCA同盟と、地域を地盤としそこから生じる課題に対し具体的事業をもって働く東京YWCA、というように異なる役割を担う関係へと、明らかに変化を遂げてきたのである。こうした動向は、戦前期設立の各ローカルYWCAにおいても同様にみられ、会館取得などを契機に財団法人格を得ており、各々独立した法人として位置付けられている。戦前期設立6都市YWCAの法人格取得年度は以下の通りである。

＜各YWCA（設立年）、法人格取得年及び機関紙（誌）発行年＞

東京YWCA（1905年）	1927年財団法人、1926年機関紙（誌）発行
横浜YWCA（1916年）	1935年財団法人、1929年機関紙（誌）発行
大阪YWCA（1918年）	1925年財団法人、1923年機関紙（誌）発行
神戸YWCA（1920年）	1952年財団法人、1954年機関紙（誌）発行
京都YWCA（1923年）	1935年財団法人、1933年機関紙（誌）発行
名古屋YWCA（1933年）	1956年財団法人、1938年機関紙（誌）発行

### 第3節 独自の運動を支える財政的自立

主体者としての自律には、経済的自立への認識が内在されていなければならない。東京YWCAの働く若い女性たちは次章で詳細を述べるが、「1930年会館出入り職業婦人調査」の通り「独立して生活するが如き夢にも考えられない」経済状況の者が7割弱であった。独立自活は、現在まで続く女性の大きな課題であり、その解決には社会状況の変革や、教育の充実など取り組むべき問題が多くある。ここではYWCA設立時より実施されていた募金活動の中に、経済的自立への認識を培う教育的要素を見してみる。

東京YWCAの組織的自律のためには、それを支える人材とその育成が不可欠な要素であるが、経済的自立も欠くことのできぬ大きな要素である。東京YWCAの事業は寄宿舍から始まり、その後自らの会館も含め各種の施設を作った。その施設においては各種の事業が展開され、会員の学びと活動の拠点として位置付いていた。そうした施設は支援者や海外からの寄付金と、会員による募金や、音楽会、バザーなどによる資金の調達によって作られている。『地の塩』には、募金や寄付に関する記事が多く掲載されている。『地の塩』発刊の1926年は、関東大震災で失われた会館を復興しようとする時期でもあり、新会館建築も含む復興資金募金運動についての記事は、『地の塩』上に機会あるごとに様々な形態で掲載されていた。募金活動の実情を、復興資金募金運動の記事から見てみるために、表3-1「募金関連記事一覧（機関誌『地の塩』より）」として整理してみた。

1926年2月第2回年会（総会）で、東京YWCAは会館建築並に其資金25万の募金を決議している。これを受け翌月の幹部委員会では、夏迄を準備期間、秋期より募金運動開始を決定した。早速復興委員会（幹委7名+3名）を組織し、毎金曜日を委員会日と定め、募金額は会員5万円、一般から20万円を募集すると決めた。『地の塩』第3号一面には、募金趣旨と新会館概要、及び予算が掲載された。総予算65万円で40万円は米国YWCAの寄贈、「残る25万円の募集方は私共の双肩にかかっております」と募金のスタートが宣言された。「復興資金募金運動」と命名され新会館建設と復興事業に向け、東京YWCAは1926年5月から1928年10月の間、全会での募金運動を展開している。『地の塩』第4号では、「募金の話」として、会社に卒業生を訪ねての様子や、少女部クラブが各自の俸約で30銭、50銭を集めていることや、学校（府立第一）記念日バザーでは紅茶販売を実施、利益一部が募金に充てられたことなど、募金活動の様を紹介する記事が掲載されている。



表3-1 募金関連記事一覧（機関誌『地の塩』より）

掲載日	号数	内容
1926. 10. 15	第3号	「復興建築趣旨」+会館スケッチ画 新会館内容説明、計画工費＜内訳＞ 収（65万）：米Y寄付40万+日本募金25万 支（65万）：建築費 「募金運動に際して」志立タキ、加藤タカ、橋本京子 そのための働き—牧師招待会（19名）、賛助員招待会の開催、 会員部 募金運動への意気込み—最寄会開催
1926. 12. 15	第4号	募金記事*卒業生を会館に訪ねるの記事 *少女クラブの募金（毎月各自30銭50銭の俟約） *ハーベストクラブ2年後100円を目標 学校（府立第一）記念日バザー—紅茶販売。純益30円学校と東Y募金へ
1927. 2. 26	第5号	「復興資金募金運動の概容」 1926. 2. 27第2回年会—会館建築並に其資金25万の募金を決議 3月幹部委員会—準備期間（夏迄）、秋期より募金運動開始決定 復興委員会（幹委7名+3名）設置：定例日 毎週金曜日 会員献金5万、一般募集20万と決定 その他記事：*内務省3万、宮内省2千、三井家1.5万の寄贈寄付 *「先帝御不例に引続き御諒闇を迎へ、募金運動も一区切りをつけることに。目的地に達しますには幾多の突貫を、一層努力を」 *＜2/25迄の報告＞ 総額80,949円 内訳：一般61,371円、会員・クラブ・委員・その他19,578円
1927. 3. 26	第6号	新会館前景スケッチ画
1927. 6. 10	第7号	「あゝ早く心地よい会館がほしい」「東京の市に1日も早く清く気高い心地よい平和な家を完成しようではありませんか」
1927. 8. 2	第9号	「映画の集い」純益1487円27銭：保田休養所・修養会・夏期事業に 教育部主催「文芸会」報告：純益160円—夏期修養会費用18クラブへ
1928. 2. 25	第12号	「復興事業経過」 所感：志立タキ（復興委員長） 建築経過：（略） 募金経過：1927. 10. 28各部から募金委員集り相談—7チーム編成 委員長：内地よね子 期間11/20募金出発～12/23募金報告感謝会、 目標15万（10万復興委員+5万一般会員募金） 各部の募金額イラスト 1月までの集計103,993円36銭 1か月間の様子：成果表のポスター（月曜報告、数値記入）学生部— 10銭袋を市内62女学校へ配布・門前払いや会社での屈辱等の話も
1928. 10. 5	第18号	*「募金経過並計画」（イラスト表付） 募集金額 25万円：第1回（1926. 5～1927. 10） 10万、第2回 （1927. 11～1928. 6） 5.2万、残額 9.8万円 新計画（1928. 10. 7～10. 28）大口8万+小口1.8万（私共の努力で） *「復興計画工事費収支一覧表」収入の部（92万）：米国Y（第1 回）40万、日本寄付募集予定額25万、米加（第2回）+本会貯蓄+為替 差益+不動産処分見積額27万。支出の部（92万）：当初予定額65万、 追加拡張建築費予定額27万
1928. 11. 5	第19号	「募金運動の経過」現状1875円60銭（1.8万に対し）各部別責任額 （人数に比して）計1.8万：会員11,000円、有職1000円、家庭部2000 円、商業部1200円、英語部1200円、体育1000円、学生・少女600円
1929. 2. 11	第21号	「新会館に入るに臨みて」会長 志立タキ 「復興費報告」①建築費701,704円+②敷地及復興事業費25万 ① 米Y40万+米加分、東Y貯蓄、為替差益、不動産処分301,704円 ②日本寄付分申込総額160,283円78銭、募金残額89,716円22銭

1926 年 12 月の天皇崩御時一旦募金は中断されたが、2 か月後の機関誌第 5 号（1927 年 2 月 26 日）には「復興資金募金運動の概容」記事にて、これまでの経過報告が示され、その後新会館のスケッチや、「早く会館を」の記事が掲載されるなど、募金運動は継続されていることが読み取れる。

また、第 9 号（1927 年 8 月 2 日）の夏期事業募金報告は、復興募金以外にも同時に各種の募金活動も実施されていたことと、催し物などを通し、寄付を集める方法が様々に工夫されていたことが見えてくる記事である。第 12 号（1928 年 2 月 25 日）では、諒闇の期間終了を目前に控え、東京 YWCA 全会を 7 チームに編成し、1 か月で募金目標達成を推進しようという意気込みを感じさせる記事が「復興事業経過」として掲載された。その後、新会館完成を目前とする第 18 号（1928 年 10 月 15 日）～第 21 号（1929 年 2 月 11 日）誌上では、復興事業費の収支にわたる詳細が報告されている。25 万円の目標を掲げた募金は最後まで各部別責任額を持つなどの不足額への対処方法が示されているが、最終的には 89,716 円 22 銭の不足額であったことが記されている。

以上『地の塩』記事や年史から「復興資金募金」の流れを見た。本募金運動は、震災後新しい会館を立てるという東京 YWCA にとっての大事業であり、全会一丸となり取り組む事業であったと言える。会員はその費用の 1/4 を募金で集めようと動き出した。建築費用の 4 割強は米国 YWCA などの海外からの寄付、3 割強が東京 YWCA の預金などの資産が充当され、会員募金は予定の 7 割弱を集めた。不足の 3 割分については、各部責任割り当てが記載されているが、その後についての顛末は、『地の塩』上には見られない。幹部委員会記録には 1929 年 3 月 13 日と 1929 年 4 月 17 日の記録として、建築に関する会計報告と復興資金募金会計の会計報告がなされた記録はあるが、会計報告自体は別紙となっているためその詳細を知ることはできなかったが、何らかの形で会計が締められたと予測される。

この募金は、会員全体を対象としての予算共有から始まっている。予算は細目化され各部、各会員に渡る目標値という予算化がなされていく。65 万円という会館建築事業規模は現在で考えるならば約 4 億程度かと換算<sup>33</sup>するが、会員には 5 万円（約 3 千万）の負担と、20 万円（約 1 億 2 千万）を募金として集めるという大きな目標が掲げられている。その目標値に向け、具体的な取り組みが検討され実施された。最終的には費用増加分も含めその 7 割は海外寄付と東京 YWCA 資産が当てられたが、会員が担う費用は変わることなく 25 万円が堅持され、追求された。その状況は委員会を通じ、また会報を通じて会員に共有されている。様々な背景を持つ会員は、それぞれのやり方を考え行動に移し、会館建築費用を

担う経済的な責任を負った。その責任は、扶養される存在でありがちな女性にとっては、経済を自覚する機会であり、その課題に立ち向かう実践的な経験であった。こうした財政に関与する経験は募金に限定された事ではなく YWCA 事業の全てにおいても追及され、常に予算主体者としての自覚と責任を促すものであった。

1929 年、ついに東京 YWCA は関東大震災で失った会館を再建した。「駿河台にそびえたつ新会館」<sup>34</sup>は地下 1 階地上 5 階のスペイン風洋館で、日本初の女子専用の屋内温水プールを始めとして、大小講堂、体育館、カフェテリア、教室、ホステルなどを備え、細やかな配慮に満ちた会館であった。総経費 951,704 円は、米国及びカナダ YWCA からの寄付 400,000 円と日本における寄付を資金の柱としていた<sup>35</sup>。日本での寄付集めは、「募金活動」として委員会が設けられ、篤志家や支援者への依頼のほか、アメリカで売った使い古しの切手を集めることや、小額でも協力することが出来るよう十銭袋作りなど、少女部や学生部に至る全ての会員が様々な機会を捉え働いた。「会館を得て会の活動は躍進し、会員のクラブ活動—少女、学生、職業など各層の人々—駿河台女学院、体育部、プログラムなど、当時の若い女性憧れの場所であった」<sup>36</sup>と東京 YWCA80 年史には記されている。

会長志立タキ<sup>37</sup>は「此会館の十二分に利用され社会の為に一層有益に活用せらるる様」<sup>38</sup>にと願った。新会館祝辞には、新渡戸稲造(奨励)、津田梅子(東京 YWCA 初代会長)、河合道子(日本 YWCA 初代日本人総幹事)、安井哲(東京女子大学学長)、長尾半平(東京 YMCA 理事長)、三好努(富士見町教会牧師)、市川源三(府立第一高女)、遊佐敏彦(中央社会事業協会)、生江孝之(日本女子大学教授)、新渡戸まり子(元東京 YWCA 会長 1914 年～1917 年)、久布白落実(婦人矯風会)、市川房枝(婦選獲得共同委員会)、斉藤惣一(東京 YMCA 総主事)らのメッセージが並んでいる<sup>39</sup>。それは、人々の YWCA に寄せる期待の高さを物語るものであった。

東京 YWCA の建築物は、世界の YWCA を通じての海外からの寄付金が建築の基金となっていることが多い。その基金と日本国内で集められた募金とによって建てられた施設は、その運用により自営されかつ東京 YWCA の財政を賄うものとなっている。東京 YWCA の事業は、宗教、教育活動、社会活動など多様な領域に亘っているが、それらの多くは施設を基盤に展開されることが多かった。自前の施設を持つことによって、安定した事業展開が可能となり、施設運営による収入は、財政面を支える役割も持っていた。組織としての財政的自立の一端を担う一つの方法としての有効性を、世界 YWCA ネットワークは経験的に認識し、その情報は共有され、日本においてもその方法が継承されていたのではないかと考える。

自覚ある会員と経済的な自立が、東京 YWCA の自律性を支える大きな要因であり、同時に会員個々にも YWCA 活動のあらゆる場面で財政的な認識を含めた主体者としての自律的な教育が展開されていたと言える。

## 小 括

ナショナル YWCA の日本 YWCA が設立され、その 1 ヶ月後、最初のローカル（市部）YWCA として東京 YWCA が設立された。当初は、同じ総幹事（マクドナルド）、同じ事務所という状況から混然一体とした組織のように見えていたが、その役割は徐々に明らかになっていった。日本 YWCA は機関誌の刊行と、ミッション・スクールや公立学校を対象とした学校 YWCA の組織を担当し、東京 YWCA は学生寄宿舍事業や社会事業、職業教育などの、地域で求められる課題に対応した事業を実施した。

東京 YWCA の寄宿舍事業は、時代的にも必要性が高く、また YWCA が対象とする女子学生へ向けた事業でもあり、東京 YWCA の最初の事業として、社会的にも認知される事業であった。この事業から会員は募金活動の方法を学び、積極的に取り組む体制を定着させていった。

教育事業では、専門的職業教育と共に、自治的集団であるクラブによる教育が展開された。クラブ員は、話し合いと協力による自治的集団活動の経験に含まれる人間教育的な影響を受け、その人格形成を促された。YWCA はすべてにおいて自治的集団活動による組織運営がなされている。クラブの活動を通して成長するクラブ員は、YWCA 運動を担う「会員」としての育成が同時に実施されていた。

社会事業においては、労働環境の厳しい女工や看護婦などへの精神的サポートとしてのキリスト教を伝える集会やバイブルクラスが実施されていた。そうした経緯を経て、「旅行者の友」や「好友園」などの社会事業分野での活動は広がり、関東大震災においても種々の事業が実施された。地域社会の必要性に応える社会事業は、委員として事業を推し進める者、ボランティアとして協力する者など多くの会員が共に係わり、その係わりの中から育てられるという教育的意味を持つ事業でもあった。

これらローカル YWCA としての事業の拡大は、東京 YWCA を社会的に独立する方向に導い

た。他のローカル YWCA も同様に独立した。こうした独立は各 YWCA の独自の運動を支える財政的自立が貫かれていたことによる。自覚ある会員と経済的な自立は YWCA の自律性を支える大きな要因である。日本の YWCA は、1925 年第 1 回全国総会を開催し、日本における YWCA の組織を整え、ナショナル YWCA とローカル YWCA はそれぞれの事業を推進していった。

- 
- <sup>1</sup> 『東京朝日新聞』 明治 38 年 (1905) 11 月 25 日「会」欄。
  - <sup>2</sup> マーガレット・プラング (Margaret Prang) / 鳥海百合子訳『東京の白い天使 近代日本の社会改革に尽くした女性宣教師キャロライン・マクドナルド』教文館、1998 年、p. 68 (世界 YWCA 文書キャロラインからスペンサーへ、1905 年 11 月 29 日)。
  - <sup>3</sup> 石橋/櫛編『職員版東京 YWCA 年表』東京 YWCA、1986 年、p. 5 には「1904 年創立委員会成る、関係者として次の人々の名前が・・・」と記されているが、この出典元は明らかではない。
  - <sup>4</sup> 日本 YWCA 機関誌『明治の女子』第 2 巻 9 号 (1905 年)「東京女子青年会の役員」、不二出版、1992 年、p. 18。及び同上『職員版東京 YWCA 年表』による「東京 YWCA の最初の委員」東京 YWCA、1986 年、p. 6 による。
  - <sup>5</sup> 小畑久五郎は渋沢栄一の秘書を勤めた人物。
  - <sup>6</sup> 本多庸一 (牧師) は日本メソジスト教会初代監督。新島襄、内村鑑三、新渡戸稲造、本間俊平と並び、明治期日本におけるキリスト教主義教育の先駆者。当時は青山学院長、YMCA 同盟委員長。
  - <sup>7</sup> 長尾半平は九州・中部鉄道管理局局長、東京市電気局長などを歴任。後衆議院議員、日本国民禁酒同盟理事長他。
  - <sup>8</sup> 小室三吉は三井物産ロンドン支店長などを経て理事、取締役他を歴任。
  - <sup>9</sup> 日本 YWCA100 年史編纂委員会『日本 YWCA100 年史－女性の自立を求めて』日本 YWCA、2005 年、p. 4。
  - <sup>10</sup> 東京 YWCA100 周年記念委員会編『年表 東京 YWCA の 100 年』東京 YWCA、2005 年、p. 5。寄宿舎の第 1、第 2 については、『女子青年界』第 22 巻 10 号 p. 16 や日本 YWCA、東京 YWCA 年史などは納戸町を第 1、水道町を第 2 としているが、東京 YWCA 機関誌『地の塩』紙面に掲載されている寄宿舎の広告は、水道町を第 1 寄宿舎、納戸町を第 2 寄宿舎と明示している。時の経過の中で変更などがあったのか定かではないが、常時関係者の眼にさらされている広告が間違えたまま掲載され続けることは考えづらく、機関誌広告での表記はその当時そう呼ばれていたことを示し、名称の信頼性は高いと考えられる。しかしここでは、日本 YWCA、東京 YWCA 年史上で使用された名称で表記した。
  - <sup>11</sup> 日本 YWCA 機関誌『YWCA』第 50 号、「創立時代 日本 YWCA50 年の歩み」1955 年 4 月、p. 6。
  - <sup>12</sup> 日本 YWCA 機関誌『女子青年界』第 22 巻 10 号、河井道子「創立の頃を想ひ出でて」、不二出版、1993 年、pp. 53-54。
  - <sup>13</sup> 吉屋信子著『吉屋信子乙女小説コレクション 2 屋根裏の二処女』国書刊行会、2003 年。1920 年に発行された当小説は、1916 年を時代設定として書かれ、当時の YWCA の宿舎が舞台となっている。僅かながら、寄宿舎やそこに暮らす女性たちの様子が垣間見られる。吉屋自身も YWCA 寄宿舎で暮らした事がある。
  - <sup>14</sup> 日本 YWCA80 年史編纂委員会編『水を風を光を 日本 YWCA80 年』、日本 YWCA、1987 年、

---

p. 47。

- <sup>15</sup> その詳細は第4章、第5章において述べる。
- <sup>16</sup> 前掲『東京の白い天使』p. 135。カナダYWCA文書35巻キャロラインから家族へ（1912年6月15日）を引いたとされている。
- <sup>17</sup> 前掲、『明治の女子』第9巻第6号、1912年、pp. 8-10。及び同上『東京の白い天使』pp. 134-135。
- <sup>18</sup> 前掲、『女子青年界』第10巻11号、1913年12月1日。
- <sup>19</sup> 同上、第13巻第4号「昨年における旅行者の友 ミス、ページ」、1916年4月。
- <sup>20</sup> 前掲、『YWCA』第50号、p. 6。
- <sup>21</sup> 前掲、『女子青年界』第11巻第6号、1914年6月、p. 344。
- <sup>22</sup> 東京YWCA『東京YWCA50年の歩み1905年-1955年』東京基督教女子青年会、1955年、写真を多く掲載した小冊子で頁表記無し。
- <sup>23</sup> 前掲、『女子青年界』第20巻臨時号、1923年10月、全頁関東大震災関連記事。
- <sup>24</sup> 同上、第22巻第11号、1925年、p. 26。会費はこの時点まで画一されておらず、額面ごとの人数報告などが見られる。当時の会則である憲法第3章第1条第2項では、「福音主義の教会に属するものを正会員となし之に選挙権と被選挙権とを付与す」と教会員が正会員でありそれ以外が准会員とされているが、基督者であるか否かは個人的内面的問題として洗礼を標準とはしないなどの議論が継続されている。また幹部委員（全体運営委員）は正会員から選出されるが、各委員は正、准会員から選出された。
- <sup>25</sup> 関東大震災、第2次世界大戦により、東京YWCAの資料はほとんど消失している。1926年東京YWCA機関誌『地の塩』発刊後は定期的な会勢の報告が掲載されそこから会勢を読み取る事が出来るが、それ以前に付いては、日本YWCA機関誌『女子青年界』やいくつかの年史などから読み取ったものである。
- <sup>26</sup> 東京YWCA『戦前期東京YWCA幹部委員会記録』1924年12月。
- <sup>27</sup> 同上、1925年3月。
- <sup>28</sup> 同上、1925年12月9日。戦前期東京YWCA幹部委員会記録（\*詳細については序章、研究方法の注にて表示）は1923年9月～1944年4月の間の記録として保管されデータ化されている。幹部委員会は東京YWCAの中心的な運営執行機関であり、幹部委員は総会での選挙により選出される。
- <sup>29</sup> 同上、1926年2月10日。
- <sup>30</sup> 同上、1926年5月12日。
- <sup>31</sup> 同上、1926年6月。
- <sup>32</sup> 基督教女子青年会日本同盟『基督教女子青年会日本同盟憲法第2章目的第1条』1925年制定。
- <sup>33</sup> 日本銀行HP>公表資料・広報活動>おしえて日銀>企業物価指数（戦前基準指数）より算出した。1929年（1,078）：2016年（658.2）＝1万円：612万円を基に、65万×612≒4億とした（2017年4月29日現在）。
- <sup>34</sup> 東京YWCA『東京YWCA七十年のあゆみ』東京キリスト教女子青年会、1975年、p. 2。
- <sup>35</sup> 前掲、『地の塩』第21号、1929年2月。
- <sup>36</sup> 東京YWCA『東京YWCA80年の歩み—渡辺松子「東京YWCAが追い続けたもの」』東京YWCA、1985年、p. 7。
- <sup>37</sup> 福沢諭吉の四女である志立タキは、1918年から1941年（1927年のみ日本不在のため西野清子）の間会長職を務めた。その期間の総幹事は加藤タカであった。
- <sup>38</sup> 前掲、『地の塩』第21号、1929年2月。
- <sup>39</sup> 同上。

## 第4章 東京YWCA有職婦人部による女子教育

### 第1節 女性の労働者化の進行と、YWCAによる職業教育の拡大

日露戦争（1904年）、第1次世界大戦（1914年）を経て、急速に発達する日本の産業界は、女性の職場進出を拡大させていた。それは女性の職業分野の拡大と、女性の労働者化の進行でもあった。東京市社会局『職業婦人に関する調査』（1924年）序言では、「近來婦人の職業を救むる者が続出したので」と調査の目的を述べ、「近來中流階級からこれらの人々の続出したのは、云うまでもなく主として生活難が中流階級を襲った為であるがこれは寧ろ、産業革命の影響と之に伴う婦人の自覚（婦人解放運動）が與つて力あると云わねばならぬ」と職業婦人の増加を経済上の圧迫と共に、独立自立の抑え難き欲求の発現であると分析している。帯刀貞代は「資本主義の発展と共に急速に没落しつつある中産階級を背景とし、職業婦人問題はその労働条件の如き労働婦人と漸次その軌を一つにしつつあり<sup>1</sup>」と、比較的知的労働の性質を有し、間接に生産に参与する所の職業婦人の実情は、労働婦人の置かれた状況に近づきつつあることを述べている。1920年代の都市中間層に位置付く職業婦人は、その数と職種を増し、総体としては労働者化されつつある状況であったと言える。

日本のYWCAは設立当初から女学生を対象とした事業への取組みと共に、労働婦人への関心を持っていた。高等女学校を卒業し、会社、銀行、商店などで働く職業婦人を始め、労働環境の厳しい看護婦や、女工などの労働婦人と、幅広く働く女性の為に活動しようとしていた。こうした動きの背景には、世界YWCAの方針があった。1910年第四回世界YWCA大会では労働問題、職業婦人問題が議題とされ、1920年代に入ると産業労働者への働きかけの強調と、加盟各国の訪問調査などが実施されていた。1925年、日本YWCAは第1回総会で、婦人労働問題に関する研究及び調査部を設置する事を決め、1927年労働調査部委員会<sup>2</sup>を発足させた。

日本YWCAの方針に呼応しつつ、地域に拠点を置く東京YWCAもまた働く若い女性を対象に各種の事業を行っていた。そうした東京YWCAのうごきを、「職業教育」と「クラブ」という特徴的な事業から見てみる。

## 1. 職業教育

前章で述べたように、東京 YWCA は 1912 年工女のための講話会を富士紡績会社<sup>3</sup>の工場  
で、また看護婦人会の開催を赤十字社、三井病院<sup>4</sup>などの看護婦を集めて実施した。厳し  
い環境下で働く女性へのキリスト教を通しての精神修養的なプログラムであった。看護婦  
人会は各病院内で集会や礼拝などを数年継続したが、工女講話会は工場側から「働く少女  
たちがものを考えるようになり危険」との理由で禁止された。一方 YWCA 内部でも、全ての  
労働を神聖視する基督教的解釈は、劣悪な労働条件の黙認につながると幹事の中から批判  
が起こっていた<sup>5</sup>。こうした労働婦人事業といえる取り組みは試行錯誤を重ねていたが、  
東京 YWCA 会館では職業婦人への教育事業が徐々に拡大されていた。それは「職業婦人への  
英語の組」を始めとして、外国人幹事によりもたらされた英語や欧米ビジネスのリソース  
を活用したものであった。東京 YWCA の職業教育は、女子計算員養成科、商業簿記、珠算、  
実務などの実施（1916 年）、英語商業科、タイプ実務実習開始（1918 年）、商工部夜学科設  
置、商業部に速記科、オフィーストレーニング科設置（1921 年）と続いた。東京 YWCA は財  
団法人として認可を受けた翌年の 1928 年、従来の各クラスをまとめ、学校組織とし東京府  
より「駿河台女学院」の許可を受けた。その時には、商業科（欧文タイプライティング、  
速記科、商業英語科）、英語科（高等科、普通科、受験科、夜間普通科、別科会話専修科）、  
家政科（料理科、生花科、裁縫科）が整っていた。東京 YWCA において実施された職業教育  
は、前掲「職業婦人に関する調査」の分類<sup>6</sup>によれば、「知力」「技術」を主とする職業への  
教育であり、労働者化されつつあると言われる都市中間層の若い女性たちが、その受講者  
であったと考えられる。

## 2. クラブ活動

1919 年、東京 YWCA は最初の職業婦人（BG : Business Girl）クラブである鉄道局勤務女  
子のクラブを発足し、その後商工部スタークラブが発足（1921 年）した。「第一線に立つ  
女性即ち職業婦人の幸福のために全力をささげる」商工部は、夜学科の設置や職業婦人のた  
めの休養所運営など多岐にわたるプログラムを展開したが、自治的に運営されるクラブは  
その活動の核であり、「有為にして信仰つよき女性を一人でも多くすることと、現代社会の  
欠陥に直面して、弱きもの互いの協力と精神とによってより良き社会建設の一助ともなさん  
」とその決意を謳っている<sup>7</sup>。1926 年にはクラブ数 6、人員百余名に達していた。クラブ  
の活動は、クラブ毎の活動と全クラブとしての活動から構成されている。各クラブの活動



は、手芸や料理、文芸の講演会など、各クラブの興味や関心などによってプログラムが企画される。クラブ全体としての活動は、聖書研究、社会学講座、社会見学などの他、東京YWCA 全体で実施される活動写真の開催や、クリスマスの社会奉仕活動への助力のほか、夏の修養会への代表派遣<sup>8</sup>などがある。商工部が発足した時期は、既に横浜、大阪、京都の各市にもYWCA が設置され、BG クラブが開始され始めていた。1926 年、商工部は有職婦人部と改称され、翌年には米国YWCA 有職婦人連盟からの呼びかけに応え、世界のYWCA で開催されていた有職婦人国際晩餐会<sup>9</sup>を同時開催するに至っている。

## 第2節 東京YWCAにおける「有職婦人部」設立

東京YWCA 機関誌『地の塩』第5号（1927年）によると、「社会発達の要求と婦人自覚の結果、職業婦人の数が激増し、此等の姉妹方の為に修養、教育、娯楽の目的を以て適當なる機関を設け之が指導の任にあたらねばならぬといふ事に気付き」1919年に商工部を設置<sup>10</sup>、その後1926年には、単に女事務員のみならず広く一般の有職婦人をも網羅する考えで有職婦人部と改称し、その主な活動はクラブにあると記述されている。一方、日本YWCAの機関誌『女子青年界』第26巻第3号（1929年）「全国商工部幹事会報告」において、東京YWCA 元商工部幹事の安齋富得は、「東京YWCA では、商工部の名称は、インダストリアル、アンド、ビジネス（industrial and business）という事を直訳して附した。適當でない様に思え、協議の結果、職業婦人では、ビジネスガール丈に限られるからそれにプロフェッショナルといふ意味も含ませて有職婦人としては如何との事で、その後は有職婦人部という名称にいたしました」と経緯を述べている。これは各ローカルYWCA 商工部と日本YWCA 労働部との関係を協議する中での発言である。各ローカルの商工部幹事の意見交換の後、日本YWCA 労働調査部幹事正田淑子は「職業婦人部を総括した名称として、其の内容を二つに分けて職業婦人部（誤植：文の前後から判断すると「有職婦人部」と考えられる）と労働婦人部としては如何」と発言、大阪YWCA 商工部幹事ミス・マッキントシ（Miss McIntosh 生没不明）の「現在のところ商工部を二つに分け有職婦人部と労働婦人部といった事は資力の上から不可能。その二つの部の独立組織を希望として、現在の商工部を改め有職婦人部としては如何」とのやり取りを受け「全会一致可決」を見、全国的にも「有職

婦人部」と言う名称が確立したと記されている<sup>11</sup>。その後、『地の塩』においては、「私共の意味する有職とは一切の職業を有する婦人を包含する。目下は一般に職業婦人と呼ばれているタイピスト、事務員、看護婦、教師等と労働婦人又は勤労婦人と云われている工場婦人が有職婦人部の範囲内にある」と記述された<sup>12</sup>。これら資料から、YWCAにおいては、「職業婦人」をビジネスガール(business girl)とプロフェッショナル(professional)と労働婦人(factory girl)に分類し認識しており、「有職婦人」とは、これら「一切の職業を有する婦人」たちであると規定したといえる。では、東京 YWCA に集った有職婦人とは実際どのような女性たちであったのだろうか。

#### 1. 東京 YWCA の事業に参加した有職婦人

東京 YWCA は 1929 年、関東大震災で崩壊した会館を新たに駿河台に建築した。日本初の女性専用の屋内プールを持つ地下 1 階地上 5 階のスペイン風洋館では種々の事業が展開され、学校事業や有職婦人部の活動は充実度を増していた。翌 1930 年「会館に出入する職業婦人に就いての調査」の結果が『地の塩』に図表入りで報告された。このような調査が掲載されたのは初めてである。調査は 470 名の職業に就く婦人を数え、内クラブ員は 200 名、その他駿河台女学院夜間部(英語などのクラス 180 名、習字などの稽古事 90 名)に属する職業婦人であったと記されている。

では、東京 YWCA の事業に参加した女性たち全体の中での有職婦人はどのような位置であったのだろうか。『地の塩』上には各年度事業報告が、会員総数やその内訳、会計報告といった形である程度詳細に掲載されてきたが、1937 年度事業報告<sup>13</sup>は各部門において詳細な報告がなされている。この報告の中に「1937 年 12 月現在の会員調査<sup>14</sup>」がある。こうした会員調査一覧はこれまで『地の塩』上には掲載されていない。

「表 4-1 東京 YWCA 会員調査(1937. 12 現在)」は、この報告を整理しなおしたものであるが、属性を示す用語には今日では使用できない表現も含まれているが、当時のままに表記した。この表は、会員の属性について今日では調べることの難しい点までも把握しており、貴重なデータとなっており、特定の個人を限定するものではないため、そのまま分析の対象とした。

表 4-1 東京 YWCA 会員調査 (1937.12 現在)

有職婦人/家庭婦人/ 学生少女/2世/外人			年齢別						教育程度別														宗教別				
			1 7 歳 以下	1 8 歳 2 5	2 6 歳 3 5	3 6 歳 4 5	4 6 以上	不 明	高 等 小 学 及 小 学	中 等	当学院						専門		大 学	外 国	不 明	正 会 員 ( ス ト 教 会 へ キ リ	準会員				
											小 学 卒	中 等 卒	特 殊 校 卒	専 門 校 卒	外 国	不 明	特 殊	専 門					仏 教	神 道	其 の 他	無 し	
有職婦人 635人	一般 397		133	156	48	26	34	2	91	5	129	3	4		9	15	89	1	22	27	181	4			212		
	YWCA職員 63		17	27	11	8			8		4		1			4	30		16		52				11		
	YWCA講師 25		1	7	9	8			5		1					2	13		2	2	10	2			13		
	クラブ員 150		145	5				12	134		2						2				14				136		
家庭婦人 1134人	既婚婦人 750		37	254	140	137	182		368		53		1	1	2	16	134		12	163	325	23	2	2	397		
	未婚婦人 384		266	108	2		8		120	1	164	3	8		3	10	58		4	13	114	18	2		250		
学生少女 317人	一般 26		2	24					7		3		2			6	6		1	1	7	2			17		
	クラブ員	専門校29		29					1		10					7	11				1	2	1		25		
		女学校171	88	83					171												35				136		
		小学校91	91						91																91		
二世 24人	既婚婦人 3				2		1												8		3						
	未婚婦人 5			2	3						1								3	1	3				2		
	学生 4			3	1												3		1					4			
	有職婦人 12	一般 7	2	2			3									1			6		6				1		
		YW職員 2		2													1		1		2						
		YW講師 3		3															3		2				1		
外人 40人	既婚婦人 14				1	2	2	9											13	1	13		1		1		
	未婚婦人 2			1			1						1						1		1				1		
	有職婦人 24	一般 21		1	1	1	7	11											21		21						
		YW職員 3			1		2												3		3						
不明 25人					4	1		20		6		1			1		8			9	3	1			21		
総計 2175人			181	744	577	214	190	269	105	911	6	368	6	17	1	15	61	355	1	112	217	796	52	6	3	1318	

(『地の塩』第103号(1938.2.11) pp.22-23より作成)

表 4-1 によると、東京 YWCA が会員とした女性たちは、「有職婦人」「家庭婦人」「学生少女」「二世」「外人」と 5 分類されている。事業報告などでは有職婦人部、家庭婦人部、学生少女部といった括りとなっている。会員数として多いのは「家庭婦人」の 1,134 名で、全会員の 52% を占めている。またその 7 割弱は既婚婦人である。「有職婦人」には既婚未婚の分類は無い。

「有職婦人」と分類される人は、有職婦人部在籍者 635 名の他に、二世グループ 12 名、外国人グループ 24 名いたことがわかる。総計 671 名の有職婦人の内訳は、150 名のクラブ員、68 名の YWCA 職員、28 名の YWCA 講師、そして 425 名の一般と呼称されている有職婦人である。有職婦人中の女子青年層（ここでは 18 才から 25 才を女子青年層とした）は、299 名（二世、外人含む）いた。全会員中の女子青年層は、2175 名中の 744 名（34%）で、年齢層としては最も多くの会員が存在していたことが分かる。その内訳を見ると、有職婦人部に属する女子青年層は 40% を占め、他は家庭婦人 41%（内未婚婦人は 88%）、学生 18% であった。東京 YWCA が捉えていた女子青年層は 4 割が職業を持ち働く女子青年で、6 割が職業に就かず家庭にいる女子青年と学生であった。生活環境の異なる二つ階層の女子青年は、共に、クラブや教室に通い、学び語りあう女子青年たちであった。彼女らは東京 YWCA 会館という空間の中で、共に活動を展開していた。女子青年たちの話し・動き・活動する姿は、会館という限られたスペースの中では、より大きな存在感を現していたのではないかと推測する。

調査報告書によると、1930 年東京 YWCA 会館に出入りした職業婦人の多くは 20 代前半の女性たちであった。18 歳以下と 30 歳以上の存在は絶無と記されている。彼女たちの大半（85%）は高等女学校で学び、その内の 1 割以上が専門学校などへ進学した女性たちであった。職業や勤務先、年齢などの属性を『地の塩』記事を基に、整理してみたのが、「表 4-2 東京 YWCA 会館出入り職業婦人調査（1930 年）」である。

彼女たちの多くは、一般企業、銀行、商店、官庁などで事務員や、邦文・英文のタイピストといった事務に従事し、2 割弱が学校や病院など専門的知識と技能を必要とする職業に従事していた。勤続年数は約 7 割が 5 年未満であるが、6 年を超える人も 2 割存在している。彼女たちの月収は平均的には 38 円程度で、約 4 割が 26 円～40 円、60 円を越す月収は約 2 割の女性たちであった。物価の変動を考慮したとしても、前述の帯刀貞代の分析を借りるならば、「月 5 円以上の交通費を差し引けば 30 円そこそこで、食費、被服費、化粧品代に決して十分とは云えず、独立して生活するが如き夢にも考えられない<sup>15)</sup>」といえ

る収入であった。ごく一部労働婦人の存在も記述されているが、収入や勤続年数また職種などの数値結果からは残りの約2割がプロフェッショナルな人々であった事が分かる。

表 4-2 東京 YWCA 会館出入り職業婦人調査 (1930 年)

属性	構成比率
勤務先	会社47% 銀行、商店（含百貨店）11% 官庁、事務所10% 学校、幼稚園7% 病院5% その他4%
職務別	事務員45% タイピスト（邦、英）36% その他（店員、訓導、保母、看護婦、交換手、ごく少数の女中及び女工）18%
教育程度	女学校卒業60% 女学校中途退学15%（女学校程度中半ばは商業学校） 高等小学校卒業5% 小学校卒業10% 専門学校卒業7% 専門学校中途退学3%
年齢	18~20歳2% 21~23歳49% 24~27歳47% 28~30歳2% 21~27歳が絶対多数。18歳以下と30歳以上はほとんど絶無。（女子青年会においてのみ見るものではなかろうか）
月収と勤続年	最低20円より130円に至る。26円から40円が大多数、平均38円程度。20~25円4% 26~40円39% 41~50円20% 51~60円16% 61~70円6% 71~130円15% 勤続年数は2年から3年が最も高。然し4,5年から10年以上の勤続年数も相当あり、今後の職業婦人の方向を暗示するものではあるまいか。1年未満5% 1~2年19% 2~3年20% 3~4年17% 4~5年10% 5~6年10% 6~10年19%
その他	住居：自宅66% 親戚15% 自炊7% 下宿6% 寄宿舍6% 宗教：基督教45% 無宗教27% 不明15% 仏教9% 神道4%

（『地の塩』第31号（1930.5.5）p.3より作成）

## 2. クラブ員

続いて YWCA 職員及び講師と、二世、外国人を除いた、有職婦人部に在籍する一般 397 名と、クラブ員 150 名について詳細を見てみる。

会員調査が行われた時期のクラブ状況は表 4-3 の通りである。この表からクラブ員とは、会社や官公庁の事務員、デパート店員、看護婦、保母といった職種に就く人々であることがわかる。クラブ員 150 人中 145 人が年齢 18~25 歳であり、その 9 割は高等女学校や実業学校の中等教育を受けた女性たちである。これは前述の 1930 年会館出入りの職業婦人調査とほぼ同じ状況である。本会員調査では、彼女らの 1 割が正会員、即ちキリスト教信者であるが、他の 9 割は準会員、即ちキリスト教信者ではないことがわかる。

高等女学校を卒業し、事務員やデパート店員として働く 20 代前半の青年期女子であるク

ラブ員の日常活動はどのようなものであったのだろうか。1936 年度及び 1937 年度の事業報告の記事<sup>16</sup>から、定期的な活動と年間を通しての活動を見ると以下のものであった。

表 4-3 クラブ名と構成員

クラブ名	構成員
勇泉	主として鉄道省勤務者
オリオン	丸の内日本橋方面の各会社、銀行のタイピスト事務員
ドスカル、北針	各方面のタイピスト、事務員
あざみ	各方面のタイピスト、事務員、看護婦、保母
T・S	各方面のタイピスト
あけぼの	主として会社関係
緑野	官庁勤務
紫明	高島屋勤務店員
聖芽	三越を主とし、白木、松屋松坂屋勤務店員

(『地の塩』第 83 号 (1936. 2. 11) p. 36 より作成)

#### (1) 定期的活動

毎週木曜日がクラブの活動日であり、クラブは全体のマシニング<sup>17</sup>から始まる。その後キリスト教の礼拝を行い、学びやレクリエーションなど、全クラブと各クラブのプログラムが、週毎に決められたスケジュールで組み合わせられ実施される。こうしたクラブの運営は、クラブ員から選出された委員によって推進され、1936 年度は各クラブから 2 名が選出され、常任委員としてクラブ運営に携わっていることが事業報告に記されている。また各クラブにおいては第 1 週に各クラブ会議が予定さ、クラブ全体会議と組織的な運営がなされていたことがわかる。

表 4-4 定期集会 (毎週木曜日)

時間	内容
5 : 30 ~ 6 : 30	マシニング
6 : 30 ~ 7 : 30	(第1・第3) 礼拝及聖書研究
	(第2) 各クラブ礼拝及プログラム
	*10~12月社会思想史研究
	(第4) 礼拝・趣味のグループ
	(第5) 礼拝・クラブ研究又はレクリエーション
7 : 30 ~	(第1) 各クラブ議事
	(第3) 各クラブプログラム
	講演

(『地の塩』第 93 号 (1937. 2. 11) p. 19 より作成)

## (2) 年間活動

表 4-5 に示した年間活動には、季節行事的なものから、入会式や総会、他部門との交流など多くのプログラムが組まれている。これらの各種集会を通し、クラブ員は YWCA 活動全体に参加し、多様な人々と接する中で学びを深めていったことが理解される。

表 4-5 年間活動

季節行事	他部門との交流
新年会	デパートクラブ招待会
すすはらい	学院YWCA週間招待会
忘年会	実学部修養会招待会
有職婦人クリスマス	講習修了者親睦会
誕生会	<b>組織活動</b>
母の日の集会	年会準備デスカツション
みのる会料理会	クラブ総会
第3回劇の夕	クラブ入会式
催報告会	<b>関東部会</b>
有職婦人修養会	全国有職婦人連盟祈祷会
保田思い出会	全国BG連盟懇談会

(『地の塩』第 103 号 (1938.2.11) p.29 より作成)

クラブ員は定期的な集会や年間活動などの日常活動を通してクラブ員同士の関係性を深め仲間となって行く。そうした人間関係はクラブ全体、YWCA 全体までにも及び、YWCA の仲間としての関係性は深まり、広がる様がプログラムの実情から十分に推察できる。こうして彼女たちは自他共に YWCA の会員という認識を共有し、自己を高め、集団としての質を高めていったと言えよう。そうした様を下記「会員の声」からも読み取る事ができる。

職業を持っている、といふ一つの共通点がクラブに集ふ人達をどんなによく理解させ合ふか、言外の慰安を与え合ふかわからない。併も、集団の力が次第に根強く広がって行く希望は、私達をただ無意味に働かせて枯れさせてしまはしないのだ、といふ確信の

もとに働かせるのではないだろうか。ただ働いて食べてゆく丈の生活に何の興味が有るだらう。自分丈が足りる事をのみ念願する生活に何の楽しみが有るだらう。次の時代に現出すべきよりよき社会、其の社会に生きる人々のためにも、この青年会こそはよき成長をすべきなのだ。<sup>18</sup>

### 3. 「一般」の有職婦人部会員

有職婦人部において「一般」と分類されている会員は、クラブ員でも YWCA 職員、講師でもない有職婦人部会員のことである。では具体的にどのような有職婦人たちであったのか、その実態を見ていく。

表 4-6 は 1937 年度事業報告中の表 4-1「会員調査」に引き続き「有職会員職業別」として掲載されているものである。職業を持つ会員の職種が網羅されている。総数には若干の違いがみられるが、職種を知る上では問題はないと判断して使用する。

表 4-6 有職会員職業一覧

年度	職業別人数	合計
1937年度	タイピスト146、事務員134、教師101、YW68、店員62、Y講師28、裁縫師13、看護婦13、医師10、社会事業7、宣教師6、電話交換手6、速記者6、その他Y勤務6、薬剤師5、保母4、生花師範4、秘書3、救世軍2、記者2、家庭教師2、舎監2、編物教師2、製図師2、歯科医2、音楽家2、舞踏家2、産婆1、美容院経営1、図書館嘱託1、女中見習1、書家1、琴師範1、アパート経営1、牧師1、官吏1、写真師1、大学嘱託1、公吏1、消費組合1、婦人団体1、病院1、目下なし3、不明13	671人

(『地の塩』第 103 号 (1938. 2. 11) p. 24 より作成)

有職の会員は多種多様な職種に就く人々であったことがわかる。記載されている職種の一部はクラブ員の職種でもあるが、殆どが一般有職婦人部会員の職種であったと考えられる。クラブ員の職種でもあるタイピスト、事務、店員などが 5 割を占め、残り 5 割の職種は、YWCA に関わる職種 102 名、教師 101 名、それ以外の職種 110 名と、同割合で存在する。

表 4-1 の会員調査を重ねて見ると、一般有職婦人部会員の正会員は 181 名で 5 割弱を占



めている。年齢構成は 20 代前半までが 133 名（3 割強）、20 代後半から 30 代前半までが 156 名（4 割）、30 代後半以上が 74 名（2 割弱）となっており、20 代前半が殆どであったクラブ員の年齢構成とは異なる年齢構成である。クラブ員と共通しない職種の仕事内容を見ると、この職種の層が 20 代後半からの年齢層に多くいたことは推測できる。また高等教育を受けた人が 134 名と 3 割以上という教育程度についても、この層の人々であったと言える。

表 4-7 講演会、研究会、座談会一覧

講演会	セイロン会議(ミス・カフマン)	研究会	聖書研究、劇研究、消費組合研究
YWCA関係	支那と満州を旅して(安斎トミエ)		YWCA研究、クラブ研究、
	朝鮮婦人について		メイクアップ研究
	満州土産話		リーダーシップについて
		座談会	「生活と職業」
			「アメリカの職業婦人連盟について」
情勢	最近の中東(太田宇之助)		
	支那事変を繞る国際情勢(阿部真之介)		
	支那に於ける戦局(田中香苗)		
	実戦を語る(高田保)		
	事変と生活(太田正孝)		
他団体	婦人の愛市運動(櫛田孝・金子しげり)		
	組合運動について(辻氏)		
	時局下の婦人運動(市川房江)		
その他	物を書く時の心構え(林芙美子)		
	婦人としての責務(ガンドレッド恒子)		
	僕聴くエホバ語り 給え(久布白落実)		

(『地の塩』第 103 号 (1938. 2. 11) p. 30-31 より作成)

こうした一般有職婦人部会員の活動や学習内容はどのようなものであったのだろうか。1937 年度事業報告書には、有職婦人部が行った講演会、研究会、座談会などのほかに、講習や講座、見学旅行などの詳細が記録されている。表 4-7 に見るように、講演の内容は多方面からの時局についての解説や職業婦人自らのあり様を思索するなど広い視野に立ったものが多く、高い社会性がうかがわれる。また研究会においては聖書による「精神」やリーダーシップという人格の育成にかかわる分野と共に、YWCA 及び内部の組織についての研

究など、組織づくりと人格の育成が合わせ検討されている。事業報告書では、講座、講習会は料理や習字など教養的なもの 18 科目が開催され、650 名が在籍していたと報告している。

一般の有職婦人部会員は、日常的にこうした種々の活動へ参加していたと言えよう。さらに、一部会員は、これらの活動と同時に東京 YWCA の運営や推進役を担っていた。有職婦人部の日常活動を通しリーダーシップを養い、有職婦人部の組織運営から東京 YWCA の組織運営まで関与し担う会員へと育つ道筋が用意されていたのである。

### 第 3 節 東京 YWCA 「有職婦人部」労働部

1930 年の「東京 YWCA 会館出入り調査」においても、また 1937 年「会員調査」においても、有職婦人部が包括するはずの労働婦人を示す調査結果が見当たらない。労働婦人については、「有職婦人部」労働部として、事業報告中の「社会事業」としてまとめられていた。

#### 1. 「有職婦人部」労働部の設置

東京 YWCA 「有職婦人部」はクラブ活動を中心に、消費組合や洋服相談部の設置と事業を拡大していった。新たに、名古屋 YWCA も加わった各ローカル YWCA においても有職婦人部の活動は盛んであり、1934 年には有職婦人クラブ代表会合の開催や、全国有職婦人連盟も組織され、有職婦人部の活動は充実度を増しつつあった。

東京 YWCA では、関東大震災(1923 年)後の震災救護事業から授産及び託児、低収入職業婦人宿泊所の開設といった社会事業が始まっていた。日本 YWCA 第 1 回全国総会(1925 年)では、婦人労働問題に関する研究調査の実施が決議された。この年は細井和喜蔵著『女工哀史』が出された年である。ILO 東京支局に婦人労働委員会が設置(1926 年)され、東京 YWCA 総幹事加藤タカは委員長(幹事:市川房枝)を引き受けていた。こうした状況下で 1929 年有職婦人部の下に労働部が設置された。労働部開始にあたり幹部委員会においては、いかなる主義方針に立って実際の事業に携わるか協議の結果、「キリスト教主義に基づき、婦人の向上教化を図ることを目的として労使間において厳正中立を標榜して着手すること<sup>19)</sup>」が確認された。そうした 1930 年度の東京 YWCA 有職婦人部計画には、「労働方面事業

着手」が掲げられた。

1930 年有職婦人部では「労働方面事業着手」計画を掲げ、最初に「東京府及近県工場世話掛講習会」を開催した。その後「工場世話係教育会」を設け月 1 回の例会となり、講演や座談会などが行なわれた。それらの内容は、『地の塩』第 33 号付録（1930. 9. 25）B6 版の小冊子としてまとめられた。その他「工場クラブ」集会、「神田区内小工場労働婦人就業状態調査」などの取り組みが行われている。これらについては、1930 年度の『地の塩』においても、多くの紙面を割き詳細な報告がなされている。

東京 YWCA 有職婦人部労働部は、その方針を「凡ての婦人の正しき成長を希ひ労働に従事する女子の人格を尊び社会人として正しく起くことの出来得る様女子労働者の教育を以って目的とする。故に女工現在の生活状態及其要求を正しく知り工場労働者と密接なる関係を有する農村問題をも研究し労働者教育事業を為す事」とした。と同時に「外部に向かって叫ぶ前に先づ女子青年会幹事、委員、会員、会館出入者に女子労働者の現状を知らしめ正しき理解の下に労働者教育を助けらる々様導く事<sup>20</sup>」が重要であると確認された。

1932 年、労働部は若い女工たちによるクラブを文京区白山御殿町に立ち上げた。地域の棟割長屋を借り受け、1932 年から 1939 年の 7 年間ではあったが、女工として働く地域の娘や少女、また母親たちとのクラブが「私共の家」と名付けられた「家」を中心として展開された。そこで行なわれたクラブは、有職婦人クラブと同様に自治的に運営されるクラブであり、YWCA の持つ人材や施設などを活用した事業内容であった。「私共の家」の詳細は、次章にて述べる事とする。

## 2. 労働婦人

1937 年度社会事業報告として、「勤労婦人の教育」「職業紹介」「私共の家」の 3 項目が掲げられている。各種方面での教育を目指したが実現が難しく、内閣印刷局派遣の女工を中心に栄養料理短期講習会を開催したのみであった。しかし、この年度、25～6 名で自治的組織を持つ事が出来たと記されている。また今後は、毎月一回料理の研究を中心に集会を続け、更に秀英舎女工の集会復活と東京市内の大小工場女工の諸姉を一丸とした教育的自治組織にしたいと意気込みが語られている。次に「職業紹介」については一年間にわたる職業紹介の詳細を月別職業別に一覧表にしたものが掲載されている。職業は「事務員、タイピスト」「教員、家庭教師、保母」「病院（看護婦、受付）」「家庭使用人（女中、アマ、コック、主婦代理、子守其の他）」「雑（店員、給仕、交換手、洋裁師、雑役婦、通訳、外

人接<sup>判読不明</sup>○)」の括りで纏められている。年間 343 件の求人と 336 人の求職があり、内紹介数は 159 件、就職が決まったものが 62 件であったことが記されている。「私共の家」については全活動の月毎の詳細な数値や動きが一覧表として掲載されている。その中から有職婦人のクラブとして、白百合（女工）クラブ 19 名、裁縫（女工）クラブ 8 名が在籍し、それぞれ年間 39 回と 150 回開催されたことが記録されている。彼女たちの多くは小学校卒業後女工となる<sup>21</sup>場合が多く、年齢は 12 歳以上で 20 歳前後に属する人が多いと推測できる。

## 小 括

東京 YWCA 有職婦人部に焦点を置き、機関誌『地の塩』から東京 YWCA に関わった有職婦人の姿を追った。機関誌掲載の資料は、その時々で視点が纏められており、必ずしも同一基準で対比させられるものではなかった。しかしそれら資料を重ねあうことで、ある時期の有職婦人の概要が見えてきた。設立当初、東京 YWCA の「若い女性労働者」への働きかけの試みは前述したように継続には至らなかった。一方、都市の若い女性は就業率を高め、職業や教養的な教育への需要は高まっていた。こうした状況を背景に、東京 YWCA は有職婦人に向けた各種の教育とクラブ活動を推進させた。そこに参加したのは、ビジネスガールと呼ばれたタイピストや事務員や、プロフェッショナルな職業に就いていた者、そして工場などで働く労働婦人たちであった。彼女たちは、年齢や職種など異なるグループ群ではあるが、それぞれが職業を持ち、自活するため、家計の補助や「嫁入り」のためなど、その必要に応じて働いていた。彼女たちは職業上のキャリアアップや、教養や技術を身に着けるために YWCA の門を叩いた。そこでは、クラブに象徴される自治的活動と、職業や教養教育などの学びの場が提供されていた。ビジネスガールとプロフェッショナルと労働婦人たちは、東京 YWCA 有職婦人部として同じ括りの中に位置していた。彼女らは各種の集会や講演会などで顔を合わせ、共に YWCA メンバーとして一つの集団を形成した。ここに有職婦人として東京 YWCA が取り組んだ事業の特徴があると言える。西欧文化を享受したエリートだけでなく、労働者だけでなく、ビジネスガールだけでもない、その時代を共に生き、生活する女性たちが集まり、集団として存在していた。東京 YWCA 有職婦人部で取り組まれたクラブや知識と技能の教育の場は、限られた環境で暮らす彼女たちの視野を拡張、他者と

の関係や思考する力を育む社会教育的実践の場となった。それは女子青年たちの全人格へ影響を与え、個の確立、精神の自律への道筋をつける可能性をもつものであった。労働婦人と呼ばれた若い女工たちにとっても、またプロフェッショナルな職業婦人たちにとっても、それは同様であっただろう。その時代は、「母」であり「労働力」であるための女子青年としての教育が求められた時代と言えるが、有職婦人部に集う女子青年たちには、時代の風潮に与しないで、社会に生きる主体としての青年期教育が目指されていた。

このように東京 YWCA は、社会に向き合う主体者としての青年期教育を目指していたと言える。

YWCA の組織は世界 YWCA から各国のローカル YWCA に至るまでそれぞれに委員会を持ち、独立した運営を行い財政に責任を負うことが追求されている。YWCA は自覚ある会員によって動く会員組織であるとされている。会員の自覚は「委員会」や「クラブ」の経験を重ねる中で培われていく。最初の委員会の構成員にも見て取れるように、設立当初は都市の知識層といえる人々が会員であった。その後事業の拡がりに伴い女子学生、女子事務員、女工などさまざまな背景を持つ女子青年も「会員」となっていく。彼女たちは「クラブ」によって自治的な集団活動を経験し、そうした経験を基に各部に設けられた「委員会」の一員としての役割を担えるようになっていく。「委員会」は YWCA 運動の推進者である「委員」がその活動を通して育成される場でもあり、会員としての更なる成長を遂げる場所でもある。「クラブ」は、一人の女子青年を「会員」として受け入れ自律的な「会員」に育てる土壌であったと言える。

一方、事業の拡大と共にその必要性が謳われ創刊された機関誌『地の塩』は、月報という形で発行され、会員に配布された。『地の塩』の記事を見ると、各部報告と共に、東京 YWCA 内で行なわれた各種の講演や、取り組む事業に関する資料や情報が多く掲載されている。また会員が書く報告などの記事は、活動の共有化と共に、自分たちの活動を客観視する機会としてあったと言える。また書くことは自己を表現する機会でもあったであろう。こうした経験と広い見聞や情報からの学びは、会員の思考する力を育成する機会でもあったと言えよう。会員は「クラブ」で YWCA の基本的原理を身に付け、機関誌を通し東京 YWCA の現状を認識し、委員会において自律的に事業を展開する力をつける。ここに YWCA 会員として、広い知識と教養を獲得し、主体者として自律性を持った女性へと育成される道筋が見えてくる。

1920 年代、主に働く若い女性たちを組織した「クラブ」は、彼女たちが YWCA の会員と

なる入り口であった。「クラブ」は自発的で自由な個人として集まり、自律的に目的遂行のために働く自治的集団活動として機能し、個々の人間的成長と社会的自立を促していた。東京 YWCA に係わった女子青年たちには、YWCA 運動の中で異なる環境や階層の人々と出会い、共に YWCA メンバーとして活動を作り上げていくといった経験を通して、社会に向き合う主体として育つ。それが YWCA の女子青年教育機関としての独自の機能であった。

- 
- <sup>1</sup> 帯刀貞与『日本労働婦人問題』ドメス出版、1980 年、pp. 29-30。
  - <sup>2</sup> 委員長は志立タキ（東京 YWCA 会長 1918 年～1941 年＊1927 年除く）福沢諭吉の四女。幹事は正田淑子（日本女子大学校英文学部卒業、1910 年コロンビア大学でソーシャルワークを学ぶ、1926 年日本女子大学校社会学部長就任）。
  - <sup>3</sup> 1896 年創業、クリスチャンの工場監督の理解を得、工場講話会の第一歩として催された。
  - <sup>4</sup> 1906 年貧困者の為無料施療機関として三井家総代三井高棟が設立。
  - <sup>5</sup> 日本 YWCA『日本 YWCA100 年史』日本 YWCA、2005 年、pp. 11-12。
  - <sup>6</sup> 東京市社会局『近代都市社会調査資料集成 1 東京市社会局調査報告書 12』（4）「職業婦人に関する調査」東京市社会局、1924 年、p. 52。
  - <sup>7</sup> 東京 YWCA 機関誌『地の塩』創刊号、東京 YWCA、1926 年 7 月 24 日、p. 6。
  - <sup>8</sup> 同上、第 5 号、1927 年 2 月 26 日、p. 3。
  - <sup>9</sup> 1827 年米国 YWCA の呼びかけで開始、世界同日に職業を持つ女性が食事をしながら、共通の問題を語り合う晩餐会。各国間ではメッセージの交換や活動の紹介などが行われた。
  - <sup>10</sup> 明確に商工部設置年度を記載した年史はないが、石橋/櫛編『職員版東京 YWCA 年表』には、1919 年商工婦人事業の専任幹事就任が記載されている。『地の塩』第 5 号記事にも「有職婦人が最初商工部の名称をもて生まれたのは 8 年ほど前」と記載がある。それらから商工部設置を 1919 年と判断した。
  - <sup>11</sup> 日本 YWCA 機関誌『女子青年界』第 26 巻第 3 号、1926 年 3 月、pp. 21-22。
  - <sup>12</sup> 前掲、『地の塩』第 38 号、1931 年 2 月 10 日、p. 4。
  - <sup>13</sup> 1937 年度事業報告は 50 頁掲載されている。前年 30 頁、翌年 21 頁と比すと、その詳細ぶりが窺われる。同年日本 YWCA も『基督教女子青年会指導者読本』を発行し、「機構の大本と運用の主眼とを抄述」したと記した。戦争と統制を押し進める時代の中で、組織がその本質や実態を鮮明に描き出す背景は何か、これらの動きは時局に対する何らかの意思なのかと推測するがその検証には至っていない。
  - <sup>14</sup> 前掲、『地の塩』第 103 号、1938 年、2 月 11 日、pp. 22-23。
  - <sup>15</sup> 前掲、帯刀貞与 p. 47。（1922 年 11 月 12 日東京市内婦人調査）
  - <sup>16</sup> 前掲、『地の塩』第 93 号、1937 年 2 月 11 日、pp. 18-20。第 103 号、1938 年 2 月 11 日、p. 29。
  - <sup>17</sup> 内容は不明だが、mass thinking の解釈からすれば全体会と言えよう。
  - <sup>18</sup> 前掲、『地の塩』第 40 号、1931 年 4 月 28 日、「会員の声」T.S クラブ新莊須磨。
  - <sup>19</sup> 東京 YWCA 幹部委員会記録、1929 年 9 月 18 日。
  - <sup>20</sup> 同上、1930 年 11 月 19 日。

---

<sup>21</sup> 吉田元一氏によると「12 歳位から共同印刷か白山上のメリヤス工場に皆女工に行っていた」という。(2010 年 7 月 27 日筆者によるインタビュー)。

## 第5章 東京YWCAによる社会事業の展開

19世紀末の日本における近代産業の急激な発展は、都市市民層を形成すると同時に、厳しい環境の下で働く多くの女工たちを生み出した。『日本YWCA100年史』によると、日本に派遣されていた宣教師たちの中には、それぞれの母国でYWCAの運動に接した者も存在し、過酷な労働を強いられている「女工」たちのために働くYWCA幹事(職員)を日本に送るよう、本国に再三要請していたとの記録が残されている。

日本YWCA同盟<sup>1</sup>及び東京YWCAが設立された明治30年代(1897年～1906年)は、日本においてキリスト教社会主義<sup>2</sup>やキリスト教社会改良思想<sup>3</sup>に基づく運動が盛んであったといわれる時期である<sup>4</sup>。その背景には、日清戦争の公債発行による生活窮迫、戦後恐慌と、それを上回る社会的な打撃を与えた日露戦争により「税金滞納者、戦争による廃業者が膨大な数に達し、餓死者、自殺者、小児遺棄、精神錯乱者等々数えるにいとまがない」<sup>5</sup>という困窮した社会的状況がある。この状況は多くの救済立法を成立させたが、それらは特殊救済立法(北海道旧土人保護法・罹災救助基金法・行旅人及行旅死亡人取扱法 1899年、精神病患者監護法 1900年、下士兵卒家族救助令 1904年、廃兵院法 1906年、癩予防法 1907年など)であり、一般の貧困者の救済制度ではなかった。

こうした中、キリスト教慈善事業といえる社会事業施設が各地に作られていった。それらは1912年(明治45年)には124(うち東京市37)の事業・施設を数えている。その内容は、養護施設(40)を始めとする児童に関するものが58、医療に関するものが18、感化事業に関するもの7、授産や隣保事業などに関するもの41(うち東京市13、東京YWCAも含まれる)事業・施設であった<sup>6</sup>。

大正期に入り、第1次世界大戦(1914)終了の頃は、ロシア革命(1917)、米騒動(1918)、原敬の政党内閣の出現(1918)、労働争議の激化、普選運動、労働組合公認運動などが続き、大正デモクラシーの社会的風潮が頂点を迎えたと言われている。そうした社会状況の中、関東大震災(1923)にて大きな打撃を受ける。1926年12月、日本は昭和を迎えた。引き続く長期的不況の上、1929年世界大恐慌は日本の資本主義を危機的状況に陥らせた。農山漁村は荒廃し、都市には失業者があふれ、労働争議・小作争議などの社会問題は深刻さを増していた。厳しい国内状況を抱え、日本は欧米列強との帝国主義的対立を激化させ、経済の軍事化<sup>7</sup>・重化学工業化を推進し、満州事変(1931)以後中国侵略を強行しファシズムの時期に入っていく。



## 第1節 東京 YWCA による社会事業「私共の家」の概要

1934 年東京市『東京市内外社会事業施設一覧』によると、東京市のみで社会教化事業として 95 の公私施設が掲載されており（隣保 71、矯風 2、教化 16、融和 1、補習教育 5）、1930 年代の東京はその社会状況の深刻さゆえに各種の社会事業が取り組まれていた時代であった。さらに『小石川区史』（1935 年）においても、こうした厳しい社会状況を緩和するため、「公的には経済現象の対策として公設市場、公設質屋、宿泊保護、公設食堂、公営住宅、公設浴場等の施設を、要救護者に対しては、方面委員会制度、失業救済の為に職業紹介、授産事業等が行われ、児童保護施設としては産院、託児所、児童相談所、児童遊園地等の諸施設が設けられ、民間でも之に似た各種の施設が起こった」と記されている。

本論文で取り上げる、東京 YWCA による「私共の家」は、こうした時期に設置された社会事業施設であった。場所は小石川区白山御殿町である。

当時の白山御殿町の一部は、「東京市統計年表」（1921 年～1930 年）によると、細民区域としての指定を受けていたところである。「私共の家」は、窮乏に瀕する人々への奉仕という慈善的救済事業から始まり、工場で働く若い女工たちを対象に 1931 年から 1939 年まで活動を展開した「地域の家」であった。

すでに述べたように、1930 年代というのは、挙国一致の歩みの時代であり、市民の生活は、国民精神総動員の一大教化運動に飲み込まれ、言論統制・思想統制がなされていた時代であった。1938 年国家総動員法が制定され、1939 年宗教団体法<sup>8</sup>が成立、国民徴用令が公布された。1941 年「大日本宗教報国会」<sup>9</sup>が結成され、各宗教教団においても報国会の結成が進められた。

1932 年、東京市小石川区白山御殿町にて東京 YWCA は、若い女工への労働者教育事業を始めた。白山御殿町はその名が示すように「徳川公の御殿跡」という面と、徳永直がその著書『太陽のない街』<sup>10</sup>で「貧民窟トンネル長屋」と表現したような「特定区域（細民区域）」<sup>11</sup>という面を併せ持つ地域であった。その地域の 2 軒長屋で試みられた事業が、東京 YWCA の細民地域事業<sup>12</sup>と言われた社会事業<sup>13</sup>「私共の家」（1932 年～39 年）である。

「私共の家」については、「白山、千住の生活困窮者のための救済事業、これは後に白山御殿町の『私共の家』という社会隣保事業となった」と『東京 YWCA80 年の歩み』に記されているが、筆者の調べた限り「私共の家」に関する研究は見当たらない。

女性労働者への働き掛けは、日本 YWCA 同盟においても、その設立目的の一つであり、1925 年労働調査部が置かれ、1930 年名古屋インダストリアル・センター（「友の家」労働婦人憩いの家）が設置されていた。同センターは、1934 年名古屋 YWCA に合併された。日本の YWCA の中で女子工場労働者を対象とした社会（隣保）事業施設は、この名古屋 YWCA「友の家」と東京 YWCA「私共の家」の 2 事例が確認されるのみである。

こうした特別な時代であり困難な時代に実施された東京 YWCA 社会事業「私共の家」は、果たしていかなる事業を展開しえたのか、明らかにしたい。上述のように、この事業に関する先行研究は全くないため、まずは、その事業概要の把握から始めなければならない。

図 5-1 として当時の地図を用意した。また、『地の塩』に掲載された同事業に関する記事を拾い上げ、表 5-1 を作成した。



図 5-1 「私共の家」と周辺地図 ★印が「私共の家」

（『文京区史 付図Ⅰ「文京区内道路種別路線図」』（昭和 31 年）を基に作成）

表 5-1 東京 YWCA 機関紙『地の塩』における「私共の家」関連記事一覧

「私共の家」関連記事年表		号数	発行年月日	記事表題
1930年11月	細民地区に対する奉仕を決め調査実施 (クリスマス奉仕委員会)	36	1930(s5)年 11月28日	クリスマス奉仕計画
12月	12/4白山御殿町訪問 白山御殿町21家 族96名に対し年内に一人平均1日米1合 を1週間分配給、適した古着配給を決定	37	12月2日	クリスマス奉仕 千住を尋ねて 古着 募集の結果について
1931年1月	12/24古着と米引き換え券を配布 12/25.6 30世帯120名に白米配給 1/24第2回めとして米と木炭配布 廉売が検討される	38	1931(s)年 2月10日	クリスマス奉仕
3月	4回の廉売を実施、白米24石 購入人数 720名1升10銭(最終的には計8回実施)	39	3月24日	クリスマス奉仕収支報告 お米の廉売に行つて
	1931年度毎週水曜 有職婦人部 出張 集会を実施	47	2月9日	年報(その三)有職婦人部
10月	白山御殿町に間借りする	51	7月5日	有職婦人部報告 労働婦人部『私共 のお家』
12月	12/25久堅町市民館にてクリスマス会計 画約600名の小学児童参加	46 47	1931(s6)年 12月 1932(s7)年 2月9日	クリスマス奉仕計画に就いて 奉仕(その一) 奉仕一覧 白山御殿町クリスマス クリスマス奉仕金収支
1932年3月	ひな祭り 小学生クラブ、少女部日曜学 校に招待される	55	1933(s8)年 2月9日	有職婦人部
5月	5/15白百合会(白山御殿町)の7人と新 興毛織(大井町)2人と労働婦人部で国 領遠足に行く	50	5月25日	青葉の国領 労働婦人部国領遠足の 記
6月	「私共のお家」に引っ越し(小石川区白 山御殿町86番地)裁縫の組 週2回18人 クラブ開始 ゆかたの廉売2回実施	51	7月5日	有職婦人部報告 労働婦人部『私共 のお家』
7月	7/15白ゆり会 保田1泊旅行 7/26すみ れ会保田1泊旅行	52	10月7日	有職婦人部報告 労働婦人部 白 百合会及びすみれ会保田行の記 白山御殿町小学校生徒林間学校記
8月	8/2～31カード階級小学校女子部欠食 児童を主として林間学校(植物園にて) 実施 母親招待会			
12月	12/19古着廉売(数日前古着廉売券配 12/25クラブ員と家族対象に(56名)クリ スマス	53 54 55	11月11日 クリスマス号 1933(s8)年 2月9日	クリスマス奉仕 委員会報告 クリスマス奉仕 白山御殿町古着廉売 の景 クリスマス奉仕一覧 昭和7年12月奉 仕事業会計報告

1933年7月	7/24からミドリとモミジクラブは週2回林間保養を復習に過ごした 駿河台会館プール行き(土曜午後) 7/15.16白百合会保田1泊旅行	59	7月18日	有職婦人部 白山御殿町私共のお家
		62	1934(s4) 2月11日	復習と読書会 労働婦人「私共の家」
8月	白百合会より選ばれた2名御殿場修養会に参加、小さいクラブからは興望館キャンプに2名参加 「私共の家」朝昼夜と終日開放	60	10月1日	夏季事業報告(その五) 小石川区白山御殿町「私共の家」の夏休み 山野井ゆき
		62	1934(s4) 2月11日	労働婦人「私共の家」
11.12月	11/26古着廉売(予定12/25) 12/26「私共の家」付近児童の為にクリスマス	61	12月	子どもクリスマス行事一覧表
		62	1934(s4)2 月11日	今年のクリスマス奉仕 労働婦人「私共の家」
1934年2月	2/20青年会で親睦会	73	1935(s10) 年2月11日	1934年度事業
4月	幼児(満4歳以上学齢)サクラ(小学1.2年)ナデシコ(高等1.2年)クラブ開始 4/1尋常科卒業生国領へ遠足	68	1934(s9)年 6月2日	白山、私共の家
		73	1935(s10) 年 2月11日	昭和9年度事業
5月	東京YWCA館外事業一覧に「私共の家」細民地区事業として掲載される 5/6子供会、全員で植物園に(約70名) お昼は赤飯3時にはおやつ欠食児童お腹一杯食べ幸福そう 5/25 母の会 白百合会が司会進行子供たち お小遣いの俵約の他雑巾さしや新聞折 で夏の行事に向け貯金	67	1934(s9)年 5月20日	東京YWCA館外事業
		68	6月2日	白山、私共の家
6月	家庭調査実施 7/15.16保田1泊旅行	69	7月15日	私共の家 白山御殿町家庭調査の一
	浴衣セール	73	1935(s10) 年 2月11日	昭和9年度事業
8月	7/30～8/27 林間学校(月・木)11回689人 プール(土曜)2回30人 8/16納涼会(白百合参加)会館 8/3～8/9御殿場修養会(白百合3名)派遣 8/10～8/23 興望館キャンプ(子供クラブ3名)派遣 8/12.13撫子、みどりクラブ保田1泊旅行	70	9月25日	白山御殿町「私共の家」夏季事業の一端を・・・(宮崎貞子)
9月	9/15夏の思い出会(会館) 9/30子供会(植物園)	73	1935(s10) 年2月11日	昭和9年度事業
10月	10/21白百合会遠足 東京見物			
11月	11/17～12/22編み物講習会			
12月	12/1～15電話局員料理講習会 12/12.13白山御殿町要救護世帯調査 12/15久堅町市民館託児所のクリスマス応援 12/22つばみ主催クリスマスに招待される 青年会クリスマスに白百合会参加 12/25～31付近幼児の為に託児所開く 12/27付近要救護世帯慰問			

1935年1月	1～5月料理講習会 電話局勤務交換手の為 1/28活動写真会 子供の為 2月 2/8針供養 3月 3/5ひな祭り	83	1936(s11) 年2月11日	社会部 私共の家
	3/16母の会 白百合会挨拶、笑話劇	75	4月29日	私共の家 母の会3月16日
4月	4/7阿部先生山野井先生送迎会	83	1936(s11) 年2月11日	社会部 私共の家
5月	五月人形寄付(家庭婦人部高島先生) 節句のお祝い(幼児クラブ)	76	5月23日	私共の家 白山幼児クラブのお節句
	渡辺松子先生洋行のお祝いに白百合会「紙折内職」でうちわを送る	78	7月19日	社会部(山中) 小さい贈り物
6月	6/29母の会約50人、お母さん達の間から当番をつくり自分達自身の集まりにする相談が出来た 浴衣廉売 売上高16円6銭 6/22家庭婦人部婦人工場従業員招待に白百合参加「あわてもの」3場の余興			母の会  浴衣廉売 婦人工場従業員招待
7月	7/15.16白百合会に資生堂工場に働く人たちを加え20名で保田1泊旅行 7/25～8/201週に4回終日植物園にて林間学校、小学児童70～80人、延1058名、昼食の給食実施	79	9月14日	「私共の家」保田行-林間学校-プール-キャンプ(山野井ゆき子)
8月	8/10～20東京児童指導者会主催共同キャンプ(多摩川キャンプ)に23名(尋常2年～高等2年)加入			共同キャンプ 社会部
9月	9/25母の会	80	10月25日	私共の家 母の会(山野井)
11月	11/27.11/29感謝祭の夕食招待(家庭婦人部「芽ぐみ会」のおねい様方から)「私共の家」139人分と近隣82軒へ	82	12月2日	家庭婦人部 芽ぐみ会の感謝祭 私共の家 感謝祭
	11/10日曜学校開始 11/26感謝祭のお祭り	83	1936(s11) 年2月11日	社会部 私共の家
12月	12/19古着市 12/20クリスマス 久堅市民館託児所クリスマス応援と私共の家クリスマス祝会 12/20～30付近幼児の年末託児	83	1936(s11) 年2月11日	社会部 私共の家

1936年2月	至急をお願い、次の書をご寄付ください	83	2月11日	社会部	辞書、教科書等の依頼
3月	3/1お雛祭り100名近い集い、撫子クラブ 司会、各クラブの発表、厳戒令下では あったが子供の世界のみはいつも和や かで楽しく平和 幼児グラブピクニック 31名大塚公園 3/15白百合クラブ21名憩の家へ	85	4月10日	社会部	お雛祭り  ピクニック二つ
4月	今日は早舟さんあたりで母の会をと出か けた。(この地区に出張っての母の会は 初めて) 青年会のはおやしきの品物で立派な他 所ゆきになる	86	5月10日		A地区の集い  ジャンブルからの声
6月	夏行事の為の寄贈品依頼 4畳半長屋3棟26軒調査	87	6月10日	社会部	白山夏期事業の予告 B地区の発見(白山御殿町96番地)
	6/14国際花の日 献金の奨励(貧しくと も幼くとも人々を喜ばす天使になりうるの 実感を味あわせたい)大塚病院お見舞	88	7月10日	社会部	白山だより
7月	7/15.16保田1泊旅行 山本螺施工場、 河野さんの染色工場で働く女工さん、市 営バスの車掌さんその他20名で	89	9月18日	社会部	「私共の家」の夏
8月	8/3～28 林間学校16回平均出席82名 延990名来訪者13名 8/26～31多摩川共同キャンプ35名引率				
9月	9/26林間キャンプ報告会(社会部) 9/30お月見(白百合、裁縫)	90	10月16日	社会部歴	
10月	保健組合開始(キャンプに向けての一銭 貯金)	93	1937(s12) 年 2月11日	社会事業「私共の家」(白山御殿町教 化施設)	
	10/19母の会 芋掘り 10/21白百合クラブ料理「オヤツの作り	90	10月16日	社会部歴	
11月	11/11白百合クラブ料理 11/13.16.18芽ぐみ会「感謝祭」	92	12月19日	家庭婦人部芽ぐみ会報告	
12月	年末託児 12/12白山ジャブルセール 12/19クリスマス	90	10月16日	社会部歴	

1937年1月 新年会 2月 豆まき、針供養(女工) 3月 雛祭り、イースター 3/28白山御殿町火災 4月 卒業祝会 5月 大日本連合母の会「母の日」に参加 6月 「母の会」結成 会費月額3銭 国際花の日	103	1938(s13) 年 2月11日	「私共の家」 年間数値報告表及び 状況を記す文章
7月 7/15.16保田キャンプ 7/22～31多摩川キャンプ 8月 8/3～26林間学校 水泳	99	9月10日	夏の社会事業 私共の家にて 或る日の林間学校 共同キャンプ お盆の中日
11月 人形芝居	90	10月16日	社会部歴
12月 12/1～3芽ぐみ会「感謝祭」の御馳走	102	12月15日	催報告「私共の家」感謝会
クリスマス	103	2月11日	「私共の家」 年間数値報告表
1938年1月 新年会 2月 豆まき 3月 ひな祭り、卒業、入学、就職祝会 4月 イースター祭り、母の会 児童愛護週デー、幼児遠足、レクリエー ションの集い、国際母の日の集い、子供 レクリエーションデー、国際花の日の集 い、第一陸軍病院慰問 7月 古着市、保田キャンプ行、タマ川キャン 8月 8/3～25林間学校	112	1939(s14) 年 2月10日	社会事業 「私共の家」年間事業報 告
10月 10/19銃後援後援強調週間、出征家族慰 問(芽ぐみ会)	109	9月10日	林間学校、多摩川キャンプ
11月 感謝祭(芽ぐみ会) 出征家族Xマス(芽ぐみ会)、女工さんの	110	11月10日	白山御殿町出征家族慰問記
12月 Xマス(有職婦人部)、母の会Xマス、幼 児クラブXマス、学童Xマス 年末託児	112	2月10日	社会事業 「私共の家」
* 館外事業一覧中に記載なし	113	1939(s14) 年3月20日	東京YWCA館外事業 「地の塩」終刊号

\* 1 名称については原文表記を使用、漢字・ひらかなは、当用漢字・語句を使用した

\* 2 事業実施順を優先した

(東京 YWCA 機関誌『地の塩』より作成)

## 第2節クリスマス奉仕から「私共の家」設置へ

### 1. クリスマス奉仕

日露戦争以後、徐々に日本の経済状況は厳しさを増し、第1次世界大戦後の深刻な不況は、一般市民の生活を脅かしていた。新会館が竣工した1929年は、ニューヨーク株式相場大暴落による世界大恐慌が始まった年でもあり、東京市には「細民」が30万人<sup>14</sup>ともいわれた時代である。こうした状況に対して、東京YWCAは会館再建の翌年、細民地区に対するクリスマス奉仕計画を企画した。

世を挙げて不景気を嘆じ、彼処に此処に失業と飢餓の声迫り、年の瀬と酷寒との前に慄え戦く多くの同胞が巷に満ちている昨今の状況を見る時に、私共にも亦、なすべき何かの責任が与えられている事を感じないでは居られません。例年は各部任意に各種の奉仕をして参りましたが、今年は特にその意味から、全体が一つの事に向かつて動くことにいたしました<sup>15</sup>。

それは、東京YWCA会館近辺の子供クリスマス祝会や贈り物をするというような、例年の取り組みとは趣の異なる奉仕計画であった。奉仕委員会は、候補地として押上方面、小石川区氷川下町及白山御殿町、牛込榎町、巢鴨町水久保、荏原町蛇窪、千住町五丁目付近を挙げている。

その道の専門家より、比較的社会事業の施設薄く又YWとして取扱うに適したところとして提唱されたところですが、これらの地区に対しては22日迄に各部にて詳細に調査の上取捨し或いはその実情に応じて奉仕案が立案される事に成っています。

その上で各部に責任を分けて年末に際してそれぞれの計画が遂行される筈になっていますので確定的なことを申し上げる事は出来ませんが、子供の為のクリスマス祝会贈り物、母の会福引、病人老人への見舞、古着市あるいはその贈呈という様な事が腹案としてあります。この資金は宗教音楽会の純益を以て当度い計画ですが、少なくとも4百円を必要といたします<sup>16</sup>。

各担当委員及び職員たちは実情を探るため、現地の実地観察と共に、方面委員事務所<sup>17</sup>、



役場、交番、警察また地域の社会事業団体、例えば、白山御殿町の聖ステパノホーム<sup>18</sup>などを訪ね関係者と面会、各機関の調査や実情の情報収集と共に、どの様な働きを行うべきかの相談打ち合わせを行った。『地の塩』には調査の様子が次のように報告されている。

夕闇迫る百軒長屋の足もと危うい溝板の上に、ドン底生活の足場を踏みしめる者、日の光も通はぬ室の中に我人ともに尊しとする生命の息吹に、満ち充てる胸押されて今更ながら吐息を久しうする者、その一人一人の報告は想像以外の数多くの事柄が山々です。病魔に犯されて日々に消え行く姉娘を看り乍内職する母、その母を助けて自分も倒れた妹、しかも今は其姉は亡く母も病臥し、母子枕を並べて餓死を待つ。七十歳近くして半身不随の妻を抱へ大工を職となすも月四円にも充てぬ収入、それも有る無しの現状。三児を懐く若き母、青物行商をなししが去月以来病臥、等々書いたら皆書かなければならなくなります。

隣人の悲惨な態をみて私共は腕をつかねている事が出来ませうか、寸時も安閑としていられません。この時に当って女子青年会が例へ微力でも奉仕できることを喜び感謝します。一人の小さい力も 1500 の会員の団結となります。私共会員は強く立ってゆきませう。キリストの愛の実行者となりませう<sup>19</sup>。

奉仕委員会は、YWCA 会員たちに向け、自らの日常生活の中では想像すら出来なかった現実の厳しさを前にし、胸潰れる想いを味わいつつ、行動を起こす呼びかけを行った。また千住や白山御殿町の地域の様子を示す写真や家族調査の事例などが『地の塩』誌上 2 回にわたり掲載報告され、「クリスマス奉仕」は始まった。

十二月二十二日南千住方面に出かける事になりました。その日は特別に寒く、空はどんよりとして雪空でした。交番で大体の見当を聞いて其の目指す家を探しに行きましたが、容易に探せません、その家族は娘が奉公に出て其の給料の一部と、親戚から送られる毎月の御米で生活しているのだそうで、前の家族に比べていくらか有<sup>マ</sup>福らしいものを見て安心しました。けれ共、前の家族を訪ねた時も、そうでしたが、同じ軒続きの同じ様に貧しい人達の様子を見ては、私達がここへ来て少しでも人の為<sup>マ</sup>に尽した、と云うよりも、貧しくて救われねばならないまだ多くの人を見せられた様な気がして、却って、苦しく思われました。

十二月二十四日各部の方々十四五名と白山細民街に配給に出かけた。横丁をうねうねと辿り聖ステパノホームに一先落付いた。別れ別れに受け持った家に古着とお米の引換券を配った、送られた人達は大喜びで幾度もお礼を述べられるので非常に恐縮したがこの深い彼等の感謝を皆様どうぞ覚えて下さい。キシキシと鳴る溝板を気にしたり、干物をよけて通ったりする程それは私共の想像の及ばない状態だ。家の込んでいる関係か、学校が冬休みの為か非常に子供が大勢いるのを見かけた。物珍しさに付きまとう鼻をたらし子供、おできの出来た子供、皆無心の愛くるしさを持っていた<sup>20</sup>。

「クリスマス奉仕」は、困窮を極めている人々を助けることを目的として実施された。具体的な支援としては、警察の調査を基として千住 27 家族 134 人、聖ステパノホームの協力によって調べ出された小石川白山御殿町 21 家族 96 人に対し、年内一人平均一日米一合を一週間分配給し、同時に会員から集めた古着や玩具 993 点から、その家族に適したものを選び届けた。

この「クリスマス奉仕」は、取り組みの過程で、奉仕範囲を広めた方が良いとの意見により、配給から廉売へと奉仕の方法が変わった。それまでの配給者には、廉売価格の半価で分ける事とし、奉仕期間は翌 1931 年 3 月まで延長された。最終的には 1,920 名に対して 1 升 10 銭で白米 145 俵分を廉売、他に木炭 50 俵、古着なども廉売や配給が計 8 回行われた。何度となく廉売や配給のため、東京 YWCA の学生部、少女部、家庭婦人部、有職婦人部全ての会員が何らかの形で関わり「細民地区」へ通うことになったのである。

## 2. 白山御殿町における「私共の家」の開設

「クリスマス奉仕」から始まった、東京 YWCA による白山御殿町との関わりは、一時的な奉仕活動から継続的な活動へと変わっていった。1931 年度の有職婦人部年間報告<sup>21</sup>中に、毎週水曜日白山御殿町で出張集会が行われている事が記載されている。こうした会の為に白山御殿町に間借りがおこなわれていたようだ。「私共の家」への引っ越し記事<sup>22</sup>の中からそれは読み取れるが、その期間（1931 年 10 月～1932 年 6 月）についての詳細な記事は無い。東京 YWCA 幹部委員会 の記録によると、「勤労婦人のために移動講習を 10 月以降開く事を計画している」<sup>23</sup>との労働婦人部の報告がある。また 11 月幹部委員会には「白山御殿町細民街ステパノホームに於いて労働婦人の為のクラブを開いた。現在 8 名くらい出席。今後も続ける筈」<sup>24</sup>との報告がなされている。これらから、10 月よりステパノホーム

に間借りし、女工たちのクラブを始めたことが分る。

では、なぜ東京 YWCA は、白山御殿町で女工たちのクラブを始めたのであろうか。その背景について考えてみたい。

日本の YWCA は設立当初から、女子工場労働者に対する働きかけを使命と考えていた。しかしその実現は容易ではなく「工場講話会」や「工女慰労会」などを行っていたが、労働条件の厳しい工場労働者の自主的活動を生み出すには至らなかった。1927 年日本 YWCA 同盟は労働調査部第 1 回委員会（委員長：志立タキ、幹事：正田淑子<sup>25</sup>）を開催、1930 年 2 月、名古屋ルーテル教会の 2 階を借りて、名古屋インダストリアル・センターを設置し、女工教育、労働事情の調査に着手した。そして同年 5 月名古屋千種町に一軒家を借り、婦人求職者のための宿泊施設事業を始とする「友の家」事業を開始した。その他、有職婦人部担当幹事（職員）の全国研究会なども開催され、全国的な取り組みが展開されていた。

東京 YWCA においても 1929 年労働部の活動開始が決議され<sup>26</sup>、1930 年には工場世話係、監督の講習会、大井町新興毛織における定期的な事業、工場調査（神田、牛込、小石川）などが開始されていた。この調査には、日本女子大学社会事業学部の学生が実習に来ていたとの記述も残されている<sup>27</sup>。

全国の YWCA の幹事（職員）たちによって行われる幹事研究会において、東京 YWCA は「女工余暇時間の利用を研究する為調査票に基き調査」「大井町の女工教育のため適当な組を開始」を希望しており、以下の労働部方針を掲げた。

全ての婦人の正しき成長を希ひ労働に従事する女子の人格を尊び、社会人として正しく起つことの出来る様、女子労働者の教育を持って目的とす。故に女工現在の生活状態及び其の要求を正しく知り工場労働者と密接なる関係を有する農村問題をも研究し、労働者教育事業を為す事<sup>28</sup>。

東京 YWCA のこのような方向は、クリスマス奉仕を扱った『地の塩』第 36 号、37 号紙面上にも「現下の工場婦人を視つつ」「労働統計実地調査報告を見て」「工場世話係り教育会から」「労働組合法について」「工場の集まりから」「区内工場内の女工就業状態調査に就いて」などの記事掲載からも裏付けられる。

東京 YWCA が女子工場労働者に向け、労働者教育事業を為さんとした時「クリスマス奉仕」で白山御殿町に出会うのである。

東京市小石川区白山御殿町は、徳川 5 代将軍綱吉の館林城主時代の別邸の地であり白山御殿と呼ばれたことに由来する町名である。また貞享元年(1684 年)、それまで現在の護国寺のある場所にあった御薬園がこの地に移転し、享保 7 年(1722 年)には小石川養生所が置かれた所でもある。近代国家建設に向け明治政府は教育に力をいれた。旧大名屋敷・寺社・田畑が多く残る文京区(旧小石川区本郷区)は教育環境として好ましく用地の確保も容易であったため多くの官立私立学校が区内に設立され、学校の転入も相次いだ。

日露戦争を経て第一次世界大戦を迎えると、日本の経済状況は著しい発展を遂げ、東京 15 区を中心に人口が急増しつづけた。文京区は旧武家地が宅地化されたこともあり、他区と比べ人口の増加は急激であった。また文教地区としての、印刷、製本、医療機器製造の密集地域を形成させた<sup>29</sup>。徳永直の『太陽のない町』は、この地で、1926 年発生した「大同印刷争議」を題材としたものである。『東京史統計年表』により 1921 年から 1931 年の「特定区域(細民区域)<sup>30</sup>」を見ると、白山御殿町は常に特定区域(細民区域)として指定されている。同町は共同印刷会社の存在した久堅町と千川を隔てて向かい合っていた町である。

『文京区史』第 4 巻(1965 年)によると、この地域は、低地で顕地で商業地域としては不適當でありながら、「物資ノ供給ハ居住者ノ日常生活ニ不便ヲ感ゼシムル事比較的少キヲ以テ勢ヒ細民カ蟠集シテ集团的ニ生活ヲ営ムデアロウ<sup>31</sup>」地域であったと記されている。

白山御殿町をとり囲む、久堅町、氷川下町、戸崎町四町の特徴を表すと、人口過密地帯(1925 年当時、世帯数 6,387 人口 27,623 人)であり、製本の比重が極めて高い印刷・製本の町であり、それは 5 人以上の使用の零細な下請け家内工業的なものであり、女子労働をも吸収するものであったと言える。

こうした経済的にも環境的にも厳しい地域であったため、公私の社会事業施設が多く存在した。

また社会事業施設ではないが白山御殿町には御殿町尋常夜学校<sup>32</sup>も存在した。

これらから白山御殿町の社会事業施設は近隣四町を含め、医療についてはある程度診療の機会があり、地域のセンター施設としての市民館が児童保護、社会教化事業を行い、夜学校が教育部分を担う状況であったと言える。

また隣接する原町にある東洋大学には、社会事業科が 1921 年～1932 年の間設置されており「社会事業に従事する実際的人物養成<sup>33</sup>」が夜学でなされ小学校教員、僧侶、幼稚園、社会事業関係者が学んでいた。『東洋大学 100 年史』には、日本 YWCA の総幹事シェン・

ニール・スコット（J. N. Scott：在任期間 1920. 5～1929. 10）がアメリカ人ウッド夫人を伴いこの科を視察、一場の演説をしたことが記されているが、直接的な関わりは見えないが何らかのネットワークがあったのだろうと推測される。

表 5-2 白山御殿町及び隣接地域にある社会事業施設

東京市社会局による 1934 年調査

<社会事業施設>	<教化事業>
東京市方面委員小石川区第一方面事務所（氷川下） 東京市久堅町市民館 仏教広済会診療所（戸崎） 恩賜財団済生会戸崎診療班 東京府医師会小石川簡易診療所（久堅） 恩賜財団済生会小石川診療所（氷川下） 恩賜財団済生会白山診療班（白山御殿町） 東京興仁会（司法保護）（白山御殿町大雲寺内）	異常児保護として東京力行園 <sup>3 4</sup> （白山御殿町） 司法保護として社会教育協会 <sup>3 5</sup> （白山御殿町） 聖ステパノホーム（白山御殿町）

（東京市小石川区『小石川区史』小石川区、1935 年を参照し作成）

以上見てきた通り、白山御殿町は、印刷製本の零細工場の町であり、若い女工たちが暮らす街、生活する場所であった。その地域で「クリスマス奉仕」活動を展開する中、東京YWCA は聖ステパノホームや方面委員会、市民館など、地域との関わりを積み重ねていった。こうした段階を経て、女子工場労働者に向けての事業実施の要件が整えたと考えられ、その第一歩としての聖ステパノホームでのクラブ開始であったと考えられる。

「クリスマス奉仕」を切掛けに始まった救済事業が、社会隣保事業「私共の家」として本格的な活動を開始するのは、1932 年 6 月小石川区白山御殿町 86 番地に長屋 2 軒の壁を抜いた 4 畳半二間と 4 畳と 3 畳という小さな「お家」に引っ越した時からといえる。

『地の塩』第 51 号には、「労働婦人部『私共のお家』」と表題された記事がある。

「私共のお家」は女工として働いている私共若いクラブ員だけの為ではなく白山御殿町の若い女の人を中心に母さん妹弟たちのお家としたい。・・・お家には財産も何もありません。茶飲み茶碗が二十余りありますが、お盆も茶托もなしです。でも無い所から有る所に皆でしたいと望んでいます。明るく、綺麗に、そして太陽のよくあたる様になった私共のお家へ皆様一度、お出かけください<sup>36</sup>。

また東京 YWCA 1932 年度年間事業報告号には以下の様に記されている。

「私共の家」小石川は白山御殿町に根城をおいた可憐な労働少女達の集う家。恵みの太陽はここにも平等に降り又照って双葉時代はすこやかである<sup>37</sup>。

『地の塩』第 51 号には、この家を見つけるまでの家探しの様子や、本数冊と裁縫道具一包みの引越荷物であったこと、引越しそばを配った様子、瓦斯や電燈が入り家らしくなる様子なども記され、夢や希望を膨らまし、この事業に向ける喜びが見て取れる。こうして白山御殿町に、東京 YWCA 社会事業「私共の家」は開設されたのである。

### 第 3 節「私共の家」の事業展開

#### 1. 事業概要

「私共の家」事業別集計表（表 5-3）は、『地の塩』掲載記事から「私共の家」の事業をその活動の形態と実施年及び参加人数など、読み取る事の出来る範囲で表としてまとめたものである。この表 5-3 を元に、「私共の家」で行われていた活動を、以下のように大きく 3 つに分けた。①定期的に行われていた事業で、「私共の家」で行われた事業の核といえる部分である。各「クラブ」、「日曜学校」、和洋裁や編み物の「組」などがあった。②行事的な事業で、夏のキャンプやクリスマス、また針供養やひな祭りなど季節的な行事を通し、「クラブ」や定期的に行われている活動に、変化を加えるもの③上記①②以外のその他の事業。主に地域への事業として行われる年末託児や人事相談などである。「私共の家」で実施された活動を、3 つの括り毎に説明する。

### ① 定期的に行われる事業

定期的に行われる事業は「私共の家」において行われる事業の核をなす部分といえる。その中でも「クラブ」は、YWCA 活動の基本的な活動形態である。女子工場労働者教育を実施するに当たり、まずこの「クラブ」作りから取り組みは始まっている。

#### <クラブ>

活動の基本はグループであり、年齢や社会的環境の違いによって分けられることが多い。このグループが「クラブ」と呼ばれ、クラブには指導者がおかれ、クラブ員と共に自治的な活動を展開する。クラブ活動を通し、個人の発達を促す教育的な営みであり、グループワーク理論がその根底にある<sup>38</sup>。「私共の家」には、工場で働いている 15～19 歳位の女工たちによる「白百合」、尋常小学校 6 年生～高等科 2 年生の少女たちによる「なでしこ」、高等科 1 年生を対象とする「すみれ」（1932～33 年まで）、尋常小学校 4～5 年生からなる「みどり」、尋常小学校 1 年生～3 年生の「さくら」、幼児の「もみじ」（1934 年からは「幼児」と記載）の 6 クラブがあった。また、1937 年母の会が結成されたが、これも母親たちの「クラブ」と言える。

「私共の家」でのクラブ活動は、開設初年度（1932 年）には、「白百合」は 35 回、「すみれ」は 32 回開催されている。「私共の家」は 6 月から開始され、開設当初からはほぼ週 1 回定期的に開催された事が推測される。クラブ員は「白百合」8 名、「すみれ」6 名と少人数ではあったが、「私共の家」の主たる対象者である若い女子工場労働者への教育事業として歩み出したことが伺える。1934 年頃から「私共の家」廃止までは、20 人前後のクラブ員となった。クラブ員は、日常のクラブ活動を基礎に、「私共の家」が行う地域の事業や、東京 YWCA の事業にも参加し、それらを通して社会的経験を広げ、人間的な成長が促された。

表 5-3 「私共の家」事業別集計表

事業別集計表							
	1932	1933	1934	1935	1936	1937	1938
<定期集会在席数>							
白百合（女工）	35回8名	○	23名	21名	21名	19～25名	21名
和服裁縫の組	週2回8名				40名		
裁縫	"	月水金の夜	16名	月水木金17名	17名	6～8名	10名
編み物		冬：火木土の夜	6回				
なでしこ（尋常6～高等科2年）			15名	21名	21名		
すみれ	32回6名	6名					
みどり（尋常4～5年）	13回20名	20名	24名	22名	25名	62～84名	73名
さくら（尋常1～3年）		（つぼみ○）	23名	25名	25名		
復習会		○	月水金19名	40名	30名		15名
もみじ	13回20名	20名					
幼児			11名	30名	30名	22～40名	45名
日曜学校				106名	106名	52～85名	80名
童謡クラブ							31名
読書クラブ							28名
母の会	招待会	○	○	○	8回平均出席32	母の会結成 8回81～85名	8組110名 会費3銭
<夏行事>							
保田行き	白百合、すみれ	2回	白百合、撫子、みどり	白百合	白百合	○	29名
国領	○	○	4月				
林間学校	40名	40名	689名（74名）	1058名（70～80）	990名（平均82）	1日平均30名	延べ1821名
駿河台プール		○	2回30人			○	
多摩川キャンプ				23名	35名	○	延べ312名
興望館キャンプ		小学生2名	小学生3名	3名			
御殿場		白百合2名	白百合3名	3名			
<年間行事>							
クリスマス	56名	○	○	○	○	108名	5回292名
古着市	6月12月	11月60余円	283.81円	6月12月	夏冬2回		50.5円
新年会、針供養		奉仕部へ		○			62名
豆まき		（学資補助等）				○	78名
雛祭り	小学生招待			○	100名	○	135名
イースター						○	73名
国際母の日						53名	65名
国際花の日						67名	76名
感謝祭				芽ぐみ会招待他	5回	○	延べ248名
遠足、お楽しみ会		駿河台本館	動物園他	○	○		○
<その他事業>							
年末託児			○	○	○		延べ943名
労働婦人講習会			料理18回	料理8回			
職業相談				○			
人事相談				○			
保健事業					1銭貯金70口		66～80口

\* 1 『地の塩』『私共の家』記事から数値を取り出した

\* 2 数値が無いが実施されたものについては○とした

\* 3 その他記載のない部分についても実施された可能性があるが、判断できないものは無記入とした。  
(『地の塩』掲載記事より作成)



#### <日曜学校<sup>39</sup>>

『地の塩』には Sunday School を略し SS と呼称されている。キリスト教会によって日曜日に開かれ、児童・青少年を対象にキリスト教教育を行う学校であるが、「私共の家」のように、信徒有志によって、教会以外でも開設される場合が多くある。1936 年度からは六年生、高等科生のバイブルクラスが開始されたと『地の塩』に記されているが、人数の増加と参加者の成長に合わせクラスを増やしたと考えられる。

#### <母の会>

クラブに通う子どもたちの母親に、子どもたちがどのようなクラブ活動を行っているのか、その意味の理解と賛同を得るために組織される部分と、母親自身のクラブとしても機能し、自治的なグループ活動が目指されるところでもある。「私共の家」の場合、事業開始と共に母親招待会が実施されている。当初は話を聞く受身の「母の会」であったが、徐々に会の進行をするなど、主体的な関わりになった。こうした変化は、母親たちの積極性を生み出し、「キャンプの為に 1 銭貯蓄をする」保健組合結成（1936 年）というような行動力を培った。1937 年には、子どもの保護者会としての「母の会」ではなく、自分たちが主人公のクラブである白山「母の会」がつくられた。

#### ② 行事的な事業

クラブや定期的な事業に変化をつけ、また新たな人への働きかけの機会として、行事が計画される。大きな催しとしては夏の各種キャンプと冬のクリスマスが挙げられる。

##### (1) 夏行事

#### <保田行き>

千葉県保田元名海岸にある東京 YWCA の職業婦人のためのキャンプと休養所施設「保田休養所」（1922 年に開設）への一泊旅行である。保田には藁葺き屋根の母家、バンガローが配置され、多くの会員たちが夏の海辺を満喫する所である<sup>40</sup>。幹事（職員）が常駐し、水泳や集団生活の指導などを通じ、休養とキャンプ教育<sup>41</sup>の実践が行われている。

#### <国領>

1926 年レクリエーションハウス（職業婦人の休養施設）「憩いの家」として、多摩川縁の調布町国領に建てられた西洋館で、四季折々の花に溢れ、珍しい西洋野菜が食卓に並べられたという。敷地 3000 坪には芝生・温室、テニスコートなどもある。

#### <林間学校>

白山御殿町カード階級の小学校女子部欠食児童を主対象に、夏の 1 ヶ月、白山御殿町に

ある、東京帝国大学の小石川植物園内で開かれた。当初は半日のプログラムであったがその後は一日となり、多くの参加者を集めた。カード階級とは、1920 年生活困窮者の保護指導、調査資料提供、施設の改善普及、社会事業の連絡統制する機関として方面委員制度が設けられ、方面委員は一定様式のカードを使用して詳細に細民、要保護世帯の生活状況を調査し、適切なる補導救護をなしたとされる。そのカードをもって細民、要保護世帯をカード階級と称した<sup>42</sup>。

#### <駿河台プール>

東京 YWCA 会館にある屋内プールへ、円タクやバスを借り切って数日通い、東京 YWCA 体育部の指導のもとに泳ぎを楽しむプログラムである。

#### <多摩川キャンプ>

東京児童指導者会主催、東京日日新聞社後援の多摩川で行なわれた共同キャンプである。東京 YWCA「私共の家」が参加した 1935 年は帝大セツルメント<sup>43</sup>、櫻楓会託児所<sup>44</sup>、王子隣保館<sup>45</sup>他計 18 団体が合同で行っている。以後 1938 年まで毎年参加している。1935 年のキャンプについて書かれたクラブ員の文章が、『地の塩』に掲載されている。

キャンプの一日      五十嵐清江

一、朝は体操      お昼は勉強

晩はやすやす      ねんねして

楽しいキャンプの      一日は過る

二、キャンプ畑に      トマトがじくす

遠くにトモロコシの      頭が見える

新しい野菜で      うれしいキャンプ<sup>46</sup>

#### <興望館<sup>47</sup>キャンプ>

興望館が主催するキャンプで「私共の家」の小学生クラブ員の中から数名が選ばれ派遣された。

#### <御殿場>

日本 YWCA 同盟の御殿場富士岡荘修養会<sup>48</sup>のことで、「白百合」から 2～3 名が選ばれ派遣されている。

#### (2) 年間行事

#### <クリスマス>

クリスマスは、キリスト教にとってはキリストの生誕という大きな意味を持つものである。地域の多くの人に呼びかけ、久堅市民館を会場に開催するクリスマスは、東京 YWCA の奉仕活動の一環として実施される。またもう一つ「私共の家」で「私共の家」に関わる者が集まり実施するクリスマスがあった。

#### <古着市>

クリスマスと夏のキャンプの前には東京 YWCA 全体で寄付品を集め「古着市・浴衣市」が開催される。これは東京 YWCA の奉仕活動の一つとして行われている。集まった寄付品は、廉価で販売され、その売上を奉仕活動の費用とする。白山御殿町においても、地域の人から、「青年会のはお屋敷の品物で立派なよそゆきになる<sup>49</sup>」と評判も良く、毎回大勢の人が列を成して買いに来ていた様子が記されている。

#### <その他の年間行事>

節句などの日本的行事のほかにイースター、花の日、感謝祭などキリスト教的な行事も行われている。花の日にむけて、少女クラブ員は買い食いを我慢し、そのお金を献金する。当日献金で花を用意し、病人を見舞うなどを行っている。感謝祭は東京 YWCA の他の部に招待されることが多かったようである。

#### ③ その他の事業

「私共の家」として実施された地域事業である。地域事業は、日常のクラブなどの中からも、その必要性が明らかになり開始されたものであるが、個の教育に重点がおかれるクラブとは異なり、地域問題を解決するための社会事業活動である。

#### <年末託児>

年末、白山御殿町の印刷や製本の小工場は一年中で最も忙しい時を迎える。それは内職や仕事に精を出す母親たちにとっても、かきいれ時でもある。母親たちが心行くまで働けるよう「私共の家」で31日まで子供の託児を行うものである。1日5銭で昼食とおやつが提供された（1935年）。子どもにとっても、歌や積み木などの遊びや団体生活は貴重な教育経験であることが『地の塩』に述べられている<sup>50</sup>。

#### <労働婦人講習会>

近隣で働く若い女工や勤め人のための、主に料理や裁縫の講習を行うものである。講師は専門家が派遣された。

#### <職業相談・人事相談>

子供のことや夫婦喧嘩など日常的な相談から、仕事や役所の手続きなど日常の些細な困り事の対応を行った。

#### <保健事業>

保健組合を作り一日一銭貯金を行ったものである。そもそもは、子どもの夏キャンプ費用を積み立てる事から始まったが、入学費や盆や正月の費用に、或る時は不慮の災難の融通資金ともなっていて活用されていたと記されている。

## 2. 事業展開と各期の特色

「私共の家」関連記事一覧（表 5-1）と「私共の家」事業別集計表（表 5-3）を元に、「私共の家」が開設されていた 1932 年～1939 年を、事業対象人数やプログラムの拡大を目安として 3 期に区分し、事業展開を述べると共にその特徴を見ていく。

### （1）1 期：創設期（1932 年～1933 年）

1932 年 6 月に「私共の家」への引っ越しが終わり、工場で働く若い女工と小学校高等科の少女たちの 2 つのクラブが定期的で開催されるようになった。少女たちのクラブは、人数の増加に伴い数ヵ月後 2 つに分けられ、また幼児のクラブも作られ、合計 4 つのクラブが 54 名で動き出した。クラブ以外にも、裁縫の組が定期的で開催され 8 名が通っていた。合計 62 名のメンバーが通い始めた。彼女たちは、「私共の家」を「お家」と呼んだ。小さな社会隣保事業が「お家」を拠点として動き始めたのである。

お裁縫の組には十八人<sup>51</sup>の人が一週二度稽古に来ます。クラブが始まったのでお裁縫をしたり歌を覚えたりしてます。大きい方のクラブ員は皆それぞれ工場で働き、年は十五～十九位までです。小さい方は小学校高等 1 年です。近い中にクラブ員とお母さん方のお集まりをしたいと思っています。小さい妹や弟にもクラブを作ってやりたいのです<sup>52</sup>。

この期は「私共の家」事業の核となるクラブが成立する期である。活動の主力もそこに置かれていたと推測される。「白百合」「なでしこ」のクラブは週 1 回開かれていたようである。仕事を終え、夜「私共の家」に通い、2～3 時間程度を過ごしたのであろうか。クラブの名前を決め、何がしたいかが話し合われ活動が進められていく。若い女工たちのクラブは「白百合」と命名され、「お裁縫をしたり歌を覚えたり」する活動からクラブが開始され

ている。

クラブの活動は定期的な会合だけではない。「私共の家」全体が実施する季節的な行事への参加、東京 YWCA 本館にある少女部への招待、他地域の女工との合同の遠足が実施された。2 年目には、他団体や日本 YWCA 同盟主催のキャンプや修養会に、選抜されたクラブ員が各 2 名派遣されるなど、その活動の幅は広がった。

初年度、「白百合」と「すみれ」がお盆休み、夏休みを使い保田休養所へ出かけた「保田行き」は、クラブの活動としては最初の大きな事業であった。「保田行き」は、船で行く泊まりがけ旅行である。その上に海で遊ぶということは、「毎日工場の中の騒音と塵埃の中で」<sup>53</sup>働き、厳しい暮らしの中にいる娘や少女たちにとっては、どれだけ嬉しい出来事であったかは想像に難くない。多くの女工や少女たちにとっては初めての経験であった。その様子が『地の塩』に記されている。

一同海の子となる。水の中に顔を入れる事から、初めて浮かんだ時の嬉しさ。帰ればお汁粉のお八つ。舌鼓を打って海の疲れを休めながら皆がもう一日滞在を日延べしてとの議がまとまり先生にお願いしようと言うことになる<sup>54</sup>。

そのお願いされる「先生」である、保田を担当した渡邊松子幹事（職員）の報告にもその様が記されている。

最初のお客様は白山御殿町「私共のお家、白百合会の十五名、はじめて海に入る喜び」たった一回で一人で浮くようになった時の嬉しさ。それにも増して、広々した屋敷に白麻の蚊帳をつり真白いシーツを敷いて寝ようとする時「一生の中に又とこんな処で寝る事が出来るかしら」という率直な感謝の言葉の洩れた時の涙ぐましい喜びを忘れる事は出来ない。一泊後帰京<sup>55</sup>。

この年は、クラブだけでなく、社会事業「私共の家」にとっても大きな活動が始まっている。地域で開催された、小學校生徒林間学校である。それは「私共の家」と、通りを挿む向かい側、目の前にある小石川植物園で実施された。植物園は東京帝国大学の付属施設であるが、当時も一般に公開されていた。

この林間学校は、午後に開始、夕方 5 時終了の半日のプログラムであり、8 月いっぱい 2

期に分けて行われた。カード階級の小学校女子部欠食児童を主なる対象として、各期 20 名計 40 名の少女たちが集まった。1 期は東に寄った土地の子、2 期は西に片寄った特に生活困難な家庭の子であったが、2 期の子供たちの大部分が日曜学校（SS）の生徒であったとの報告がなされている<sup>56</sup>。この記事から近隣の教会が行っている日曜学校の生徒達が、YWCA 主催の林間学校に参加したことが伺える。「石を投げられた過去の事を省みて現在を思うと」<sup>57</sup>という記述が後に記されているが、白山御殿町地域とは異なる YWCA の人々が主催する「私共の家」を、地域の人々が、最初から何の抵抗も無く受け入れたとは考え難く、同じ地域のキリスト教会や団体の支持や協力によって事業が成立したであろう事は十分に推測される。

夏の行事とクリスマスの前には古着（浴衣）販売会が行われ、地域への広報と資金作りを兼ねた取り組みがなされている。この期に行なわれた夏の行事を始めとするこれらプログラムは、以後毎年継続され、内容や規模を拡大していった。

このように「私共の家」事業の創成期は、日常的にはクラブ活動を中心に、地域の協力を得ながら、夏には林間学校、冬にはクリスマスを行い、東京 YWCA 社会事業「私共の家」事業の骨格となる部分を形作って行った時であった。同時に、YWCA の会員や職員たちにとっては、地域や子どもたちの実情に、驚きや戸惑いも含め、「私共の家」事業の意義を再確認し、事業の今後を模索し始めた時でもあった。

粗野な中にも純真な無邪気な子供たち・・・かと思えば 11, 2 歳でもう小学校を卒業したら働いて親を助けると語る彼女達・・・自分等より境遇のいい人を見ては憎らしいとの言葉を遠慮なく吐く・・・しかし気持ちのいいほどキビキビと積極的に動く子供たちを眺めては憂鬱になったり希望に燃えたりしかも私共のなさねばならない多くの責めのある事を切実に感じさせられいろいろの想念が心の奥底を往来する。私共のお家にこの子供等がいつも自由に汚れた手を清められる水道と身体の垢を流されるお風呂場があったらどんなに仕合せだろう<sup>58</sup>。

東京 YWCA が当初描いた女子労働者教育事業は、クラブの活動を核に実施され始めたと考えられる。それと同時に、地域に小さいながらも「私共の家」という拠点となる施設を持ったことにより、細民地区の社会事業へと活動の幅を広げる事ともなった。

(2) 2 期：充実期（1934 年～1935 年）

1934 年 5 月号からの『地の塩』最終ページには、「館外事業一覧」が記載されるようになった。「寄宿舍」、「憩いの家」、「保田休養所」、「野尻キャンプ」と共に、「私共の家」も細民地区事業として掲載された。この掲載は、東京 YWCA 社会事業「私共の家」の実施を、全国の YWCA や他団体などに知らせる広報的役割を担った。

一方、白山御殿町においても「私共の家」は、着実に地歩を固めていったと考えられる。クラブメンバー数は「白百合」23～21 名、「なでしこ」「みどり」「さくら」は 62～68 名、「幼児」11～30 名と、前期の約 3 倍と大きく増加している。「私共の家」に出入りする若い娘や少女たちの様子を地域の人々は見えており、クラブでどのような事が行われているのかの情報は、地域の人々に流れていたことは十分に考えられる。こうして「私共の家」の存在が、地域に徐々に浸透し、人々はそこで日々行われている活動への興味と関心を示し、「私共の家」を受け入れた結果、人数が増加したと考えられる。

1933 年、地域児童対象の学校授業を補習する「復習会」がこの期から定着し、19～40 名で実施されたことが報告されている。日本女子大学社会科卒業生と現役学生を講師、白百合メンバーが助手の役割を担った。クラブ員にはグループ活動を通しての経験の広がりに加え、個々の基礎学力を補充する機会が提供されるようになった。と同時に、地域のお姉さんである白百合メンバーが、助手を務める姿は、少女たちにとっては憧れの姿であり、少女たちの将来像の一つのモデルを示すこととも繋がっている。また白百合メンバーにとっても、リーダーシップ養成の機会であった。クラブの活動が、人数の増加だけでなく、その活動の内容においても充実してきたといえる。若い女工たちへの女子労働者教育は、白百合クラブの活動を通して実施されていたといえる。

林間学校も、前期の 2 倍 70～80 名規模のものとなった。週 2 日朝 7：30 集合、午後 3 時まで植物園で過ごし、銭湯に入って解散をする一日のプログラムとなっている（1934 年）。1935 年は週 4 日の開催になっている。銭湯を利用することに関しては、何度となく交渉を重ね、実現したことが記されている。さらに、1935 年からは給食が実施された。

母の会は 10 数名の母親たちが「家」の前でもじもじとしていた状況から、50 名近くが誘い合わせ参加し、当番を決めて集まりをするといった話が出るまでになっていた。

この期には、地域以外で実施された、東京児童指導会が主催する共同キャンプ（多摩川キャンプ）への参加が始まっている。これは 10 日間多摩川縁で行われる 18 団体 300 名規模のものであった。きびしい環境の中の児童を対象に、健康の維持回復や集団生活の機会

として計画されたものであった。「私共の家」からは、尋常2年生から高等科2年生までのクラブ員たち23人が指導者2名と共に参加している（1935年）。これまでYWCA内部で計画されたものへ数名が選抜され派遣されキャンプとは異なり、多くのメンバーと一緒に、様々な団体とも出会うキャンプであった。新たに始まった日曜学校には100人を超える子どもが来ている。このようにクラブ以外にもこの期に実施された事業の経過を見ると、人数の増加と質的な充実がなされた時期である事が見て取れる。

もう一つ、この期には新しい動きがある。「地域サービス・プログラム」の開始である。家庭調査や要救護世帯調査と慰問の実施、労働婦人講習会、年末託児、相談事業などが実施されている。これらは、白山御殿町の地域の要望と「私共の家」が行った「調査」から実施されることになったと推測される。「私共の家」は細民地区の地域に位置付き、地域の社会事業としての事業展開がなされた。それは、「個」の社会的成長に視点を置いた「クラブ」や「母の会」などとは性格の異なる、地域の課題解決に視点をおいた地域事業としての側面を持っている。

この期は、女子労働者教育事業と細民地区事業が混在し、相互に影響を及ぼしつつ、共に充実化が図られた時期といえる。『地の塩』にも、様々な「私共の家」の記事が、最も多く掲載されたのが、この時期である。

### （3）3期：成熟期（1936年～1938年）

1936年、東京は2.26事件により戒厳令がしかれていた（2月27日～7月18日）。こうした社会の不穏な空気の中、「私共の家」はそれまでと変わらずに事業を進めている。雛祭を祝い、国領へのピクニックを実施し、夏の行事を続けている。職員は、地域に出かけ土産の団子と煎餅、そこにお茶と漬物が加わり母親たちと話に花を咲かせている。「私共の家」は5年を経て、地域と安定した関係を保ち、親密度を増しながら活動を継続的に続けている。この期は、地域にその存在を認知され、社会事業としての「私共の家」が「地域の家」として働こうとした成熟期である。

その一方、1937年頃からは、『地の塩』掲載記事に変化が見え始める。記事掲載が年間事業報告号に集約され、それまで生き生きと記されていたクラブの様子や行事などの記事が減り、キャンプ関連記事のみに限られてきたのである。事業報告記事からは、「私共の家」の今後を考え始めている姿が見えてくる。

子を林間学校とキャンプに参加させるための親による一銭貯金が1936年から開始され



た。何の心配もなく夏期事業に参加ができるようにとの動機からである。「私共の家」では、母親を招待し、娘たちの参加する行事の説明や報告、また啓発的な講話などをする「母の会」を行っていた。初め母親たちは、受身的な参加をしていたが、自ら当番を決め会を進めていくというように、主体的な参加へと変わっていった。こうした変化が、原動力ともなり、1 銭貯金の保健組合が始まった。1938 年 1 月～12 月期間の保健組合の実績を見ると、月 66 口～84 口累計 866 口が集まり、金額としては 265 円 38 銭が預金されている。こうした預金は「或る時は入学費に、或る時はお盆やお正月のおしきせに、或る時は、不慮の災難の融通資金ともなっていて活用されている」<sup>59</sup>と記されている。母親たちは組合活動を通じ、「私共の家」との繋がりを強くし、母親同士の結束も強まっていったと考えられる。

そして 1937 年に白山「母の会」が結成された。今まで、子の親として参加していた母の会ではなく、会費月額 3 銭の自分たち自身の自治的クラブである「母の会」が組織されたのである。母の会には、8 人の委員（組頭）が存在し、各組ごとに、母の会会費の徴収、母の会会員と「私共の家」との連絡及び会の進捗を計った。1938 年 12 月には 110 名の親が母の会会員として登録されている。当年度集められた会費総額は 34 円 83 銭であった。集められた会費からは集会の一部経費や時節柄、出征祝旗、戦死も含めた死亡者への線香代の慶弔費のほか、軍用機献金、母の会が主催した漢口陥落提灯行列接待費、クリスマスへの砂糖寄付など、時局の要望に応えるものや、地域への奉仕的な事柄へも支出されている。1937 年 6 月（母の会結成）から 1938 年 12 月間の出納表によると、総収入 71 円 97 銭、総支出 55 円 2 銭、差引残高 16 円 95 銭となっている。

継続的に実施されている地域サービス事業、保健組合や母の会の相互扶助的な活動など「私共の家」は白山御殿町で地域の社会事業施設「私共の家」として確立していったと考えられる。こうした事業が確立しその役割が果たされていたと思われる時期に、下記のような記事がある。

1937 年 2 月

「私共の家」（白山御殿町教化施設）

小さな家は親しみ易いと見えて、戸籍登録の相談から、子供の性行相談、夫婦喧嘩の仲裁から、施療の世話、職業相談等何でも相談を持ちかけられる。少なくともこれらの要求に応じた積りである。単なる救済事業としてではなく、より強き社会生活を営むべく、自立自営の意気と精神の涵養を希つて止まない次第である<sup>60</sup>。

上記記事には、「私共の家」（白山御殿町教化施設）と表記されている。こうした表記は、この記事のみである。東京 YWCA は 1929 年教化団体連合会に加盟していたが、1936 年に脱退について協議している。脱退の理由は、1、あまり国粹的な空気に於いて又教化方法に於いて賛成できない点が多々ある。2、指導者講習会でも資格が男子であるので何の役にも立たない。3、教化団体連合会館設置につき各加盟団体の負担金として百円出さねばならない様だ。4、会費は年 12 円<sup>61</sup>。として、脱退の方向で進める事が議されている。その後脱退したか否かの記載は見つけていないが、こうした状況を見ると、何故にあえて「教化施設」と記したのか疑問である。あえて「教化施設」と表記したのは、保健組合の成立や相談事業の充実を通し、「私共の家」は「単なる救済事業で無く」、社会事業の「教化」機能を持つ施設である事を強調しようとしたと捉えられる。翌年はこのような記述となっている。

1938 年 2 月

支那事変勃発以来、非常時の警鐘が乱打された。その時である。一人の母親が私に囁いてくれた。「光を出したいのです。太陽の無い町にも青年会があって、母の会が組織されている。一人では出来ないが、大勢でやれば此の際何かお国の為にお役に立つかもしれない」と。「母の会」といふ体制のもとに雑巾を縫ったり、浅草紙を販売したりして 12 円 90 銭を非常時献金の一部とすることが出来た。こうした母親の願いこそ長い歳月の教育の賜物でなくてなんであろう。

昔は酷かったが現在は経済状態が幾分良くなったので、施設の必要はないのではないかと常識的に考えられやすい問題である。

どぶが暗渠になった、氷川山の手銀座が展開、小工場が林立。

然し、こうした社会現象が地区の人々に果たして幸福を与えているであろうか！古い救済的な、慈善事業的な、社会事業範疇からぬけ出でた新しき観点から、小工場地帯及び商店街の児童問題、労働婦人問題を、見直し、強き信念と熱とを以て今一步、踏み出す必要に迫られている。而して準戦時体制時代への良き意味の奉仕的活動として成長させたいと願っている<sup>62</sup>。

前半の「母の会」部分は、時代的な価値観もあり意見の分れる記事ではあるが、母親の「お国の為にお役に立つ」という積極的な言葉を、母の会での「教化」の具体的成果「長い歳月の教育の賜物」として受け止めている。そうした成果を生む場所として、「私共の家」の意義を記している。後半部分からは、施設の必要性を、地域の社会事業のありようを今一步深めていく課題を示し述べている。これらの記述は、「私共の家」に関わる職員が、「私共の家」の意義を表明しなくてはならなかった状況が生まれ、「私共の家」の役割を、再構築しなければならない必要性を感じ始めていたからではないかと考えられる。この記事が書かれた後の「私共の家」に関する掲載記事は、夏の林間学校・多摩川キャンプの写真と記事が、白山夏事業協力依頼の広告記事を除き、1回掲載されただけである。地域としては、東京YWCA本館の家庭婦人部芽ぐみ会が、銃後援強調週間の出征家族慰問に白山御殿町を訪問した事が取り上げられているが、「私共の家」が行なったものではない。

1939年2月の総会報告号の記載には、年間事業報告として、「私共の家」の各クラブや母の会、行事など詳細な報告が、図表なども使い2頁半に渡って掲載されている。この総会報告号の翌月、1939年3月号を持って『地の塩』は終刊された。

#### 第4節「私共の家」の廃止

機関誌『地の塩』2月号はその年度の事業報告号となっており、毎年の活動がまとめて報告されている。1938年度も例年のごとく事業報告がなされた。「私共の家」も詳細な報告がなされたが、その最後は以下のようにまとめられた記事であった。

Yの多難な経済機構の中から、白山の細民地区教化のため本年度も投資された事により無事に過ごすことが出来た。物価高騰による経済力の窮迫や、出征者、戦死者を出して、働き人を失った家庭が出来たりして、地区としてはかなり強力な風が吹き荒んでいる。「私共の家」を通しての年中行事を省みる時、かうした地区の子供等に母親に和やかな空気を贈り得た事を想うて感謝である<sup>63</sup>。

そして、1939年3月をもって「私共の家」は閉鎖された。『地の塩』3月号紙上には総会の

報告がなされ、「私共の家」に関することが含まれているであろうと推測される組織変更に関する結果が報告されている。

#### 総会の議事会決議事項

##### 一、昭和 14 年度（1939）方針—組織変更

三項共実行する事に可決<sup>64</sup>

それまで毎号掲載されていた館外事業一覧中から「私共の家」の名前が消え、機関誌『地の塩』そのものもこの 3 月号をもって終刊とされた。

「私共の家」が何故廃止になったのかの事情を、1939 年 1 月の東京 YWCA 幹部委員会記録<sup>65</sup>からみておこう。

12 月幹部委員会に於いて提出の 14 年度（1939）予算原案に於いては、差し引き約 3 万 9 千円の欠損あり。予算の関係上は勿論、時局に際する折柄、基督教女子青年会として今日何を強調すべきかを検討（略）万国委員会の五項目中の一つ、青年層を目指して力を尽くすべきことを 14 年度の方針と決定。その結果、1 児童に関する仕事 2 二世教育事業 3 社会事業（母子ホームを除く） 4 地の塩 等を一考の余地あるものとして盛んに討議（略）1 白山御殿町の地区事業は開始当時とは違い、府、市の此方面への救済の手も伸び私団体の此種の事業も興り、周囲の事情は好転の状態にあり、青年会として莫大な赤字の補充（年間約 4 千円也）に苦しみ、不十分な設備のまま、事業を継続するよりは此際この仕事の永年の成功を成功として一旦打ち切り、社会事業としては母子ホームに会員の関心を集中しては如何<sup>66</sup>。

1939 年度、3 万 9 千円という赤字予算の額が、厳しい判断を導き出す直接的理由とみることができる。東京 YWCA の財政状況は、国中が日々戦争体制へ向かわんとする中、会員や支持者の減少、事業の減少など厳しい状況を抱えていた。『地の塩』を見ると、東京 YWCA は常に会員や支持者の拡大を掲げている。会の財政も常に不足があり、寄付や催し物への協力が訴えられている。そうした状況にありながらも、東京 YWCA の財政は、会員の協力と、エマ・カフマン（Emma R. Kaufman 1881-1979）<sup>67</sup>に代表される外国人幹事たちの協力による海外からの支援などにより、この期までは乗り切ることができていた。

社会事業「私共の家」はその性格上、費用を自営することは厳しく、その負担が東京 YWCA にとっても大きな負担となっていたのは幹部委員会記録の通りであろう。東京 YWCA は社会事業を、創立 30 周年記念事業として計画された「母子ホーム」に集中させ、「私共の家」廃止の決断を下したのである。

その決断が下された時を見してみる。前年 1938 年は、国家総動員法が公布され、国民全体が統制管理される体制が取られた時である。また日本において初めての基本法である社会事業法が公布されたが、この事業法は視点を変えれば指導監督事項による監督的側面の強いものであった<sup>68</sup>。そして 1939 年には宗教団体法が成立し、宗教団体は統合され、国民総動員体制がつくりあげられていった状況下であった。帝国大学セツルメントでは、1938 年 5 月警視庁特高部に出頭を命じられ、翌日解散声明を出すに至るという様な事柄が起きた状況下である<sup>69</sup>。様々な場面において、強弱はあったであろうが、取締や統制の動きが厳しい状況であったことが推測される。

また東京 YWCA の内部では、1938 年「私共の家」を担当する幹部委員社会部委員長の辞任や辞退が続き、その結果、社会部の委員長は不在のままであったことが幹部委員会記録(1938 年 2 月 23 日、3 月 16 日、4 月 20 日)に残されている。これは、社会に対し何らかの働きかけをしようとする社会事業という分野が、場合によっては時局と相反するかのような社会的認識が起りうる状況があり、そうした事に影響されて委員長を受ける人が居なかったのではと推測する事もできるが、事実は不明である。しかし、幹部委員会において「私共の家」の運営を推し進める社会部委員長の不在が何の影響も与えなかったとは考えられない。こうした複合的な厳しい社会情勢が、女子労働者教育を掲げ、細民地区の社会事業として歩んできた「私共の家」の存続する力を東京 YWCA に与えなかったともいえよう。

1939 年 3 月の廃止後を幹部委員会記録で追っておきたい。母の会には 1939 年 3 月 12 日(出席 40 名)閉鎖の件を発表した。「閉じるにあたっては所々より何らかの方法による事業継続を希望する向きあり」後継者は物色中であるが未決であると、また地区内の軍属者死亡の家族(母親と 11 歳女兒を頭に 5 人の子供)への米代として、月 10 円を 3 月以降(1939 年)2 ヶ年補助することを決めている。この家族には、方面委員会の尽力も及ばず、軍属故手当、扶助料など何も支給されておらず、特別扶助も未定のままであり、軍人遺家族募金の残金 300 円が充てられた。この記載以降、幹部委員会記録には、白山御殿町の記録は出てこない。

こうした経過の後、1939 年度がどのような決算状況で終わったのかを見ておきたい。幹

部委員会記録（1940年2月14日）の1939年度の決算予想報告<sup>70</sup>には、収支予算140,000円に対し収入173,564円30銭、支出167,000円差引き6,500円余の余剰金が出るが見込まれ、その余剰金処理について協議がされたことが記録されている。この結果がどのように受け止められたのかを見る資料にはまだいき当たらず、詳細は不明である。

この後、本格的な戦時体制に組み込まれる中、多くの団体がそうであったように、東京YWCAはその独自の活動を、ほとんど閉じて行くことになる。以下その流れを列記する。

1940年 国際友好部廃止、寝室部閉鎖、外国人幹事全員帰国

1941年 カフェテリア閉鎖、キャンプ取りやめ、女学生クラブ廃止

1942年 少女会員制廃止、保田使用禁止

1943年 日本基督教女子青年会本部の支部となり事務所を日本YWCA同盟に移す

1944年 駿河台女学院廃校

その一方、1942年基督教女子青年会報国団東京支部が結成され、青年会員や職員は報国隊や挺身隊員となって、地域、農村、工場などで厚生福祉活動や体育指導を終戦間近まで行ったのである<sup>71</sup>。

## 小 括

東京YWCA機関誌『地の塩』関連記事から、「私共の家」の歴史を再構成してみた。そこから明らかになったことは、以下の点であった。

第一に女子労働者への関心についてである。YWCAは女子労働者事業からその歴史が始まったが、日本のYWCAもこの課題に向き合っていたことが明らかになった。それは、ロンドンにおいても日本においても、女子労働者の置かれた状況には共通性があり、その時代の女子労働者、広くは女子青年の状況を変革する取り組みであったといえる。

第二に、女子労働者の状況を変革するため、「社会的自立」や「人間形成」といった目標への取り組みが成されていた事が明らかになった。それは当時行われていた皇国の臣民としての教育とは異なる、個を尊重した、自由な要素が多く含まれるグループワークという方法で取り組まれた。

第三には、YWCAの時代と向き合う姿勢の一端が明らかになった。「私共の家」は1930

年代という、大正リベラリズムの余波を残しつつも 1940 年代へと向かう時代に展開された事業である。挙国一致の国策の中、東京 YWCA は「私共の家」事業を抗うことなく廃止させたかのように見える。しかし視点を変えると、事業は廃止したが、事業の本質的な力までもが時代の中で消し去られたとはいえない。そこで行われた、人間の生き方の根本にかかわるさまざまな教育的活動と、それによって実現した人々の学び、またひろく人間形成といった人々の内面によって現される事象は、時を越え、次なる時代にその姿を具体的な形として現してくるものだと考える。こうした形で東京 YWCA は時代と向き合い、その中で掲げた目標を追求したといえる。

- 
- <sup>1</sup> 日本 YWCA100 年史編纂委員会『日本 YWCA100 年史—女性の自立を求めて』日本キリスト教女子青年会、2005 年、p. 21。  
1925 年第 1 回全国総会に於いて会則「基督教女子青年会日本同盟憲法」が定められ本部の名称は「同盟」と呼ぶことになった。
- <sup>2</sup> 社会科学事典編集委員会編『社会科学事典』新日本出版社、1878 年。  
キリスト教の教義を社会主義的に解釈して、平等・友愛の精神で社会の矛盾を解決し社会主義的な「共同社会」を実現しようとする思想及び行動である。日本では木下尚江(1869～1973)らがこの思想を主張した。  
土肥昭夫『日本プロテスタント・キリスト教史』新教出版、1982 年、pp. 203-205。  
日本資本主義の興隆は貧富の格差や労働者の悲惨な状況を生み出していた。1890 年代「今日の問題は労働問題である」と、キリスト者による労働組合期成会(1897)から労働組合の結成が見られた。初期の運動は、社会改革や階級闘争ではなく、社会改良や労使協調を目的とするものであった。しかし、労働組合結成の法的保障のためには政治運動が必要であった。この動きに対する治安警察法(1900)の公布は、労働運動の指導者と社会主義を目指す政治運動(社会主義協会)を結び付け、普選の実現と労働者政党の結成を目指す社会民主党が結成された。その創設者は幸徳秋水を除きみなキリスト者であった。
- <sup>3</sup> 吉田久一『日本社会事業の歴史』勁草社、1995 年、p. 109。  
吉田は、キリスト教社会改良思想として内村鑑三を取り上げ以下のように述べている。  
「明治 20 年前後に、欧化主義的慈善思想や、啓蒙主義的慈善思想に対して、信仰と福祉の関係を追及していた。30 年代が内村の社会改良期である。その社会改良思想の第一の特徴は非戦と福祉の関係で、それは、日露戦争の『歴史的現実への洞察力』を通してである。第二は足尾銅山鉍毒事件批判、第三が禁酒、禁煙、廃娼である。第四が飢餓や災難を神の劫火や啓示と受け取った事である。その背景には帝国主義化しつつある日本への批判があった」。
- <sup>4</sup> 同上、P105。
- <sup>5</sup> 同上、p. 103。
- <sup>6</sup> 矢島浩『明治期日本キリスト教社会事業施設史研究』雄山閣出版、1982 年、目次より集計。

<sup>7</sup> 前掲、『社会科学事典』。

国民経済全体を戦争の軌道にのせること。帝国主義の段階、特に全般的危機（経済・政治・イデオロギーも含む世界資本主義全体、体制そのものの危機）の時代には、軍国主義が発展し、経済の軍事化を促進する。

<sup>8</sup> 日本キリスト教歴史大辞典編集委員会編『日本キリスト教歴史大辞典』教文館、1998年。1939年成立した宗教団体の国家統制を図るための法律。1899年より3度内閣より国会へ提案されたが不成立、日中戦争が始まり国家主義化が進む中で、39年平内内閣は宗教団体法案を国会に提出した。全37条の簡潔な法案で、神道、仏教、キリスト教、その他の宗教団体と結社の統制を目的として、教団の設立は文部大臣の認可を必要とし（第3条）、その宗教行為が安寧秩序を妨げ、又は臣民たる義務に背く時は認可を取り消される事になっている（16条）。しかし、神社はこの法の外にあり、神社参拝を拒む者は取り締まるとの説明もなされた。1939年3月23日成立、4月4日公布された。キリスト教界には、この法律に宗教団体として「基督教」の文字が初めて入った事を喜ぶ意見もあり、批判的見解は稀であった。40年6月宗教局長は教会数50、信徒数5000名以上なければ教団として認められないと言明。各派合同の要因となった。カトリックは41年に日本天主教教団として設立を認可、プロテスタント各派は6月基督教団として合同、11月に認可された。

<sup>9</sup> 原誠『国家を越えられなかった教会 15年戦争下の日本のプロテスタント教会』日本キリスト教団出版局、2005年、p.115。「1941年結成、活動の具体的目標は、・宗教教学の刷新・宗教国策の確立・宗教報告活動の総合的展開。緊急実施すべき事項として、例えば大政翼賛会に宗教を担当する部門独立の設置の建議、そしてこれらによって展開される活動を末端まで浸透させる挺身隊の創設などが揚げられた」。

<sup>10</sup> 徳永直『太陽のない街』岩波書店、1950年。

<sup>11</sup> 文京区『文京区史第4巻』文京区、1965年、p.465。

<sup>12</sup> 東京YWCA機関誌『地の塩』第67号、1934年5月。この号から東京YWCA館外事業一覧に「細民地区事業」と掲載された。

<sup>13</sup> 『地の塩』誌上の表記を見ると、「細民児童教導所（第64号1934年2月）」「細民区事業（第67号、1934年5月以降の館外事業一覧）」と表記されてきたが、1935年2月（73号）からは「社会事業」と表記されているので、本論文では「社会事業」を使用する。

<sup>14</sup> 東京市小石川区『小石川区史』小石川区、1935年、p.655。

<sup>15</sup> 前掲、『地の塩』第36号、1930年11月。

<sup>16</sup> 同上、第36号。

<sup>17</sup> 東京市小石川区『小石川区史』小石川区、1935年、p.655。

方面委員会は、約30万人とも言われた「細民」その内でも極貧者と言われる者が約4万世帯、16万人を数えた状況下、日常生活に接触し、親切的相談相手、適切な保護指導に当たると共に、正確な調査資料を提供し施設の改善普及を促し、社会事業の連絡統制する機関として設けられた。東京市では最初1920年下谷、深川に設けられ小石川は1922年に設置、1935年時点では市内11区に32方面部が設けられている。委員は市の嘱託として、一方面十数人で任期2年、正副委員長が互選され其の方面を代表する。また其の方面委員を補翼する為方面参事員が置かれその役には区長、警察署長、区医師会長が任命されている。

<sup>18</sup> 同上、p.689。

聖ステパノホームは経営者（『地の塩』には新生教会の草野氏と名前が記されている）が貧民及び肺癆病者伝道に従事中、その救護にも尽力したのが基礎となり社会事業化するに至り荏原町にホームを急設し病発者を収容したが、住民の反対と当局の注意を受けその後数か所移動し、1924年より白山御殿町を中心に伝道救助を開始し現在に至ったと記されている。



- 
- <sup>19</sup> 前掲、『地の塩』第37号、1930年12月。
- <sup>20</sup> 同上、第38号、1931年2月。
- <sup>21</sup> 同上、第47号、1932年2月。
- <sup>22</sup> 同上、第51号、1932年7月。
- <sup>23</sup> 東京YWCA幹部委員会記録1931年9月26日。
- <sup>24</sup> 同上、1931年11月21日。
- <sup>25</sup> この時点では幹事となっているので、日本YWCA同盟の職員であるが、『地の塩』第23号（1930年6月）に肩書き日本女子大学社会事業学部長としての記事がある。
- <sup>26</sup> 前掲、幹部委員会記録1929年9月18日。
- <sup>27</sup> 同上、1930年4月23日。
- <sup>28</sup> 同上、1930年11月9日。
- <sup>29</sup> 文の京『わたしの便利帳 文京区のプロフィール』文京区、2006年、p.136。
- <sup>30</sup> 文京区『文京区史第4巻』文京区、1965年、p.468。  
「特定区域」とは東京市社会局に於いていわゆる細民階級＝5人以上の家族一世帯を標準とし、その月収50円～60円以下の者の居住する地域を言い、非衛生地域に該当している場合が多い。
- <sup>31</sup> 同上には、東京市役所編『東京市特定区域二関スル調査』1925年調査1927年発行の資料を出典と表記されている。
- <sup>32</sup> 文京区教育委員会 文化財表示看板「御殿町尋常小学校跡」（1989年）。  
白山御殿町41の御殿町尋常小学校に1919年昼間働く生徒のため「御殿町尋常夜学校」を併設1937年近隣からの出火により校舎全焼、仮校舎に移るが戦争激化により校舎建設に至らなかった1943年廃校。
- <sup>33</sup> 東洋大学創立100年史編纂室編『東洋大学百年史資料編Ⅰ上』東洋大学創立100年史編纂委員会、1988年、p.264。
- <sup>34</sup> 同上、p.171。  
1913年白山御殿町64番地に設置され、付近一帯の貧困者を対象として、彼らの指導、救済、慰安、向上を図る事業として、家庭相談、人事相談に応じ、金品給与慰安、職業の斡旋紹介、青少年少女の保護救済、苦学生の保護指導に努め、さらに母の会、母子の会、児童の夕、童話会などを開いたりした。
- <sup>35</sup> 同上、pp.688-689。  
1925年財団法人として認可された社会教育団体である。調査部講演部などを置き雑誌書籍の発行、講演会、展覧会の開催などを行っていた。1927年には大日本連合女子青年団機関誌『処女の友』を発行している。
- <sup>36</sup> 前掲、『地の塩』第51号、1932年7月。
- <sup>37</sup> 同上、第55号、1933年2月。
- <sup>38</sup> 前掲、『東京YWCA80年の歩み』p.9。  
梶美津保「東京YWCAとグループワーク」  
YWCAは婦人団体であり、青少年団体であり、社会教育機関であるとして一般に規定されているが、社会事業団体であり、Group Work Agencyであるという規定は、日本においてはあまり明確にされていないようである。1800年代後半産業革命によって農村から都市へ流入した若者たちの保護と教育、そして「自助」育成の理念から出発したと言われるGroup Workは、日本においても、YMCA、YWCAの活動を通して、アメリカ、カナダから取り入れられた。東京YWCAのグループ活動は、「クラブ」という呼び名をもって、学生を対象に1915年に始まっている。1919年には最初のBG（有職婦人）クラブ「湧泉クラブ」が組織され、1924年、学生部とは別に少女部が出来て女学生クラブをつくる準備ができた。翌年家庭婦人の最寄会が始まり、BGクラブもその数を増していった。1926年、少女部に専門家ローさんを迎え、女学生クラブはますます盛んになる

と同時に、キャンプによる人間教育を取り入れ始めたが、これも、キャビンという小単位にリーダーがついて、生活を通しての総合関係をつくる中での人間の成長と変化を目指したのである。

39 前掲、『日本キリスト教歴史大辞典』

1780年代イギリス人信徒レイクス、R. (Raikes, Robert 1736-1811) がグロスターにおいて、聖日に放任され非行に走る労働者子女を憂え、6歳以上の少年少女に読書など普通教科と共にキリスト教教理を教えたことに始まる。日本では、1864年にヘボン夫人がいわゆるヘボン会堂で居留地の外国人子女を集めて、サンデー・スクールを開いているが、ソーパー、J. が東京築地明石町の自宅で73年11月に、ペリー、J. C. やグリーン、D. C. 夫人らが神戸本町で12月、安息日学校の名称で開いたのを初めとする。翌年太政官は日曜休日制を決定、76年から実施されて、SSは漸次盛んとなり、『よろこばしきおとづれ』(76)などSS向けの小誌も発刊され、88年には『万国共通日曜学校課程表』も発表され、90年前後から日曜学校と呼ばれた。こうして諸教会は競ってSSを設けるようになり、教会のない町村でも、信徒有志によって開設され、それによって教会が開設される事ともなって伝道と教勢向上に貢献した。1907年日本日曜学校協会が設立され、20年には世界日曜学校大会が東京で開催された。その頃から次第にプロテスタント教会の中で、教会の責任を重んじた呼称として教会学校が用いられるようになった。

40 保田休養所「夏の一週間」としてこのような記事がある。

「濱めし バケツの中に茶碗箸飯櫃等を又鍋一杯に南瓜の煮付け時には胡瓜もみ時には汁を入れて、元名の濱辺に車座になり東京湾の落日又遥かに白秋の歌の城ヶ島をかすかに眺め風をはらんですーすとひく白帆を賞しつついただく夕食のことです。島めし 岩崎のおじさんに船で小さい島に連れて行っていただきそこでしたためる日の丸式お結びの称。キャンプ一流の送迎法 敷布にYWCAとサヨナラを色紙で縫い付け各自が海水着の上にかける大タオルを振ります。送迎されるものの感謝の仕方 汽車から豆キャラメルキューピー其他のおみやげを落とす、付けたリボンペーパーにはいろいろの言葉もかかれてあります」(『地の塩』第2号、1926年9月)

キャンプで生き活きと楽しむ娘たちの姿が読み取れる。

41 前掲、『地の塩』第43号(1931年9月)には以下のように掲載されている。

「教育機関としてのキャンプ」少女部幹事 丹羽多嘉子

キャンプの教育は教案に従うものではなく一人一人のキャンパスの性質、趣味、傾向、生活、精神、健康状態を研究しつつこれを正しく導くにある。次にキャンプは教育を施すのに全人格的方法を用いることである。学校、教会、家庭、社会の協力教育は近年教育者の高潮する所であるが、キャンプは之を一つとしたもの、即ち少女たちの全生活を一定の期間中共にする全人格的教育に努めるもので、指導者は起居を共にし、友人として少女たちの自然のままの日常生活に注意し導く事が出来る。次にキャンプは共同生活即ち現在最も重要視される社会教育、社会生活を実際に体験せしめる。家庭を離れた純な少女達、ミディーにブルマースのキャンプ生活とは、階級諸制度に掟はれるうれひ比較的に少く学校別地方の区別もなく一つのキャンパスとして等しく活動するディモクラティックな社会教育を教へ導くのに之程理想的な所はない。

42 前掲、『小石川区史』。

43 大森俊雄編『東京帝国大学セツルメント十二年史』平文社、1998年、解説p.1。

関東大震災における東大の「学制救護団」が、末広巖太郎教授の提案を受け、ロンドンのトインビー・ホールに学ぶ「大学拡張運動」としてのセツルメントを1924年に創設した。

44 小島幸治『隣保事業管見 隣保事業調』社会局社会部、1926年。

1913年日本女子大学の同窓会である社団法人櫻風会が開設した託児所、昼間保育や母

---

の会から子ども会、夜学校、復習会などの事業を行っている。

45 同上。

財団法人東京府社会事業協会が 1923 年関東大震災罹災者救済の目的で王子町にて開始、幼児保育、母の会、夜学院、青少年倶楽部、職業紹介などの事業を行っている。

46 前掲、『地の塩』第 79 号、1935 年 9 月。

47 日本キリスト教婦人矯風会編『日本キリスト教婦人矯風会百年史』ドメス出版、1986 年、p. 458。

在留外人矯風会が中心となって作り上げた隣保事業「興望館」は、労働者家庭の為に託児、助産、救療などの社会事業を行う目的で内外篤志家によって建てられた。

48 前掲、『日本 YWCA100 年史』p. 15、p. 19。

1924 年日本 YWCA が設置した御殿場 7000 坪の敷地に講堂、カテージ、水泳場、テニスコート、農園などを持つ山荘で行われた学生や会員の修養会で、神と人との交わりによる魂の目覚め、社会への開眼、自治と自立の精神を体得する機会として日本 YWCA の大切な行事であった。

49 前掲、『地の塩』第 86 号、1936 年 5 月。

50 同上、第 83 号、1936 年 2 月。

51 記事中は 18 人となっているが、年間報告号（『地の塩』第 55 号、1933 年 2 月）には 8 名と記載されている。

52 前掲、『地の塩』第 51 号、1932 年 7 月。

53 同上、第 52 号、1932 年 10 月。

54 同上。

55 同上。

56 同上。

57 同上、第 83 号、1936 年 2 月。

58 同上、第 52 号、1932 年 10 月。

59 同上、第 112 号、1939 年 2 月。

60 同上、第 93 号、1937 年 2 月。

61 前掲、東京 YWCA 幹部委員会記録 1936 年 3 月 18 日。

62 前掲、『地の塩』第 103 号、1938 年 2 月。

63 同上、第 112 号、1939 年 2 月。

64 同上、第 113 号、1939 年 3 月。

65 幹部委員会とは、市 YWCA の最高意思決定機関である年会（総会）で選挙された幹部委員によって構成される。選出された幹部委員会から役員（会長・副会長・書記・会計）を互選、会長は各部委員長を任命する。「年会で定められた大綱内において幹部委員会は全ての政策を行う権利が与えられ、又各部委員会は幹部委員会の方針に従う範囲内でその事業遂行に適宜の配置と計画とを為す事が出来る」。幹部委員会は原則月 1 回開催され、幹部委員会記録はその記録である。（『基督教女子青年会指導者読本』参照）東京 YWCA の戦前の多くの記録や資料は、殆ど関東大震災や東京空襲などで焼失したとされる。この幹部委員会の記録はそうした中で、不完全ではあるが貴重なものとして保管されている。現存しているものは①1923 年 9 月～24 年 6 月②1924 年 9 月～26 年 12 月（26 年 11 月はなし）③1927 年 1 月～30 年 12 月④1931 年 1 月～35 年 12 月⑤1936 年 1 月～40 年 12 月⑥1941 年 1 月～44 年 4 月のものである。

66 前掲、東京 YWCA 幹部委員会記録 1939 年 1 月 18 日。

67 ドイツ系カナダ人、1914 年より東京 YWCA 無給幹事として 1940 年まで勤務、その間外国人総幹事、副総幹事職を歴任。彼女の個人資産の多くを東京 YWCA の土地建物を始めとし多くのプログラムに提供した。また彼女の資金で会員職員その他多くの指導者たちが海外留学や国際会議に派遣された。自身の資産だけでなくカナダ、アメリカなど

---

のYWCAへ積極的な寄付の呼びかけを行い、日本のYWCAに多額の寄付をもたらした。  
塩野幸子編著『カフマン讃歌』東京YWCA、1995年参照。

<sup>68</sup> 吉田久一『日本社会事業の歴史』勁草社、1995、p. 164。

<sup>69</sup> 前掲、宮田親平 pp. 210-213。

<sup>70</sup> 総会開催日程の関係で、会計年度途中で決算を見込まなければならぬため予想報告となる。決算時と大きく数字が変わることは少ない。

<sup>71</sup> 前掲、『東京YWCA80年の歩み』p.8。

## 第6章 東京YWCAの職員とその養成

本章では、戦前期東京YWCAの職員とはどのような人々であり、どのように養成され、女子青年教育においていかなる役割を担ったのかを明らかにする。当時の限られた資料から職員全ての動向を読み取るのは厳しいが、東京YWCA創立から敗戦までの間在籍した職員は320名、外国人スタッフは44名と、元職員石橋宮子編纂責任下の年表（1972年作成）には記されている。ただその数を裏付ける資料には行き当たらず、職員動向を東京YWCA機関誌『地の塩』に求めた。機関誌の発行期間である1926年から1939年の「職員動静」欄には、邦人職員216名（幹事80、事務・講師他136）、外国人スタッフ25名が掲載されていた。この職員たち全て女子青年教育を担う職員と言えなくもないが、本論では80名の幹事を分析の対象とした。

なお、『地の塩』にて判明した職員241名を、幹事（80名）、外国人幹事（25名）、職員・講師（136名）の3分野に仕分けし、記事掲載日及びその内容を一覧表とした。その一覧を巻末に掲載した。

### 第1節 1920年代後半～1930年代の東京YWCA幹事職員

YWCAは会員と職員の両輪で運営されると言われ、『基督教女子青年会指導者讀本』には以下のように記されていた。

基督教女子青年会の採ってゐる組織の根本をなすのは会員制である。即会員が母体となって事業が運ばれてゐる自治体であることを意味する。(略)自治体であることは二様の意義を有する。即管理・計画・実行すべて一会の構成員の手によって為される事と、財政の責任はすべて自会が負ふと云う事である。その結果として会員相互の委員制度が採られる。之に加へて、女子青年会組織の特徴とする所は幹事と呼ばれる有給の専門家をおいて、委員会で立案及決議された諸事業の実行にあつてその専門的技能をもち得ることである<sup>1</sup>。

ここで言われた「専門的技能をもち得る」と規定される幹事はどのような人たちであったのだろうか。前述の「職員動向」欄の記述を追うことで、邦人幹事 80 名中 57 名の出身校が判明した（表 6-1）。その内 51 名はキリスト教主義又はその影響を受けた私立女子専門学校である日本女子大学校、女子英学塾、東京女子大学などの出身者であった。その他の 2 名は体育専門学校、4 名は海外の学校出身者であり、「幹事・幹事補」の大部分は、当時の女子高等教育機関で学んだ者たちであった。表 6-1 から幹事たちの学んだ専攻を見ると、日本女子大学校は社会福祉系の専攻が多く、多くはその分野の仕事に就いている。東京女子大学は英語専攻が多く、女子英学塾は専攻先の記入は無いが、高度な英語教育を施し女性の英語教員の養成を掲げ設立された学校<sup>2</sup>であることから英語専攻であると考ええる。この 2 校の就任先は各部に散らばっている。各事業の基本的言語として英語の必要性の高さが伺える。その他及び二世の専攻では、就任先の体育部と関連しての体育専攻が 4 名いた。先行研究には東京 YWCA 体育部研究や体育的諸活動研究がみられるが、『地の塩』復刻版解説<sup>3</sup>では、女子の先駆的な体育教育に注目し、学校教育とは異なる市民スポーツ分野（健康保持、余暇を楽しむ）での普及事業を取り上げ、女性の健康、体力増強の取り組みが、駿河台女学院での体育部師範部新設（1936 年）へとつながっていったことの経緯を示している。東京 YWCA の体育教育について本研究では言及していない。体育部事業を始め、キャンプやレクリエーションの指導、そして健康診断や医務室の常設など、女子青年の身体に目を向けた体育教育については今後の課題としたい。

1920 年から 1930 年は「急激な女子高等教育の拡大期」<sup>4</sup>であり、彼女たちが学んだキリスト教系の女子高等教育機関は、英語教育、教養教育に一定の役割を担い、自由な雰囲気の中での学びであった<sup>5</sup>とされている。YWCA はそうした教育を受けた女性たちが職業を得る新しい職場でもあったと言えよう。また、巻末掲載幹事一覧の日本人幹事 80 名の内 4 割弱の者が、留学や視察、国際会議出席などの海外経験を持つ者であった。外務省統計<sup>6</sup>によれば、日本女性の修学・研究渡航者数は 1919 年 34 名、1928 年 81 名、視察・遊歴においては、同じく 1919 年の 61 名から 1928 年の 717 名へと増加を見せているが、この数字と比較しても、東京 YWCA における幹事たちの海外経験の割合は、非常に高いと言えよう。

表 6-1 YWCA 邦人幹事一覧（出身大学別）

①日本女子大学			
就職年	氏名(就任先)	卒業年	専攻
1918	安斎(鈴木)とみえ(有職婦人部)		英文科
1926	渡邊松子(有職婦人部)	1926	女工保全科
1930	湯川晃子(労働部)	1930	女工保全科
1930	風戸秀(家政部)	1930	家政学部
1931	西村壽美(英語部)	1931	英文科
1933	岡田孝子(家庭婦人部)		師範家政科
1934	庄田さだ(実学部)	1930	女工保全科
1934	宮崎貞子(社会部)	1934	児童保全科
1935	山野井ゆき(社会部及有職婦人部)	1932	児童保全科
1935	石畑とめ(社会部)	1928	児童保全科
	菊池ただ(家政部)		家政科
1937	二股みのり(家政部)	1937	家政科
1937	菊池ハツ(社会部)	1930	女工保全科
②東京女子大学			
就職年	氏名(就任先)	卒業年	専攻
1928	由利郁子(体育部)		
1928	竹内菊枝(体育部)		英語専攻部
1931	大森松代(体育部)		英語専攻部
1931	内海ちゑ(野尻キャンプ)		
1933	高木淑(英語部)		英語専攻部
1933	千葉幽香(英語部)		英語専攻部
1934	小林文子(英語部)		英語専攻部
1934	牧野綏(商業部)	1934	大学部英文科
1934	仲山千代(体育部)	1934	英語専攻部
1935	櫻井恵美子(体育部)		国語専攻部
1936	高杉和江(英語部)		大学部英文科
1936	永井晃子(キャンプ部)		英語専攻部
1937	堀内信子(商業部)	1937	英語専攻部
1937	河野勝子(商業部)	1937	英語専攻部
1937	小出法子(体育師範部)	1937	英語専攻部
1937	矢島眞(体育師範部)		英語専攻部
1937	杉田薫(会員庶務)		英語専攻部

③女子英学塾			
就職年	氏名(就任先)	卒業年	専攻
1926	大石ふか子(英語部)	1926	
1927	河西はつ子(体育部)	1926	
1928	柳田元(英語部)		
1930	岩井益恵(体育部)		
1930	櫛田孝(商工部)		
1931	弘瀬晴(商業部)		
1931	片岡静(商業部)		
1933	田山栄(英語部)	1933	
1935	村田愛子(学院庶務)		
1936	青野富美恵(少女部)		
1936	堀芳枝(家政部)		
1936	三谷松子(語学部)		
1937	永島愛子(少女部)		
④その他			
就職年	氏名(就任先)	卒業年	卒業校及び専攻
1927	山田多嘉子(少女部)	1927	神戸女学院大学部
1930	田中婦美子(体育部)		日本体育会体操学校女子部
1930	塩野幸子(少女部)		神戸女学院大学部 英語師範科
1931	蒲生文子(家政部)		活水女学校家政科
1933	原口佐典子(体育部)		二階堂先生の体育 専門学校
	瀬川八重(宗教部)		明治学院神学部
1936	有岡美代子(食堂部)		青山学院家政部
1936	石川百合子(音楽部)		宮城女学校音楽部
1937	西川環(宗教事業部)		青山学院神学部女 子部
1937	清水有楽(商業部)		同志社(女子専門 学校)・英
⑤二世			
就職年	氏名(就任先)	卒業年	卒業校及び専攻
1930	堂本菊子(体育部)	1930	カリフォルニア大 学体育専攻
1933	手塚雲(体育部)		NYナショナルレク リエーションス クール
1934	三宮都(家庭婦人部)		加洲大学
1935	水口百合子(国際友好部)		米国コロラド州実 学学校

(東京YWCA『地の塩』No.1～No.113より作成) \*空欄は不明を表す。



また、すでに第2章で述べたところであるが、1861年から1912年の間、女性の公共機関や企業以外の海外渡航者7名中に2名の、さらに自主渡航者34名中に9名のYWCA関係者が確認された。彼女たちは、河井道以外は、会長や委員、講師という役割を担うYWCAの指導者であった。彼女たちから伝えられる情報は、幹事の国際性を育む貴重な教育機会としてあったと考えられる。

樽松・影山による機関誌復刻版への解説<sup>7</sup>には、東京YWCAの活動の特徴の一つに国際交流を挙げられており、大きく発展はしなかったが中国人女性との交流、シベリア出兵に対する兵隊への慰問袋やロシアの子ども支援、国際子ども祭り、米国西部8大学学長交流を記し、国際友好部設置への経緯が示されている。

YWCAにとっての国際性とは、交流という一つの事業として展開される部分も含め、国際団体であること、世界YWCAを構成する一つの組織であることにその特徴があると考ええる。先述したYWCA幹事の留学や海外研修、また会員や講師による国際性の伝授など、それらは日本のYWCAが国際団体として存在するための必要な教育であり、海外幹事も含め幹事たちは世界YWCAネットワークの一員としての働きを担う人としての養成が実施されていたといえる。

## 第2節 職員の養成

日本YWCA初の日本人総幹事となる河井道（1877-1953）は、1904年に米国YWCAの幹事養成校に入学し、YWCA幹事としての教育を受けた。その後東京YWCA総幹事の加藤タカを始め各ローカルYWCAの主たる職員も同校にて養成されてきた。その背景には、主要6都市のローカルYWCAと学校YWCAの拡がりがあり、組織としての意思決定を行うボランティア会員へ各種情報を提供し、実行を助ける役割を担う幹事の育成が急務であったと考えられる。

米国YWCA幹事養成校は、将来のYWCA幹事を養成する学校である。1907年の募集要項には以下の条件が記されていた。

22才～35才までの女性、プロテスタント福音主義教会の会員、カレッジの卒業生、カレッジ卒業後の就労経験（ビジネスや他の）がある者、YWCA 経験があればなお良しなどの、募集条件が明記されていた。

養成校では、農村部、産業部門、外国学部及び学生部門の幹事養成（1年コース）と宗教部門の幹事養成（2年コース）の2つのコースがあり、幹事候補者でない留学生やボランティアも受け入れた<sup>8</sup>。

表 6-2「米国 YWCA 幹事養成科 受講者一覧(1904 年～1935 年)」に示したように、受講者は、日本、東京、横浜、大阪、神戸の総幹事や主任幹事などを担う人々であった。またほとんどの受講者は、養成校入学の前後には、大学での学びやアメリカの YWCA での実地研修の機会が設けられており、手厚い養成のプログラムであったことが見て取れる。

表 6-2 米国 YWCA 幹事養成校 受講者一覧(1904 年～1935 年)

研修年	名前	記事	帰国後の職種	記事掲載資料
1904	河井道	プリンマー女子大学卒業、NY養成校終了後帰国	日本YWCA総幹事	『日本YWCA100年史』
1913	加藤高子	ミルウォーキーYWCA(ミシガン州)に1年 その後、NY幹事養成校に派遣、1915年卒業	東京YWCA総幹事	日本YWCA『女子青年界』 22巻10号1925.10
1918	坂本花代	トロントカレッジ2年修学(家政科)後、養成校1年	東京YWCA主任幹事	同上
	大呑久子	トロントカレッジ2年修学後養成校1年	神戸YWCA主任幹事	同上
	横澤つぎ	コロラドカレッジ2年修学後養成校1年	横浜YWCA主任幹事	同上
1920	中西しな子	ノースウェスタン大学1年修学、養成校1年、卒業 後学生部事業の視察	東京YWCA幹事	同上
	山本琴子	養成校では総幹事部を専門に考究、卒業後1年を 太平洋沿岸移民婦人の状況見学の為、ロスアンゼ	京都YWCA総幹事	同上
	堀信子	北米の大学で2年修学の後、養成校に入学、卒業 後米国で結婚		同上
1926	佐々木愛子	米国YWCA幹事養成科に入学	京都YWCA幹事	『日本YWCA100年史』
1927	河西はつ子	体育部幹事、NY幹事養成学校入学の為渡米	東京YWCA幹事	東京YWCA『地の塩』 1928.2
1930	益田米	コロンビア大学、養成校勉学後ケンタッキー・ル イビルYWで実地研修後帰国	元大阪YW⇒ 東京YWCA幹事	同上、1931.3
	山田多嘉子	米国キャンプ教育研究1930.5-1931.7	東京YWCA幹事	塩野幸子編著『カフマン 讃歌』付録「カフマン年 譜-歴史と業績」
1935	渡邊松子	米国YW事業視察及び研究	東京YWCA総幹事	同上

(右欄掲載の各種資料掲載記事より作成)

こうした研修の為、1914年に東京YWCA ボランティア幹事に就任したエマ・R・カフマン (Emma Kaufman 1881-1979) は、自身も受講したニューヨークのYWCA 幹事養成校 (1916年～1917年)<sup>9</sup>で日本人幹事が研修を受けるための資金提供を行っている。その後、東京YWCA は1929年、志立タキ (1876-1970) 会長とエマ・R・カフマン外国人総幹事による寄付金を基に奨学金制度を設け、米国女子大学との交換留学や各国YWCA 協力による研修の機会をつくるなど、幹事たちの研修の機会を拡げた。以下の表は、カフマン奨学金により実施された海外留学、国際会議出席の戦前期リストである。またカフマンは世界YWCA に日本人指導者養成資金5万ドルを委託 (1946年)<sup>10</sup>し、その奨学金により戦後多くの幹事が海外留学の機会を得ている。

表6-3には、掲載された人物の帰国後の職種について記載していない。不明の部分もあり全員についての記載は出来ないが、現在判明しているもののみ記述しておく。

工藤 (坂本) 花代	東京YWCA 主任幹事
円谷 (中西) 可那子	学生部幹事
加藤タカ	東京YWCA 総幹事
安齋とみえ	東京YWCA 有職婦人部幹事、後大阪YWCA 総幹事
平尾 (河西) はつ	東京YWCA 体育部幹事
山田多嘉子	東京YWCA 少女部幹事
石橋 (爾見) 宮子	駿河台女学院学監
渡邊松子	東京YWCA 研究部幹事、後東京YWCA 総幹事
山本 (大森) 松代	東京YWCA 家政部幹事
山本琴子	京都YWCA 総幹事、後日本YWCA 総幹事
白石つぎ	東京YWCA キャンプ教育部幹事

表 6-3 カフマン奨学金による指導者養成のための海外留学及び国際会議派遣

派遣期間	名前	国	留学等	その他
1916. 5-19. 7	工藤(坂本)花代	加 米	トロント大学家政科3年、アメリカYW 幹事養成科1年	
1920. 6-22. 7	円谷(中西)司那子	米	シカゴ市ノースウエスタン大学、アメ リカYW幹事養成校各1年	
1923. 6-24	加藤タカ		万国職業婦人大会及び万国YW少女部協 議会(ウィーン)出席後、ロンドン市経 済大学聴講6か月滞在後、NY他主要都 市視察5か月	
1925. 6-27. 8	宇佐川(金森)タワ	加	オンタリオ州マクドナルド大学家政科	
1927-28. 9	安斎とみへ	英 米	バーミンガム市セレオーク大学、YW事 業及び労働事業研究。万国YW大会(ブ タペスト)出席。米国YW事業視察	
1927-28	碓井(国井)綾子	米	アメリカYW夏期学校出席、各地視察	
1927. 6-27. 12	加藤タカ	米 加	ホノルルYW新会館落成式に日本代表出 席。カナダオンタリオ州で静養後米国 市YW建築設備視察	
1927. 9-28	平尾(河西)はつ	米	NYコロンビア大学体育学校	
1928	久留島(酒井)アイ	中	中華民国YW総会(上海)に日本代表とし て出席	
1930. 5-31. 7	山田多嘉子	米	米国キャンプ教育研究	
1931. 5-31. 11	山本(櫛田)孝	米	カリフォルニアにて商業教育視察	
1933. 5-34. 6	石橋(爾見)宮子	米	カリフォルニアにて教育学研究	
1934. 5-34. 9	加藤タカ	米	休暇、米国加州大学聴講。第3回万国 婦人平和大会出席	
1935. 6-36. 8	渡邊松子	米	米国YW事業視察及び研究	
1935. 5-36. 8	山田寿々代	米	加州にて宗教劇研究及び視察	「地の塩」：劇や音楽 をシアトルやワシント ンで、NYでレクスクー ルでも学んだ
1935. 7-37. 6	山本(大森)松代	米	オレゴン州ブルマン大学家政科研究 後、NY「グッドハウスキーピング」社 にて研究	「地の塩」：ワシント ン州立大学より奨学金
1936. 2-36. 6	山本琴子	米	休暇	
1936. 6-37. 4	白石つぎ	米 加	コロンビア大学及びカナダで女子教育 キャンプ研究	
1937. 8-39. 4	升本(中村)礼子	米	ボストン市ブーバー体育学校	
1937. 12-39. 3	岡田孝子	米	オレゴン州立家政師範学校	
1938. 6-40. 7	桜井恵美子	米	ブーバー体育学校	
1939. 3-40. 2	刈田(牧野)綏	米	加州にて商業教育及びYW事業視察	
1939. 6-41. 10	佐藤(結城)光子	蘭 米	世界青年会議(アムステルダム)出席 後、渡米、シカゴ市で神学研究	
1940. 5-42. 7	塩野幸子	米	ジョージ・ウィリアムズ大学(教育)及 びYW事業視察研究	
1940. 8. 41. 11	吉田美知子	米	ブーバー体育学校	

(塩野幸子編著者『カフマン讃歌—エマ・R・カフマンに捧げる—』付録「エマ・R・カ  
フマン年譜歴史と業績」東京 YWCA80 周年記念行事委員会、1985 年、pp. 1-9 より作成。)

米国幹事養成校への派遣と共に、日本YWCAは自ら1922年「幹事養成科」を設置し、アメリカの養成学校のスタッフを招聘するなど、本格的な取り組みを始めた。表6-4(1)(2)は第1回目から第4回目までの養成科目及び講師一覧と各回の受講者である。

表6-4(1) 日本YWCA 幹事養成科養成科目(1922年第1回～1925年第4回)

回	養成科目	講師
<b>第1回</b>		
	聖書研究	田島牧師、川尻牧師、河井先生
1922. 4～5. 24	社会学	久布白夫人、荒川氏
主任幹事：	社会事業	濱井氏、大迫氏、留岡氏
ミセス・ウッド	女子青年会の組織及内容研究	本部、東京、横浜諸幹事
受講者数6	体操	ミス・フェリス
	時事問題	ミセス・ウッド
<b>第2回</b>		
1923. 4. 14～7. 14	聖書研究	藤井武氏、田島牧師、郷司牧師、ウエンライト博士、ボサンケット女史、コールマン氏
主任幹事：	社会事業	内片孫一氏、生江孝之氏、アクスリング氏、大岡氏、難波氏、北澤氏
ミス・マキノ	特別講話	鶴見氏、吉野作造氏、アイングマン氏
受講者数12	女子青年会の組織及内容研究	本部、東京、横浜諸幹事
<b>第3回</b>		
1924. 4. 12～7. 5	聖書研究	飯田堯一氏、郷司牧師、ボサンケット女史、ウエンライト博士
	社会学	内片孫一氏、竹中勝男氏
主任幹事：	社会事業	賀川豊彦氏、生江孝之氏、黒川氏、山田やす子女史、金澤甚衛氏、ガントレット恒子夫人、久布白落實夫人、植田たまよ女史、瀬川少佐、相良氏、安井哲子女史、柿崎正治博士、植村牧師、マクドナルド女史
小木曾其枝		
受講者数6	女子青年会の組織及内容研究	本部、東京、横浜諸幹事
	社会事業実地見学(毎週土曜日)	隣保事業、託児所、哺乳院、少年審判所、癲病院其他
<b>第4回</b>		
1925. 4. 19～6. 28	聖書研究	高倉徳太郎氏、ウエンライト博士、ヘルマー幹事
	心理学	菅原教造氏、アレン幹事
主任幹事：	社会学	竹中勝男氏、植田たまよ氏、
エディス・ヘルマー	教授法	松本松枝幹事、守屋米子女史
古坂つぎ	社会事業視察	卒業式後数日間(植田たまよ氏指導)
受講者数8	御殿場修養会及キャンプ実地研修	7月～8月
(日本YWCA機関誌『女子青年界』第22巻10号(1925. 10. 15)より作成)		

表 6-4 (2) 日本 YWCA 幹事養成科受講者名簿

回	受講者名	卒業後の任地
<b>第1回</b>	相澤けい子	神戸市部 商工部
1922. 4～5. 24	大石みゆき	横浜市部 教育部
主任幹事：	高島音羽	大阪市部 商工部
ミセス・ウッド	高久敏子	甲府伝道事業
	山添通子	京都市部 商工部
	吉岡美知子	東京市部 商工部
<b>第2回</b>	秋田文子	家庭
1923. 14～7. 14	飯田哲子	横浜市部タイプ科
主任幹事：	岩崎きよ子	神戸市部 教育部
ミス・マキノ	星野文子	東京市部 商業部
	穂積みき子	
	木村雪子	京都市部 学生部
	加藤れい子	甲府伝道事業
	小木曾其枝	本部 雑誌部
	佐々木愛子	京都市部 教育部・会員部
	清水貞子	大阪市部 会員部
	菅沼百合子	東京市部 特志指導者
	吉原きみ子	大阪市部 学生部
<b>第3回</b>	朴 承浩	家庭
1924. 4. 12～7. 5	濱田濱子	東京市部 商工部
主任幹事：	影山光子	横浜市部 教育部
小木曾其枝	佐藤義子	佐藤製糸工場(父上経営の工場)
	佐藤松子	本部 雑誌部
	弓削田ますみ	本部 事務部
<b>第4回</b>	井上佐曾子	横浜市部 クラブ
1925. 4. 19～6. 28	入江千代子	神戸市部 総幹事
主任幹事：	金子喜美子	東京市部 英語部
エディス・ヘルマー	奥村春子	京都市部 事務部
古坂つぎ	寺田三千代	神戸市部 事務部
	渡部君代	神戸市部 少女部・会員部
	足立きみ子	撰科
	福井かつ子	撰科

(日本 YWCA 機関誌『女子青年界』第 22 巻 10 号 (1925 年 10 月) より作成)

上記表 6-4 (2) にも明らかなように、受講者は全国各地から集まってきており、終了後には、各地の幹事としての仕事についている。日本 YWCA は、養成科開始の約 2 か月前に養成科生徒募集案内を『女子青年界』に掲載した。

今や東京、横浜、大阪、神戸、京都に市の女子青年会を含み、28 の学生部を連合するに至れり (略) 幹事の短期養成科を開始せんとす。

資格 ①専門学校卒業或いは教育、伝道に数年の経験ある人若くは同等の学力または経験のある者②福音主義基督教会の信者たるべき事 (所属教会、牧師名記入)

③健康者にして人と協力の可能者たるべきこと④年齢 20 才以上 40 才まで<sup>11)</sup>。

こうした養成を組織的に進める準備の為、1921年にニューヨークの幹事養成学校長ミスダオが来日<sup>12</sup>している。ニューヨーク幹事養成校と応募資格に共通性がみえるが、講習期間は2か月から3か月という短期間での実施であった。第1回の主任幹事となったミセス・ウッドは、工業部創立の為日本YWCAの本部幹事として、1921年に来日<sup>13</sup>している。彼女については、以下のような報告がなされている。

指導者ミセス・ウッドは工女間の働きに非常な興味のおありになつた方で絶えずその研究の結果を話して居られた事に偶然も伴うてか、第1回卒業生の多数が商工部に入ったことは面白い現象です<sup>14</sup>。

関東大震災（1923年）により、YWCA全体は震災事業に奔走したためか、『女子青年界』誌上に第2回幹事養成校の報告記事は見当たらず、第3回及び第4回養成講座終了後に受講生による報告が掲載されていた。以下は第4回後の報告である。

毎日多数の人に接し、空つばな心の隅から絞り出す様に苦心して聖書のお講義をしたり、殆んど器械的に英語の教授をしたり、諸種の事務に忙殺されたりしてゐた身が、久しぶりに落ち着いて静かな心でお講義に耳を傾け、一つ一つ先生のお言葉を飢えた心に吸い込む様にとり入れ、批判的に研究してゆくことをどんなにうれしく思った事でせう。(略) 今年は例年と少しく趣を異にし実際の経験と学理とを通して二重から徹底した教授法をもって最善な実をおさめ様とせられた(略)。高倉先生の私共の既成の魂を根底から覆へして革命的な新しい基督観及宗教態度について、又竹中先生によって示された近世社会思想の傾向と時代にあらはれた多くの社会主義者の巨傑と、その主義に対しての真剣な態度といひ、その他二人の先生によって説かれた心理学を通じ、又諸先生のこの一つの目的に集注された協力的な指導によって比較的短い期間に想像以上の効果を修め得ることのできたのを心から感謝して止みません。井上伊曾子<sup>15</sup>。

各回とも受講者の詳細については判明していないが、この報告から推測すると、一部の受講者は、YWCAや他での職業経験者であることが推測できる。また大学レベルと思える実践

と理論を兼ね備えた講義の質の高さも伺われ、それを理解しうる受講生の質も高いものであったと推測する。

創立から 25 年を迎えようとしていた東京 YWCA に所属していた女子青年層を概略的にみると、1929 年度学院生 1430 名（商業部 270、英語部 213、家政部 470、実学部 432、音楽部 45）、有職婦人部 234 名、体育部 1600 名などが機関誌から読み取れる。他にも会員ではないが人事相談（就職相談）170 名や、多くの若い女性が入りしであろうカフェテリア 159 名/1 日平均など<sup>16</sup>の女子青年層を推測すると、正確な数値としては不明確だが、この時期の東京 YWCA 全体では 3000 人を超える女子青年層を捉えていたのではないかと推測する。幹事たちは女子高等教育機関で学んだ知識を基礎に、各部担当者としてこうした女子青年のために教育事業を展開していた。更に研修や学習による養成プログラムによって専門家としての力量を高めていくことが幹事には求められていた。彼女らは女子専門学校で英語や社会事業などの専門教育と教養教育を身に付け、その学びを基礎に職業として現場での実践に臨んでいた。また 1919 年からは、日本 YWCA と各ローカル YWCA の幹事が一堂に会する、全国幹事会が実施され始め、そこでの協議や情報交換は彼女らにとっては相互研修の機会であったとも言えよう。そして幹事には海外での研修などの機会が提供されていた。東京 YWCA 幹事には、篤志家や世界 YWCA の協力があり、実践と研修による着実な職員養成の形があったことが理解される。一人の女性に、このような研修を提供していた女性団体は、この時代の日本においては稀有な組織であったといえよう。

### 第 3 節 女子青年担当職員について

1929 年 2 月、東京 YWCA は日本初の女性専用屋内プールやカフェテリア、教育施設などを持つスペイン風の新会館を完成させ、活動の昂揚期を迎えていた。その年度の職務分担表が『地の塩』に掲載されている。



表 6-5 1929 年度職員担当表

総幹事	加藤タカ, エマ・R・カフマン		
部・係	職員名	部・係	職員名
庶務	由比喜代	学生・少女部	丹羽多嘉子
	山中志摩子		ミルド・レッド・ロー
事務	山賀とみゑ		根本静江
	奥村こと	有職婦人部	安斎富得
会計	岡田美喜		渡邊マツ子
事務	金井千代子		ルー・リン
会員部	横倉ヒロ	事務	大澤恵子
事務	大島貞子	宗教部	瀬川八重子
地の塩	橋本君子	体育部	竹内菊枝
会館部	奥さく		ノーベル・ギボンス
計画部	吉澤ナツ	事務	澤井千恵子
食堂部	田村ミツ		横山いと
	貞島トミ	教育部（駿河台女学院）	
	池田操	商業部	酒井アイ
	後藤瞳		ロチー・エングルハート
	有馬米二		山上信子
	作家キヨシ	事務	太田都嗣子
	山崎精一		平山茂子
受付事務	平澤英子	英語部	近本春子
	山縣三喜重		マーガレット・マクノートン
	安井寛子	事務	太田みね
	堀内蔦子	家政部	金森クワ
	後藤栄子		菊地タダ
電話	玉木愛子		三浦トワ
傭人	8名	人事相談部	各部幹事之にあたる
	夫婦2組	寄宿舎舎監	岡林たねを
	男3女1		横井貞代
暖房係	1名（男1）		香月つね
電気係	2名（男2）		
憩の家取締り	2名（夫婦）		

(『地の塩』第 23 号、1929. 5. 25 より作成)

表に示されたように、職務は「総務」、「活動」、「施設」という 3 つの部門で括る事が出来、それぞれの部門では、取扱う事項や対象者などにより「部」がつくられ、各々幹事とその下で働く幹事補、事務の職員によって、業務が遂行される組織であることが判る。このことをわかりやすくまとめたものが、次の表 6-6 である。

表 6-6 各部門職務

部門	担当部・係
総務部門	庶務・会計・会員部・機関紙『地の塩』
活動部門	学生少女部・有職婦人部・宗教部・体育部・教育部(駿河台女学院)
施設部門	会館部・計画部(貸室)・食堂部・受付事務・電話・施設関連業務

翌 1930 年の「会館出入り職業婦人調査」<sup>17</sup>によると、200 名のクラブ員と 270 名の駿河台女学院夜間部クラス(英語、書道ほか)参加者が数えられている。彼女たちの多くは 20 代前半の女性で、その大半は高等女学校卒業後、事務員や邦文・英文のタイピストといった業務に従事している女子青年たちであった。こうした職業婦人を対象に活動を展開したのが有職婦人部(第 4 章)である。有職婦人部はグループ活動を展開するクラブ、夜間の実学的なクラスがこの時期の主たる事業活動であったが、その後、労働婦人を対象とした事業も開始されている。職務分担表上に記された有職婦人部 3 名の幹事、安斎富枝、渡邊マツ子、ミス・ルー・リンの履歴を「職員動向」記事から追ってみると以下のようであった。

①安斎富枝：日本女子大学校英文科卒業後函館遺愛女学校に教鞭を執る

1918 年 12 月東京 YWCA に就職

1919 年商工婦人事業の為専任幹事就任

1927 年バーミンガム YWCA 幹事養成学校入学の為渡英

1928 年 11 月に帰国

1935 年 4 月会員教育幹事に異動

1939 年退職、大阪 YWCA 総幹事に就任

②渡邊マツ子：1926 年日本女子大社会事業学部女工保全科を卒業し就職

1935 年－1936 年米国 YWCA 有職婦人事業視察及び研究、帰国後研究部担当

1944 年総幹事就任

③ミス・ルー・リン：1926 年 11 月米国より有職婦人部主任として来日

1929 年 6 月辞任後帰国

安斎は商工部(後に有職婦人部と改名)設立の幹事として、職業婦人のクラブを組織し、夏期休養所や実学的クラス(夜学部)の開設など事業を推進した。留学後は労働婦人のための専任幹事としての役割を担い、「工場世話係講習会」や白山御殿町地区事業(第 5 章)

などを推進した。その後は他部門へ異動し、20年の勤続の後、大阪YWCAの総幹事として赴任している。東京YWCA退職時の記事には「在職20年、労働婦人・有職婦人に対し働きかけ、有職婦人部や保田休養所の基礎を固め、白山御殿町に地区事業を営み、30年記念事業『母子ホーム』に尽くされた。謡曲、演劇に興味豊かで度々隠し芸として発表され同氏への親しみを増すものであった」との記事が掲載されている<sup>18</sup>。

渡邊は日本女子大社会事業学部二回生として女工保全科に1922年に入学、同期生には谷野せつ（婦人少年局長1955年）がいる。渡邊は「私は職業婦人の仕事で、ニューヨークYWCAの職業婦人担当のベテラン　ミス・リンの指導の下で働いた」が、そこには「新しい会館に相応しい内容をもるために、各方面の専門家数名が米国から招聘され担当の事業を進め(略)若い職員を一对一で訓練することも含まれていた<sup>19</sup>」と記している。

ミス・リンは、商工部を有職婦人部に改称した1926年に、主任としてアメリカYWCAから派遣された幹事である。先に記したように、ニューヨークYWCAでの職業婦人担当者としての経験を基に、東京YWCA有職婦人部確立のための働きをした。彼女は日本語を余り理解できなかったが、温和で謙虚でにこやかに働く姿は、若いクラブ員の心に沁み、国境を越えた親しい心持が養われていった<sup>20</sup>との記事が掲載されている。

以上の例にみられるように、高学歴であり研修を重ねていた幹事に担当された女子青年たちには、幹事たちの姿はどのように映っていたのだろうか。東京YWCA90周年記念委員会『会員が綴る九十年』（1995年）より何人かの記述を抜粋しておこう。

「先生をリーダーと呼び、和服姿の素敵な丹羽先生と颯爽とたのもしげなミス・ロー・・・かつて経験したことのない自主的でチャーミングな活動に夢中」（1929年頃 坂本松江）。

「先生はアメリカ帰りでとてもモダンでいつもにこにこしていらっしゃいましたが、授業の時はバシバシと名指しで質問・・・立たされたことも」（1934年頃 佐藤照）。

「『レク』ってなあに？『ディス』ってなあに？・・・ディスになると大変だ。司会者を交替で決め、各自が主題に沿った意見を述べるのだが、・・・意見を持つ事を要求されたのは初めてという人も多いのだから、司会に当たった時の大変さ・・・戦争が始まるまでの学院は華やかで活気に溢れていた」（1935年頃 中村統子）<sup>21</sup>。

そこには幹事に対する「憧憬」と「信頼」があったのではないだろうか。東京 YWCA に集う女子青年にとって、幹事は未知なる世界を知る憧れのリーダーであり、又厳しいリーダーであった。そして期待感や緊張感を持って接した人たちであっただろう。上記『綴り』には、東京 YWCA での学びや経験を後の生活の一つの指針にしていることが多く綴られている。それは幹事と共に過ごした東京 YWCA 時代への肯定感であり、リーダーとしての幹事への信頼と自分もそうありたいと願う理想的ロールモデルとしての女性像が幹事たちの姿に見出していたからであろう。

第 1 節で見た『基督教女子青年会指導者讀本』に委員と幹事の関係述べた文書がある。委員とは会員の中から直接の会務に参与する「幹部委員」及び「各部委員」の事である。

委員はグループの代表者であり、代弁者であると言う点にその立場を定め、責任の範囲を明白ならしめる根拠を見出すべきである。又基督教女子青年会の存在する周囲の社会の宗教的経済的な事情や社会的傾向或ひはその社会の持つ特殊な風習などに対して十分な知識をもち、その要求を知る識見がなければならない。そしてその社会なり、グループなりとの直接の接触によって得た知識を専門家である幹事に伝えて、幹事をしてその専門家としての技能をもつて最も有効に社会やグループの成長を援け、要求を充させるやう援助しなければならない。一方幹事は委員との協力によって得た知識をもとにしてその社会やグループの状態、要求、関心を解剖し、研究し、検討して、それを如何なる方法で会の目的実現と結び合はして行くべきかを考慮し、種々方法を考へて、それを実行に移していくべきである<sup>22</sup>。

この『指導者讀本』には、委員と幹事は会の目的実現のためにどのように働き合うかの原則が述べられている。理想としての文言ではあるが、それぞれの立場にたち相互に影響し合うことによって個々の成長が図られていくという構造が存在している。

## 小 括

1920 年後半から 30 年代は、大正リベラリズムの空気感を残しつつ 1940 年代へと向かう

時代であった。幹事たちは教育環境に恵まれた中産階級として育った一群の女性たちであった。前述の通り幹事は「委員会で立案及決議された諸事業の実行にあつてその専門的技能を持ち得る」「有給の専門家」としてプロフェッショナルな意識を持ち誇りを持って仕事にあたった人々である。彼女たちの多くは、キリスト教主義またはその影響を受けた私立女子専門学校を卒業し、職業人としてキリスト教的な理想を掲げて女子青年の教育に携わったのである。幹事にはアメリカの幹事養成校への派遣を始めとする各種の研修の機会があり、そのための奨学金も準備されていた。国内外で実施された幹事としての研修は、キリスト教理解を基本に専門家としての力量を高めるものであった。専門家としての質の向上を支える基礎には、女子青年教育における国際的な情報と、グループワークなどの新しい教育方法を学ぶ機会が備わっていた。東京 YWCA で取り組まれた女子青年の教育は、限られた人数ながら「自由」や「平等」、「個人の責任」という新しい市民としての教育を受けた女子青年を着実に増やし、リベラリズム（自由主義）やデモクラシー（民主主義）という近代思想が流れ込む細い一本の水路を形成していたと言えよう。この水路に常に水を流し続けたのが幹事であり、その水路こそが養成の仕組みそのものであった。

---

<sup>1</sup> 基督教女子青年会日本同盟『基督教女子青年会指導者読本』基督教女子青年会日本同盟、1937 年、pp. 16-17。

<sup>2</sup> 第 2 章参照のこと。

<sup>3</sup> 前掲 樽松・影山、『解説』p. 13、p. 16。

<sup>4</sup> 佐々木啓子「伝統的規模から脱却した新中間層の女性たち-戦前期日本における女子高等教育拡大のメカニズム」、香川せつ子/河村貞枝編『女性と高等教育-機会拡張と社会的相克』昭和堂、2008 年、p. 216。

<sup>5</sup> 同上、pp. 205-206。

「キリスト教系ミッションスクールは（略）わが国の学校制度上では、英語科中等教員無試験検定許可学校として、女子の英語教育に一定の役割を担い、確実に日本の学校教育体系上に位置付けられる」pp. 205-206。

「日本女子大学校創設者成瀬仁蔵がモデルにしウェルズリー・カレッジ（略）津田梅子が学んだプリンマー・カレッジ（略）ともに米国を代表するリベラル・アーツ型の女子大学」p. 206。

「こうした女子専門学校は、東京・奈良の女子高等師範学校のような厳格さはなく、比較的自由的な雰囲気があった」p. 206。

<sup>6</sup> 外務省通商局『自大正 8 年至る昭和 3 年海外渡航給在留者邦人統計』第 4 表渡航目的別本邦人海外渡航者員数年表（其 2）。

<sup>7</sup> 前掲 『解説』p. 12、p. 14、p. 17。

<sup>8</sup> ニューヨーク YWCA 幹事養成科や養成学校、米国 YWCA 幹事養成校などとして日本 YWCA

---

の年史には記されている。NANCY BOYD, *EMISSARIES The overseas work of THE AMERICAN YWCA 1895-1970*. THE WOMAN 's PRESS, NEW YORK, 1986, pp.23-27, には、THE NATIONAL TRAINING SCHOOL と明示されて、以下のように記されている。

将来の幹事の養成の為、2つの短期間の学校があった。The International Association School(1895-1896)とThe Institute at Chicago(1904-1906)である。その後1907年アメリカYWCAは、22才～35才までのYWCA幹事養成受講者の募集を行なった。その条件は、プロテスタント福音主義教会員、カレッジ卒業生、卒業後のビジネス及びその他での就業経験者、理想としてはYWCA経験のある者というものであった。養成の中身は、農村部、産業部門、外国学部及び学生部門の幹事の為のコース(1年間)とreligious work directors(宗教部幹事)の2年コースであった。また幹事候補者に限らず、留学生やボランティアなども受け入れた。1908年N.YのタウンハウスNO.3で、10人の若い海外からの学生やボランティアの女性たちに向けた養成学校が始まった(中本訳)。

<sup>9</sup> 塩野幸子編著『カフマン讃歌—エマ・R・カフマンに捧げる—』付録「エマ・R・カフマン年譜—歴史と業績」東京YWCA80周年記念行事委員会、1985年、p.1、p.6。

<sup>10</sup> 同上、付録「エマ・R・カフマン年表—歴史と業績」p.5。

<sup>11</sup> 日本YWCA機関誌『女子青年界』第19巻2号、1992年2月。

<sup>12</sup> 同上、第19巻1号、1992年1月、p.49。

<sup>13</sup> 同上。

<sup>14</sup> 同上、第22巻10号、1925年10月。

<sup>15</sup> 同上、第22巻7号、1925年7月。

<sup>16</sup> 前掲、『地の塩』第38号、1931年2月、pp.4-5。

<sup>17</sup> 同上、第31号、1930年5月。

<sup>18</sup> 同上、第113号、1939年3月。

<sup>19</sup> めじろ路出版実行委員会『めじろ路 - 日本女子大社会事業学部卒業生のあゆみ』日本女子大学社会福祉学科の会みどり会、1978年、p.28。

<sup>20</sup> 前掲『地の塩』第24号、1929年7月、「御別れする日」参照。

<sup>21</sup> 東京YWCA90周年記念委員会『会員が綴る九十年』東京YWCA、1995年、p.19、pp.35-38。

<sup>22</sup> 前掲『基督教女子青年会指導者読本』pp.47-48。

## 第7章 処女会・女子青年団とYWCAの比較研究

戦前期の女子青年教育を代表する女子青年団体としては、処女会・女子青年団が挙げられる。日本の農山漁村では、義務教育終了後から結婚までの間、若い娘たちは各地域の処女会・女子青年団に組織されていた。その規模は、後述する内務省社会局社会部『男女青年団体事績一斑』調査では、団体数14,008、正団員数1,393,390人（1926.7.1現在）と記されている。一方、同時代、都市における女子青年を組織したYWCAは、1925年の第1回全国総会時には、5ローカルYWCA、28学校YWCAがあり、会員数は6,000名、専任幹事は日本人45名外国人19名という規模であった<sup>1</sup>。同時代に共に女子青年教育に取り組む組織としては、この二団体が存在する。しかし、この二つの女子青年会（団）は成立の背景、その規模など大きく異なる組織であった。本章では、この二団体を比較検討することを通して、YWCAの女子青年教育の特徴を明らかにしたいと考えている。

### 第1節 処女会・女子青年団の概要

1928年、内務省社会局社会部は、「青年団の施設は、近時著しき発達を見たるも、未だ之が集録の備はれるものあるを見ず。（略）将来各青年団体事業の参考に資せんことを目的とする」として『男女青年団体事績一斑』を、各道府県の報告による優良団体の記述を基に作成した。そこでは女子青年団体の概況について以下のように記されていた。

女子青年団体の沿革を理解するには、前提として婦人団体について述べなくてはならない。日本の婦人団体は、明治中期以後に成立したが、それ以前にはほとんど集団らしいものはなかった。明治維新後、婦人教育の前進と、女性の地位の向上や活動範囲の拡大は、「篤志婦人」や「先覚婦人」を輩出し、婦人たちが「時代に目覚め、乃ち同気相集まり、同好相率ゐて、団体的活動を試みる」などの変化をもたらした。こうして、明治の中期頃から宗教、教育、慈善、矯風、家事、娯楽などを目的とする各種の集団が、都市部を中心に各地に組織され、次第にその活動が盛んになってきた。それらの団体で著名なものは、「明治二十年前後の創立に関わる日本婦人矯風会、大日本婦人教育会、日本赤十字社篤志看護婦会」が挙げられている。その後程なくして生じた日清・日露戦争に対して、「国民の

義勇心は燃え、敵愾心は昂まり、婦人としても亦晏居するを許さず」、地域や年齢を超えて、婦人は声を掛け合い「出征兵士の送迎」、「家族遺族の慰問」、「恤兵金品の募集」、「帰還負傷兵の看護」など、男子青年団にも劣らない活動を展開した。こうした状況は、婦人が集団として動く機会を増やし、各種の婦人会がさまざまな場所で創立されることになったといわれている。そうした団体の中には青年女子を含むものもあった。その後「時勢は益々進歩し」「国力の充実、社会の改善兩つながら女子の力に俟つべきもの多き」ことから、「婦人の覚醒を促し、智徳の涵養を図る」必要に迫られ、その為には先ず「前途多望なる青年女子」に対して、「合同の修養を奨め、団体的の活動を促す」ことが最も「妥当且つ捷徑なり」と認識され、各地に女子青年団が設立されることになったといわれている。こうした背景には、男子青年団活動がさかんとなり、その「真価を発揮しつつある」ことに女子青年は刺激され、女子といえども「其の団結に依って必ずや実績を挙げ得べきの確信」を持つに至ったことも、女子青年団体発達の動機となったと記されている。

この様にして、「有志の主唱」、「同志の糾合」、「既設婦人会の一部事業」、「小学校同窓会の模様替え」などによる、女子団体の創立が各地に相次ぎ、大正中期には全国各地に普く存在するようになったといわれている。それらの多くは、「処女会」と称し、綱領を定め、事業、行事を通して、「婦徳の修養、技能の修練、常識の涵養、趣味の向上」に努めた。ただその体制は様々で、青年団を男子部と女子部に、婦人会を主婦部と処女部に区分したものや、婦人会の付属として設けたもの、実業補習学校と異身同体のものなど一様ではなかった。また、団員についても、義務教育修了後結婚までの女子のみで組織するものが最も多いが、未婚者既婚者を問わず、20歳、25歳と年齢で限るものもあり一様ではなかった。こうした状況の中、地方の「連絡統一機関」として連合女子青年団が各府県に設立され、地方行政と共に「誘導奨励」されていた。1918年には、「有志の主唱」に依って処女会中央部が創立され、全国的な連絡提携と「指導誘掖が図られ」ることとなった。このようにして、各地方とも「一村一郷を感化して、婦人に自覚を与え、自励を促し、趣味、情操を養ひ、虚体虚飾を矯め、勤儉貯蓄の風を起こす」など、男子青年団が「外面的成果」を現すとするならば女子青年団は「専ら内面的の成績を挙げ、その真価を示し」つつあると評価されていた<sup>2</sup>。

また、政府も女子青年団体の普及振興の必要性を痛感し、1926年、内務、文部両大臣の連署による訓令「女子青年団体の指導誘掖に関する件」により、女子青年団に対し初めての政府の意向を公示し、同時に社会局長官、文部次官連名の通牒「女子青年団体に関する



件」を各地方長官宛に発した。翌 1927 年には大日本連合女子青年団の成立が告げられ発団式が執り行われた。それに伴い処女会中央部は解散し、「府県連合団体を的確に連絡し、統制的体系を具ふ権威ある団体」として大日本連合女子青年団が組織されたのである。こうした動きの動機として男子青年団と同様に、「皇室の御奨励」として御大婚満 25 年祝典の折の男女青年団体御奨励による「多額の御内帑金」を下賜されたことが挙げられている。1926 年 7 月 1 日現在の調査では、団体総数 14,008、正団員総数 1,393,390 人に至っている。

以上処女会・女子青年団設立の概要を内務省の視点で見てきた。

処女会・女子青年団は、日本の近代化の振興の中で、機会を得た女性たちの社会的進出から始まり、その動きに刺激を受け同調する女性たちによって社会的活動が組織的になる過程で、青年期女子の存在が認識され、男子青年団を規範に政府の意向の下に組織設置された団体であると言える。そこでは国家が願う公民としての育成が事業として展開されていた。

青年期女子を組織した YWCA と処女会・女子青年団は、どちらも女子青年の修養を要に事業を展開している。日本を網羅した国家事業としての女子青年団と西洋キリスト教を基とする一女性団体である YWCA とは、その組織運営に大きな違いがあることは明白である。しかし、女子青年という共通項から、類似した事業目的や方法が取られている部分も多くある。同時代に女子青年活動を展開し、女子青年への働きかけを行った二団体そのものの比較研究は本論における主要目的ではないが、その時代を生きた青年期女子へ向け実施された社会教育事業の比較は、YWCA の実施した女子青年教育の特徴を示すと同時に、その時代の女子青年教育の実態を多面的に検証する一つの作業でもあると考える。

## 第2節 処女会・女子青年団と東京 YWCA の事業比較

処女会・女子青年団と東京 YWCA の 1921 年と 1928 年の実施事業を対比したのが表 7-1 である。

1921 年は、処女会中央部の設置と機関誌『処女の友』の創刊を終えた処女会が、組織の整備と事業の充実を図った時期であり、第 1 回全国処女会指導者講習会なども開催された年であった。一方、東京 YWCA は、創立以来試行錯誤を行ってきた、働く女子青年を対象と

した取り組みにおいて、休養所の設置や職業教育としての英語や商業タイプクラスの設置の他、職業婦人クラブの開始も見られ、事業が拡充を見せていた時期であったといえる。

1928 年は、その前年に処女会中央部の解散を受け「大日本連合女子青年団」の発足を見、一方、東京 YWCA は財団法人格を持ち、名実共に市部組織として独立した年であり、共に新たな歩みを始めた充実期であった。

ではそのような時代に、この二つの女子青年団体はどのような事業を行っていたのだろうか。組織形態が異なるため単純なる比較は出来かねるが、処女会・女子青年団会員は義務教育修了（14 歳）後から結婚までの青年期女子とされている。東京 YWCA 事業では、主に働く女子青年の関わる部分、即ち商工部と有職婦人部を中心に、他の部については 14・5 歳以上の未婚女性が関わった事業を比較検討の材料とした。

表 7-1 処女会・東京 YWCA 事業比較 (1921 年)

	処女会		東京YWCA
智的方面	講習会（裁縫・割烹・手芸・作法・育児・産業等）、講演会、文庫経営、図書雑誌の回覧、補習教育の実践、会報の発行	教育部	英語、商業英語、速記、タイプライター、体操、会話専修科、女子青年会文学会（学芸会）、英語社交会、受験準備、音楽部
娯楽方面	講話会、遠足会、見学旅行	家庭部	家族親睦会、料理実習会、料理の組、神田区内小学校教師の集会（米国食糧問題講演と晚餐会）、洋裁縫講習会（従来得難き方面の方々に接する機会を与えられしのみならず、有力なる会友を得）
体育方面	運動会	学生部	クラブ、聖書の組、日曜諸集会及学生親睦会、官立女学校生徒間にクラブ事業開始、親睦会、講演会、バスケットボール
徳育方面	吉凶慶弔慰問、善行者表彰、矯風事業、共同貯金、高齢者慰労会、小学児童就学督励援助、会員中結婚者の送別祝賀会の開催、謝恩会の開催	会員	月報発行（会員総数923名、職員内外人共総数30名）、バザー、音楽会、総会、有職婦人懇談会、クラブ指導者養成科開始（基督教と社会事業・女子青年会歴史及目的趣旨・女子青年心理・クラブ組織及方法）
公共事業方面	廃物利用の奨励、慈善事業の幫助、道路危険物の除去		
産業方面	模範田の試作、展覧会品評会の開催	商工部	クラブ（実務にある人々の間に創設され益々発展）、夏期休養所（好結果なり）、夜学部設置、夜間講習会開催、料理講習、ミシン講習、実務員会合
		施設他	寄宿舍、旅行者の友、王子巡回産婆、会館貸与、簡易食堂

（内務省社会局『全国処女会・婦人会の概況』（1921 年）実施しつつある事業、日本基督教女子青年会第 18 巻 1 号『女子青年界』（1921. 11）「東京女子青年会事業概要」及び第 17 巻 4 号～10 号市部報告掲載記事より作成）

1921 年処女会中央部は第 1 回全国処女会指導者講習会を、東京女子高等師範学校を会場に、1 府県 5 人平均(内 1 人男子)の参加者を予定して実施している。

表 7-2 はその領域と講演タイトル及び講師について一覧にしてみたものである。

表 7-2 第 1 回全国処女会指導者講習会(1921 年) 講演タイトル及び講師

指導項目	講演タイトル	講師	肩書等
処女会組織運営	「処女会につきて」	大野祿一郎	評議員 内務書記官処女会中央部理事
	「処女会指導の要諦」	天野藤男	評議員 文部省嘱託
	「処女会の幹部養成」	山本龍之助	
処女会基本事業	「処女会と補習教育」	乗杉嘉壽	評議員文部省事務官理事 三輪田高等女学校長
	「処女と修養」	三輪田元道	
婦人問題関連	「婦人問題概観」	宮田修	理事 成女女学校長
	「家族制度に就きて」	井上哲次郎	文学博士
	「頽廢思想を戒む」	湯原元一	評議員 東京女子高等師範学校長
		国府種徳	理事 内閣宮内省兼内務省嘱託
	「欧州婦人の節制状況」		
生活改善	「処女と生活改善」	嘉悦孝子	理事 日本女子商業学校長理事 東京女子医学専門学校長
	「婦人の衛生」	吉岡弥生	理事 東京女子高等師範学校教授
			評議員 医学博士
	「衣食住の整理及改善」	甫守ふみ	医学博士
	「性と結婚」	永井潜	
	「食物と健康」	仁木謙三	
	「家政経済整理」	大原信久	
	「処女整容法」	山本久栄	
その他	「視察見学」「実験談」		
	「宮城、宮城内御養蚕室、新宿御苑拝観」		

(処女会中央部機関誌『処女の友』大正 10 年 6 月号及び大正 10 年 11 月号(第 4 巻 11 号)記事より作成。指導項目による仕分けは中本による。)

ここでの講習項目を筆者なりにまとめてみると、①処女会の組織経営(処女会につきて・処女会指導の要諦・処女会の幹部養成)に関わる項目の他、②処女会基本事業(処女会と補習教育・処女と修養)、③婦人問題(婦人問題概観・欧州婦人の節制状況・家族制度に就きて・退廃思想を戒む)、④生活改善(処女と生活改善・婦人の衛生・衣食住の整理及改善・性と結婚・食物と健康・家政経済整理・処女整容法)というものであった。上記の実施しつつある事業一覧を見ると、この時点での実施事業としての種類は少ないが、指導者講習会で取り上げられた項目との継続性が見て取れ、処女会事業の現状と今後に向けての講習内容であったことが理解できる。処女会事業の目的的事業とも言える補習教育と修養に関連する事業は、智的・徳育・公共事業方面の実施事業としてあり、社会に存在する女性としての認識を培う婦人問題については、講演や図書の中に位置しているが具体的なプログラムまでには至っていない。また娯楽や体育方面の事業によって、処女会員の親睦を深め、集団を組織し運営する基礎的な集団づくりが始まっていることが判る。こうしてみると、

この時期の処女会では、実学としての講習会、教養学習といえる講演会、基礎学力としての補習教育が進められ、図書雑誌の回覧も含め、「学ぶ」機会が多く時間を占め、修養とも関連する奉仕や他者を思いやる活動が、身近な場面で取り組まれていたといえる。

一方、東京 YWCA での実施事業を見ると、学生部、教育部の事業において、女子青年への職業教育としての商業英語、タイプ実技などのクラスが開かれ、働く女子青年たちには商工部でのクラブが発足し、グループ活動が開始され盛んになったことが記されている。また新たに夜学や夜間講習会なども開始され、働く女子青年への事業が広がりつつあることが見えてくる。また、クラスやクラブの合間には、YWCA の行事や会合、イベントなども僅かながらあり、そうした機会を通して YWCA メンバー意識の育成が図られている。

次に、表 7-3 を元に 1928 年度の事業一覧を見てみよう。

1928 年の事業一覧を見ると、両団体ともその事業が充実期を迎えていたことが理解できる。女子青年団においては、各方面とも実施事業の種類が増え、各地での様々な取り組みや工夫が見て取れる。特に徳育、公共事業、産業方面での事業が拡大している。生活改善的な事業の視点で見ると、1921 年次には「廃棄物利用」「危険物除去」「共同貯金」程度であったものが、1928 年には、「風紀矯正」「禁酒」「綿服着用」「盆踊改善」「規約貯金」「一日一善」「家計簿記入」「予算生活」「化粧廃止」「指輪廃止」「時間尊重」「儉約奨励」「信用購買販売」「服装改良」「虚礼廃止」「除雪」「迷信打破」「陽暦励行」「簡易保険加入」「方言矯正」など多面的に取り組まれ、生活改善の要素である経済面についても、「副業の研究」に示されるように、「共同養蚕」「共同養鶏」「共同養魚」「家庭菜園」「機織」など具体的な領域が設定されたほか、品評会や展示会、農場視察など、より積極的な活動が実施されている。このように見ていくと、学習と修養という処女会・女子青年団の目的は、彼女たちの日常生活そのものの中にある課題を解決するために実施され、成果が積み重ねられていたと言えよう。

一方の東京 YWCA では、「駿河台女学校」が許可され学校組織が確立し教養教育、実技教育、自治教育が、各科で実施されていた。

表 7-3 女子青年団・東京 YWCA 事業一覧 (1928 年)

	女子青年団の一般施設事項		東京YWCA
智的方面	補習教育、講演講話会、巡回文庫、図書館、団報発行、見学旅行、学芸会、成績品展覧会、研究会、通信教授、修養会、総会、月次会、懇談会、手牒教育、雑誌回読、読書会、講習会（家事経済・作法・料理・造花・裁縫・点茶・絞染・打紐・刺繍・下駄緒・養蚕・編物・育児・台所整理改良・廃物利用・洗濯・髪結・マッサージ・看護法等）	教育部	商業科（欧文タイプライティング科・英文速記科・商業英語科・事務実習科）英語科（高等科・普通科[昼/夜]・会話専修科・リーディング科・個人教授科）文芸会（英語劇）、朝日新聞社英語大会参加、音楽科（ピアノの組・コーラス[英語/日本語の組]クラブ商業科（欧文タイプライティング科・英文速記科・商業英語科・事務実習科）
娯楽方面	音楽会、活動写真会、談話会、慰安会、俳句会、歌会、茶話会、試食会、盆踊、雛祭、茶湯、生花、娯楽会、カルタ会、針供養、園芸、栗拾、観桜会、茸狩、福引、蓄音機、活人画、羽子	家庭部	西洋料理科、洋裁縫科、生花科、講習会（西洋料理・地方料理・アイスクリーム/シャーベット・支那料理）、衛生週間（小児の衣食に就いて出品）、ベビーデー（「小児の衛生に就いて」・赤ん坊の入浴実習・活動写真「歯の衛生に就いて」）、親睦会、送別会、歓迎会、玉姫託児所園児のクリスマス会
徳育方面	三大節拝賀式、詔書俸読式、敬老会、敬神崇佛思想涵養、祖霊礼拝、優良団体表彰、風紀矯正、禁酒、吉凶慶弔、病氣見舞、小学児童出席督励、綿服着用、修養袋配布、記念日設定、寺社参拝、亡会員追弔、公德箱設置、児童保護、入営兵家族慰問、児童保護、盆踊改善、規約貯金、一日一善、謝恩会、法話聴聞、家計簿記入、予算生活、風雪日学童手引、追悼会、結婚者見送、化粧廃止、指輪廃止、入営者家庭手伝、軍隊慰問、国旗掲揚励行宣伝	会員部	会館建築募金運動、会員追悼会、中日会員交誼会、運動会、母と子の会、聖書の組、最寄会 ＜宗教教育方面＞聖書研究会（会員・職員・学生及少女・有職婦人・教育部生徒・寄宿舎々生）、礼拝（少女礼拝・復活節早天礼拝・讚美礼拝・クリスマス礼拝等）、日曜集会（俸悼式・会員追悼式・修養会及キャンプ思へ出会等）、伝道週（各部、各クラブの集会・宗教画及基督教書類陳列展覧・宗教音楽会・伝道集会）、修養会（夏期修養会[専門学生部・高等女学部・一般部]・短期修養会・祈祷会）
公共事業方面	掲示板設置、指道標設置、消防訓練、時の宣伝、時間尊重、勤儉奨励、生活改善運動、社寺並墓地清掃、看護法練習、街燈設置、雨傘提灯貸与、義捐金募集、入退営者送迎、休憩所設置、信用購買販売、慈善事業、服装改良奨励、バザー開催、火防並衛生思想宣伝、道路清掃、虚礼廃止運動、危険物除去、罹災民救護、窮民救恤、除雪、花の日会、迷信打破、陽曆励行、簡易保険加入奨励、社会奉仕デー、身上相談、方言矯正		
体育方面	運動会、遠足、旅行、登山、庭球、卓球、水泳、体操、耐暑耐寒練習、体育講習会、早起会、ボール遊戯、海水浴、身体検査	体育部	講習会（フォークダンス、遊戯、ガールスルールのバスケットボール）、組（デンマーク式体操、遊戯、エッセティックダンス）総練習、文芸会（ダンス劇）、身体検査、衛生週間、女医懇談会
産業方面	農場及工場視察、共同試作、副業研究及奨励、物産品評会、手芸品展覧会、害虫駆除、農談会、共同養蚕、共同養鶏、操業競技会、家庭農園、苗圃手入、機織、除草、共同養魚	有職婦人部	クラブ、クラブ連合連合集会（聖書研究、社会問題研究：ガレット恒子「社会問題概論—公娼問題・婦人運動・婦人と職業婦人」、原戊吉（都新聞）「政界漫談—政治事情・政党の政綱主張」、他「社会と個人との関係」）、クラブ連合会（入会式、親睦会、日本事情紹介品製作、衛生週間、修養会の為の資金作り、クリスマスパーティー、女工クリスマス祝会、加盟式、お料理の組、編物の組、コーラスの組）、保田キャンプ
		施設他	＜会館部＞会館貸与、食堂、人事相談　＜その他＞学生及少女部(クラブ、クラブ連合、講演会、送別会、懇談会、関東連合集会)翠香寮・安藤坂寄宿舎・国領「憩の家」

（女子青年団（内務省社会局『男女青年団体事績一斑』（1928年）「女子青年団体の一般施設事項」）と東京YWCA機関紙 第12号『地の塩』（1928年）及び第13号記事より作成）

働く女子青年を組織した有職婦人部は、クラブ事業を拡大し連合体での活動を増やし、社会へ目を向けさせるための「社会問題研究」事業などを実施していた。また、新会館建築のために、全会挙げての募金活動が展開され、クラブ員は会員としての自覚を促がされ、外へ向け動き出す積極性を培うことも求められた。YWCA 創立の翌年から女学生に向けて実施されていた「修養会」が、1924年には職業婦人に対して実施され、その翌年は家庭婦人へと拡がり、この時期には、広く一般婦人対象の事業として実施されている。学校の確立、有職婦人部の拡大は東京YWCAに関わる女子青年数の増加をもたらし、全会で実施された修養会は、YWCA全体を精神的にまとめ意識の向上をもたらす、そうした力が新会館建築募金の実施を支える力として働いたと考えられる。広く展開された募金活動は、YWCAを社会的な存在として認知される効果を挙げていたのではないかと考えられる。

以上、1920年代の初期と終盤に実施された各々の事業について見てきたが、その事業から見える二つの女子青年会（団）の共通点と相違点は如何なるものであったのかを、以下の3点で整理しておきたい。

#### ① 新しい知識を得るための学習

- └ 処女会・女子青年団—補習的学習、教養、生活改善（日本的傾向）
- └ YWCA—進学・職業のための学習、教養、生活改善（西洋的傾向）

両団体は、それまで女子青年には実施されなかった新しい知識を得る教育の機会をつくっている。処女会・女子青年団には、学校教育の補習機関としての機能が掲げられている。それと共に、教養的な講演講話会や読書会など、また生活改善に向けた家事経済の話や養蚕、看護法などの講習会を実施していた。YWCAでは、上級学校進学のための英語や、就職時また就職後の技能習得のための欧文タイプや速記のクラスが実施されていた。また教養的なものとしては、ピアノ、コーラスや講演会、生活改善としては、西洋料理や洋裁、衛生に関する学習などが実施されていた。教養や生活改善に関する学習内容には、それぞれ日本的な科目と西洋的な科目といった二団体の特徴に起因する違いはあるが、大枠として

の共通性がある。しかし、基礎学習補完のための補習学習と、進学や職業に就くための補強的な学習とには、大きな隔たりがあるといえる。処女会・女子青年団における補習的学習は、国家的教育政策としての意味を持つ学習の制度であったといえる。一方、YWCA の進学・就職のための学習は時代の風潮とも相俟って、一個人がその必要性から始める学習で行政的な関与からは外れたところに位置する。こうした学習を享受したのは、その必要性の認識と経済的な条件を持つ限られた人々であったともいえる。

## ② 地域社会とのかかわりと精神的成長

処女会・女子青年団—地域（家・村・地域）への奉仕、敬神崇佛教育  
YWCA—社会奉仕、キリスト教教育

両団体は、社会に仕えることを通して、女子青年の精神的な成長を培うことを目指している。処女会・女子青年団では徳育方面の事業としてまとめられ、道徳心や情操豊かな人間性を養うことが目指されている。YWCA では宗教教育方面にまとめられるが、聖書の学びや奉仕活動を通しての、人格形成や人間的成長が謳われている。宗教の違いはあるが共に宗教的な思想を基盤に、社会や地域また人への奉仕を通して精神的成長を目指している。処女会・女子青年団の奉仕の対象は、家・村・地域、最終的には国家へと広がる。即ち自分の属する社会への奉仕である。それは、女子青年が暮らす社会は家族主義的社会であり、その中で生活が営まれ歴史が形成されていることに由来している。一方、YWCA は貧しい者、弱い者といった広く社会一般に存在する個人への奉仕であるといえよう。単なる他者なのか同族の中の他者なのかの違いは、個の生活とかかわる社会をどの範疇で認識しているかという世界観の違いを示しているといえる。

## ③ 働くということ

処女会・女子青年団—第1次産業（家業）、無給労働者  
YWCA—第2次・第3次産業、給与労働者

両団体は対象者が青年期女子であることにより、共に労働に関わる学びの機会を提供している。学びを通して彼女たちの労働環境が整えられ、労働の質の向上が図られる。処女会・女子青年団員にとっての労働とは、第1次産業である農林漁業に従事する家の仕事を



手伝うということで成立する労働である。またこの時代においては、家業を手伝う女子青年に給与という概念はない。YWCA メンバーにとっての労働は、都市における会社や工場、商店など第2次第3次産業へ勤務する労働であり、その報酬は給与として個々人に支払われる。両団体の女子青年は、共に家のため、また自らのために働いているが、家として受け取る報酬なのか、個として受け取る報酬であるのかの違いがある。こうした経済的な環境の違いは、両団体が掲げる女子青年の自立像の違いを生み出していると考えられる。

### 第3節 処女会・女子青年団の修養とYWCAの修養

処女会・女子青年団は、「女子青年団体に関する訓令」（1926年）に記述されるように「女子青年の修養機関」として、智的、徳育、公共事業、体育、産業、娯楽の各方面からの事業を通し目的を実行した団体である。事業の種類や数はその時代により異なるが、そこに示された各事業は、自らの生活を見直しより良い生活を展望し、地域社会を中心とした社会活動を展開するものであった。こうした事業を通じ、処女会・女子青年団の女子青年は修養され、国や地域、また女子青年自身が求める成人女性像に近づこうとしていた。

これに対して、YWCAでは創立前年に発行された機関誌『明治の女子』開書（テリーザ・イー・モリソン）に以下のような記述がある。

此の会の理想とする所如何と申すに、妙齡婦人をして発達し得る頂点まで各方面に発達せしめ、身体、社交、智力、靈性等生命の各部分に調度を全うし活動を盛んならしむるに之れ有り。(略) 靈性発達の必要を認むる事深く且つ切なるにあるべく候。体育智育を勉め又社交の娯楽を求むるの間に於いて、自己の本性即ち靈魂の修養すべきを忘れざる事に之れ有り候<sup>3</sup>。

ここに端的に示されるように、キリスト教による心・体・靈の自己修養・自己確立というYWCAの目指す特質<sup>4</sup>を現わす事業として、各部による事業が展開されていた。学校や社会教育場面での学び、クラブやYWCA活動が持つ集团的自治活動、社会への各種の奉仕活動などが、欧米YWCAの支援や協力を背景に実施され、YWCAが理想とした女性像に向けた事

業を展開していた。

二つの女子青年団体は、それぞれの目的を持ち、それぞれの環境や状況に見合った方法で事業を展開した。処女会・女子青年団は智的、徳育、公共事業、体育、産業、娯楽の各方面に、YWCA は各部において、身体、社交、智力、霊性、体育、智育、社交の娯楽などのプログラムが展開されている。同時代、共に女子青年を対象とした二つの女子青年団体は、共通する領域で事業を展開している。具体的に実施されたプログラムの種類や表現方法の違いは、儒教的価値観に支えられる日本文化とキリスト教的価値観による西洋文化、農村と都市、公共事業とチャリティといった文化や生活環境からくる違いと見ることもできよう。では、二つの女子青年団体の根底にある修養とは、両者の目指す人格形成、自己形成においては、どのように見えてくるのであろうか。

「修養」を現代の辞書で引くと、「精神を練磨し、高度の人格を形成するようにつとめること<sup>5</sup>」と表示される。研究者によるものとしては、野間教育研究所編『人間形成と修養に関する総合的研究』における、上野浩道による以下の定義がある。

主に学校教育以外の場で、個々人が生きていくうえで、自発的に自分の精神と身体を律して他者とつながりながら自分を高め成長させていく力を身につけ、自由で個性に沿った人間形成をはかるもの<sup>6</sup>。

無体系で、自由な体系をもって人間形成をはかるという点が様々な修養の思想や行為において共通していた。そして、個々人が自発的にしつけや道徳を自らのシステムとして内面化し、自己形成をはかって行くところにその特徴がある<sup>7</sup>。

また、同研究史では田嶋一によって社会史としての「修養」がまとめられている<sup>8</sup>。田嶋によると、中村正直によって翻訳された「修養」と云う用語<sup>9</sup>は、日本社会の近世から近代への転換期に出現し、自発的・自立(律)的に自己形成に立ち向かおうとしていた人びとの多様な意識のあり方を反映し、時代とともに深化、変容しつつ、日本社会の自己教育・自己形成をめぐる極めて重要な用語・概念に成長したと記るされ、近代的概念として成立した青年期の「自己形成上のキーワード」として、新しく登場してきた一群の青年たちに受け継がれたと述べられている<sup>10</sup>。「修養」は明治半ばから、「精神の修養」「人格の向上」などの言葉で説明されるようになり、明治中期からは日本の伝統文化への回帰志向が強まり、禅や『論語』に基づく文化を手掛かりに修養論を立ち上げる人も現れた。明治末から

大正期、中・老年期を迎えたメンター（指導者）は、自分たちの世代の青年像をモデルに、日清・日露戦争後の社会に生きる青年に自己形成のための修養を説き始め、日露戦争後の勤労若年層への青年期の拡大と共に、修養論は修養（書）ブームを経て密教的、小乗的段階から顕教的、大乘的な段階へと移行したと田島は述べている。また田島は「修養」の発信者として、学者―新渡戸稲造、出版界―野間清治、社会教育―田澤義鋪を挙げている。

では、処女会・女子青年団とYWCAで重視された「修養」はどのようなものであったのだろうか。

#### 1. 「女子青年の修養機関」と言われた処女会・女子青年団における修養

処女会の父とも言われた天野藤男の『農村処女会の組織及指導』（1916年）に見る「修養」は、修練や教養など様々な意味を持って使用されている。天野は処女会を「修養兼娯楽、社交機関と定義を下したい<sup>11</sup>。」と述べているが、婦人は外出する機会が乏しく社交の機会も少なく、地域の仲間と集まる機会も乏しいので、多くの娘たちにとっては、「相当に着飾って打寛いで公会堂に集まるといふことが、既に慰藉であり、娯楽であり、又一種の修養である」と述べ、処女会は「会合談合せしむるを、一目的とするといふても差支えない」としている<sup>12</sup>。農村の娘たちの状況を熟知する天野は、「会合即ち事業」であり、修養でもあるのだとしている。ここでの天野の「修養」は、田島の「自発的・自立(律)的に自己形成に立ち向かう」初歩的な一歩として位置付けている。と同時に天野は、処女会は「修養の基点に立脚し、控え目に、従順に、真面目に、指導者の指揮に俟たねばならぬ」とし、「努めて青年団の陰に隠れて、婦人相応の仕事を担当するが宜しい」と述べている点から考えると、あくまでも内助の存在としての自発的・自立(律)的な自己形成を、処女会の「修養」と見なしていたと言えよう。

天野の後を受け文部省嘱託となった片岡重助は『新時代の処女会及び其の施設経営』（1926年）の中で、「修養の本義は自己の覚醒と自己の満足にある<sup>13</sup>」と言っている。「自己の満足」とは、「自己を見出し自己の価値を静に評定して、そこに向上を図り生存の意義を明確にせんが為に、全力を傾け尽くしたる効果を再び評定して自ら満足する」ことだと述べ、良妻や賢母は修養を積んだ処女の必然到達すべき道程なのであって、女性の修養は善良なる主婦を作る為ではなく、修養は「実に平凡なものであって生活其のものの充実である」と言い、天野の領域を拡大した考え方を示している<sup>14</sup>。天野の会合談合することが修養の第一歩であった時代から10年経過した処女会は、活動の幅を広げ良妻賢母に止まる

のではなく、「自己の覚醒と自己の満足」という生活そのものからの自己形成をはかって行く修養を目指していた。片岡は同書で、教育の機会均等や自由教育への提言を述べ、「婦人もなほ一個の自治民である」と言い、「処女をして自治民として及至国民としての教養を積ましむる事は喫緊の時務である」と述べているが、「男子は男子として女子は女子として等しく政治に参加するにしても形式を異にすべきものである」に示されるように、そこには、片岡の理想とする、これからの女性のあるべき姿として自治民、国民としての婦人が述べられてはいるが<sup>15</sup>、それは男女同等なる自治民、国民と言う訳ではなく、女性が一個の主体者として自己形成を成し遂げるということではない限界が存在している。渡邊はこうした流れを、「女子を『公民の妻』から『一個の自治民』『国民』へと新たに位置づけなおした点で、青年女子団体の基本的性格を転換させるものであった<sup>16</sup>」と述べているが、基本的性格を転換させつつも、女性は男性によって規定される存在と言う潮流は変わらずあったと言える。

## 2. 「修養会」に見る YWCA の修養

YWCA はキリストの教えである聖書に理念的基盤を置いており、聖書研究は YWCA 設立の動機であり目的でもある事業として実施されており、YWCA にとっての修養の基本は聖書研究だといえよう。日常のプログラムにおいても、聖書の組や聖書研究会が実施されているが、日本 YWCA が創立の翌年から開始した夏期修養会は、YWCA にとっては寄宿舍と共に伝統的な事業の一つで、象徴的な修養として位置付けられている。

日本 YWCA は設立時に、翌年の修養会開催を決めている。それは 1902 年米国 YWCA のシルヴァ・ベイでの修養会に参加した河井道子の経験から発せられたものだった<sup>17</sup>。

1902 年の夏、私はニューヨーク州ジョージ湖畔のシルヴァ・ベイで催された YWCA 協議会<sup>18</sup>に招かれた。そして何という新鮮な感銘や新しい経験や思想の大祭典に浴した事だろう！ここでこそ、あのヴァンクーヴァーに上陸したとき新渡戸博士が言われた協力というものが、実践されているところを、わたしはみたのであった。30 校ほどの大学からきている約 400 人の女子学生が、競争意識などなしに他の大学でやっていることを学んで自分自身の大学を改善しようと願う気持ちで、共に遊び共に祈っていた。(略) アメリカ中からこうして女子学生たちが、愛と相互扶助の精神をもって一緒に集まってきているのを見て、この精神を、どうか日本の女学生が持ってほしいと切に願ったのである。

(略) シルヴァ・ベイの経験は、アメリカのハイティーンの人たちの快活な楽しい娘時代のありようをのぞかせてくれた。日本の娘たちの人生からは、その年ごろは抜け落ちているのではなかろうか。なぜなら、わたしたちが 13,4 歳だった頃は、屈託がなく楽しかったけれども、それから私たちはひととびに大人になってしまうからである。私は日本の娘たちも、またこのようなリクリエーションと交わりと精神生活との楽しい経験が出来ればいいと心から願った<sup>19</sup>。

河井は、女子学生が共に学び、遊び、理解し、祈ることによって、競争ではなく協力によって課題を解決する場面を目の当たりにした。そこにはアメリカの快活な楽しい娘時代が存在し、日本の娘たちにも同様な機会をと願ったことが記されている。渡邊百合子<sup>20</sup>は夏期修養会開催 20 年を期して、「夏期修養会について」の記事を『女子青年界』に記している。その中で河井の懐奮談として「シルヴァ・ベイの修養会で諸所より集まった多くの若い女子が宗教問題、社会問題、国際問題に就いて真剣に考へて居るのを見て、日本の女子の間にも他日このような事の起るのを夢見ていた<sup>21</sup>」ことを紹介し、日本に派遣された幹事マクドナルドが「日本の青年会事業は一体どこから始むるべきか」の課題を河井と相談した折、河井はシルヴァ・ベイでの経験とそれに伴う希望を述べ、「修養会をして見やう」となったと修養会実施の経緯を記している<sup>22</sup>。日本の青年事業を始めるに当たり計画されたその修養会は当初「女子青年会夏期会合」と命名され告示された<sup>23</sup>。現在その名称については、日本 YWCA の年史上では「修養会」に統一され表示されているが<sup>24</sup>、第 1 回目が実際に会合と呼ばれたか否かは確認できていない。また、第 2 回目は「夏期学校」、第 3 回・第 4 回に付いては「講習会」とされ、第 5 回は不明、第 6 回から「修養会」と名付けられていることが機関誌で確認できている。名称上の変遷はあるが、その目的や意図は、「快活な楽しい娘時代のありよう」を「リクリエーションと交わりと精神生活との楽しい経験」から培おうとするものであった。なお、日本 YWCA 修養会開催一覧（1906 年～1942 年）を作成し、巻末に添付した。

修養会開始当初は学校 YWCA の女子学生を対象に開催され、1919 年（第 14 回）頃よりローカル YWCA に属する女子青年の参加へと広がり、1924 年（第 19 回）には、日本 YWCA 自前の施設（富士岡荘）が造られ、専門学校生の部、高等女学校生の部、一般婦人の部、有職婦人の部とその対象を広げた修養会が開催されていった。例えば第 26 回（1931 年）有職婦人、一般婦人の部で実施された修養会は以下の内容であった。

期間：1931 年 8 月 4 日～9 日（参加者 93 名、講師及び指導者 10 名）

事務会：会期中の心得及び事務規定などの打ち合わせ、

聖書と協議会の組み分け、各係選定など

協議会：加藤高子－「時事問題」、安齋とみえ－「結婚問題」、

木村ゆき子－「婦人と法律」、宮原きく子－「職業婦人問題」

講演：久布白落実－「禁酒問題、廃娼問題、平和問題他」

鈴木文治（労働総同盟）－「社会及労働問題」

座談会：「関西人と関東人との相違」、「職業婦人の服装問題」、「国営鉄道従業員の共済組合に就いて」などのテーマによる発表と意見交換

その他：礼拝、聖書研究、プール、運動、キャンプファイヤー、親睦会、娯楽指導、遠足、村の夕（今季は村の児童会）

全国有職婦人連合会総会

この会では、有職婦人と一般婦人という参加者に向け、結婚、職業、服装や共済組合など彼女たちの関心あるテーマと、時事問題や社会的テーマが取り上げられている。こうしたテーマを協議、座談する傍ら、プールや運動、親睦、レクリエーションなどが実施されている。これらプログラムの要には、毎日の礼拝や聖書研究がある。修養会開始にあたる事務会では、自治的運営についての打ち合わせがなされ、「快活な楽しい娘時代のありよう」を「レクリエーションと交わりと精神生活との楽しい経験」から培おうとした修養会の意図は、その内容をより具体的にしつつ継続実施されていた。

## 小 括

処女会・女子青年団と東京 YWCA の事業と修養についてみてきた。先行研究で矢口が指摘したように、「青年」という用語の持つ概念は一樣ではない。この時期の日本の「青年」の背景には軍事、教育両面からの国家的意図が見られたように、「女子青年」においてもその意図は共通のものであった。処女会・女子青年団と YWCA はそうした時代環境の中にあり、国家的事業である処女会・女子青年団はその道を推し進め、民間の一団体である YWCA は、

国家との距離がある故の自由さがこの時期には内在していた。処女会・女子青年団は農村の娘たちが集まり、共に学び語らうこと、行動することから事業が展開していた。そうした事業は智育、徳育、公共事業、体育、産業、娯楽の各分野で充実度を増し、女子青年の主体的な事業が展開された。一方 YWCA はキリスト教の教えや西洋文化に、また職業技術の習得に関心を持つ女子青年が集まり、それぞれの関心事に取り組む中で、クラブメンバーや YWCA 会員として、彼女たちの主体性が育成されていった。二つの女子青年会組織は共に女子青年の主体性を培うことにおいて共通性を持っている（類似している）。女子青年団は「自治民」「国民」としての主体性が求められ、YWCA は「快活な楽しい娘時代のありよう」としての主体性が求められていた。封建時代を通じ家の一員、部分としての存在である日本における個は、家族国家の恭順なる臣民としての主体であり、処女会・女子青年団は、総力戦の体制の中で「大陸の花嫁」、「傷病軍人の妻」となるという主体性を発揮することとなる<sup>25</sup>。一方 YWCA は、封建主義的な人間観から人間を解放しようとする近代主義思想や自由主義、人間解放運動や教化運動、西洋キリスト教社会が形成してきた人格的個としての形成を目指した。それは戦後の民主主義教育の推進者、または受け皿としての主体性を発揮することになったと評価されている<sup>26</sup>。日本人にとっては新しい文化であり価値観でもある人格的個としての確立を、日本の YWCA が充分に実現していたのかの検証は今後の課題とするが、その理想を目指して励んでいたことは事実であり、それが戦後の民主主義の潮流を受容し広げる基となっていたと考える。

---

<sup>1</sup> 日本 YWCA100 年史編纂委員会『日本 YWCA100 年史 女性の自立を求めて』日本キリスト教女子青年会、2005 年、p. 21。

<sup>2</sup> 内務省社会局社会部『男女青年団体事績一斑』1928 年。

<sup>3</sup> 日本 YWCA 機関誌『明治の女子』第 1 巻第 1 号、1904 年 5 月、「開書」。

<sup>4</sup> 前掲、『日本 YWCA100 年史』、p. 4。

<sup>5</sup> 『広辞苑第二版』岩波書店、1975 年。

<sup>6</sup> 修養研究部会『野間教育研究所紀要 第 51 集 人間形成と修養に関する総合的研究』野間教育研究所、2012 年、p. 5。

<sup>7</sup> 同上、p. 5。

<sup>8</sup> 同上、第 2 章「修養の社会史（1）修養の成立と展開」。

<sup>9</sup> Samuel Smiles: *Self-Help* を中村正直が翻訳し『西国立志編 原名自序論』として 1871 年出版され、「修養」は cultivate, cultivation の訳語として使用された。福沢諭吉の『学問のすゝめ』と共に明治期のベストセラーとして、社会に影響を与えた。

- 
- <sup>10</sup> 前掲、『野間教育研究所紀要 第51集』pp.55-56。
- <sup>11</sup> 天野藤男『農村処女会の組織及び指導』洛陽堂、1916年、p.25。
- <sup>12</sup> 同上、pp.60-61。
- <sup>13</sup> 片岡重助『新時代の処女会及び其の施設経営』日本図書センター、1982年、p.9。
- <sup>14</sup> 同上、p.10。
- <sup>15</sup> 同上、p.17。
- <sup>16</sup> 渡邊洋子『近代日本女子社会教育成立史—処女会の全国組織と指導思想』明治図書、1997年、p.394。
- <sup>17</sup> 前掲、日本YWCA p5。
- <sup>18</sup> 河井は著書中で、シルヴァ・ベイでの「YWCA 協議会」に招かれたと記している。これはカンファレンス (conference) を翻訳し協議会と記したと推測する。アメリカYWCA史中にも conference 表記の催しの記載があるが、河井が参加したものについての記録での確認はまだできていない。
- 日本での「夏期修養会」は、戦前期1942年まではその名称が使われていた。1943年には練成会、修練会と名前を変え実施されたが、1944年には中止された。戦後は1946年に学生部全国修養会として再開され、1952年からは全国カンファレンスと名称するようになり、1970年学生YWCAの全国組織解体により終了したが、中高YWCAにおいては現在も同名称で継続されている。全国学生組織解体後は広く女子青年に向けた各種のプログラム（例：リーダーシップ、平和、国際など）による事業が継続され、その内容による名称が使用されている。
- <sup>19</sup> 河井道『わたしのラターン』恵泉女学園、1968年、pp.148-150。
- <sup>20</sup> 英学塾生徒として夏期修養会に出席。その後日本YWCA幹事となる。結婚後は夫（一色扇児）と共に河井道の恵泉女学園を理事として支えた。
- <sup>21</sup> 日本YWCA機関誌『女子青年界』22巻10号、1925年、p.633。
- <sup>22</sup> 同上、22巻10号、p.634。
- <sup>23</sup> 日本YWCA機関誌『明治の女子』第2巻第7号、1905年、p.450。
- <sup>24</sup> 『日本YWCA100年史』は、日本YWCA年史の最新版であり、ここでは「修養会」と統一され表示されている。
- <sup>25</sup> 渡邊洋子「1930年代の女子青年団と男子青年団—公共的精神と結婚」、橋本紀子他編『ジェンダーと教育の歴史』川島書店、2003年、pp.174-179。
- <sup>26</sup> 駒田錦一「青少年指導者講習会を顧みて」、社会教育研究会編『社会教育』6月号、1950年、pp.49-50《財》全日本社会教育連合会編『復刻版 教育と社会・社会教育』雄松堂出版、1986年》。駒田錦一は次のように述べている。
- 連合国軍最高司令官総司令部 (GHQ/SCAP) 民間情報教育局 (CIE) のもとに1948年から実施された教育長等講習会 (IFEL=Institute for Education Leadership) の一環として、文部省主催の第1回青少年指導者講習会 (1948年10月～12月) が開催され、米国より3人の婦人講師が来日し、その中の一人はYWCAのミス・エステル・ブリーズマイスター (Esther Briesemeister) であった。この講習会ではグループワークの技術と方法の指導がなされ、青少年団体の基本的機能として、レクレーションと教育と社会奉仕の3つが強調された。こうした指導を手助けする通訳や補助者として、元職員や会員たちが関わっていた。またテキストとしてのハンドブックや指導書など (「YWCA指導者シリーズ」「ゲームと指導」) の出版においても青少年指導の専門的スキルや情報を提供している。
- 武田清子『戦後デモクラシーの源流』岩波書店、1995年、pp.15-16、pp.90-91で武田は次のように記している。
- 戦後、「教育勅語」を無効化し、国民を代表する国会が採択する国民教育の根本原理として「教育基本法」のする事とし、起草にあたった教育刷新委員会の第一特別委員会



---

には河井道子（元日本 YWCA 総幹事、恵泉女学園学園長）が委員として参画している。

## 終 章

### 第1節 結論

#### 1. YWCA 成立の背景

19 世紀前半、欧米でのキリスト教リバイバル運動から生み出されたエネルギーは、キリスト教宣教活動の活性化と人道主義的な社会活動を生み出していた。宣教活動と人道的な社会活動を実施する組織として各種の協会が設立され、そこでは女性たちの積極的な働きがあった。19 世紀のリバイバル運動を背景として、欧米女性に求められていたのは、キリスト教的価値観をベースとする母性であり、限られた領域の中での社会性であった。しかし、彼女たちの社会性は、家庭を超えた社会の要請に応えるための奉仕活動の中で培われ成長した。それは困難を抱える人を訪ね、世話をやき教育的な働きかけをすることであり、そのために必要な資金をつくることであった。自ら献金を捧げ、資金を生み出す様々な方法を考え、奉仕活動の財政を担った。女性たちは奉仕活動を支え拡大し、職業人としての女性を派遣するなど、その活動を人的にも財政的にも保障できるまでの社会的な位置づけを確立した。欧米女性たちは自らに設定された社会的自律の領域枠を拡張してきた。このリバイバル運動を背景に YWCA の設立は促されていた。

19 世紀後半、世界へ拡張したキリスト教界は、教会再一致を目指すエキュメニカル運動が推し進められていた。その流れの中で YMCA、YWCA、WSCF は、世界各国のキリスト教青年を宗教的社会事業を通して接近させ、相互協力の機会を作る、世界的ネットワークとして機能していた。そうした流れの中で、働く若い女性や女学生を対象に展開された YWCA 運動は、直接的・間接的に社会改良や改革を自らの問題とする自律的女性の育成を目指した世界運動となった。

1905 年、女子工場労働者の現状を憂いた在日婦人宣教師による世界 YWCA への要望をきっかけとして、日本 YWCA が設立された。女学生とミッションスクール卒業生、そして女子工場労働者という女子青年層に向けた YWCA 事業は、学校 YWCA と東京を始めとする 6 都市のローカル YWCA を日本に設立させる事となった。

欧米キリスト教のリバイバルを背景として成立した女性たちの奉仕活動（チャリティ）は、活動の拡張と共に社会性を高め、女性の社会的位置付けの変化を促した。日本の YWCA

は、リバイバルという背景とエキュメニカルの中で形成された YWCA ネットワークを通して、社会的変化を遂げる欧米女性たちの奉仕活動の姿を学び、それを継承する運動であった。

## 2. YWCA 事業の実態

東京 YWCA が実施した女子青年事業の中から働く女子青年に焦点を当て、有職婦人部と女子工場労働者を対象として実施された事業の実態を明らかにした。

20 世紀初頭、都市の若い女性の就業率は上昇し、職業や教養的な教育への需要は高まっていた。東京 YWCA は有職婦人に向けた各種の教育とクラブ活動を推進させた。彼女たちは職業を持ち、自活するため、家計の補助や「嫁入り」のためなど、その必要に応じて働いていた。そして職業上のキャリアアップや、教養や技術を身につけるために YWCA の門を叩いた。彼女たちは、ビジネスガールとプロフェッショナルと労働婦人という年齢や職種など異なるグループ群の女子青年であったが、東京 YWCA 有職婦人部として同じ括りの中に位置していた。各種の集会や講演会で顔を合わせ、共に YWCA メンバーとして一つの集団を形成し、クラブに象徴される自治的活動と、職業や教養教育の場を共有していた。時代を共に生き、生活する女子青年が集まり、集団として存在していたのである。東京 YWCA 有職婦人部で実施されたクラブや知識と技能の教育の場は、限られた環境で暮らす彼女たちの視野を拡張、他者との関係や思考する力を育む社会教育実践の場であった。それは女子青年たちの全人格へ影響を与え、個の確立、精神の自律への道筋をつける可能性をもつものであった。こうした事業を支え、推進していく YWCA 幹事（職員）の育成には、海外をも含む研修の機会が用意され、女性への職業教育としての質の高さがみられた。YWCA 幹事には会員と共に YWCA 運動を推進してゆく専門職としての役割が求められていた。と同時に、自律的な女性像を表すロールモデルとして存在する女子青年のリーダーとしての役割が意識された教育が実施されていたのである。

文京区白山御殿町「私共の家」を拠点に、地域に住む、若い女工たちのクラブを組織した「私共の家」は社会事業と同時に社会教育事業であった。女工たちの白百合クラブは、少女や幼児へと広がり、最終的には母親たちのクラブが成立していった。クラブを通し彼女たちは多くの女性や社会と、人的にも社会的にも交流し、経験を広げ、可能性を伸ばし、社会性を広げる事になった。こうした社会教育的な営みは、彼女たちの「人間形成」ともなり、地域からの信頼を得る事にもつながっていた。彼女たちへの信頼は、「私共の家」自身の信頼を増し、林間学校やキャンプ、年末託児や各種相談事業など社会事業の充実とも

つながっていた。少女たちは用意した花束で病人を慰め、女工たちは少女たちの良き指導者となり、母たちは地域の相互扶助に力を発揮している。東京 YWCA が当初掲げた「労働に従事する女子の人格を尊び、社会人として正しく起つことの出来る」女子労働者教育は、その内容を「個」から社会へ、また社会から「個」へと、クラブや地域活動の有機的な関係の中で拡大し、実施しされていたといえる。そうした意味で「私共の家」は、社会事業と社会教育活動が統合された事業といえ、この事業を通して社会的存在としての「人間形成」が育まれたといい得る事業であった。

こうした働く若い女性に対する事業は、その時代の女子労働者、広くは女子青年の置かれた状況を変革する取り組みとして、各国 YWCA の相互協力（YWCA ネットワーク）のもとに実施された。女子労働者の状況を変革するための「社会的自立」や「人間形成」といった目標は、個を尊重した、自由な要素が多く含まれるグループワークという方法で行われていた。時代は、「母」であり「労働力」である「臣民としての女子青年教育」を求めているが、YWCA が有職婦人部に集う女子青年たちに実施した事業の実態は、社会に向き合う主体者としての青年期教育であったと考える。

### 3. 日本の女子青年教育における YWCA の位置付け

1920～30 年代に女子青年に向けた教育に取り組む組織として存在した二つの女子青年団体は、共に日常的事業の中で主体者としての女子青年教育を推進した。そこには①学習、②精神的成長、③労働という共通項があった。

- ① それまで女子青年には実施されなかった新しい教育の機会の提供は、処女会・女子青年団では、学校教育の補習と教養や生活改善のための教育として実施され、YWCA では、上級学校進学や就職にむけての学習と教養や生活改善のための教育が実施されていた。教養や生活改善に関する学習内容には二団体の特徴からくる違いはあるが、大枠としての共通性があった。しかし、基礎学習補完のための補習と、進学・職業のための補強的な学習とには、基本的な違いがある。国家的教育政策としての意味を持つ学習の制度としての補習的学習と、その必要性を認識した個人が経済的な負担も含み学ぼうとする補強的学習とには、公的教育と私的教育の違いを見ることが出来る。この時代の私的教育には、何を学ぶかの自由で自発的な選択があり、制度として組み込まれていく公的教育に比して、選び取ることからくる学びの主体者としての意識を培う要素を含み持つことができた。

- ② 地域社会への奉仕を通して、道徳心や情操豊かな人間性を養うことを目指した処女会・女子青年団と、社会の弱者への奉仕を通して、人格形成や人間的成長を目指したYWCAは、共に宗教的な思想を基盤に奉仕事業を実施、経験する中で、精神的成長を目指している。処女会・女子青年団の奉仕の対象は、家・村・地域、最終的には国家へと広がった。そこには国家家族社会の中に存在し続けた意識が根付き継続されていることが見える。一方、YWCAは貧しい者、弱い者といった広く社会一般に存在する個人への奉仕であった。この時代日本のYWCAが封建的社会意識から脱却しているとは考えられないが、西洋キリスト教社会から伝えられる思想を世界に広げ根ざす運動の中で、一人の人間に視点が定められ、そこには国家や人種、階級などが前提として存在していなかったと考える。個の人格としての認識についての理解が、充分に日本のYWCAに根付いていたかは、今後の研究課題であるが、少なくともそうした理想に向け事業が展開されていたといえよう。
- ③ 二つの女子青年団体は、学びを通し労働環境を整え、労働の質の向上を図る各種の事業を実施していた。処女会・女子青年団の労働は、第1次産業での労働、YWCAは第2次第3次産業へ勤務する労働であったが、両団体の女子青年は、共に家のため、また自らのために働いていた。処女会・女子青年団の娘は、家として受け取る報酬に暮らす一員であり、都市で働く娘は個々人に支払われる報酬を給与として受け取る人であった。都市で働く女子青年がその給与で自立した生活を実現することは厳しく、多くの女子青年は家族のための労働でもあったと推測するが、自らの収入の有無は、女子青年の自立像の違いを生じさせる。内助者として主体性、個人としての主体性といった両団体の主体性の違いは、こうした経済環境によっても規定されていたといえよう。

この時代日本の「青年」の背景には軍事、教育両面からの国家的意図があり、「女子青年」においてもその意図は共通のものであった。処女会・女子青年団は国家の意図に沿った道を歩むための事業が推し進められていた。YWCAは同じ時代環境の中にありながらも、民間の一団体であり、その規模や社会的位置付けなどから国家的な関与がまだ十分に及んでいない故の自由さがこの時期には内在していた。

日本においては国が設立する、認可するということは、種々雑多な民間によるものより国家が選択したものとして優越性を有すると考えられている<sup>1</sup>。女子青年団は国家的事業

として国家の意図に沿う社会的に認知された女子青年組織として存在していた。YWCA は多くの民間組織の一つである女子青年組織としての存在であった。多くの民間組織には国が全く無関与であるのではなく、大きな問題を発しない限り放任という自由があった。国家が総力戦体制へ向かう 1930 年後半期頃より YWCA も国家の意向によりその事業を変更させることになっていくが、それまでは YWCA にもそのような自由さがあった。二つの女子青年団体は女子青年の主体性を培うことにおいて共通性を持っていたが、主体性の内実は、異なるものであった。女子青年団には「自治民」「国民」としての主体性が求められ、YWCA では「快活な楽しい娘時代のありよう」としての主体性が求められていた。女子青年教育における YWCA は、社会的な位置づけとしては微力な存在であるが、その微力さゆえにある種の理想化された西洋キリスト教文化に位置する女子青年教育の実践を可能にしていた。日本全土を網羅する女子青年教育としての影響力は持たなかったが、戦後より始まる民主主義教育を既に実践実施していた女子青年組織であったといえる。

封建時代を通じて「家の一員」としての存在である日本における個は、家族国家の恭順なる臣民としての処女会・女子青年団に、総力戦の体制の中で「大陸の花嫁」、その結果としての「戦争未亡人」あるいは「傷病軍人の妻」となるという主体性を発揮させ<sup>2</sup>、一方西欧キリスト教文化を背景とする民主主義的精神を持つ YWCA には、戦後民主主義受容の基礎力を持つ者としての主体性が培われていた。二つの女子青年団体の主体性を象徴的に評価するならばこのように言い表せる。しかし、そこに集った女子青年の中にある小さな経験の記憶に視点を移すと、そこには多様で多面的な記憶が存在していたのではないかと考えられる。一人ひとりその理解や受容の濃度は異なり、活動への熱意も異なっていたであろう。天野の言う「会合談合する」こと、すなわち女子青年という同世代が集い語らうことは、「快活な楽しい娘時代」を生み出す貴重な一步であったと考える。娘から即妻へという青年期のなかった時代に、会員であり団員であった日々の多くは「快活な楽しい娘時代」を実感するものであり、そうした姿は、二つの女子青年団体の実践の中に、また機関誌の中に見出す事が出来た。こうした実践の姿は時代の流れの中で簡単に変質させられるが、個々人が体感した喜びや躍動感また楽しさは個々の記憶として深く存在し続ける。娘には存在し得なかった青年期を、女子青年集団の快活な時として共有し、自らの将来を描き他者や地域、また社会のために働こうとした女子青年の根底には、処女会・女子青年団員にも YWCA 会員にも同様に戦後の民主主義を受容する芽が育まれていたのではないかと考える。つまり、青年期という女子青年集団の快活な時の共有と、他者、地域、社会に向き合

い働こうとした個々の団員の思いは、国家の意図とは別に、彼女たちの根底に民主主義をわがものとして受け止める土壌をすでに準備するものであったといえよう。

#### 4. YWCA の教育学的な特徴

女性たちによる社会活動の一つである婦人宣教師とその働きを支えた婦人伝道局に付いては第1章第2章で述べたが、彼女らの背景には、イギリスの下層中産階級の女性たち、ガヴァネスや教師として職業を持たなければならなかった独身の女性や未亡人となった女性たちの姿がある。矢口悦子は『イギリス成人教育の思想と制度』において、彼女らは、生活費を得るため、自分の職業能力を高めることで自信を得、精神的な安定を図るために、学習を熱望した<sup>3</sup>と記し、それは生きてゆくための手段を得る切実な動機であると共に女性たちの権利を獲得してゆくための運動でもあった<sup>4</sup>と述べている。

当時のイギリス下層中産階級の独身女性たちの生活は、肉体的にも精神的にも厳しく辛いものであったが、全員が悲嘆にくれながら生きていたわけではない。彼女たちは職業能力を高め自立を目指し、精神的な安定を得るために、女性の職業教育の機会をつくり、女子中等教育機関を設立<sup>5</sup>するなど女性のおかれた状況を改善していった。こうした独身女性の一人でもある婦人宣教師は、経済的、精神的自立のための職業の必要性和、それを現実とするための職業教育の必要性を身をもって知っていた人々であった。厳しい環境の中を生き抜いた女性たちの記録は、連綿と続く記憶として引き継がれていく。婦人宣教師が日本で行った女子教育の根底には、西欧キリスト教社会で形成された教育の形があり、彼女たちが身をもって体得した自立の価値は、教育の中で多様な方法で継承されていたと考えられる。欧米 YWCA の幹事は各ミッション（教派）からの派遣である宣教師ではないが、その流れをくむ職業であり、自立の必要性を知っている層の人々であった。YWCA 会員として、思考する力、決定する力を身に着け主体者として自律性を持った女性へと育成される道筋が YWCA 事業の中には存在していた。

139 万人の処女会員（1926 年）は農山漁村に暮らす娘たちであった。農山漁村は、不況などを機に都市に出て働く女工や諸産業従事者などの供給源でもあるが、娘たちは基本的には家、村、地域で完結する人生を送っている。都市に暮らす女子青年に対し YWCA は仕事をもち個として自立できる女性像を示したが、地域で完結する人生を送る処女会・女子青年団には、この発想の必要性はまだ認識されていなかった。

1920～30 年代、人格的個である主体者としての自律的な教育は、日本の女子青年教育に

においては特徴ある教育実践であったと言えよう。この教育実践にはクラブや委員会また学習やスポーツ、レクリエーションというプログラムの中で、多くの人と出会い交わることから新しい人間関係を拓ける可能性があった。それは個々の女子青年たちの個人的領域を超える範疇での人との関係性を得る事であった。また世界の YWCA ネットワークも彼女らの意識を拓け新たな人との関係性を得る機会であった。

西欧キリスト教文化を背景とする YWCA 運動が、日本社会にどのように認識され受容されたか、また日本人にとっては新しい文化であり価値観でもある人格的個としての確立を、日本の YWCA が十分に受容し得ていたかの検証は今後の課題であるが、1920～30 年代の日本の YWCA の女子青年教育は、日本の伝統的女子青年教育とは異なるものであった。そこには西欧女性たちにみる個としての認識が強く意識され、封建主義的な人間観から人間を解放しようとする近代主義思想や自由主義、人間解放運動や教化運動など、西洋キリスト教社会が形成してきた人格的個（自己）の育成という女子青年教育が追求されていた。

時代的には国家や自らの所属する場所や家庭に押し込められていく環境の中にあった女子青年に、新しい社会や人と向き合い新たな世界が開かれていく環境が存在していた。この点においても東京 YWCA で実践された女子青年教育はリベラルな特徴を持った教育の姿をしている。青年期女子の社会的自律を現実化する教育は、自治的集団活動を基礎に、奉仕という形での社会的関与を実践する教育であった。その実践は女子青年の自律を可視化させるものであり、戦後の教育制度改革を待たねばならなかった男女平等の主体者としての女子教育の取り組みが既に実践されていたと言えるものであった。

## 第2節 今後の課題

1. 東京 YWCA は女子青年を、異なる環境や階層の人々と出会わせ、共に YWCA メンバーとして活動を作り上げる経験（自治的集団活動）を通して、個々の人間的成長と社会的自律（立）を促していた。本論では YWCA が実施した女子青年教育をこのような簡潔な言葉で現した。自治的集団活動はただ人が集まることで成立するものではなく、また話し合いが行われれば自治的な組織になるわけでもない。そこには話し合いのためのルールが必要であり、参加するグループ員の主体的な係わりを促すリーダーの存在が不可欠である。グループ経験を積み重ねる中で、それぞれ他者に学びながら個性ある思考力を培っていくためには、細やかな働きかけが求められる。第4章5章で東京 YWCA の女子青年教育の実態を述べ



たが、こうした教育が持つダイナミズムや、複合的要素が関わり合う中でおこる変化は十分に考察できなかった。この課題は組織の記録からではなく、変化の実態を個々のメンバーの実例からさまざまに示すことであると考えている。現存する資料からでは限界もあるが、資料の再検と未整理となっている資料を整理し、新たな研究資料として整える中で取り組む課題としたい。

2. YWCA 設立の背景には欧米キリスト教社会で発生したキリスト教リバイバル運動がある。リバイバルによるキリスト教世界伝道の高まりは、YWCA においても同様に世界に YWCA を設立する事業の拡張として表れていた。アジアではインド、中国、日本、韓国へと主にアメリカ YWCA の海外事業が始まっている。本論では日本 YWCA 設立の概要を述べるに留まり、アジア地域各国での YWCA 設立経緯や事業の内実に言及する事が出来なかった。この課題に取り組むことは、日本 YWCA 設立の背景を、より重層的に解明することとなり今後の課題である。またアジアへの拡張は、YWCA を世界運動へと突き動かしたエネルギーの核心は何であったのかを解明する貴重な資料でもあると考える。こうした課題は継続する研究の中で明らかにしていきたいと考えている。

3. 本論においては、1920～30 年代の日本の YWCA が、封建的社会意識から脱却し得ていたのか、また個としての人格の認識を理解し得ていたのか、その受容の実態は如何なるものであったのかなどを今後の課題として掲げている。この課題は大きなテーマであり、一つ一つの事例をもとに検証していかなければ明らかにはならない。今回の研究はその第一歩として位置付けたい。日本の YWCA が実施した運動史の記録を残す作業は、こうした課題を確実に明らかにする作業でもある。運動史の記録は膨大であり全容は見えづらいが、課題とすることで継続した取り組みとしたい。

\* 本論の各章は、以下の論文を元に大幅な加筆、修正を加えたものである。

序章－2012 年度東洋大学大学院紀要第 49 集「日本女性教育史における YWCA の位置づけ」  
第 1 章、第 2 章－2016 年度東洋大学大学院紀要第 53 集「日本における YWCA 運動受容の背景に関する考察」

第 3 章－2011 年度東洋大学大学院紀要第 48 集「女子青年教育機関としての YWCA の定着

過程-1920年代の日本YWCAと東京YWCAの動きを中心として-

第4章-2013年度日本社会教育学会紀要No. 49-2「戦前の東京YWCA有職婦人部による女子青年教育」

第5章-2009年度東洋大学大学院修士論文「社会事業と教育活動の統合-1930年代東京YWCA社会事業『私共の家』を事例として-

---

<sup>1</sup> 学校教育を例とするならば、土方苑子編『各種学校の歴史的研究-明治東京・私立学校の原風景』東京大学出版、2008年、p. 19には、以下のような記述がある。

各種学校と呼ぶ「制度化された学校以外の学校」が広く存在することを前提とし、制度化された学校はそのなかで「国家の意思」が法令として発現されたものだとする。すなわち国の制度にある学校というのは、雑多な「学校」なる者の存在を前提として、国家が選択したものにとらえられていると言えないだろうか。

木場貞永（文部次官）『教育行政』金港堂、1902年、p. 31、p. 114、には以下の記述がみられる。

日本の学校の制度化は国家が行うもので、「国にとっては制度化した（する）学校こそが重要であり、その背後に存在してきた雑多な教育機関に対しては国の学校制度の形成を妨げない限り放任してきたというのである。

宗教教育を例とするならば、前述の木場は次のように述べている。

大日本帝国憲法（1889年）第28条で宗教の自由を定めていたが、国の「宗教」に関する法令にキリスト教、神社神道を含めなかった。（略）神社神道は宗教としてではなく、皇室神道と結びつき国家神道へと変化する方向に進みはじめており、新仏二教という時、仏教各派、及び教派神道を指していた。このように内務省の宗教行政のなかにはキリスト教は含まれていなかったのである（pp. 322-324）。

土肥昭『日本プロテスタント・キリスト教史』新教出版、1980年、p. 349は以下のように述べる。

1939年成立した宗教団体法に「キリスト教指導者の大半はこの法によってキリスト教が多宗教と同列に置かれ、文部省の保護によって官憲の介入を避ける事が出来ることを期待し、これを歓迎した。

<sup>2</sup> 渡邊洋子「1930年代の女子青年団と男子青年団-公共的精神と結婚」、橋本紀子他編『ジェンダーと教育の歴史』、川島書店、2003年、pp. 174-179。

<sup>3</sup> 矢口悦子『イギリス成人教育の思想と制度-背景としてのリベラリズムと責任団体制度』新曜社、1998年、p. 50。

<sup>4</sup> 同上、p. 51。

<sup>5</sup> 同上、p. 95。

1848年クイーンズ・コレッジ（Queen's College）、1849年ベッドフォード・コレッジ（Bedford College）、1953年チェルトナム・コレッジ（Cheltenham College）が設立されている。

## 引用・参考文献

### YWCA 関連

#### <世界 YWCA 関係>

Anna Virena Raice, *A History of the World's Young Women's Christian Association*,  
The World's YWCA, 1947, LIC(2012/9/8).

Compiled by Elizabeth Wilson, *A Record of the Foreign Work of the American Associations 1866-1292*, YWCA of the United States of America, 発行年不明  
Elizabeth Wilson, *Fifty Years of Association Work among Young Women 1866-1961*, NY,  
1916.

Nancy Boyd, *EMISSARIES: The Overseas Work of The American YWCA 1895-1970*,  
The Women's Press, NY, 1986.

#### <日本 YWCA 関係>

日本 YWCA80 年史編纂委員会『水を風を光を』日本キリスト教女子青年会、1987 年。

日本 YWCA100 年史編纂委員会『日本 YWCA100 年史 女性の自立を求めて 1905-2005』日本  
キリスト教女子青年会、2005 年。

日本 YWCA 機関誌『明治の女子』『女子青年会』日本基督教女子青年会 1904 年～1943 年。

日本 YWCA 機関誌復刻版『明治の女子』『女子青年界』『女性新聞』不二出版社、1992  
年～1994 年配本。

武田清子「解説・総目次・索引 解説ー日本 YWCA の使命と特質」日本 YWCA『復刻版 女  
子青年界』別冊、不二出版、1994 年。

日本 YWCA 機関誌『YWCA』1951 年～現在に至る。

基督教女子青年会日本同盟編纂『基督教女子青年会指導者讀本』基督教女子青年会日本同  
盟、1937 年。

#### <東京 YWCA 年史他>

東京 YWCA 写真文庫『東京 YWCA50 年の歩み 1905 年-1955 年』東京基督教女子青年会、  
1955 年。

渡辺松子監修『東京 YWCA 創立七十周年記念 七十年のあゆみ』東京キリスト教女子青年会、

1975 年。

東京 YWCA80 周年記念行事委員会『東京 YWCA80 年のあゆみ 1905～1985』東京基督教女子青年会、1985 年。

東京 YWCA90 周年委員会『会員が綴る九十年 東京 YWCA90 周年記念「YWCA と私」』東京キリスト教女子青年会、1995 年。

東京 YWCA100 周年記念委員会『東京 YWCA の 100 年』東京基督教女子青年会、2005 年。

石橋宮子編纂東京 YWCA 年表（元職員石橋責任編集で 1972 年作成、元総幹事梶美津保により 1986 年完成）。

東京 YWCA 戦前期幹部委員会記録（1923 年 9 月～1944 年 4 月但 1926 年 11 月欠）

#### <その他>

伊藤康子「名古屋における婦人セツルメントのこころみーYWCA『友の家』をめぐってー」  
中京女子大学『中京女子大学紀要第 20 号』1986 年。

石川照子「日本 YWCA の国際主義・ナショナリズム・ジェンダーー加藤鷹の経験と言説を手がかりとして」『KASHIWA 学術ライブラリー05 日本近代国家の成立とジェンダー』  
2003 年。

M. プラング著、鳥海百合子訳『東京の白い天使ー近代日本の社会改革に尽くした女性宣教師キャロライン・マクドナルド』教文館、1998 年。

大阪 YWCA50 年史編纂委員会『年輪ー大阪 YWCA50 年』大阪 YWCA、1967 年。

河井道『私のランターン』恵泉女学園、1995 年。

河井道/中村妙子訳『スライディング・ドア』恵泉女学園、1997 年。

外務省通商局『自大正 8 年至る昭和 3 年海外渡航給在留者邦人統計』第 4 表渡航目的別本邦人海外渡航者員数年表（其 2）。

北脇実千代「日本人移民女性を教育すること：1910 年代における横浜 YWCA の試み」カリタス女子短期大学『CARITAS（45）』2011 年。

小崎弘道『七十年の回顧』警醒社書店、1927 年（国立国会図書館近代デジタルライブラリー）。

神戸キリスト教女子青年会五十年誌編集委員会『あゆみ』神戸キリスト教女子青年会、1970 年。

塩野幸子編著『カフマン讃歌ーエマ・R・カフマンに捧げるー』付録「エマ・R・カフマン

年譜―歴史と業績」東京 YWCA80 周年記念行事委員会、1985 年。

女性展望「世紀をつなぐ女性団体活動の継続と発展 (2) 東京 YWCA」『女性展望』NO. 526、2001 年。

新保淳乃「戦時下キリスト教女性運動のジェンダー的考察―日本基督教女子青年会 (YWCA) と機関誌『女子青年界』について―」平成 17-18 年度科学研究費基盤研究 (C)「家父長制世界システムにおける戦時の女性の差別の構造的研究」2007 年。

竹本英代「戦前日本における宣教師に対する日本語教育―松宮弥平を中心に―」同志社大学人文科学研究所『キリスト教社会問題研究 第 59 号』2010 年。

堤稔子「木村雪子と YWCA―‘国際人’の誕生」関東学院大学法学研究所『ジュリエスコンサルタス (22)』2013 年。

東京 YWCA『あるシニア・シティズン-Emma R. Kaufman のこと-』東京 YWCA、1971 年。

富坂キリスト教センター編『女性キリスト者と戦争』行路社、2002 年。

名古屋 YWCA50 年史編集委員会『名古屋 YWCA50 年の歩み』名古屋 YWCA、1983 年。

奈良常五郎『日本 YMCA 史』日本 YMCA 同盟、1959 年。

マーガレット・プランク/鳥海百合子訳『東京の白い天使』教文館、1998 年。

山形政昭「カフマン女史と YWCA 東京 YWCA 会館・大阪 YWCA 会館」『ヴォーリスの建築―ミッション・ユートピアと都市の華』創元社、1989 年。

文部省編『欧米青少年運動の精神と実際』社会教育会、1931 年 (国立国会図書館近代デジタルライブラリー)。

横浜 YWCA80 周年史委員会『この岩の上に―横浜 YWCA 八十年史』横浜 YWCA、1993 年。

横田睦子『渡米移民の教育―栞で読む日本人移民社会―』大阪大学出版会、2003 年。

吉屋信子著『吉屋信子乙女小説コレクション 2 屋根裏の二処女』、国書刊行会、2003 年。

渡辺松子編『エマ・カフマンと東京 YWCA』東京 YWCA、1963 年。

## キリスト教関連

### <辞典>

今橋朗他監修『キリスト教教育事典』日本キリスト教団出版局、2010 年。

大貫隆他『岩波キリスト教辞典』岩波書店、2002 年。

高崎毅他編『キリスト教教育事典』日本基督教団出版局、1969 年。

外村民彦『キリスト教を知る事典』教文館、1996年、p. 353。

日本キリスト教歴史大辞典編集委員会編『日本キリスト教歴史大辞典』教文館、1998年。

比屋根安定編『日本近世基督教人物史』大空社、1992年。

#### <その他>

G. H. ジャーマニー/布施濤雄訳『近代日本のプロテスタント神学』日本基督教団出版局、1982年。

Graf Friedrich Wilhelm/野崎卓道訳『プロテスタンティズム:その歴史と現状』教文館、2008年。

Justo L. Gonzales /石田学・岩橋恒久訳 原題 “The Story of Christianity” 『キリスト教史 下巻 宗教改革から現代まで』新教出版、2003年。

Williston Walker (ウィリントン・ウォーカー) /竹内寛 監修/野呂義男他訳 キリスト教史4『近現代のキリスト教』ヨルダン社、1986年。

阿部義宗編『日本におけるキリスト教学校教育の現状』基督教学校教育同盟、1961年。

石原謙『キリスト教の展開—ヨーロッパ・キリスト教史 下巻—』岩波書店、1972年。

伊藤悟「キリスト教教育と神学的人間観」北星短期大学紀要『*Journal of Hokusei Jr. Col.* Vol. 32』1996年。

海老沢雄三、大内三郎編『日本キリスト教史』日本基督教団出版局、1971年。

老川慶喜他編『ミッション・スクールと戦争—立教学院のディレンマ—』東信堂、2008年。

岡部一興「明治キリスト教史における需要と変容」、キリスト教史学会編『宣教師と日本人—明治キリスト教史における受容と変容』教文館、2012年。

菊池城司『近代日本の教育機会と社会階層』東京大学出版、2003年。

キリスト教学校教育連盟編『日本キリスト教教育史 人物編』創文社、1977年。

工藤英一『明治期のキリスト教：日本プロテスタント史話』教文館、1979年。

塩野和夫『19世紀アメリカンボードの宣教思想 I』新教出版社、2005年。

隅谷三喜男『日本プロテスタント史論』新教出版、1983年。

武田清子「日本におけるキリスト教教育原理の問題の—教育と宗教の衝突論争をめぐって—」国際基督教大学学報『教育研究』1955年5月。

武田清子「キリスト教受容の方法とその課題—新渡戸稲造の思想をめぐって—」、武田清子編『思想史の方法と対照』創文社、1961年。

武田清子編『戦後日本思想体系 2 人権の思想』筑摩書房、1970 年。

武田清子他『イギリス思想と近代日本』早稲田大学社会科学研究所、北樹出版、1992 年。

武田清子編『世界教育学撰集 29 日本プロテスタント人間形成論』明治図書出版、1963 年。

武田清子『日本リベラリズムの稜線』岩波書店、1987 年。

武田清子『戦後デモクラシーの源流』岩波書店、1995 年。

武田清子「デフォレスト院長と学風ー日本に根を下ろしたピューリタニズムー」岡本道雄監修『パン種としての日本女性ー日本の近代化に活躍した女性たち』春秋社、1984 年。

塚田理『イングランドの宗教ーアングリカニズムの歴史とその特質』教文館、2006 年。

富阪キリスト教センター編『近代日本のキリスト教と女性たち』新教出版社、1995 年。

同志社大学人文科学研究所編『戦時下抵抗の研究 I II キリスト者・自由主義者の場合』みすず書房、1968～1969 年。

土肥昭『日本プロテスタント・キリスト教史』新教出版、1980 年。

中島浩二「改革・長老教会」キリスト教史学会編『宣教師と日本人ー明治キリスト教史における需要と変容』教文館、2012 年。

日本プロテスタント史研究会『日本プロテスタント史の諸問題』雄山閣、1983 年。

日本基督教団宣教研究所編纂『日本基督教団史 資料集 第 1 巻 2 巻』日本基督教団研究所、日本基督教団出版局、1997 年。

原誠『国家を越えられなかった教会 15 年戦争下の日本のプロテスタント教会』日本キリスト教団出版局、2005 年。

森本あんり『アメリカ・キリスト教史 理念によって建てられた国の軌跡』新教出版社、2006 年。

吉田亮『ハワイ日系 2 世とキリスト教移民教育ー戦間期ハワイアン・ボードのアメリカ化教育活動』日本図書センター、2008 年。

## 女性史関連

ベッツィ・イズリアル (Betsy Israel) / 緒方房子監/長尾絵衣子他訳『明石ライブラリー アメリカ女性のシングルライフ メディアでたどる偏見の 100 年史』明石書店、2004 年。

エレン・キャロル・デュボイス (Ellen Carol Dubois) /リン・デュメル (Lynn Dumenil)  
 石井紀子他訳 『世界歴史叢書 女性の中から見たアメリカ史』明石書店、2009 年。

サラ・M・エヴァンズ (Sara M. Evans) /小檜山ルイ他訳 『世界歴史叢書 アメリカの女性の歴史 自由のために生まれて』明石書店、1997 年。

N. ゼモン=ディヴィス他編/杉村和子他訳 『女の歴史Ⅲ①16～18 世紀』藤原書店、1994 年。

李省展 (イ・ソンジョン) 『アメリカ人宣教師と朝鮮の近代』評論社、2006 年。

伊藤るり他編『モダンガールと植民地的近代－東アジアにおける帝国・資本・ジェンダー』岩波書店、2010 年。

伊藤康子『草の根の女性解放運動史』吉川弘文館、2005 年。

上野千鶴子『ナショナリズムとジェンダー』青土社、1999 年。

奥田暁子他編『宗教の中の女性史』青弓社、1993 年。

金澤周作『チャリティとイギリス近代』京都大学学術出版会、2008 年。

鹿野政直『戦前・「家」の思想』創文社、1983 年。

河村貞枝他編『イギリス近現代女性史研究入門』青木書店、2006 年。

紀平英作他編『シリーズ・アメリカ研究の越境第 5 巻 グローバリゼーションと帝国』ミネルヴァ書房、2006 年。

小檜山ルイ『アメリカ婦人宣教師 来日の背景とその影響』東京大学出版会、1992 年。

小檜山ルイ「婦人宣教師の女子教育事業」キリスト教史学会『キリスト教史学 第 48 集』キリスト教史学会、1994 年。

小檜山ルイ『「帝国」のリベラリズムー『ミドゥル・グラウンド』としての東京女子大学』駒込武他編『叢書・比較教育社会史 帝国と学校』昭和堂、2007 年。

小山静子『家庭の生成と女性の国民化』勁草書房、1999 年。

篠田靖子「アメリカ女性宣教師の来日とその生活－金城学院を例として－」『金城学院大学キリスト教文化研究所紀要 12』2009 年。

ジン・ジョンウォン『双書ジェンダー分析 12 東アジアの良妻賢母論－創られた伝統』勁草書房、2006 年。

鈴木裕子編/解説『日本女性運動資料集成 第 10 巻 戦争 官製婦人団体による運動と戦争体制への動員』不二出版、1995 年。

瀬地山角『東アジアの家父長制 ジェンダーの比較社会学』勁草書房、1996 年。

千野陽一編・解説『資料集成 現代日本女性の主体形成』ドメス出版、1996 年。



戸田徹子「「ロールモデルとしてのメアリー・ライオン」『メレイライオン一代記』を中心として」キリスト教史学会『キリスト教史学第48集』キリスト教史学会、1994年。

中畠邦監/近代女性文化史研究会編『近代婦人雑誌目次総覧』大空社、1986年。

並河葉子解説『復刻シリーズ:西洋女性宣教師の語った日本 英国人女性宣教師の日本 別冊』エディション・シナプス、2009年。

日本キリスト教婦人矯風会編『日本キリスト教婦人矯風会百年史』ドメス出版、1986年。

早川紀代他編『東アジアの国民国家形成とジェンダー』青木書店、2007年。

深谷昌志『教育名著選集② 良妻賢母主義の教育』黎明書房、1998年。

三戸公『「家」としての日本社会』有斐閣、1994年。

三井為友編『日本婦人問題資料集成』ドメス出版、1976年。

宮本百合子「女性の歴史の74年」『宮本百合子選集』第10巻、新日本出版社、1969年。

## 女子教育関連

B・サイモン/成田克矢訳『イギリス教育史Ⅱ 1870年-1920年』亜紀書房、1980年。

赤司道雄編『同仁キリスト教伝道百年史』キリスト教同仁社団、1990年。

秋枝蕭子『森有礼とホーレス・マンの比較研究詩論：日米近代女子教育成立史研究の過程から』梓書院、2004年。

大森秀子『多元的宗教教育の成立過程ーアメリカ教育と成瀬仁蔵の「帰一」の教育ー』東信堂、2009年。

木場貞永（文部次官）『教育行政』金港堂、1902年（国立国会図書館近代デジタルライブラリー）。

木村元編著『人口と教育の動態史』多賀出版、2005年。

「講座日本教育史」編集委員会『講座日本教育史第四巻 現代Ⅰ/現代Ⅱ』第一法規出版、1984年。

斉藤泰雄『初等義務教育制度の確立と女子の就学奨励ー日本の経験』広島大学教育開発国際協力研究センター『国際協力教育論集 第13巻第1号』2010年。

佐々木啓子「伝統的規模から脱却した新中間層の女性たちー戦前期日本における女子高等教育拡大のメカニズム」香川せつ子他編『女性と高等教育ー機会拡張と社会的相克』昭和堂、2008年。

生活科学調査会編『講座・日本の社会教育第Ⅳ巻婦人教育』医歯薬出版、1960年。

千野陽一『近代日本婦人教育史 体制内婦人団体の形成過程を中心に』ドメス出版、1979年。

津田塾からし種の会編集『津田塾大学創立110周年記念 もうひとつの津田スピリット』津田塾からし種の会、2010年。

東京女子高等師範学校『女子教育研究調査報告集第一集』東京女子高等師範学校、1915年。

東京都『都史紀要九 東京の女子教育』東京都、1966年。

東京都立教育研究所編『東京と教育史 通史編四』東京都立教育研究所、1997年。

中畠邦監『近代日本女子教育文献集』誠進社、1983年。

中村政雄編『日本女子大学校四十年史』日本女子大学校、1942年。

日本女子大学女子教育研究所編『女子の生涯教育』国土社、1968年。

日本女子大学教育研究所編『昭和前期の女子教育』国土社、1984年。

橋本紀子他編『ジェンダーと教育の歴史』川島書店、2003年。

芳進堂編集部編『最新 東京女子学校案内目次』武田芳進堂、1933年。

土方苑子編『各種学校の歴史的研究 明治東京・私立学校の原風景』東京大学出版会、2008年。

平塚益徳「女子教育」、駒田錦一「成人教育」文部省『文部時報十月号 第1022号』帝国地方行政学会、1962年（国立国会図書館近代デジタルライブラリー）。

船木恵子「ヴィクトリア時代の女子高等教育-J. S. ミルとケンジントン・ソサエティー」『武蔵大学総合研究所紀要 17』2007年。

三井為友編『講座・日本の社会教育 婦人教育』医歯薬出版、1960年。

三好信浩『日本女子産業教育史の研究』風間書房、2012年。

村田鈴子『アメリカ女子高等教育史—その成立と発展』春風社、2001年。

めじろ路出版実行委員会『めじろ路 - 日本女子大社会事業学部卒業生のあゆみ』日本女子大学社会福祉学科の会みどり会、1978年。

文部科学省ホームページ「学制百年史/教学聖旨の起草」、「学制百年史/六 教学聖旨と文教政策の変化」

湯川次義『近代日本の女性と大学教育 教育機会開放をめぐる歴史』不二出版。2003年。

## 社会教育関連

- ハロルド・W・スタブルフィールドパトリック・キーン/小池源吾監訳『アメリカ成人教育史』明石書店、2007年。
- ケニス・E・リード (Kenneth E. Reid)/大利一雄訳『グループワークの歴史 人格形成から社会的処遇へ』勁草書房、1992年。
- ピーター・ジャービス/黒沢惟昭他訳『明石ライブラリー30 国家・市民社会と成人教育－生涯学習の政治学に向けて－』明石書店、2001年。
- マイケル・D・スティーヴンス/渡邊洋子訳『明石ライブラリー16 イギリス成人教育の展開』明石書店、2000年。
- 相庭和彦『現代生涯学習と社会教育史：戦後教育を読み解く視座』明石書店、2007年。
- 上杉孝實他編著『社会教育の近代』松籟社、1996年。
- 大槻宏樹『自己教育の系譜と構造－近代日本社会教育史－』早稲田大学出版、1961年。
- 大槻宏樹『近世日本社会教育史論』校倉書房、1993年。
- 海後宗臣『教育学叢書 7 社会教育学』誠信書房、1959年。
- 海後宗臣監修『社会教育戦後日本の教育改革 第十巻 』東京大学出版会、1971年。
- 片山清一『近代日本の女子教育』建帛社、1984年。
- 国民教育研究所編『近代日本教育小史』草土文化、1980年。
- 国立教育研究所編『日本近代教育百年史 第7巻8巻 社会教育1』(財)教育研究振興会、1974年。
- 島田修一編『教育基本法文献選集 6 社会教育の自由第7条』学陽書房、1978年。
- 新海英行編『現代日本社会教育史論』日本図書センター、2002年。
- 鈴木眞理『ボランティア活動と集団－生涯学習・社会教育論的探究』学文社、2004年。
- 仁平典宏『「ボランティア」の誕生と終焉』名古屋大学出版会、2011年。
- 日本社会教育学会 50 周年記念講座慣行委員会編『講座現代社会教育の理論Ⅱ 現代的人権と社会教育の価値』東洋館出版社、2004年。
- 日本社会教育学会編『日本の社会教育第45集 ジェンダーと社会教育』日本社会教育学会、2001年。
- 日本社会教育学会編『日本の社会教育第13集 都市化と社会教育』日本社会教育学会、1969年。

日本女子大学女子教育研究所編『婦人と社会教育』国土社、1983 年。

松田武雄『近代日本社会教育の成立』九州大学出版、2004 年。

宮坂広作『日本現代教育基本文献叢書社会・生涯教育文献 I 6 近代日本社会教育史の研究』  
日本図書センター、1999 年。

宮原誠一『宮原誠一教育論集第 2 巻 社会教育の本質』国土社、1977 年。

矢口悦子『イギリス成人教育の思想と制度ー背景としてのリベラリズムと責任団体制度』  
新曜社、1998 年。

### 処女会、女子青年団、青年団関連

天野藤男『農村処女会の組織及び指導』洛陽堂、1916 年。

石川謙『近世日本社会教育史の研究』東洋図書、1938 年。

大島正徳『女子と公民教育』文部省、1937 年。

大澤章『女子を対象とする公民教育』文部省、1937 年。

海野幸徳『現代の青年運動』内外出版、1924 年（国立国会図書館近代デジタルライブラリー）。

笠森傳繁『農村構成の基礎としての 農村女塾』啓明会、1935 年。

片岡重助『新時代の処女会及び其の施設経営』日本図書センター、1982 年。

片岡重助『女子青年団指導教範』日本図書センター、1991 年。

熊谷辰治郎編『大日本青年団史 第三編明治時代（第一期）』大日本青年団、1942 年。

小尾範治『社会教育思潮』南光社、1927 年（国立国会図書館近代デジタルライブラリー）。

駒田錦一「青少年指導者講習会を顧みて」、社会教育研究会編『社会教育』6 月号、1950  
年（全日本社会教育連合会編『復刻版 教育と社会・社会教育』雄松堂出版、1986 年）。

下村寿一『聖戦完遂と女子教育』日本経国社、1944 年。

修養研究部会『野間教育研究所紀要 第 51 集 人間形成と修養に関する総合的研究』  
野間教育研究所、2012 年。

社会局社会部『男女青年団体事績一斑』社会教社会部。1928 年。

田子一民「青年の女性の対する心-敬愛-協力-」大日本青年団『青年 第 11 巻 7 号』  
1926 年。

竹内真一『青年運動の歴史と理論』大月書店、1976 年。

竹中理恵「大正中期から昭和初期(1918-1941 年)における『非就学青年女子』の身体に関する議論について—機関誌『処女の友』『女子青年』から」『日本体育学会大会号(54)』

2003 年。

多仁照廣『同成社近現代史叢書⑤ 青年の世紀』同成社、2003 年。

千野陽一『近代日本婦人教育史：体制内婦人団体の形成過程を中心に』ドメス出版、1979 年。

大日本連合女子青年団制定、編『女子青年経典』社会教育会、1938 年（国立国会図書館近代デジタルライブラリー）。

内務省社会局『全国処女会婦人会の概況』内務省社会局、1921 年（国立国会図書館近代デジタルライブラリー）。

日本青年館史編纂委員会『グラフ日本青年館と青年団—青年と青年施設の歴史—』財団法人日本青年会、1992 年。

鳩山春子『婦人の修養』博文館、1907 年。

平川景子「処女会組織化の理念—セクシュアリティの装置—」『明治大学社会教育主事課程年報 6』1997 年。

平山和彦『青年団史研究序説』新泉社、1978 年。

不破和彦編『近代日本の国家と青年教育』学文社、1990 年。

宮原誠一他編『岩波講座 現代教育学 16 青年期教育の歴史』岩波書店、1961 年。

宮原誠一『青年期の教育』岩波書店、1966 年。

文部省社会教育局/小川利夫他監『近代日本青年期教育叢書 第 7 期基礎資料編 第 9 巻 男女青少年団体概況 文部省社会教育局編』日本図書センター、1993 年。

矢口悦子「地域青年集団における女性の位置と学問の展開その(1) —青年団の女性活動(女子活動)のあゆみを中心に—」『山脇学園短期大学紀要 38 号』2000 年。

矢口徹也『女子補導団—日本のガールスカウト前史—』成文堂、2008 年。

山本龍之介「処女会か女子青年団か」大日本青年団『青年 第 12 巻 3 号』1927 年。

渡邊洋子「1930 年代の女子青年団と男子青年団—公共的精神と結婚」、橋本紀子他編『ジェンダーと教育の歴史』川島書店、2003 年。

渡邊洋子「1940 年代前半期の女子青年団運動の指導理念と事業(1) —『国民化』とジェンダーの問題を考える手がかりとして—」『京都大学生涯教育学・図書館情報学研究 vol. 1』2002 年。

渡邊洋子『近代日本女子社会教育成立史－処女会の全国組織と指導思想』明石図書、1997 年。

## 女性の職業関連

グレース・ハッチンス/西田勲訳『働く女性』青木書店、1955 年。

赤松良子他監『戦前婦人労働論文資料集成 第 3 巻 農村婦人、職業婦人』クレス出版、2002 年。

岩見照代監解/解説『時代が求めた女性像－大正・戦中・戦後に見る「女の一生」第 11 巻、第 12 巻、第 14 巻』ゆまに書房、2011 年。

小島恒久『ドキュメント働く女性百年のあゆみ』河出書房新社、1983 年。

川嶋保良「明治－大正・草の根の有職婦人像（その一）」昭和女子大学『女性文化研究所紀要 第 6 号』1990 年。

近現代資料刊行会編『日本近代都市社会調査資料集成 1 東京市社会局調査報告書（大正九年～昭和十四年）15 大正十四年（3）』SBB 出版会、1995 年。

田村佳子「1930 年代アメリカ合衆国における女性労働者教育」広島大学平和科学研究所『広島平和科学 16』1993 年。

東京市社会局『近代都市社会調査資料集成 1、東京市社会局調査報告書 12 職業婦人に関する調査』東京市社会局、1924 年。

東京市役所編『婦人職業婦人戦線の展望 付録 統計編』東京市役所、1932 年。

中寫邦監/解説『近代婦人問題名著選集続編 第 1 巻 婦人職業論（伊賀歌吉著 1906 年）』日本図書センター、1982 年。

中寫邦監/平野貴子解説『近代婦人問題名著選集続編 第 7 巻 婦人自立の道（東京市社会局 1925 年編）』日本図書センター、1982 年。

中寫邦監『近代女性文献資料叢書 39 女と職業婦人 第 15 巻 東京女子就職案内（東京女子就職指導会 1936 年編）』大空社、1994 年。

中寫邦監『近代女性文献資料叢書 40 女と職業婦人 第 16 巻 女は働いてゐる（山川菊枝著 1940 年）』大空社、1994 年。

濱（山崎）貴子「1930 年代日本における職業婦人の葛藤－読売新聞婦人欄『身の上相談』から－」『京都大学大学院教育学研究科紀要 第 57 号』2011 年。

前田一『職業物語』東洋経済出版、1928 年。

三宅義子編『女性の見た近代Ⅱ 別巻Ⅰ アンソロジー 女と労働』ゆまに書房、2005 年。

村上信彦『大正期の職業婦人』ドメス出版、1983 年。

## 社会事業関連

Kenneth E. Reid/大利一雄訳『グループワークの歴史 人間形成から社会的処遇へ』勁草書房、1992 年。

Trattner, Walter /古川孝順訳『アメリカ社会福祉の歴史 救貧法から福祉国家へ』川島書店、1979 年。

愛国婦人会隣保館『愛国婦人会隣保館概要』愛国婦人会隣保館、1927 年。

青木保他編『近代日本文化論 1 巻 近代日本への視角』岩波書店、1999 年。

浅野俊和「東京帝国大学セツルメント託児部の子ども観と保育実践新」新海英行編『現代日本社会教育史論』日本図書センター、2002 年。

池岡直孝『公民教育』義済会、1927 年。

一番ヶ瀬康子『一番ヶ瀬康子 社会福祉著作集第 2 巻社会福祉の歴史研究』労働旬報社、1994 年。

一番ヶ瀬康子他編『社会福祉学』日本図書センター、2001 年。

奥むめお「セツルメント報告号」『婦人運動』第 9 巻第 5 号 7 月特集号 職業婦人社、1931 年。

大森俊雄編『東京帝国大学セツルメント十二年史』久山社、1998 年。

窪田暁子『社会福祉事業シリーズ 7 グループワーク』誠信書房、1969 年。

小島幸治『隣保事業管見 隣保事業調』社会局社会部、1926 年。

柴田謙治『貧困と地域福祉活動：セツルメントと社会福祉協議会の記録』みらい、2007 年。

社会科学事典編集委員会編『社会科学事典』新日本出版社、1878 年。

瀬岡誠「財閥経営者とキリスト教社会事業家Ⅰ」国際連合大学編『国連大学人間と社会の開発プログラム研究報告 技術の移転・変容・開発-日本の経験プロジェクト』国際連合大学、1982 年。

帯刀貞与『日本労働婦人問題』ドメス出版、1980 年。

辻浩「貧困把握と教育的救済の展開」新海英行編『現代日本社会教育史論』日本図書セン

ター、2002 年。

東京市小石川区『小石川区史』小石川区、1935 年。

東京市社会局『東京市内外社会事業施設一覧』東京市社会局庶務課、1934 年。

東京大学社会科学研究所『福祉国家 第 4 巻 日本の法と福祉』東京大学出版、1984 年。

東京都立教育研究所編『東京都教育史 通史編三』東京都立教育研究所、1996 年。

東洋大学創立 100 年史編纂室編『東洋大学百年史資料編 I 上』東洋大学創立 100 年史編纂委員会、1988 年。

徳永直『太陽のない街』岩波書店、1950 年。

成田龍一編『近代日本の軌跡 都市と民衆』吉川弘文堂、1993 年。

西内潔『日本セツルメント研究序説』童心社、1971 年。

氷川下セツルメント史編纂委員会『氷川下セツルメント「太陽のない街」の青春群像』エイデル研究所、2007 年。

文の京『わたしの便利帳 文京区のプロフィール』文京区、2006 年。

文京区『文京区史第 4 巻』文京区、1965 年。

右田紀久恵他編『社会福祉の歴史』有斐閣、1977 年。

森幹郎『足跡は消えても：ハンセン病史上のキリスト者たち』ヨルダン社、1996 年。

矢島浩『明治期日本キリスト教社会事業施設史研究』雄山閣出版、1982 年。

安岡憲彦『近代東京の下層社会－社会事業の展開』明石書店、1999 年。

吉田久一『日本社会事業の歴史』勁草社、1995。

## その他

Lovett/浜林正夫他訳『世界教育学撰集「イギリス民衆教育論」』明治図書出版、1970 年。

青木保他編『近代日本文化論 8 女の文化』岩波書店、2000 年。

綾部恒雄監/編『クラブが創った国アメリカ』山川出版社、2005 年。

稲垣久和他編『宗教から考える公共性』東京大学出版会、2006 年。

河北稔編『結社の世界史 4 結社のイギリス史 クラブから帝国まで』山川出版社、2005 年。

佐々木武他編『欧米における公と私』東京大学出版会、2002 年。

武田清子編『比較近代化論』未来社、1970 年



武田清子『イギリス思想と近代日本』北樹出版、1992 年。

田中智志『人格形成概念の誕生－近代アメリカの教育概念史』東信堂、2005 年。

福田アジオ編『結社の世界史 1 結衆・結社の日本史』山川出版社、2006 年。

毎日新聞社編『大正という時代＜100 年前＞に日本の今を探る』毎日新聞社、2012 年。

## 卷 末 資 料 目 次

### 卷末資料 1

女子青年教育関連年表.....	180
-----------------	-----

### 卷末資料 2

東京 YWCA 機関誌『地の塩』記事一覧.....	186
---------------------------	-----

### 卷末資料 3

(1) 東京 YWCA 幹事一覧.....	235
-----------------------	-----

(2) 東京 YWCA 職員・講師一覧.....	244
--------------------------	-----

### 卷末資料 4

日本 YWCA 修養会一覧.....	249
--------------------	-----

巻末資料1 女子青年教育関連年表

年	日本の動き	女子教育関連	青年団・処女会/女子青年団	日本Y・ローカルY他	東京Y
1867	大政奉還				
1868	明治維新				
1869	東京遷都		青年夜学開く(片平信明 駿河国庵原郡杉山村)		
1870		A六番女学校(女子学院前身)、キダー塾(フェリス女学校前身)設			
1871	・廃藩置県 ・身分制度(華族・士族・平民・新平民)の改革 ・岩倉使節団(1873年帰国)	・文部省創設 ・津田梅子ら五少女、米国留学			
1872		・官立女学校開校(東京)、京都府女学校開設 ・「学制」公布			
1873	・徴兵令公布(国民皆兵、満20歳以上男子) ・内務省設置(殖産興業の育成—富岡製糸場等の官営工場を設置) ・キリスト教解禁	・女紅場設置(京都) ・女工伝習所設置(工務省勸工寮)			
1874		・東京女子師範学校創設('75年開校) ・女子小学校開校('77年海岸女学校<青山女学院前身>に改称)			
1875		神戸ホーム(神戸女学院前身)、駿台英和女学校、照暗女学院(平安女学院前身)、梅香崎女学校(梅光女学院前身)等設立			
1876	地租改正条例公布	同志社女学校設立			
1877		・東京府立産婆教授所開設 ・立教女学校設立			
1878	深間内基訳『男女同権論』(J.Sミル著)刊行	梅花女学校設立			
1879		・「教育令」公布 ・永生女学校(ブール学院前身)、活水女学校設立			
1880	・国会期成同盟結成(8万7千名余の署名・私擬憲法40編余の発表) ・東京基督教青年会(YMCA)組織される ・「官営工場払い下概則」施行—財閥形成の促しと共に、産業の中核を担う分野の育成	「改正教育令」(文部卿の認可規定、府知事・県令の権限強化)			
1881	・「国会開設の詔勅」(1890年議会開設) ・開拓使官有物払下げ事件	和洋裁縫伝習所(東京家政大学前身)設立			
1882	女子親睦会(岡山)、婦女同盟党(鹿児島)等の民権派団体結成される	・東京女子師範付属高女開設 ・遺愛女学校設立			
1883	景山英子蒸紅学舎創立				
1884	・鹿鳴館にて慈善バザールや舞踏会が開催される ・女子改良論台頭(87年頃まで)	東洋英和女学校、ウィルミナ女学校(大阪女学院前身)等設立			
1885	・内閣制導入(初代内閣総理大臣伊藤博文) ・福沢諭吉「日本婦人論」連載 ・『女学雑誌』創刊	・明治女学校、華族女学校開校 ・福岡英和女学校(福岡女学院前身)設立			
1886	・第1回条約改正会議 ・雨宮製糸紡績場女エストライキ ・各地で各種婦人団体起る	・師範学校令、小学校令、中学校令公布 ・共立女子職業学校開設 ・金沢女学校(北陸学院前身)、松山女学校(松山東雲学院前身)、宮城女学校、英和女学校(捜真学院前身)、広島女学校、引前女学校等設立			
1887	キリスト教系婦人団体の発足が続く	普連土女学校、静岡女学校(静岡英和女学院前身)、北星女学校、新潟女学校等設立			
1888	仏教系婦人団体の発足が続く	前橋英和女学校(共愛学園前身)、香蘭女学校設立			
1889	・「大日本帝国憲法」発布 ・衆議院議員選挙法、府県議会選挙規則公布 ・婦人選挙権、被選挙権認めず	山梨英和女学校、金城女学校設立			
1890		・「教育勅語」発布 ・東京女子高等師範学校設置	若連中改革の動き(山本龍之助「好友会」を組織等)		
1891					
1892		尚綱女学校、松蔭女学校設立			
1893	東京婦人矯風会(86年結成)日本基督教婦人矯風会と改称し全国組織化	・「実業補習学校規定」制定 ・文部省女子就学促進のため裁縫教授方を奨励 ・日ノ本女学校設立			

1894	・「日英通商航海条約」調印 (領事裁判権の撤廃・関税自主権一部回復) ・日清戦争、各地で婦人の軍事援護活動起きる		・農業補習学校許可(片平信明「杉山青年報徳学会」) ・新潟県新潟村奉公婦人会結成、各地で軍事援護活動を目的とする団体が生まれる	世界YWCA創立(本部:ロンドン)、英国、ノルウェー、スウェーデン、米国が加盟	
1895	日清講和条約調印	・高等女学校規定制定 ・小学校女子就学率43.87%	三重県に御座処女会設立		
1896			山本龍之助『田舎青年』		
1897	片山潜キングスレー館設立	文部省、小学校及び師範教育における男女別学に関して訓令			
1898	・民法親族編、相続編公布 ・帝国婦人協会設立			第1回世界YWCA大会(ロンドン)	
1899	・横山源之助『日本之下層社会』刊行 ・新渡戸稲造『武士道』アメリカで出版	・実業学校令、高等女学校令公布 ・帝国婦人協会付属実践女学校及び女子工芸学校創設			
1900	・治安警察法公布(女子の政党結社加入、政談集会開催禁止) ・福島四郎『婦女新聞』創刊	・女子英学塾(津田塾前身)設立 ・私立東京女医学校設立 ・小学校女子就学率71.83%		・世界YW初代総幹事レイノルズ、世界YW常任委員会の要請を受け中国・日本訪問(日本で働く宣教師から直接間接の提案や訴えが数多く届いていた:アンナ・ライス記) ・YWCA創立委員会組織	
1901	・愛国婦人会結成	・高等女学校令施行規則制定 ・日本女子大学校創立 ・女子美術学校設立		東京・横浜の婦人宣教師会議、世界YWCAに幹事派遣要請を決議	
1902	日英同盟協約調印			第2回世界YWCA大会(ジュネーブ) 非キリスト教国、とくに中国、日本でのミッション活動の推進と、各教派の伝道事業との関係が中心議題。中国と日本に特に力を入れることが話し合われた	
1903	日本基督教青年会同盟(YMCA)成立	・国定教科書制度成立 ・女子貴族学校(山脇学園前身)設立		北米(カリフォルニア、オレゴン、ワシントン)のYWの支援を受け、テレサ・モリソンがYWCA幹事として初めて日本に派遣された	
1904	日露戦争。与謝野晶子「君死に給ふこと勿れ」発表		青年団体大いに活躍す	・カナダYWがキャロリン・マクドナルドを派遣(第2回世界YW大会決議) ・世界Y総幹事クラリッサ・H・スペンサー就任(1896年から5年間宣教師として日本在住(青山学院、聖経学院)日本語を完全に習得したと伝えられる) ・日本YWCA創立委員会設置 ・機関誌『明治の女子』創刊	
1905	・日露講和条約調印 ・日比谷焼打ち事件	・文部省、地方長官宛通俗教育奨励を通牒 ・文部省、各女学校に社会主義思想取締りを訓令 ・小学校女子就学率93.4%、高等女学校数百余	・内務大臣芳川顯正、青年団体の活躍につき報告 ・内務省地方局長、地方青年会の向上発達に関し通牒を発する ・文部省普通学務局長、青年団奨励につき通牒を発する	・日本基督教女子青年会(日本YWCA)設立 ・創立委員会を中央委員会と改称 ・マクドナルド総幹事に就任	東京基督教女子青年会(東京YWCA)設立
1906		・文部省「通俗教育に関する件」通牒	・内務大臣『地方自治と青年団』全国配布 ・中央報徳会創立 ・山口県吉敷村処女会設立	・第3回世界YWCA大会(パリ)で日本YWCA創立報告、世界YWCAに加盟 ・学生第1回夏期修養会(参加28校、165名)(～1969年第59回:戦時中除く)	学生の寄宿舎事業開始
1907	・福田英子『世界婦人』創刊(09年廃刊) ・婦人博覧会開催(山脇房子他)	小学校令改正(義務教育6年)	・東京にて万国基督教青年会第6回大会開催に際し、雑誌『人道』にて地方青年団体の詳細を来朝諸外国名士に紹介 ・宮崎県三股村長田婦人会設立 ・第1回婦人報徳会を開催 ・静岡県杉山処女会設立	・世界学生キリスト教連盟(WSCF)大会(総会)開催(東京)、参加627名 ・キリスト教主義校内にYWCA組織され始める	・学生部生まれる ・第1回年会(総会)
1908	・「戊申詔書」公布 ・『婦人之友』創刊	・奈良女子高等師範学校設立 ・文相、戊申詔書に関して訓令	・日露戦争に巧みだった婦人団体に金銀盃賦与 ・山形県大岩川女子会設立	米国YWCA、全米指導者養成学校をニューヨーク市に開設	納戸町女子青年会寄宿舎(第一)落成式 寄宿生35名
1909	・伊藤博文暗殺(ハルピン) ・農村豊作飢饉	・文相、小学校教員の社会教育普及発展への努力を内訓	岐阜県小鷹利村、静岡県庵原村、三重県小浜に処女会設立		・小石川水道町第二寄宿舎落成式 寄宿生60名 ・料理の組開始(外国人幹事宅)
1910	・日韓併合 ・大逆事件	・高等女学校令改正(実科高等女学校発足)	・初の全国的青年大会開催(愛知) ・文部省、第1回優良青年団表彰(82団体) ・埼玉県豊岡処女会設立 ・沖縄県「青年会婦人会設置標準」	日Y:第4回万国Y大会(ベルリン) 河井道子、労働問題、職業婦人問題などを議す	職業婦人の英語の組開始
1911	・日米新通商条約調印(関税自主権確立、不平等条約完全撤廃) ・工場法公布(女子及び年少者の12時間労働、深夜業禁止) ・『青鞥』創刊	・通俗教育調査委員会官制発布(大逆事件を受け「国民精神涵養」にむけ)	・内務省初の優良青年団体選奨 ・全国青年団体数24,800余、団員数245万余 ・静岡県印野村、埼玉県金谷村に処女会設立		工場伝道、病院伝道盛んになる

1912	友愛会設立(女子労働者を準会員)		・文部省第1回青年団調査委員会開催 ・兵庫県長井村、三重県安乗村に処女会が、三重県波切村婦人会が設立	日Y: 機関誌『女子青年会』と改題	・女子学生大会(神田青年館)参加 ・女子工場労働者のための講演会開催(本所富士紡績会社工場)山室軍平応援1000余名参加 ・労働婦人部の活動始まる ・看護婦人会開催
1913		通俗教育調査委員会官制廃止	岡山県有漢村、三重県石薬師村に処女会設立	横浜Y: 発足	上野駅における婦人保護案内事業「旅行者の友」開設
1914	・第1次世界大戦 ・対独宣戦布告 ・東京モスリン「女エストライキ」		宮城県吉濱処女会設立		・東北凶作および桜島大噴火被害者のための慰問袋200個作成、その他救援募金(他Y)・救助金(北米) ・労働者の幼児対象「友好園」開設(小石川福岡邸内)45名在籍〜'18
1915			・中央報徳会主催「補習教育及び青年団体に関する協議会」を文部大臣官邸にて開催 ・内務、文部両大臣、青年団体に関する第1回訓令「青年団体ノ指導発達ニ関スル件」を発す ・山梨県鳴沢婦人会、愛媛県三島、鳥取県下私郡、岐阜県坂の東村、千葉県上本郷小学校に処女会設立		・神保町会館献堂式 ・「旅行者の友」事業、品川駅、東京駅にも開設 ・第三寄宿舎開設、東京Y会館3F定員16名
1916	・工場法施行 ・吉野作造「民本主義」を提唱 ・友愛会婦人部設立 ・『婦人公論』創刊	文部省普通学務局『時局に関する教育資料』にて欧米各国の婦人統後活動を紹介(16年〜17年)	・中央報徳会青年部設立(2月)その後「青年団中央部」と改称(11月) ・中央報徳会青年部機関誌『帝国青年』発刊 ・埼玉大久保村女子同窓会、熊本県戸馳村処女会設立 ・天野藤男『農村処女会の組織及び指導』刊行	・横浜Y: 渡米婦人講習所設置	・教育部(女子計算員養成科新設、商業簿記、珠算、実務等、6か月修了) ・体育部、宗教部、教育部(仏語、生花、英語社交、音楽)新設 ・女子休養所を鶴沼海岸に設置 ・女中慰労会、40名参加 ・女中夜学開講、読方、習字、作法、裁縫など教授
1917	・『主婦の友』創刊 ・ロシア革命	・「臨時教育会議官制」公布(臨時教育会議発足) ・帝国教育会、全国小学校女教員大会開催 ・内務省初の女子団体の全国的調査実施	・静岡県東益津村処女会設立 ・天野藤男『処女会の組織と其事業』刊行		・風水害罹災者救援 ・国際親善バザー(世界めぐり)
1918	・シベリア派兵宣言 ・米騒動全国的に波及 ・第1次大戦終了	・臨時教育会議、「女子教育に関する件」答申 ・臨時教育会議、「通俗教育に関する件」答申 ・東京女子大学創立	・第2回訓令「青年団体ノ健全発達ニ資スヘキ要項」 ・青年団体中央部主催全国青年団連合大会(東京帝大講堂) ・全国処女会中央部設立 ・処女会中央部、各府県郡長に処女会実態報告を依頼 ・節米運動を展開 ・中央部機関誌『処女の友』創刊	・日Y: 連合軍慰問のための「慰問デー」設置。絵葉書40万枚街頭販売 ・横浜Y: 月1でセツルメント活動(浅間町、加盟女学校と共に) ・大阪Y: 発会式	・麹町本局電話局交換手慰労会70余名参加 ・第1回工女慰安会(王子町東洋紡績会社)1300名参加 ・巡回産婆看護婦事業開始(王子岸町)〜'21 ・戦時仕事日 出征兵士慰問袋作成 ・英語商業科新設、タイプ実務実習開始 ・シベリア救済のための園遊会(小笠原伯爵邸庭園)
1919	・普選期成大会(東京)、以後各地で普選獲得運動高揚 ・3.1万歳事件(朝鮮独立宣言) ・第1回国際労働会議(ILO)に婦人顧問田中孝子出席	・普通学務局第4課(通俗教育、図書館、博物館、青年団体等)を取り扱う社会教育主管課課)新設 ・文部省全国処女会に関する初の調査を実施 ・高等女学校性十万人余	・明治神宮御造営工事への労力奉仕作業始まる ・神奈川県富士瓦紡績保土ヶ谷工場内処女会発足 ・工場巡回講演会開始 ・婦女団体台帳の編纂開始 ・東京見学地方婦人団体への援助 ・『処女の友』誌上の上相談(職業相談)開始 ・全国婦女訓及び処女会歌作成	・日Y: 米国Y産業問題調査委員4名来日、富士紡績、名古屋、近江八幡、関西、広島訪問 ・神戸Y: 移民事業に着手 ・大阪Y: 職業婦人有志が自治団となり寄宿舎新設14名収容 ・京都Y: 創立準備事業として寄宿舎開く	・「旅行者の友」事業に助成金40円(東京府慈善協会) ・学生部主催親睦会に通信局調査課員8名参加、以後毎土聖書研究会開く ・東京駅内管理局庶務課婦人のための昼休み20分間集会 ・職業婦人のための夏期休養所設置(鎌倉〜'22保田に移転)日本初 ・最初のBGクラブ(湧泉)誕生
1920	・国際連盟発足 ・内務省社会局設置 ・日本初のメーデー ・新婦人協会結成	・高等女学校令改正(国民道徳と婦徳の養成を強調) ・文部省、地方長官に対し社会教育事務担当史員の設置を奨励 ・実業補習学校規定改正(職業教育及び公民教育を二代眼目とする) ・文部省全国女教員大会(第2回)に処女会関係事項を諮問 ・内務省第2回女子団体の全国的調査 ・小学校女子就学率98.84%	・第3回訓令「青年団体ノ内容整理並実質改善方」 ・内務大臣、令旨の翌日を青年の日に制定 ・第4回訓令「青年団員ニ令旨ヲ賜ヒタルニ付奉体方」 ・内務文部両省主宰「全国青年団明治神宮代表者大会」開催 ・皇太子「男女青年令旨」下賜 ・令旨記念し日本青年館建設の議起る ・内務書記官田子一民「青年団女子青年会」を公演(第2回社会教育講習会) ・下村寿一中央部理事就任(文部省の取り組み本格化)	・神戸Y: 発会式 ・神戸Y: 海外渡航者(ブラジル移民)講習所開始(兵庫県庁要請)	最初の職業婦人湧泉クラブ(鉄道局勤務女子)会合(誕生は19年)50名出席 ・英語、商業タイプ、各々専任者を得て盛ん

1921	<ul style="list-style-type: none"> <li>・足尾銅山争議</li> <li>・信濃自由大学設立</li> <li>・赤瀬会結成</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・通俗教育を社会教育と改称</li> <li>・文部大臣第5回全国男女青年団を表彰(青年団22、処女会8)</li> <li>・内務省社会局『全国処女会・婦人会の概況』刊行</li> <li>・第1回社会教育主事会議、処女会に関する施設事項答申</li> <li>・文部省社会教育研究会機関誌『社会と教化』創刊</li> <li>・自由学園設立</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・財)日本青年館設立許可</li> <li>・東京市連合青年団、第1回明治神宮祭運動会開催</li> <li>・第1回全国処女会指導者講習会開催(府県・郡の社会教育主事、県郡視学、各種学校長、教員等230名の参加者)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・大阪Y: 国語・裁縫・習字3科夜学開始</li> <li>・京都Y: 朝鮮人女工のための日本語クラス設置</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・第1回体操競技会</li> <li>・「旅行者の友」事業中止</li> <li>・白木屋呉服店婦人店員招待会</li> <li>・商工部スタークラブ誕生 第1回クラブ総会200名出席</li> <li>・商工部夜学科設置、商業部に速記科、オフィーストレーニング科を置く</li> <li>・組織的な募金運動を始める</li> </ul>
1922	<ul style="list-style-type: none"> <li>・全国水平社結成</li> <li>・日本農民組合結成</li> <li>・サンガー夫人(産児制限論者)来日</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・文部省、女教員・保母に産前産後有給休暇承認の訓令</li> <li>・文部省消費経済展覧会開催及び地方巡回</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・東京市連合青年団主催、第1回全国青年団大会開催(大日本連合青年団設立決議)</li> <li>・文部省普通学務局『大正十年度選奨優良処女会』刊行</li> <li>・片岡重助「処女会主任」として文部省入り</li> <li>・内務省・文部省 大日本連合女子青年団組織化を時期尚早とする意味の通牒を出す</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・大阪Y: 会館の1室を朝鮮人労働共済会に提供</li> <li>・神戸Y: 海外渡航者講習所、県庁内に移転</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・商工クラブ総会90名出席</li> <li>・巡回産婆事業に宮内省金300円下付</li> <li>・保田休養所開設</li> <li>・第1回市民クリスマス(日比谷公会堂)</li> </ul>
1923	<ul style="list-style-type: none"> <li>・国民精神作興に関する詔書頒発</li> <li>・第1回国際婦人デー</li> <li>・関東大震災</li> </ul>		<ul style="list-style-type: none"> <li>・片岡重助『新時代の処女会及び其の施設経営』刊行</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・日Y: 加藤タカ万国有職婦人連盟大会(ドイツ)参加</li> <li>・京都Y: 発足</li> <li>・京阪神: 第1回クラブ連合集会</li> <li>・神戸Y: 商工部クラブ第1回委員会</li> <li>・京阪神: BG(職業婦人)クラブ連合集会代表33名参加</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・教師のための第1回体操ダンス講習会、教師84名参加</li> <li>・電気局事務員招待会80名参加</li> <li>・小名木川工場女工招待会43名参加</li> <li>・震災救護事業開始(授産・奨学金・職業紹介)</li> <li>・隣保事業開始(月島)</li> <li>・焼跡にテント張り簡易宿舎、浴場を設置</li> <li>・月島事業開始、授産及び託児事業</li> </ul>
1924	<ul style="list-style-type: none"> <li>・仏教女子青年会創立</li> <li>・婦人参政権獲得期成同盟結成(25年婦選獲得同盟と改称)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・全国小学校連合女教員会結成</li> <li>・女子学生連盟結成(日大・早大・東洋大聴講生を中心に、女子教育向上、教育機会均等を求めた)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・第1回明治神宮競技大会に青年団参加</li> <li>・全国処女会指導者大会開催</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・横浜Y: 市営バラックで事業開始(託児所、クラブ、婦人職業紹介所等)</li> <li>・大阪Y: 補習(夜間)女学校開設、本科2ヵ年定員50名</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・夜間女学校開設在籍15名、1年で閉鎖</li> <li>・低収入職業婦人宿泊所開設(のちの翠香寮)小石川関口町</li> <li>・東京・横浜BG連合総会80余参加</li> </ul>
1925	<ul style="list-style-type: none"> <li>・治安維持法公布</li> <li>・普通選挙法公布</li> <li>・日本労働組合評議会結成</li> <li>・細井和喜蔵『女工哀史』刊行</li> <li>・「モダンガール」の語流行</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・中等学校以上の学校で軍事教練開始</li> <li>・地方社会教育職員制制定、社会教育主事、同主事補設置</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・大日本連合青年団発団式 全国男女青年団体事業御奨励金75万円(大婚25年)→都道府県に男女青年団体事業奨励資金設置</li> <li>・皇室より日本青年館事業御奨励金10万円</li> <li>・日本青年館竣工、開館式にて第1回郷土舞踊と民謡の会及び青少年資料展覧会を開催</li> <li>・地方処女会指導者講習会開催</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・日Y: 婦人労働問題に関する研究および調査部を設置</li> <li>・大阪Y: 女工世話係講習会40余名参加</li> <li>・横浜Y: 有職婦人寄宿舎(山王寮)落成</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・復興募金運動着手</li> <li>・最寄会(芝、小石川、牛込)始まる</li> </ul>
1926	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ILO東京支局、婦人労働委員会設置</li> <li>・大正天皇没、昭和と改元</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「青年訓練所令」及び「青年訓練所規程」公布</li> <li>・処女会、青年団、教化団体の事務所管が文部省に決定</li> <li>・日本女子体育専門学校設立</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・第1回建国祭に青年団多数参加</li> <li>・大日本連合青年団第1回海外視察団満鮮に赴く</li> <li>・「青年団体二閣スル件依命通牒」(団体設置区域、団員年齢、団体指導者、団体経費)</li> <li>・文部省全国処女会調査</li> <li>・内務、文部両大臣、女子青年団への最初の訓令「女子青年団体の指導誘掖に関する件」地方長官に「女子青年団体に関する件」通牒</li> <li>・文部、内務関係者及び青年男女指導者による「女子青年団の振興に関する」研究協議会開催</li> </ul>		<ul style="list-style-type: none"> <li>・東京YWCA第1回事務職員会</li> <li>・商工部を有職婦人部と改称クラブ活動盛ん</li> <li>・商工部、労働問題研究会開催</li> <li>・職業婦人休養所「憩いの家」落成</li> <li>・「地の塩」創刊・教育部(英語科6科他、商業科5科)</li> </ul>
1927	<ul style="list-style-type: none"> <li>・金融恐慌</li> <li>・第1次山東出兵</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・社会教育主事会議、青年女子団体の全国連合組織化を答申</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・文部省より大日本連合青年団国庫補助1万円</li> <li>・処女会中央部解散</li> <li>・大日本連合女子青年団創立</li> </ul>		<ul style="list-style-type: none"> <li>・米国Y有職婦人連盟呼びかけによる有職婦人国際晩餐会開始(後の世界会員日、現世界YWCAデー)毎年開催</li> <li>・銀行、病院などのレク指導</li> <li>・有職婦人クラブ定期体格検査開始</li> <li>・財団法人認可</li> </ul>
1928	<ul style="list-style-type: none"> <li>・普選第1回選挙</li> <li>・特別高等警察課新設</li> <li>・3.15事件</li> <li>・張作霖爆殺事件</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・男女青年団体に関する事務、文部省主管となる</li> <li>・内務省社会局『男女優良青年団体実績一斑』刊行</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・樺太青年団加盟</li> <li>・第1回青年創作副業品展覧会を日本青年館にて開催</li> <li>・第1回登山講習会挙行</li> <li>・第1回産業講習会開催(北海道、兵庫、福岡)</li> <li>・女子青年団「団旗」完成(東京高等工芸学校協力)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・京阪神: 商工部労働問題研究会開催</li> <li>・横浜Y: 雑誌「BG」発行10クラブ200余名</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「駿河台女学院」認可</li> <li>・小中学校男女教員対象の行進遊戯暑期講習会</li> <li>・英語部児童科設置(御大礼奉賀式記念事業)</li> </ul>
1929	<ul style="list-style-type: none"> <li>・世界大恐慌</li> <li>・4.16事件(共産党員全国的検挙)</li> <li>・政府首相他、婦人大会(東京・関西)にて消費節約、勤儉貯蓄を直接要請</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・文部省に社会教育局新設—青年教育課にて男女青少年団体、青年訓練所、実業補習学校、その他青少年教育に関する事務取扱</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「青年団綱領」制定「我等ハ純真ナリ」</li> <li>・「大日本連合青年団表彰規程」(発明賞、産業賞、体育賞)制定</li> <li>・第4回海外視察団、支那に派遣</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・神戸Y: 須磨海岸カテージ開所</li> <li>・大阪Y: 天満紡績工場ストライキ参加女工100余名仮泊</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・新会館献堂式(日本初女子屋内プール・カフェテリア・寝室部開設)・労働部開始「キリスト教主義に基づき、婦人の向上教化を図ることを目的として労使間に於いて厳正中立を標榜して着手すること」</li> </ul>

1930	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ロンドン軍縮会議</li> <li>・第1回全日本婦選大会</li> <li>・農村豊作飢饉</li> <li>・全国友の会結成</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・文部大臣、家庭教育振興に関する訓令</li> <li>・文部省「母の講座」開設(東京・奈良両高師、金沢・岡山両医大に委嘱)</li> <li>・文部省、青年教育拡張に関する訓令</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・浴恩館開館</li> <li>・「日本青年新聞」創刊</li> <li>・第1回青年団賞授与</li> <li>・「青年団礼式」発表</li> <li>・公共生活訓練運動開始</li> <li>・『女子公共生活訓練本義』、『女性と公共生活』(女子青年公共生活訓練指導者講習会テキスト)発行</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・日Y:労働調査部、名古屋インダストリアル・センター(「友の家」労働婦人の憩いの家)設置、女工教育、労働事情調査に着手</li> <li>・京都Y:職業婦人キャンプ 136名参加(比叡山)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・駿河台女学院夜間部を実学部とする</li> <li>・工場世話係講習会開催</li> <li>・白山、千住の生活困窮者救済事業実施</li> </ul>
1931	<ul style="list-style-type: none"> <li>・大日本連合婦人会発足</li> <li>・満州事変</li> <li>・農村の窮乏極みに達する</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・文部省社会教育局『現代家庭教育の要諦』刊行</li> <li>・連合婦人会東京に家庭女学校(未婚女性対象)開設</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・第1回青年団指導者養成所開設(浴恩館)</li> <li>・皇太子行啓を記念、第1回郷土週間[青年団大会、郷土舞踊と民謡の会、創作副業品展覧会]と第1回一人一研究資料展覧会を開催</li> <li>・本部内に農村問題研究会を組織(農村経済の緊迫)</li> <li>・熊谷主事全国青年団を代表して満州士慰問(第6回海外視察団満支訪問の折)</li> <li>・「北満州駐屯郡慰問使派遣」事業着手</li> <li>・「満蒙派遣軍遺家族慰問義金」募集(連青合同)</li> <li>・「満蒙派遣軍慰問報告大会」連青、連女青、東京府市男女青年団共同主催</li> <li>・片岡重助『女子青年団指導教範』刊行</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・名古屋「友の家」:土曜学校及び求職婦人の無料宿泊所開設、農繁期託児所実施(児童70)</li> <li>・日Y:労働調査部、女工教育開始(西多摩郡笹本製糸工場)80余名参加</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・第1回野尻キャンプ(野尻湖外人村)</li> <li>・山岳会発足(日本初の女子山岳会)</li> <li>・有職婦人クラブ事業として消費組合(後の購買部)設置</li> </ul>
1932	<ul style="list-style-type: none"> <li>・上海事変・リットン調査団(国連満州事変調査団)来日</li> <li>・満州国建国宣言</li> <li>・5・15事件</li> <li>・大日本国防婦人会創立</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・高女、実科高女で公民科必須科目となる</li> <li>・文部省国民精神文化研究所設置</li> <li>・全国中等学校女教員会創立</li> <li>・文部省 社会教育委員並びに社会教育委員会を設置</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・京都市市男女連合青年団主催第一回青年工大創作産業品展覧会開催(同時開催、青年創作副業品・一人一研究展各覧会)</li> <li>・大日本連盟青年団第一回社会教育研究生4名採用</li> <li>・第一回海外発展講習会開催(神戸市国立移民収容所)</li> <li>・第一回指導者養成講習会(対象:青年指導の中堅となるべき師範学校、農学校、実業教育養成所などの生徒52名)</li> <li>・「青年団時局対策」決定</li> <li>・第一回満州産業研究団派遣(全国篤志農青年21名)</li> <li>・内務省より事業補助9,000円交付(時局対策費)</li> <li>・第1回農家経営講習会開催</li> <li>・第1回全国青年篤農家大会開催</li> <li>・文部省、全国男女青年団思想調査に着手</li> <li>・傷痍軍人遺家族への奉仕週間(連合婦人会、愛国婦人会との共催)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・日Y:労働調査部、女工生活状態調査作成、小金井村編物講習会開始、平均農村青年25名参加、女工懇談会、</li> <li>・名古屋「友の家」、失業救済事業(お茶振り)、工場婦人のため国語・英語・手芸・料理等を行う</li> <li>・横浜Y:コンニチハクラブ初会合、世界各国の職業婦人(主に女教師)40名参加</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・家庭婦人クラブ連合委員会発足</li> <li>・オペレッタ「マジェンカ」公演</li> <li>・野尻キャンプ場設置</li> <li>・労働週間を守る</li> <li>・「私共の家」開設隣保事業開始(白山)</li> </ul>
1933	<ul style="list-style-type: none"> <li>・独ナチス政権獲得</li> <li>・京都帝大満川事件</li> <li>・満州移民計画大綱発表</li> <li>・国際連盟脱退</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・文部省社会教育局 非常時国民運動開始、講演会並びに協議会を各地で開催(連合婦人会、女子青年団共同)</li> <li>・文部省『非常時と国民の覚悟』(文部省・外務・陸海軍共編)を学校・教化団体へ配布</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・第1回漁村青年団指導者講習会開催</li> <li>・大日本連合青年団に更生運動部新設</li> <li>・第1回漁村青年団幹部講習会開催</li> <li>・第1、2回郷土新興講習会開催</li> <li>・清溪寮開館</li> <li>・第1回全国商工精励青年大会開催</li> <li>・都市商工青年に「生業資金」貸付開始</li> <li>・連合婦人会と共催で国民更生運動研究協議会の実施、帝都非常時女性訓練運動の提唱</li> <li>・視察団、慰問団を満州に派遣(連合婦人会、国防婦人会等も)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・日Y:労働調査部、労働問題及び社会問題講習会(毎週2回)20余名</li> <li>・日Y:労働調査部を労働研究部と改名</li> <li>・名古屋「友の家」、第2回工場世話掛懇談会28名、以後世話掛研究会常設、農繁期託児所開設、夏期休憩所開設</li> <li>・名古屋Y:発会式</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・世界YWCAアジア地域会議(上海)加藤タカ、山本コト、Mロー出席</li> </ul>
1934	<ul style="list-style-type: none"> <li>・満州国帝制実施(行程簿儀)</li> <li>・東北地方冷害、大凶作</li> <li>・キュリー夫妻、人工放射能放出成功</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・文部省、思想局設置</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・大日本連合青年団十周年記念大会開催</li> <li>・第1次建国史跡巡歴講習会開催</li> <li>・大日本連合青年団南洋産業研究団派遣</li> <li>・公民教育講習会開催</li> <li>・青年団国民精神作興研究協議会を全国4ヶ所で開催</li> <li>・郷土資料陳列所開所</li> <li>・「青年団授産資金貸付規程」設</li> <li>・家庭科学研究所開設(連合婦人会と共催)</li> <li>・「全国女子青年団服並女子作業服募集」</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・日Y:名古屋「友の家」名古屋YWCAへ移管</li> <li>・名古屋Y:「友の家」事業部を設置、職業婦人問題座談会17名、冬期農村編み物講習会42名</li> <li>・各市Y有職婦人クラブ代表会合、全国有職婦人連盟組織</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・印刷局女工料理講習会5回</li> <li>・有職婦人クラブ事業として、洋服相談部設置</li> <li>・BG劇グループ発足</li> <li>・国際子供まつり(19ヶ国子供達約150名参加 日比谷公会堂)</li> <li>・国際友好部設置</li> <li>・職員住宅YWCAホーム落成</li> </ul>

1935	<ul style="list-style-type: none"> <li>・天皇機関説事件</li> <li>・衆議院、国体明徴決議案可決</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・勅令41号「青年学校令」「青年学校規定」公布</li> <li>・文部省 国体明徴に関する訓令</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・東北振興青年団幹部座談会（岩手所、青森、福島、山形）</li> <li>・文書普及に関する近府県連合青年団役員協議会開催</li> <li>・全国農村青年団産業部長大会開催</li> <li>・『日本女性鑑』刊行（連合婦人会と共編）</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・日Y：労働週間、資料「労働婦人の話」5千部発行、各市Y、学校Yで実施（以後1940まで）</li> <li>・日Y：御殿場託児所開設（～1939）、託児所母姉慰安会400名</li> <li>・衛生講話、活動写真上映</li> <li>・名古屋Y：友の家事業部、女中慰労会52名、派出婦人講習会3期</li> <li>・神戸Y：六甲山に婦人休養所建設</li> <li>・大阪Y：職業紹介所宿泊所落成式</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・劇研究グループ第1回公演</li> <li>・東京YWCA女学部大会「基督教者学生と平和」400名</li> </ul>
1936	<ul style="list-style-type: none"> <li>・2.26事件</li> <li>・日独防共協定調印</li> </ul>	文部省、日本語学振興委員会設置	<ul style="list-style-type: none"> <li>・6大都市連合青年団加盟</li> <li>・本部に体育研究会を設置、青年団体育振興協議会を開催</li> <li>・女子青年技能修練制度開始（参事 片岡重助発案）</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>日Y：労働研究部、横浜Y共同で川崎事業着手（工場婦人グループ25名）、ILO・万国Y依頼により職業婦人に関する調査701名実施</li> <li>・京都Y：京都女子学院（家政教育）認可開校</li> <li>・名古屋Y：有職少女部指導者講習会</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・30周年記念事業母子ホーム（+保育園）設立、体育師範部設立・翠香寮閉鎖（母子寮にするため）</li> </ul>
1937	<ul style="list-style-type: none"> <li>・母子保護法公布</li> <li>・盧溝橋事件（日中戦争開始）</li> <li>・国民精神総動員中央連盟結成</li> <li>・日独伊国防共協定調印</li> <li>・国民精神総動員婦人大講演会</li> <li>・パーマメントはやめましょう</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・文部省編『国体の本義』全国学校・教化団体へ配布</li> <li>・内閣に教育審議会設置</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・軍用飛行機献納計画発表（陸海軍各1機献納）</li> <li>・「時局実行要目」決定</li> <li>・国民精神総動員青年団実施計画発表</li> <li>・事務局総則改訂し、訓練、産業、拓殖の3部門を設置。時局対策委員会を設ける</li> <li>・第1次第2次青年団指導者満州移住地視察団出発</li> <li>・「時局対策要綱」発表（連合婦人会合同）</li> <li>・女子義勇隊運動</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>大阪Y：母子ホーム開設、夜間女学校文部省認可（日本初夜間女学校）</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・2世及中華留学生友好事業開始・出征家族慰問金、慰問袋募集</li> </ul>
1938	<ul style="list-style-type: none"> <li>・厚生省設置</li> <li>・国民総動員法公布</li> <li>・隣組制度充足</li> <li>・近衛声明（東亜新秩序建設）</li> </ul>	文部省、集团的勤労作業運動実施を通牒（勤労動員開始）	<ul style="list-style-type: none"> <li>・青年団体力検査実施</li> <li>・「大日本連合青年団綱領」決定「我等は大日本青年なり」</li> <li>・朝鮮、台湾連合青年団加盟</li> <li>・産業経済総動員運動実施、満蒙開拓青少年義勇軍編成支援、専任指導員設置奨励を行う</li> <li>・「満蒙開拓青少年義勇軍激励袋」募集（連青、連女青協働）</li> <li>・「拓殖訓練事業」開始</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・日Y：労働研究部、婦人労働者家庭の献立調査実施</li> <li>・神戸Y：須磨保育園設立</li> <li>・大阪Y：扇町職業紹介所、扇町婦人相談所となる（～1942）</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・体位向上レクリエーションデー（国領）466名</li> <li>・有職婦人部20周年記念事業全国職業婦人生活調査実施</li> <li>・翠香母子寮並びに保育所献立式</li> <li>・国際子供デー「世界仲よし旅行」参加21か国650名</li> </ul>
1939	<ul style="list-style-type: none"> <li>・米穀配給統制法公布</li> <li>・国民徴用例公布</li> <li>・日米通商条約破棄通告（米国より）</li> <li>・第2次世界大戦開始</li> <li>・朝鮮総督府創氏改名強制</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・大学、軍事教練必修制</li> <li>・青年学校義務制実施</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・農業報国運動開始</li> <li>・大日本連合青年団→大日本青年団と改称</li> <li>・大日本青年団学生隊結成</li> <li>・「女子よ家庭に帰れ」運動開始</li> <li>・各地で「女子青年団拓殖訓練講習会」開催</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>労働研究部、全国会員家庭の「女中さん調査」実施</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・白山「私共の家」廃止</li> <li>・翠香保育園廃止</li> <li>・日本Yと東京Yの一体化始まる、「地の塩」終刊</li> </ul>
1940	<ul style="list-style-type: none"> <li>・婦選獲得同盟解散</li> <li>・日独伊3国同盟調印</li> <li>・大政翼賛会発会</li> <li>・紀元2600年祝賀行事</li> <li>・大日本産業報国会創立</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・文部省内に家庭教育研究会設置</li> <li>・文部省、女子師範教諭対象に家庭教育指導者講習会開催</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・本部に興亜部設置</li> <li>・満州建設勤労奉仕隊派遣</li> <li>・第1回青年団幹部大陸現地訓練実施</li> <li>・産業経済報告運動実施・節米1割報告運動呼びかける</li> <li>・銃後女性貯蓄報告運動開始（連合婦人会、社会教育会共催）</li> <li>・「開拓士結婚相談所」開設（女子会館内）</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・日Y：1940外国人幹事全員帰国</li> <li>・名古屋Y：総合女学校開設</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・朝鮮女子学生寄宿舎開設</li> <li>・内閣印刷局委託「女子局員心身鍛錬会」（保田）985名</li> <li>・国際友好部廃止</li> <li>・寝室部閉鎖</li> <li>・有職婦人クラブ消費組合、洋服相談部会へ移管</li> </ul>
1941	<ul style="list-style-type: none"> <li>・家庭婦人雑誌整理統合要請（警視庁）</li> <li>・東条英機内閣成立</li> <li>・真珠湾奇襲（太平洋戦争開始）</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・閣議で婦人団体統合要項決定</li> <li>・国民勤労報国協力令公布（男子14～40歳、未婚女子14～25歳に年間30日以内の勤労奉仕義務法制化）</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>「大日本青少年団」結成式（大日本青年団解散）</li> <li>・女子青年団、大日本青少年団に統合</li> </ul>	川崎事業中止	<ul style="list-style-type: none"> <li>・在京中華民国、満州女子留学生親善とレクリエーションの会</li> <li>・青年キャンプ以外キャンプ取りやめ</li> <li>・保田休養所増設（内閣印刷局女子工員訓練）</li> <li>・駿河台女学院報国隊結成</li> <li>・女学生クラブ廃止</li> <li>・大日本青少年団主催農繁期共同託児</li> <li>・共同炊事に参加100名</li> <li>・宮城外苑整備勤労奉仕参加（～43）延べ1002名</li> </ul>

『大日本青年団史』大日本青年団残務整理委員会編纂 著者及び発行人 熊谷辰治郎（日本青年館）1942年  
 国立教育研究所編『日本近代教育百年史 第7巻 社会教育』財団法人教育研究振興会 1974年  
 千野陽一『近代日本婦人教育史―体制内婦人団体の形成過程を中心に』ドメス出版 1979年  
 渡邊洋子『近代女子社会教育成立史』明石書店 1997年  
 渡邊洋子『1930年代の女子青年団と男子青年団』橋本紀子他編『ジェンダーと教育の歴史』第7章 川島書店 2003年  
 財）日本女性学習財団編『女性の学びを拓く 日本女性学習財団70年のあゆみ』ドメス出版 2011年  
 三井為朝編『日本婦人問題資料集成 第4巻教育』ドメス出版1983年  
 阿部義宗編『日本YWCAにおけるキリスト教学校教育の現状』基督教学校教育同盟 1961年  
 日本YWCA100年史編纂委員会編『日本YWCA100年史年表』日本YWCA 2005年  
 東京YWCA100周年記念委員会編『年表東京YWCAの100年』東京YWCA 2005年  
 文部科学省 ホームページ 「学制百年史」 <http://www.mext.go.jp> 2015年2月2日



巻末資料2 東京YWCA機関誌『地の塩』記事一覧

発行年月日	号数	頁	欄	タイトル	執筆者
1926.7.24	1	1	標語 " " " " 創刊にのぞみて 創刊『地の塩』について  本号目次	日本基督教女子青年会標語 東京基督教女子青年会十五年度標語 挨拶 " " 創刊にのぞみて 創刊『地の塩』について	会長 志立タキ 総幹事 加藤タカ 会員部 濱田成子 内池ヨネ
		2		宗教部 会員部：年会、委員会、聖書研究、会員デー、 最寄会 私共の復興 第一回修養会に出席して お客様	横倉弘子  H子
		3	ニュース	家庭部：精華クラブ、光和クラブ、組、講習会 人事相談部 或月曜日のひる 震災記念祈禱会 教育部始業式 修養会思い出の会 東京女子青年会の遠足	河野静子 野呂景子 受付 林田 慎
		4	写真	学生部 東の空に現れた不思議な現象 英語部 食堂 販売部 商工部 戸山ヶ原へ、クラブ指導者養成科の遠足	宮城文子 ミルトレット・ロー 大石ふか 吉澤なつ 岡田美喜 鈴木富得
		5	個人消息	商工部続き：事業報告 "クラブ、集会、職業婦人役員会、特別集会、 講演、講習会、組、遠足、休養所、婦人宿泊所  商業部：TSクラブ(昼)	  酒井愛子
		6		商業部続き：TSクラブ(夜) 体育部 保田のおもひで 此夏の講習会(於保田休養所)	荻村操
		7	私共の会の枢機 " 写真 " " 編集の後	幹部委員氏名 宗教部、寄宿舎、会員部、家庭部、商工部、 学生部、各委員氏名 少女部入会式 ドミニオンデー(カナダ紀元節) ドミニオンデー  発送係より	     宮城文子
		8	生徒募集	一般語婦人方への福音！！ 本会教育部一覧	
1926.9.25	2	1	標語  カット  本号目次	* 1号と同じ 秋と心 トルストイの言葉 秋の色 富士岡荘にて詠める	宮城文子  K K
		2	夏の一週間	御殿場一ある朝のそぞろ歩き 秋に めぐまれた集ひ 保田生活断片 キャンプの小話	M子 一会員 関梅子 橋本繁子 S子
		3	写真  ニュース " "	会員部 拝謁を賜りて 英語部 商業部 少女部 体育部 体育 果物をよせたプディング 職業婦人連合祈禱会 ストウジ博士ご夫妻の来訪 幹事の聖書研究	加藤高子
		4	海外だより "  個人消息	外遊の河井先生より ミスロバートソンのお便りから 関西工場視察の帰途より	河野静子 鈴木とみえ

			// // 編集を終へて	会員の御日出度き事 かなしき事 暑中寄宿舍の窓から	内池ヨネ
1926.10.15	3	1	標語 カット 新会館内容説明 // // 本号目次	*1号と同じ 復興建築趣旨 新会館 レンズの価値 新会館内容説明 計画工費 新会館内部諸部屋見積	
		2	ニュース // // //	ストウジ博士のお話 学生部 少女部 家庭部 体育部 商業科の目的 ビジネスエセックス 内務省社会局復興建築資金補助3万円交付 国領献堂式及祝賀会 募金スタート祈禱会 青い鳥クラブ文芸講演のタ予告	石川静子 ミッドレッド・ロー エセル・デビス
		3		募金運動に際して // // 復興の為のはたらき 会員部 最寄会の感想	志立タキ 加藤タカ 橋本君子 小谷野かつ
		4	個人消息 // 寄宿舍欄 // // 編集の後に * 広告	職業婦人連合祈禱会 一会員より 寄宿舍欄 寄宿舍欄 ご両親様 坂爪写真館	松井よし子 安藤坂寄宿舍の母より 村田美代志 板谷伯 野呂景子
1926.12.15	4	1	標語 本号目次	*1号と同じ 国際平和の光	
		2	個人消息	海上大学を迎へて 静思と祈禱(国領献堂式説教梗概)	宮城文子 桑田秀延
		3	写真	国領「憩の家」 国領「憩の家」について ハロウィンパーティー断想 すべてはエホバの所有(祈禱会奨励)	山賀とみえ 留川順子
		4	宮内省告示	募金の話 社会事業奨励貳千円下賜 工場を訪れて 会館をおとづれし友	平澤英
		5		真の健康 英語部 少女部 少女部 商工部 国際デー ビジネスエセックスの組に出て	ギボンス かほるクラブ 小林
		6	安藤坂寄宿舍便り 編集後記 広告 //	苦力の生活 感想四題 坂爪写真館 山形屋紙店	正田淑子 二枝 渡邊
1927.2.26 第21回年会号	5	1	標語 本号目次	*1号と同じ 挨拶 所感 // 短歌	志立タキ 加藤高子 内池よね 榎富照子
		2	写真	復興資金募集運動の概略 宗教事業 国際友誼 少女部対話国際連盟会議 一般	

			職員移動	1926.1～1927.2)	
		3	写真 2枚 カット 2枚	国領「鵜の家」のこと 職員 国領に於いて 有職婦人部 雪の富士登山 雪の富士登山	一委員
		4		学生部及少女部 学生部及少女部 商業科 家庭部	一委員 一幹事
		5		家庭部続き 会員部 英語部 体育部	
		6	写真 カット	会計報告 1926.1.～12 真の健康(二) 行って参ります 行って参ります 雪の富士登山	ギボンス 安齋とみえ
		7	はがき便り 個人消息 カット	姐の音 納戸町第一寄宿舎 安藤坂第二寄宿舎 翠家寮  新入会員氏名 雪の富士登山	
		8	家庭問答欄  編集を終へて 一面 広告	(予告) 隅感  洋服製図仕立て 堀尾幸子 坂爪写真館 英国屋 毛糸と編物製品 山形屋紙店 書籍「西洋料理」 東京女子青年会 東京聖書学校 生徒募集	堀尾幸
1927.3.26	6	1	標語 " カット 本号目次	日本基督教女子青年会標語 *1号と同じ 東京女子青年会昭和二年度 目を覚しかつ祈れ 新会館前景	村尾昇一
		2	カット  新学期御案内	新会館 商業科卒業生を送るに当たりて 納戸町卒業祝 年会報告 ニュース 英語部 英・商・音各科、家庭・体育各部	ブラウニング
		3	一面: 故会員の追悼会  写真	故会員の追悼会 "(寺内よしえ) "(渡部光子、伊集院秀子) "(小松美津子) "(里美美代子) "(吉田進子) "(梅田壽恵子)  故会員の追悼	酒井愛子 野呂景子 橋本君子 荻村操 中村春子 山崎恩貴子 会員一同、福井かつ子
		4	はがき便り * 広告 " " "	日米親善の使者を迎へて  坂爪写真館 東京聖書学校 生徒募集 山形屋紙店 女子文化高等学院 学生募集 4月開校	宮城文子
1927.4.26	7	1	標語 本号目次	*6号と同じ 生命の泉	勝部武雄
		2	写真 個人消息 "	生花 牡丹の生花 新会員紹介 個人消息 北丹後の報告 アメリカへの贈物	久野連峯  有職婦人部クラブ
		3	一面 健康 (含むカット)	衛生週を催すにあたって プログラムについて	

			一般・有職婦人のため、女学生のため、郊外運動デー	
		4	同上	国民体育 家庭体操(含むカット) 靴について 荻村操
		5	同上	*靴についてつづき(含むカット・写真) 小児服について 病人と小児のために(料理紹介)
		6	編集を了へて 広告 " " " " 坂爪写真館 東京聖書学校 生徒募集 山形屋紙店 白木屋(御婚礼衣裳)	
1927.6.10	8	1	標語 本号目次	*6号と同じ 我は道なり生命なり(伝道週間日曜礼拝説教) 青山学院教授 今井三郎
		2	個人消息	伝道週日課 私の信仰に入った過程 安藤坂寄宿舎卒業生の方々へ お客様 舎の母より
		3	写真 " " 衛生週の会館 ベビーデー 郊外運動デー バレーボール(国領) みつ豆の店(国領) 弓(国領) 学生日	堀つたへ
		4	棒グラフ 棒グラフ 統計表	自らを知れ パンジー(詩) 商業部 商業科東京女子青年会一覧表 (在学卒業退学数、収入) 卒業生中ヨリノ青年会員制(1921~1926) 幸福な足と不幸な足物語 *衛生週間身長体重握力統計
		5	写真 2枚 ニュース はがき便り	生花 生花 ああ早く心地よい会館がほしい 夏の飲物 京都古流家元 久野連峯
		6	一面 広告	映画の集ひ 東京女子青年会 靴 東京女子青年会 坂爪写真館 東京聖書学校 生徒募集 山形屋紙店 白木屋(御婚礼衣裳)
1927.8.2	9	1	標語	*6号と同じ 河合道子先生の話(講演内容)
		2		キャンプ いらっしゃい保田キャンプへ 保田キャンプびらき ロー テル子
		3	カット 写真 2枚	会館 To My Mother 慈母 商業科の一日 花組修気会より 花組修気会 Miss R. D.
		4		有職婦人部クラブ連合会 国領の思出 圓谷しな子夫人を訪ひて 森田桂子
		5	写真 ニュース 個人消息	「映画の集ひ」報告 文芸会(於女子学院講堂) 七月四日(米国独立祭) ドミニオンデー
		6	編集終りて 時候の挨拶 広告	英国から 女子夏期大学 国民婦人会主催 憩の家 (暑中御見) 山形屋紙店 安齋トミエ

			//	白木屋(御婚礼衣裳)	
1927.11.15	10	1	標語 本号目次	* 6号と同じ 社交と孤独(御殿場思出会講演)	勝部武雄
		2	たより	美術の秋 英国から (無題)	安齋トミエ 圓谷司那子
		3		慰廃園見学記 煙草工場を見て 卒業の日の金森氏(含む写真)	永瀬栄子 山添通子
		4	紹介欄 編集後記	中国の政治(小石川最寄会) 国領会 御案内(万国祈禱週・新会館建設の祈禱会) 報告一束 求職の部、求人の部、其他	張清鑑 有職婦人部クラブ
1927.12.30	11	1	標語 写真	* 6号と同じ 西野清子姉略歴 弔詞 会長 故西野清子姉 編集係より	加藤高子
		2	時候の挨拶	思い出すまま 西野奥様の死を悼む クリスマス クリスマスのお知らせ(商業科) 報告一束 (新年) 高木美代子(服喪中挨拶遠慮)	岡田みき 澤柳五之助
1928.2.25 第22回年会号	12	1	標語 第二十二回年会を 迎ふるに当って // 本号目次 写真	* 6号と同じ 挨拶 所感 St. John and the Lamb	副会長 内池よね 総幹事 加藤高子
		2	復興事業経過 // //	所感 建築経過(含むカット・建築現場) 募金経過	復興委員長 志立タキ
		3	復興事業経過 // カット 写真	募金経過 各部各科募金状況報告 会館部 会館部 お料理の上手な「よし江」さん 定礎式式場	
		4		会員部:報告(入会者氏名71名他) 宗教教育方面	
		5	写真	学生部及少女部報告:少女部 // :学生部 女学生キャンプ バレーボール 商業科教室の一年 商業科を訪ねて	宮城文子
		6	写真	有職婦人部 朝の礼拝 国領にて 翠香寮 安藤坂寄宿舍	香川つね 安藤坂寄宿舍の母より
		7		家庭部 英語科報告 体育部報告	
		8	職員異動 個人消息 はがき便り	一般 (1927.3~1928.2) 幹部委員消息	
1928.3.25	13	1	標語 // 本号目次	* 6号と同じ 東京基督教女子青年会昭和三年度 家庭(日曜礼拝における講演) 目標「家庭」について 女子青年会家庭との関係	基督教婦人矯風会副会頭 ガントレット恒子
		2		日本に於ける青年会の位置 特に宗教教育 の一機関として見たる(22回年会に於ける講 演) 年会報告 幹部委員会	東京基督教青年会総主事 斎藤惣一

				臨時相談会 卒業生を送るの辞	学生部幹事 丹羽多香子
		3	予告  写真 写真	卒業生を送るの辞続き 活早天礼拝(復活祭) 少女部の運動に就いて 雛祭り:家庭部 雛祭り:少女部 雛まつり 船出(米国女子青年会総会出席) 船出(米国女子青年会総会出席) 保健週予告	
		4	職員移動 おたより 新学期御案内	有職婦人部 商業部  英語科、商業科、家庭部、体育部、音楽科 学生寄宿舍、有職婦人寄宿舍	
1928.5.10	14	1	標語 基督教女子青年会 研究(一)  本号目次	* 13号と同じ  起源及萬国基督教女子青年会 光	H子
		2	一面 健康 保健週	健康 保健週間プログラム(教育部、家庭部、有職婦人部、会員部、学生部) 保健第一日 学生保健日に於ける三輪田繁子氏談	加藤高子  体育部
		3	写真	青春の泉を求めて 米国体育学校で学ぶ河西さん	体育部主任ミス・ギボンス 放送分
		4	職員移動 個人消息 はがき便り 広告	現代社会は健康なる夫人を要し 真の健康 は正しき習慣と知識とに基く お客様 元田作之進先生を偲びて  京都基督教女子青年会寄宿舍規則	少女部  酒井愛子
1928.6.8	15	1	標語 基督教女子青年会 研究(二) 目次	* 13号と同じ 萬国基督教女子青年会及主要なる加入基督教女子青年会	
		2	一面 伝道週間	キリスト的生活	山室軍平
		3		聖画につきて(2画写真にて掲載) 濱とら子夫人を訪ねて	ゲーリ氏談 K子
		4		栄養と経済	中村不二先生講演
		5	個人消息  おたより 内地	母の会  小ちやいJOAK セレーオークより  世界日曜学校大会出席代員送別会報告	一会員千鶴子 安齋とみゑ
		6	人事相談部より 広告 " "	人事相談部より 映画会 夏向き料理講習会 翠香寮寮生募集	東京基督教女子青年会 家庭部 翠香寮
1928.6.29	16	1	標語	* 13号と同じ 基督的生活(つづき)	山室軍平
		2	写真	基督的生活(つづき) 国領の半日 映画の会 報告 国領のテニスコート開き 国領のテニスコート開き	山室軍平 幹事家庭会 K子
		3	広告 "	第23回夏期修養会 女学生キャンプ、一般婦人キャンプ	基督教女子青年会日本同盟
		4	ニュース  広告	御大典記念日本宗教大会報告 夏向きの冷たい飲み物 保田キャンプ 教育部案内	東京基督教女子青年会
1928.7.31	17	1	標語 基督教女子青年会 研究(三) 目次	* 13号と同じ 萬国基督教女子青年会及主要なる加入基督教女子青年会	

		2	国領会 有職婦人部 文芸会(写真あり) 七夕祭(写真あり) 新会館招待会 大使館巡り 美味しい西瓜(*国領広告)	湧泉 鬼頭  少女部
		3	節子姫の御帰朝を祝して(写真あり) 会員部近況 七月の商業科 英語部近況 酒なし日	
		4	写真 おたより 予告 興津はつ子夫人訪問 高木美代子様(研究に御出帆) 保田たより 始業式、幹部委員会、思ひ出会、海外おみやげ話会(汎太平洋会議・ブタペスト大会・中華女子青年会大会出席者)	
1928.10.5	18	1	基督教女子青年会研究(四) 目次 萬国基督教女子青年会及主要なる加入基督教女子青年会 中華基督教女青年会第二回全国大会に出席して(写真:上海のホステルハウス)	酒井愛子
		2	募金経過並計画 経過、新計画(図) 復興計画工費総収支一覧表 職業婦人連合会報告 一年間の事業報告 協議会決議事項 懇談会	
		3	富士岡荘で感じたまを(写真:御殿場プール) 一般部より 御殿場修養会に列席して(写真:女学生キャン	専門部 森山とよ 山本俱子 女学部 前田君子
		4	個人消息 たより(海外から) 予告 キャンプの感想 夏季遊戯講習会 10月予定	中雪子 体育部 竹内菊枝
1928.11.5	19	1	基督教女子青年会研究(五) 目次 萬国基督教女子青年会及主要なる加入基督教女子青年会 萬国祈祷週	
		2	募金運動の経過 十月七日(*募金運動開始の日) キリスト教は実生活に適應し得るか 体育部 テニスのお好きな皆様へ(*国領広告 写真あり)	商業部 デビス
		3	汎太平洋會議に列して 英語部新計画とその趣意書 由比ヶ濱の月なし月見	藤田たき子先生のお話 有職婦人部
		4	個人消息 編集後記 広告 予告 秋草の活花に就いて(写真:活花3種) 英語児童科生徒募集(駿河台女学院英語部) 11月予定、募金額目標	京都古流家元 久野蓮峯
1928.12.25	20	1	標語 本号目次 *13号と同じ クリスマスイブ	
		2	クリスマス カロル 去年のクリスマス 黄金の樹(写真あり) 無題(クリスマスに因んだ話) クリスマス一束	安齋トミエ 少女部 ミス・リン談
		3	国際日 商業科:近況 会員部 会員部:最寄会 少女部(写真あり) 家庭部:クリスマスキャンデー	
		4	募金報告:第三回募金各部成績表 キリスト教は実生活に適應し得るか(前号つづ	デビス
		5	思ひに浮ぶまを 横浜BGクラブより ジャバの芳野友子様より	金谷勝子
			個人消息	

			写真 ニュース	国際デー6カ国風俗衣装	
		6	懸賞ポスター募集 時候の挨拶	(健康並に積極的健康の思想を表現する) クリスマスを祝し(幹部委員名列記)	
1929.2.11 新会館	21	1	標語	* 13号と同じ 新会館に入るに臨みて 祝辞 "	会長 志立タキ 津田梅子 河井道子
			本号目次		
		2		祝辞 "(英文) " " 建設を祝して所感を寄す 正面入口	安井哲 Mary P.E.. Nitobe 長尾半平 富士見町教会牧師 三好努 府立第一高女 市川源三
		3		新しき革袋に何を満たさんとする乎 所感 祝辞 " 新会館の落成にあたりて	中央社会事業協会 遊佐俊彦 基督教社会事業 生江孝之 婦人矯風会 久布白落実 市川房枝 同盟委員及幹事一同
		4		感想 東京基督教女子青年会館の建築に就いて 感想 輝かしき日を望みて 国領「憩の家」の近況	早稲田大学建築学科助教授 今井兼次 渡邊静 東京青年会 斎藤惣一 米村きみ
		5		新会館発見 祝辞(英文) 新会館を與へられて " お知らせ	河崎なつ Yokohama YWCA Carolyn Allen 有職婦人部 公平百々栄 少女部・学生部
		6	東京基督教女子青年会館新築工事概要	* 詳細、各階図面、各部会館使用率	有田桂太
		7	惜別の会 " " " 写真	プログラム 惜別会の歌 マクドナルド先生のお話 思出話 惜別会 翠香寮より 納戸町だより 安藤坂寄宿舎便り	会員 櫛田孝子 新藤幸子 香月 横井
		8		昭和三年度を終へて 総務部 会員部 家庭部 学生部・少女部	少女クラブ連合委員長 長瀬栄子
		9		有職婦人部過去一年間の行程 商業科の一年 体育部報告	クラブ連合委員会書記 内藤絹江
		10	カット	ハイドンの「天地創造」に就いて ハイドンの肖像 献堂式の歌(楽譜) 英語部報告	津川主一 (* 献堂式の歌作者)
		11	人事相談部 個人消息 編集後記 祝辞広告	復興費報告 落成記念週日程 辻組他工事関係者	
		12	祝辞広告(会館 カット)	工事及設備業者他	
1929.3.30	22	1	標語 " 基督教女子青年会 研究(六) 目次	* 13号と同じ 東京基督教女子青年会昭和四年度 日本基督教女子青年会 復活	日本同盟宗教教育部
		2	一面 第二十三回年	報告詳細 奨励	加藤高子



			協議 会員に関する件 新事業として 新事業として	橋本 体育部 竹内菊枝 計画部 渡邊登子
		3	新事業として(つづき) 挨拶 〃 感謝の詞(幹部委員の方に) 感謝の詞 ミス・かフマンへ 昭和四年度予算総額88,500圓(収支見込)	食堂部 内池よね YMCA 鈴木尙 日本同盟 山本琴子 福井嘉津子 大塚美香
		4	一面 新会館関連 献堂式(写真あり) 一般のこと 午後の催しものに就いて 水泳 午後の催しものに就いて タイプライター実演 展覧会に就いて 会員部 展覧会に就いて 体育部 展覧会に就いて 英語部 展覧会に就いて 商業部 少女部・学生部	
		5	チャペル開きに列席して(チャペルカットあり) 会旗の掲る迄 旗上式(カットあり)	山本琴子 現場監督 有田桂太
		6	四月のニュース 文芸会(写真あり) ロスキー女史を迎ふ ロスキー女史のお話 炉びらき(写真あり) ミス・カフマンの御母君御来朝	
		7	個人消息 広告 個人消息 広告 〃 〃 〃 〃	連合相談会 駿河台女学院第一回卒業式 *詳細報告 寮生募集(第一第二、翠香 各舎監名記載)
		8	駿河台女学院 新学期開始 カフェテリア 杉浦商会 石炭・コークス 味の素	
1929.5.25	23	1	標語 基督教女子青年会 研究(七) 目次	*22号と同じ 日本基督教女子青年会 メーデー 有職婦人部
		2	女子青年会の保健週 広告	フラ・アンジェリコに就いて 安井哲子先生のお話 聖なる音楽の夕 宗教講演会 ピクニックシーズンの憩の家 青年会郊外デー 青年会の目標、予定 映画の集ひ 和田栄作先生
		3	各部報告 〃 〃 〃 〃	家政部 英語部 商業部 学生部・少女部 基督教学生消費組合設立について 昭和四年度幹部委員氏名一覧 東京青年会の家族・職員組織及担当者氏名一覧 学生部 根本
		4	モット博士のお話(博士写真:世界女青年の慈父) 芳名簿のぞき(写真:講堂) 総房一週	
		5	はがき便り 個人消息	*海外より、英文あり (保田写真あり)
		6	一面 広告	貸家 阿部歯科医院 松屋 坂爪写真館 竹内器楽店 杉浦商会 石炭・コークス 東京基督教青年会 キリスト教講座会員募集
1929.7.15	24	1	標語 基督教女子青年会 研究(八) 外国YWCA便り 〃 目次	*22号と同じ 全国総会 チェコスロバキヤ 独逸

		2		賀川氏講演 宗教の本質	
		3	少女部	キャンプへ	少女部
		4		体育部 " プール(写真:プールにとびこむ一寸前) 商業部の見学 :明治製菓工場へ 英語部の近況 " *クノートン先生送別会	英語部 黒川千代子
		5	有職婦人部 " " "	クラブ入会式 新しく生れ出たクラブ 今年も開かれる保田休養所 講習 夏の計画、講習日カレンダー お珍しいお客様(*スイスY委員ヨハンナ夫人)	内藤きぬる 有職婦人部 有職婦人部
		6		映画会報告 追悼記念会(会員及会員近親者) 計画部(写真:会館日本間他) 忙しい時を割いて	受付 安井寛子
		7	おたより 個人消息		
		8		御別れする日 人形贈呈式(写真あり) 文学会 七夕の集のことども 杉浦商会 石炭・コース 阿部歯科医院 竹内器楽店	
1929.10.15	25	1	標語 基督教女子青年会 研究(九) 外国女子青年会使用 " 目次	*22号と同じ 第三回全国総会 ドイツ基督教女子青年会(続) 和蘭基督教女子青年会	
		2		専門部修養会(写真あり) 女学生修養会 保田のお台所から(写真あり) 女学生キャンプ便り キャンプ終わって(*参加者からの手紙)	
		3		一般婦人部修養会の感想 御殿場の感想 御殿場を思ひ出して 全日本婦人経済大会に出席して 連合婦人会代表者首相官邸訪問 会員部近況 納涼会	英語部一年 守谷婦志
		4		八獄登山の記(写真あり) 金剛山跋涉	
		5		お報せ:英語部 " :家政部 " :体育部 体育漫話 水泳プールのこと お客様  職員のこと 個人消息 便り 広告 " " " 東京基督教女子青年会 寮生募集	河西初子
1929.11.5	26	1	標語 目次	*22号と同じ 欧州婦人の生活	堀口九萬一
		2	基督教女子青年会 第三回全国総会	報告詳細 第三回総会に出席して(写真あり) 聖書の組(予告)	廣岡たか
		3		宗教部 " 万国祈祷週日程 " 国際親善日の計画 ガイドクラスに出席して 秋の好楽 英語部、商業部の遠足 寝室部、計画部 学生部 少女部 クラブラレー	

			個人消息 便り		
1929.12.5	27	1	標語  本号目次	* 22号と同じ 秩父宮妃殿下をお迎へ申上て 秩父宮妃殿下御成 光栄の時間	
		2		感激の日 妃殿下を御案内申上げて(写真3枚あり) 国際日の四階の陳列	加藤タカ
		3		萬国祈禱週(写真:マルコルム・マクドナルド氏、ジョン・ロックフェロー氏) キルパトリック博士との懇談会 国際日(報告)	石川静子
		4		英語部 商業部のクラス会 ガイドの失敗談 体育研究大会のぞき 国領運動会(写真あり) 職員慰労の集ひ	招かれた一人
		5		姿勢デー 姿勢は各自の性格を表現す(カットあり) 何が姿勢デーを催させたか(姿勢の心理学的考察) 学生部 少女部(写真あり) 有職婦人部(写真あり) 婦人常識講座 家庭婦人クラブ 聖書の組(予告)	
		6	個人消息 編集を終へて 広告 " "	印度に於ける学生運動 受付報告 25歳禁酒法期成同盟 中央委員会に出席して  明田美粧院 阿部歯科医院 体育部 矯正体操	山中志磨子
1929.12.30 クリスマス	28	1	標語  目次	* 22号と同じ 歓喜の誕生	山室民子
		2	クリスマス(一)	クリスマスの歌物語 青葉の式 少女部 クリスマス訪問、クラブ員2名報告文 学生部 学生クリスマス礼拝、クリスマスディナー 慰療園訪問	久壽恵子
		3	各部のクリスマス(二)	回顧一年 * 新会館の使命を果たす事切望 クリスマス祝して * Christmasについて(英文) 児童科 商業科 近所の子供のクリスマス	加藤タカ エマ・カフマン 井口活泉  英語部
		4	時候の挨拶 広告 " " " " " "	謹賀新年 幹部委員氏名一覧 大日本園芸商会 和洋生花 坂爪写真館 杉浦商会 石炭・コークス 亀澤堂製 御菓子調進所 T・O自動車 キャフェテリア	
1930.2.10	29	1	標語  本号目次	* 22号と同じ 何を見るか(写真あり)	植村環
		2		カフマン女史(写真あり) " 事業 " ミス・カフマンを祝して(天盃拝受) 学生部	
		3		宗教事業 会員部 少女部:クラブ一覧、少女部年中行事、クラブ 全会員写真 学生部:1頁つづき	
		4		有職婦人部報告 体育部:(参加数等グラフあり) " 爽快な水泳	連合委員会書記 藺秀子
		5		商業部:過去一カ年	

			英語部 " 児童科(写真あり) 学院生徒在籍数比較 感想(英文)	近本春子 一保護者 ミス・ペーカー
	6		家庭部 " 冷御飯の利用法二種 音楽部 人事相談部報告 計画部 寢室部 計画部報告 寢室部報告	
	7		カフェテリア報告 会計報告:全体、各部詳細 昭和四年度行事 一般のこと 図書室より	
	8		会館部 受付に働きて(写真:受付あり) 納戸町寄宿舎 安藤坂寄宿舎 翠香寮 ミスカニングハムをお送りして 学生懇談会に出席して 京浜委員及幹事会	岡林たねを 横井貞代 香川つね
	9	個人消息 はがき便り 以下 広告	阿部歯科医院 家庭小説「貧しき富」 明田美粧院 英語児童科生徒募集 駿河台女学院	
	10	一面 広告	藤屋ドライクリーニング本店 竹内楽器店 大日本園芸商会 和洋生花 坂爪写真館 亀澤堂製 御菓子調進所 T・O自動車 銀座の十一屋 西洋食器 キャフェテリア	
1930.3.30	30	1 標語 " 本号目次	* 22号と同じ 東京基督教女子青年会昭和5年度 何を見るか	植村環
	2	第二十四回年会報告	詳細報告 海の王子様御迎へ申上げて(写真あり) 卒業礼拝順序 卒業礼拝説教 献身	山室軍平
	3		文学界:プログラム(写真2点) " 「楽屋裏から」 学院卒業式 学院第二回卒業生氏名 別れの歌	
	4		有職婦人部:昭和四年度報告 " 家庭親睦会 " ビアランティンパーティ(写真あり) 学院送別会 伊香保旅行記	家政科
	5		フェリスさん、いらっしやい。!!! 八写真あり) ミス・フェリス歓迎ダンス講習会要項 少女部 学生部 お別れに際して これからの国領	学生部
	6		ロンドン軍縮会議	海軍中佐 丸茂邦則
	7	個人消息 はがき便り 広告	前ピアノ教師一ノ瀬姉を悼みて  ロンドン軍縮会議つづき 駿河台女学院夜間実学部	山中志磨子
	8	一面 広告	藤屋ドライクリーニング本店 竹内楽器天 銀座の十一屋 西洋食器 大日本園芸商会 和洋生花	

				杉浦商会 石炭・コークス 坂爪写真館 亀澤堂製 御菓子調進所 T・O自動車 成人講座	
1930.5.5	31	1	標語	* 30号と同じ 活ける基督	由木康
			目次		
		2	一面 伝道週	伝道週日程 神の權衡(ハカリ)に秤られて 受難日礼拝にて 映画クリスマスを見て イースター早天礼拝に際して	宗教部 河井道子 商業部 塩野幸子
		3		有職婦人部: 会館に出入する職業婦人に就いての調査(図表あり) " 京浜連合会の一(写真あり) 実学部報告	
		4		プールの水に就いて 女子青年会プール水試験成績表 学生部 お別れに際して(* 丹羽多嘉子米国留学) イースターの日曜学校(写真あり) 少女部 ミスローよりのお便り 計画部 寢室部	根本静江
		5	学院の消息 " " " " " 職員の移動	入学式の日 英語部 商業部 家政部 駿河台女学院に入学しての感想 新しき生活  活ける基督つづき 国領	家政科一生徒
		6	写真	心窓より(* 萬国Y同盟委員長ワルドグレーブ夫人たより) 四月二十日に受洗されし方 ある日ある人の感想 旅行中の志立太会長より 東京府及近県工場世話係、監督講習会 他の集会(* 矯風会関連) 第一回全日本婦選大会 市電争議とYWのクラブ員 国領職員会	有職婦人部  佐藤美代
		7	個人消息 はがき便り 広告		
		8	一面 広告	フェリス女史舞踏のタベ 浴衣地販売(経常費不足補いのため) 藤屋ドライクリーニング本店 竹内楽器店 杉浦商会 石炭・コークス 坂爪写真館 阿部歯科医院 亀澤堂製 御菓子調進所 良友本店 京染めと貸衣装	
1930.6.10	32	1	標語	* 30号と同じ わが母とは誰(母の日の集りにて)	羽仁説子
			本号目次		
		2		女子選手歓迎茶話会(写真あり)* 極東大会 若葉の保田へ 舞踏の夕は去りぬ 感謝の一言 母の日会(当日朗読文含む) わが母とは誰: つづき	有職婦人部 村松壽恵子
		3		会員部: メーブルクラブ報告 学生部 少女部から 英語の組に一ヶ月過して(写真: クラブ入会式) 商業部 児童科: ミス、ボーイス 学院三部合同遠足の記	
		4		計画部 エディ夫人の講演 挨拶 Mrs. Illana(英文)	

			写真	女子青年選手(フィリピン, 中華) 保健週報告	
		5	職員のこと 個人消息	社会問題協議会  東京府及近県工場世話係講習会	有職婦人部
		6	一面 世話係関連	世話係教育会趣旨 世話係の使命 世話係教育会例会 労働者の教育	内務省社会局監督課課長 北岡壽逸  協調会教務課長 惣田太郎
		7	一面 世話係関連	工場衛生 余禄 講習会の座談会	内務省社会局保険部医療課 長 古瀬安俊
		8	はがき便り 編集後記 以下 広告	藤屋ドライクリーニング本店 竹内楽器店 杉浦商会 石炭・コークス 坂爪写真館 阿部歯科医院 亀澤堂製 御菓子調進所 良友本店 京染めと貸衣装	
1930.7.10	33	1	標語	* 30号と同じ 我等は限なく生き得るか(追悼礼拝における説	小平國雄
			目次		
		2	写真	ロンドンからジェネバへ 米国各地女子青年会を廻りて 萬国基督教女子青年会萬国委員大会出席者 国際デーのため	廬野きみ
		3		商業部: クラスの様々 家政部 英語部: 児童科ピクニック 体育部: BYクラブ報告	
		4		有職婦人部: ある日の講演 スポーツとスポーツマンシップ 少女部から 学生部 涼しい料理 日曜学校だより 会員部 " 追悼礼拝	田中寛次郎
		5		新刊書紹介 寢室部: 思い出たままを " 中華民国便り 御殿場キャンプの思ひ出	牧野れい子
		6		七夕まつり 増築成れる保田キャンプ 女学生キャンプ 体育部 * プールの様子	横山
		7	はがき便り 個人消息	販売部の近況を  8月休刊のお知らせ	
		8	一面 広告	当会夏期特別講習会 藤屋ドライクリーニング本店 竹内楽器店 杉浦商会 石炭・コークス 坂爪写真館 阿部歯科医院 良友本店 京染めと貸衣装 伊藤正一商店 和洋家具	
1930.9.25	34	1	標語	* 30号と同じ 望ましき友情 萬国委員会 役員紹介	
			目次		
		2	会員増加 " " "	会員増加運動について 会員増加目標人数 会員増加運動の収穫週間 日曜礼拝  For the Tokyo Y.W.C.A	加藤タカ  Vera Scott Cushman (American Vice-President)
		3	一面 修養会の思出	学生部	鈴木ふさえ



1930.12.20 クリスマス号	37	3		インターナショナルの夜(写真4点) 平和記念日	山下治子
		4	写真	山上の垂訓に就いての瞑想(日曜礼拝に於いて) 国際デー抹茶のお部屋 宗教の本質に就いて(有職婦人部宗教講演)	賀川豊彦 青山学院教授 大畠清
		5		現下の工場婦人を視つ(世話係教育会講演) 労働統計実地調査報告を見て (附表:工場及労働者数) 工場世話係教育会から	警視庁工場課長 矢野兼三
		6	会員部から	クリスマス奉仕計画 会員部から*新会員名一覧(76名) 計画部報告:十月、十一月 小春日和に屋上で(写真:デックテニス) お人形のくに ミスローのおみやげ 深川市民館母の会にて	有職婦人部委員 戸川秀子
		7	たより 個人消息  広告  職員動静	ヘンデルのメサイヤ メサイヤ 古着を求む 筑波登山 ベンチュラズクラブ(山室民子:英国救世軍婦人社会事業について)	津川圭一 談
		8	以下 広告	全国有職婦人部幹事研究会 大日本園芸商会 クリスマスツリー 藤屋ドライクリーニング本店 竹内楽器店 杉浦商会 石炭・コークス 坂爪写真館 伊藤正一商店 和洋家具 美津野 バスケット靴	
		1	標語 目次	*30号と同じ 己を與ふるもの(学生クリスマス礼拝)	植村環
		2		カナダのクリスマス クリスマスの来る頃 クリスマスサバに招かれた記 年末の感想 *幹部委員氏名一覧	マーガレット リーダー 塩野幸子 田村光 濱とら子
		3		クリスマスデナーの飾り付け及献立(写真あり) 鶏絲肉片油 クリスマス前夜のパーティー	堂本菊子
		4	一面 クリスマス奉仕	千住を尋ねて(千住地区写真、調査結果一例) クリスマスサービス 古着募集の結果について	少女部学生部
		5		労働組合法について 労働者の労働組合組織状態 工場の集りから 区内工場内の女工就業状態調査に就いて	浅沼春子 藤田鶴代
		6	以下 各部報告	青葉の式 有職婦人部クラブ近況 体育部 ダンス講習会 少女部のバザー SSだより 会員部から *地震慰問袋製作の様子(写真あり) 個人教授科会話専修科親睦会 カフェテリア 学院報告 十一月受付報告	英語部
		7	はがきたより 個人消息 職員動静	年末感想(2) 逝くもの 年末感想(2) 春をまつ	体育部 竹内菊枝 葉流
		8	以下 広告	*区内工場内の女工就業状態つづき 御礼一言(メサイヤ音楽会) 商業部 新しい組(商業英語、ファイリング他) タイガ婦人帽子店 藤屋ドライクリーニング本店 竹内楽器店	



			杉浦商会 石炭・コース 坂爪写真館 伊藤正一商店 和洋家具 美津野	
1931.2.10 創立25年 記念号	38	1	標語 東京基督教女子青 年会歴史概略 " " " " " " " " 目次 * 30号と同じ (1) 搖籃時代(自明治34~5年 至同39年) (2) 三番町時代(自明治38年 至大正4年) (3) 神保町会館時代(自大正4年10月至同12年8月) (4) 震災直後救済期(自大正12年10月至同13年4月) (5) バラック時代(自大正13年4月至昭和4年1月) 二五年を迎へて	会長 志立タキ
		2	一面: 思ひ出 あの頃 あの頃 あの頃 あの頃 初期寄宿舎のことども 大正五年 カフマン、加藤、ページ(前京都総幹事) Reminiscences 写真	小泉幸枝(旧菊池) 圓谷司娜子(旧中西) 三吉春子(旧世良田) 毛利英子 山中仙(旧愛波) Mary Nitobe
		3	私の希望 のぞみ 有職婦人部クラブ 二十五年の後 Recollections of the early days of the Y.W.C.A * 思ひ出つづき	小瀬たか 都留 和歌 Caroline MacDonald
		4	会員部 有職婦人部(写真: 秋の入会式) 学生部 少女部	
		5	商業部 英語部(朝日グラフよりの写真使用) 家政部(朝日グラフよりの写真使用) 実学部 音楽部	
		6	宗教事業 体育部 カフェテリアより 計画部寝室部 人事相談部	
		7	昭和5年度行事大略 三寄宿舎より 憩の家 会計報告 カフマン女史記念基金募集趣意書(職員恩給資金)	
		8	一面 クリスマス奉仕 クリスマス奉仕収支報告 江東クリスマス寸感 千住へ行く 会館附近の子供クリスマス 白山御殿町を訪ねて クリスマスデナー	南あや子 少女部 芝木好子
		9	はがきだより 個人消息 職員の動静 お知らせ 編集後記 初めて空を飛ぶの記 寮生募集(第一第二、翠香 各舎監名記載)	横井 内池よね
		10	お知らせ " " " " 以下 * 広告 *1面歴史概略つづき:「新会館建設計画書経路」 駿河台女学院 商業部生徒募集 英語部新クラス紹介 藤屋ドライクリーニング本店 杉浦商会 石炭・コース 坂爪写真館 伊藤正一商店 和洋家具 美津野	
1931.3.24	39	1	標語 " " 目次 * 30号と同じ * 東京基督教女子青年会昭和六年度 来るべき二五年(創立二五年記念祝賀式に於て)	新渡戸稲造
		2	第二五回年会報告 " " " " " " 一、宣言と標語について 二、幹部委員(昭和六年度)発表 三、昭和六年度予算発表 四、各部報告 五、讃美歌 六、祈祷	

		創立二十五年記念 祝賀の式に列して 〃 〃 〃	創立二十五年記念祝賀の式に列して 祝辞 祝賀午餐会 参観日	文部大臣 田中隆三 出席者の一人
	3		女子の為のバスケットボールに就いて (創立二五年記念放送) フォークダンスナイト 「性教育に就いて」の講演後記 「性教育に就いて」の講演後記 ミセスオールツ 「性教育に就いて」の講演後記 無題	体育部幹事 ルシーラ ウィ ルコックス  学生部 窪田修子 少女部 山本裕子、坂本瑞江
	4		クリスマス奉仕収支報告 お米の廉売に行つて 文学会(写真あり) 学年末に臨んで 学院の昨今 針供養(写真あり)	BYクラブ 中村静子  英語部 諏訪方枝
	5	一面 少女部	かんがへませう 雛祭 お雛様 日曜学校 ひな祭りの事 春を待つ心 日暮里訪問記 少女部のみなさまに	ロー・ミルドレッド 西澤笛畝氏のお話 星光クラブ 宮原光子 尋三 隅谷民子 星光クラブ 坂本瑞江 オリブクラブ 武部純子
	6		最近に於ける経済思想(有職婦人部幹事研究)	高橋亀吉
	7	はがきだより 会員の声  個人消息 職員の動静	萬国基督教学生祈祷会 メーブルクラブのこの頃 会員の懇談会 連合相談会  復活節を迎ふるに当たりて	宇野マキ  商業部の一会員
	8	お知らせ 〃 〃 以下 広告	寮生募集(第一第二、翠香 各舎監名記載) 駿河台女学院入学御案内 音楽部入学御案内 藤屋ドライクリーニング本店 杉浦商会 石炭・コークス 坂爪写真館 伊藤正一商店 和洋家具 美津野	
1931.4.28	40	1 標語	*39号と同じ  神の国の意義に就いて(伝道週合同礼拝)  永遠の青春(伝道週学院礼拝)	日本メソジスト教会監督 赤澤元造 札幌メソジスト教会牧師 亀徳一男
	2	一面:会員の声	ビルゴークラブ 有職婦人部クラブ員 少女部クラブ員 〃 〃 英語部卒業生の皆様へ お願いさまざま *4月20日までの新入会者一覧	新莊須磨 前田淑子 佐野鈴子 水野定子 太田みね 益田
	3	はがきだより 個人消息	春の舞踏祭について(プログラム詳細)	
	4	一面:有職婦人部	東京基督教女子青年会宣言、クラブ宣言、本 年度計画 職業婦人の生活費調査に就いて クラブ総会 昭和六年度計画 国際晩餐会の夜のこと(来賓名記載) 紐育の国際晩餐会(丹羽多嘉子氏来信より) イースター早天礼拝に出席して	新莊須磨  本橋三枝
	5	一面:少女部	オリヴクラブのこと 初めてお仲間に入れて頂きました 春よお早う 春 思出 小学生のつぼみクラブ ラウレルクラブ 感想 第七感	会長 武部純子 お茶の水高女2年 向野星子 吉田みち子 オリヴクラブ 田下きみ子 岩倉照子 M・リーダー 桐野富美子 ラウレルクラブ 吉澤栄子 F子

			<p>???不思議な事 五月のオリブクラブ 少女部の日割 * 谷津千鶴子画</p>	T子
		6 一面:各部の新学期	<p>英語部の春 家政部 商業部 体育部(写真あり) 社交ダンス 体育部の受付 若葉の国領へ(写真あり) 計画部報告</p>	
		7	<p>伝道週を終へて 伝道週の一タ 丸の内クラブルーム設置についての座談会 職員動静</p>	西村
		8 *お知らせ " " " " 以下 * 広告	<p>職業紹介 寮生募集(第一寄宿舍) ヴァイオリン科新設 有職婦人部洋服相談部新設 藤屋ドライクリーニング本店 竹内楽器店 杉浦商会 石炭・コークス 坂爪写真館 伊藤正一商店 和洋家具 美津野</p>	
1931.5.29	41	1 標語	<p>*39号と同じ 保健週を迎へるに当たって 保健週プログラム 陳列のかずかず</p>	体育部幹事 河西はつ
		目次		
		2 一面:少女部	<p>私達のクラブ スプリングクラブへ入会して 国領遠足(一) 国領遠足(二) 母の日を待ちわびて 母の日 学生部 夏とキャンプ</p>	<p>室橋梅子 坂本輝子 室橋梅子 大西和子 阿武節子 室橋梅子 近藤 宮城文子</p>
		3	<p>寄宿舎衛生に就いて 世話係講習会 洋服相談部 クラブの動き</p>	<p>警視庁工場課医学博士 星合勘之助</p> <p>有職婦人部</p>
		4	<p>会員の声:メープルクラブ(写真あり) " FUKSクラブの誕生 * 会へのお誘い(カットあり) 軍縮と萬国基督教女子青年会 寄附金申込書に真珠 母の日会のお話 御礼(舞踏祭)</p>	<p>ウーマンス プレス 講演者 小林珠子</p>
		5	<p>近頃の商業部 この頃の気持ち 二五歳禁酒法案に就いて 飛行機の初乗 * ポストのカット</p>	<p>西村 奥山仁枝</p>
		6 *お知らせ " " *お知らせ " " " " " " * 広告 " " " "	<p>保田キャンプ(写真あり) 保健週のために 日本宗教平和会議 日本宗教平和会議に出席して 商業部タイピスト紹介 有職婦人部洋服相談部 同盟 富士岡荘 寮生募集(第二寄宿舍) アンドリュウス商会 カーデスク 藤屋ドライクリーニング本店 杉浦商会 石炭・コークス</p>	カフェテリア
1931.7.10 創刊5周年 記念号	42	1 標語	<p>* 39号と同じ 五ヶ年間の労働運動</p>	
		目次		
		2 一面:五ヶ年の推移	<p>我が女子青年会 日本に於ける宗教界(基督教)の動き</p>	加藤タカ

			最近の教育界	河崎夏子
		3 一面:五ヶ年の推移	働く婦人界 最近婦人団体の動きを瞥見して 国際について 航空界	気賀重躬 日本航空輸送株式会社 西野恵之助
		4 一面:五ヶ年の推移	経済界 * 労働運動つづき	高野武二 山野井ゆき
		5 一面:五ヶ年の推移	延び行く女学校 東京Y.W.C.A教育部*5年の変遷年度表で 駿河台女学院卒業生数他 過去五年間に於ける「地の塩」記事分類 (論説、感想、報告、其他に分類)	
		6 一面:五年を過して	働く婦人の鳥瞰図 五歳を数へて 心に残ったまま	ミルドレッド・ロー 体育部 河西はつ
		7 各部のこと " " " 夏の計画 " "	工場世話係講習会開会に際して(写真あり) 「劇と歌」お礼(写真あり) 生活費調査のため関西を訪れて 和裁科親睦会 プール 実用本位の家庭向講習会 涼しい夜の講習会	内務省社会局向上監督官補 谷野節子 高津戸りん子 実学部和裁科 浅野チヅ子 体育部 駿河台女学院家政部 有職婦人部
		8 各部のこと " " " " " *時候の挨拶	英語部諸相 六月の少女部 計画部 寢室部(写真:ハワイ生れの母国見学会) 音楽部(演奏会報告) 保健週のこと(写真:ベビーデー) 職業紹介 世の中(有限責任東京医療利用組合、第六回 全国廃娯同志大会、基督教会館落成) 暑中お見舞い	葉流 職員一同
		9 たより お知らせ 個人消息 職員の動静	* たより new classes(英文で)  全国幹事会	
		10  * お知らせ " " 以下* 広告	白樺の林から 職業婦人の憩ひの家 保田キャンプ(写真あり) 英語部 新入生募集 第二寄宿舎 寮生募集 同盟 富士岡荘 杉浦商会 藤屋 ミツワ 現像・焼付・引伸 国分商店貿易部 リビーミルククリーム 柴田写真館	
1931.9.21	43	1 標語 目次	*39号と同じ 教育機関としてのキャンプ	少女部幹事 丹羽多嘉子
		2 一面:野尻キャンプ	一日のプログラム Cキャンプ 野尻キャンプへ寄す	Aキャンプ 中村孝子 BYクラブ イニシャル8名
		3 一面:野尻キャンプ	思ひ出 思ひ出 ジブシーデー 感謝	Cキャンプ員 阿辻わか Bキャンプ員 森綾子 Aキャンプ 丹羽温子 丹羽多嘉子
		4 一面:修養会展望	一般有職婦人修養会に列して(写真あり) 八月九日の日記 専門部修養会日記 七月、女学生修養会に出席する	久我信 島田まる
		5 以下:盛夏中の館内 さまざま	保田キャンプ(参加者数、滞在日数、写真あり) 家政部 有職婦人部 八月のプール 計画部 寢室部	
		6	女学院 実学部 クラブは動く ニルスブック氏と一行を迎ふ 音楽に関する本二冊	有職婦人部 S.T生

			三時から十時迄の受付	
		7	おたより 個人消息 職員の動静 編集後記	故マクドナルド女史 追悼 第四回全国幹事会 小畑續枝
		8	* お知らせ 以下 * 広告	三時から十時迄の受付: つづき(写真: リンパーク夫人) 受付のお手伝い 有職婦人部 ペン字手本 ミツワ 柴田写真館 杉浦商会 藤屋 国分商店貿易部 リビーミルククリーム
1931.10.1	44	1	標語 目次	*39号と同じ 総会の祈り 総会について 世界的不況に伴ふ失業問題と各国基督教女子 第四回総会準備委員長 植村環 会員部幹事 益田米
		2		英語部 実る秋 児童英語科クラス 商業部 家政部 体育部 十月の水中劇 実学部新入生受付報告 会員部 定期少女部連合役員会 書記 武者
		3		紡績労働組合大会傍聴記 最近の出来事: 世界情勢 中華民国の為に祈る 隣国の水災に就いて一言 有職婦人部委員 谷野節子 山野井雪子
		4	たより 個人消息 職員のうごき * お知らせ " " 以下 * 広告	廣山流家元(*生花について) 簡単に編める女兒用スウェーター(十歳位) 有職婦人部 ペン字手本 実学部 子供用毛糸編物集 ミツワ 柴田写真館 杉浦商会 藤屋 国分商店貿易部 岡田廣山 高木美代子
1931.11.9	45		標語 目次	* 39号と同じ 世界平和の源泉としての宗教 メソジスト教会中央会堂 牧師 川尻正修
		2	基督教女子青年会 第四回全国総会 " " " "	総会スケジュール表 総会の梗概報告(総会参加者記念撮影) 有職婦人晚餐会の夕 学生代表議員懇談会
		3		思想問題 総会第二日の講演 総会に出席して 感想 " " " " " " IMPRESSIONS 東京帝大教授河合栄治郎談 横浜 国井綾 京都 一出席者 神戸 河本久仁江 東京 出席者 名古屋 木村雪子
		4	一面: 世界平和のページ	世界平和のページ 祈祷週プログラム 軍備縮小、世界平和など 満州事変と基督教 (日支両国基督教連盟幹事間で交換された電報の公表) 宗教部 瀬川八重 爾見記
		5	一面: 時局のページ	現今の時局と日本の国際的地位 講演 英国財界不況について 国際労働局 鮎澤巖談 志立鐵次郎談
		6	一面: 各部報告	一八八—一九三—少女等の輝く五十年祭 少女部だより キャンプ思ひ出 英語部 二つの講習に就いて 教師会月見の宴の記 アンニイKギルバート

			商業部	
		会員消息とたより	外人往来	
	7		東伏見宮大妃殿下御成(写真あり) 芽生えし種 有職婦人消費組合趣意書原案 有職婦人消費組合規約原案 計画部 寢室部	諏訪方枝
	8	以下 * 広告	感謝祭デイナー献立 川手商店 洋酒食料品缶詰問屋 本郷 和洋食料品肉類バター 山田流琴けいこ所 海老名久駕 貸間 海老名しん 亀澤堂 杉浦商会 国分商店貿易部 藤屋 柴田写真館	
1931.12.7 クリスマス号	46	1	クリスマスを迎へるにあたって	基督教女子青年会日本同盟 宗教部 光静枝
		目次		
	2		パレスチナ紀行 クリスマスディナ	ミルドレッド ロー 岡村光
	3	一面:クリスマス パーティーの準備	クリスマスを待つ クリスマス祝会に用ひられる遊戯 さやけき光(クリスマスカロール)楽譜、歌詞 訳詞者のことば	多文枝 津川主一
	4	一面:クリスマス パーティーの準備	或るクリスマスのお話 クリスマス・ローズ クリスマスには何故靴下をさげるのでせう	H.カサイ
	5	一面:クリスマス パーティーの準備	クリスマスカロルス 平和王の頌 クリスマスツリー 童話2本 詩1本	クリスマスカロル物語中より 井上文慈郎 塩野幸子
	6		保健調査の結果 祈祷週を終へて 祈祷週を終へて 笹尾条太郎先生の御話 キャンデーセール	河西初子 体育部
	7	一面:各部報告  個人消息 たより	クリスマス奉仕計画に就いて 家政部 商業部 少女部  ご紹介 * 二つのクラブ誕生	
	8	以下 * 広告	総会決議事項 中華に送った手紙(英文) 国際平和声明書(決議二) ニュース 国分商店 藤屋 杉浦商会 柴田写真館 荻窪書院	
1932.2.9	47	1 標語	* 39号と同じ	商業部幹事 櫛田孝
		目次	米国西部を瞥見して(写真:南加州大学哲学館)	
	2	各部年報(1) " "	帰朝の挨拶 会員部 (会員総数1208+BGクラブ員250+少女クラブ 員150) 学生部・少女部 体育部山岳会について	カフマン
	3	一面:年報(その3)	有職婦人部 宗教事業 体育事業 菅平スキーの思ひ出	連合書記 富田喜久江
	4	一面:各部年報(2)等	商業部 英語部 家政部(写真あり)	

				実学部展望 音楽部	
		5	館外のこと " " "	カフェテリア 人事相談部 他集会 宿泊 憩の家 学生第一寄宿舍 翠香寮 学生第二寄宿舍 六年度事業の特筆すべきもの 会計報告	田村光  岡林たねを 舎監 香月つね 横井貞代 総務
		6	新讃美歌解説数々 "	新讃美歌解説数々 新讃美歌にのせられた私どもの歌(楽譜あり)	津川主一
		7		新しき「讃美歌」に就いて	鳥居忠五郎
		8	一面:奉仕(その一)	クリスマス奉仕一覧 板橋方面配給 白山御殿町クリスマス 近所の子供クリスマス 日曜学校のクリスマス礼拝と祝会 クリスマス礼拝 クリスマス奉仕金収支 凶作地御見舞金について	塩野幸子  函館遺愛女学校女子青年会
		9	奉仕(その二) 職員動静 たより 個人消息	少女部 (写真:職員底抜けの会)	
		10	*お知らせ " 以下* 広告	洋服相談部 駿河台女学院入学案内 美津野 モロゾフ 柴田写真館 国分商店 藤屋 杉浦商会 日曜学校会館内金子歯科医院	
1932.3.9	48	1	標語  予告 目次	*39号に同じ  東京基督教女子青年会昭和7年度 イースター讃美礼拝	日本メソジスト青山学院教会 牧師 勝部武雄
		2	一面 年会報告	プログラム 事務会記録 写真:年会の宴会場 愛すればこそ 二つの世界の岐路に立ちて	年会礼拝説教 阿部義宗
		3	一面 クラブの報告  お知らせ	家庭婦人部 有職婦人部 近況 有職婦人クラブ消費組合 少女部 学生部 学院文学会	
		4	一面 近頃の学院  感想(巣立つ人々)	英語部 商業部 昭和六年度駿河台女学院課外教育展望 商業部 家政部速成科	
		5	たより 個人消息  お知らせ	イースターの思ひ出  地下室ゴシップ 駿河台女学院入学案内 感想(巣立つ人々)つづき:英語部	丹羽多嘉子
		6	お知らせ " 以下 広告	洋服相談部 地下室模様替え 美津野 丸一商店 食料品 魚源 鮮魚 藤屋 杉浦商会 柴田写真館 金子歯科医院	
1932.5.1	49	1	標語	*48号に同じ OPERETTAを語る	津川主一

			目次	
		2	預告 OPERETTAを語る つづき マジェンカ梗概 マジェンカ作者ベツナーさん オペレッタ マジェンカ	丹羽多嘉子
		3	お知らせ 信仰と人生(卒業礼拝にて) 感謝 本年度卒業生寄付(写真あり) 有職婦人部 クラブ総会 国際晩餐会 先駆者の夢 クラブ総会を了へて YWCA歴史編纂 *材料蒐集協力依頼	横浜組合教会牧師 平賀徳造  藤澤一美
		4	一面 報告(各部) 商業部 英語部 家政部 実学部(写真:第四回卒業生) 学院送別懇親会 計画部 寢室部 食堂部 人事相談 イースター礼拝に出席して 日曜学校のイースター	小瀬多可子
		5	個人消息 伝道週 内田光子氏お土産ばなし あちらこちら (東京医療利用組合総会、日本基督教矯風会 総会他)	
		6	職員動静 お知らせ " 以下 広告 寮生募集 洋服相談部 美津野 柴田写真館 モロゾフ 藤屋 杉浦商会 金子齒科医院	
1932.5.25	50	1	標語 *48号に同じ 一面オペレッタマジェンカ広告	
		2	伝道週集会(家庭婦人部、川尻先生講演大要他)	
		3	若人の群れ女子青年会 スポーツ界と煙草 婦人と喫煙について 女子の喫煙といふ事について 母之日 タバコ・ゴシップ	筆によるサイン  商業部本科生 商業部本科生 家事速成科 左須磨子
		4	感想:商業部 " 家政部 新入生の感想 ホーコク:家庭婦人部 " クラブニュース " 少女部五月の報 " 学生部五月報告(写真あり) 事務所のとき	英語部
		5	青葉の国領 " ピクニック(写真あり) " 労働婦人部国領遠足の記 落ち葉がき(世情についての短文9編)  個人消息 *手紙(英文)	宮原光子 櫻井  Constance Duncan
		6	世の中 " 以下 広告 キャンプ指導者講習会 第三回全日本婦選大会 全日本基督教会連合婦人会設立 洋服相談部 美津野 藤屋 杉浦商会 金子齒科医院	
1932.7.5	51	1	標語 キャンプ生活の教育的意義 *48号に同じ キャンプ生活の教育的意義(キャンプ指導者 講習会講義) 火を焚く歌(キャンプソングのために)	小林弥太郎 塩野幸子



			目次	
		2	自然と宗教生活 大空を仰ぐ キャンプ食物考	同盟学生部幹事石川静子 ミルドレッド ロー(塩野訳) 田村光
		3	ハイキングの用具準備 動植物観察について キャンプ ファイヤ	永井三郎 三谷文子 ミルドレッド ロー
		4	野尻キャンプ " " " " 野尻キャンプビルディング募金 職業婦人保田キャンプ 有職婦人部報告:労働婦人部『私共のお家』 クラブ近況	Come to YWCA Camp! キャンプ生活のよこびは 野尻キャンプ所在地地図 野尻キャンプメインカテジ カット 地形、保健、指導者、責任者、人数と期間、費用、汽車賃 有職婦人部報告:労働婦人部『私共のお家』 クラブ近況
		5	全国修養会 " " " " " 広告 "	全国修養会 第27回御殿場夏期修養会 専門学校部 労働問題 高等女学校部 労働問題 一般及有職婦人部 西南地方夏期修養会(三回) 高等女学校部 申込 プール夏の特別計画 家庭向夏期講習会 涼しい夏の趣味講座 歯科一般 YWCA同盟主任幹事山本琴 有職婦人部 体育部歯科
		6	マジェンカ御礼 " 感想 " 憶出茶話会 " 無題 商業部「つるくさ」 英語部雑記 先生方の御動静 家政部	田下君子 商業部
		7	家庭婦人部 Dear Friends 寝室部 ライラッククラブ つぼみクラブ 日曜学校の或る日 オリンピック選手宿泊の御礼 写真 個人消息 " 内閣の動きで会員諸氏の御父君、御主人が 栄職、紹介 永井次代氏御主人(柳太郎)拓 務大臣。松村みゑ子し父君(山本達郎)内務 大臣。江口春子氏御主人勅選議員。	Meiry Hand 八田美穂子 塩野 記 守屋東
		8	世の中 以下 広告	第7回全国廃娯同志大会 一土会(日華親善) 美津濃 金子歯科医院 柴田写真館 藤屋ドライクリーニング 杉浦商会 伊藤正一商会 野尻キャンプ
1932.10.7	52	1	標語 *48号に同じ 野尻キャンプの印象集 " " " " 掬香山荘より " " " " " " " " " " 目次	高良富子 西野恵之助 藤岡潔 Caroline shereschewsky 田辺操 Laura R. Horn 斎藤つたの Georgene E. Bowen 山室民子 鈴木栄吉 小林弥太郎
		2	一面 野尻キャンプ 落成式の日 開館祈祷 御案内状 入場の歌 野尻キャンプ落成式順序	丹羽多嘉子 麻布メソジスト教会牧師 藤岡潔 東京基督教女子青年会 キャンパス合作

			落成式の歌 祝辞 祝電 祝詞 野尻キャンプの印象集:つづき " " "	鉄道省古間駅長三輪常次郎 塩野幸子 小林美代子 加納多津 吉見静江 白石つぎ
		3	キャンプの朝 キャンプ ファイヤー 野尻の詩篇 「カーニバルの夜」二篇 " キャンパス感想集 " 野尻キャンプの印象集:つづき ラウンドスピーカー	佐野静子 岩倉照子 吉田美知子 林愛子 対馬君子 Ruth Stuiwalt 吉田敬子 志立タキ 林愛子 英語部
		お知らせ		
		4	野尻キャンプ事務局より: 学校別、キャンプゲスト、カレンダー、日誌 に特筆されたもの、JONK野尻放送局、キャン プお目見え、二哩 Aキャンプ雑感 有職婦人部クラブ 消費組合を御利用下さい	永井澄子
		5	保田キャンプをふりかへって 修養会に出席して:専門部 " " " " " 思ひ出の記	渡邊松子 八田美恵子 桐野喜美子 少女部星光クラブ鳥海道子
		6	秋秋秋:家庭安全展に付て " " " " " その内容概略 プログラム 詞	益田よね 塩野 訳
		7	家庭の読物に就て 講習のかずかず:家庭趣味講習 " " "	進昌三 家政部 体育部 有職婦人部
		8	有職婦人部報告:労働婦人部(白ゆり会、す みれ会、白山御殿町林間学校) 家庭婦人部報告	
		9	ごあいさつ 児童ピアノクラス開始 お休中の受付 プールお手伝 全国幹事会	エディス・ペーカー 英語部児童科 諏訪方枝
		個人消息 職員動静		
		10	一面 広告 有職婦人部消費組合洋服相談部 ボンマルシェー 新生社 小瀧寮(健康な婦人のアパート) 美津濃 金子齒科医院 柴田写真館 藤屋ドライクリーニング 杉浦商会 伊藤正一商会	
1932.11.11	53	1	標語 *48号に同じ 婦人を代表して:世界軍備縮少会議に於ける 婦人国際団体軍縮委員長演説(翻訳:英語 部学生) 万国祈祷週を迎える準備:1932年万国祈祷週 思考題目他	メリーディングマン万国基督 教女子青年会労働部幹事
		目次		
		2	万国祈祷週について:プログラム(11.13~19) チェコスロバキアプラハYWCA総幹事よりの手紙 国際部幹事からの手紙(英文) " " " カナダYWCA総幹事からの手紙(英文) 写真(セイロンのキャンプ、ラトビアの夜の遠足)	ミス・モルナロバ Rose Beafy Mary L. Angus
		3	万国祈祷週:平和ポスター募集に就いて、当選標語 パレスタインに於けるテイレ基督教女子青年会 さんびか417番 写真(インドYW国際デーの様子)	

		たより	クリスマス奉仕 " クリスマス奉仕委員会報国(奉仕の種類、募金方法) " お願い " クリスマスバザー	
		4	家庭安全展を観る:各室の状況報告 " 家庭安全展は少女達に如何に映じたか " 講演集より 寄生虫予防と食物	紅松 内務省社会局 中川義次
		5	" 安全展ゴシップ " 講演集より 近代生活と保健 " 講演集より 衛生と経済より見たる暖房装	内務省社会局 技師医学博士 鯉沼卯吾 材料提供 東大衛生学教室 助教授 石原氏
		6	野尻だより " 和歌、漢詩 " 野尻キャンプ思い出 家庭婦人部報告:母子園、大富小学校参観記 床の間が出来ました 生花の組のため(写真と文) 新入会員九十八名	古間小学校長 常田新一郎 古間町 佐藤靖憲 丹羽多嘉子
		7	報告:京阪神連合会に出席して " 写真と文(有職婦人部昭和7年度新入会員) " 英語部 " 体育部 新しい先生ミスオールデン、山岳会1周年	有職婦人クラブ 武田国野
		個人消息		
		8 一面 広告	消費組合を御利用下さい(商品及価格) 小瀧寮(健康な婦人のアパート) 美津濃 日曜学校会館内金子歯科医院 柴田写真館 杉浦商会 藤屋ドライクリーニング 伊藤正一商会	
記載なし クリスマス号	54	1 標語	*48号に同じ 写真と解説:リベラ作「羊飼の礼拝」、聖句ルカ 伝2:8-16	
		2	クリスマス:クリスマス祝会 プログラム " :カンタクThe Wondrous Story大意 " :劇 ほほゑむ聖母	
		3	" :クリスマスの意味 " :青葉の式 (クリスマス、新年)幹部委員記名、職員一同	岡田正夫(学生部講演会)
		時候の挨拶		
		4	クリスマス奉仕 " :少女部クリスマス奉仕のこと、クリスマスバザー報告 " :極貧階級生活状態調査(板橋岩ノ坂方面調べ) " :白山御殿町古着廉売の景 " :スノークラブ クリスマス奉仕数の子昆布販売	
		新刊書の中より	教文館書籍紹介	
		5	正月重詰料理 極く家庭向きのお正月料理いろいろ お正月の室内遊戯	家政部 田中米 家政部 田中米
		6	万国祈祷週 " :少女部祈祷日早天礼拝 " :少女部国際レター(カード写真) " :少女部万国祈祷日記念朝食 " :少女部国際パーティー 家庭婦人部報告:洋裁和裁幹旋(会員への仕事紹介と受注の両方) " :アマキテヤクラブ(YMレイン ボークラブとの月1合同会の報告) " :ヴィルゴークラブ	ハーベストクラブ遠藤 オリーブクラブ佐野 プラムクラブ木内
		7	商業部:遠足 晩秋の入間川 商業部A組(国領行き) 商業部生徒募集 楽しかったクリスマス クリスマス 青葉の式 感想 新入会員紹介 109名記名(内外国人9名) 家庭婦人部報告続き:スカーレットキークラブ " :リヤクラブ	商業部B組 木村静江 少女部つぼみクラブ 隅谷民子 つぼみクラブ 星田鶴子 一色純子、木村静江
		ニュース		
		8 個人消息	職員の「つぶやき」	ニワ

			<p>動静</p> <p>以下 広告</p>	<p>体育部</p> <p>〃 : 山岳会</p> <p>体育部歯科広告</p> <p>有職婦人部 蜂蜜をおわかちします</p> <p>消費組合を御利用下さい(商品及価格)</p> <p>月刊 福音家庭新聞</p>	
		9		<p>安全週講演集より: 寄生虫予防と食物(2)</p> <p>〃 : 家庭と安全</p>	<p>内務省社会局 中川義次</p> <p>産業福利協会理事 蒲生俊文</p>
		10	以下 広告	<p>全国基督教協議会 決議事項</p> <p>小瀧奈(堅実な婦人のアパート)</p> <p>美津濃</p> <p>日曜学校会館内金子歯科医院</p> <p>柴田写真館</p> <p>杉浦商会</p> <p>藤屋ドライクリーニング</p> <p>伊藤正一商会</p>	
1933.2.9	55	1		万国YWCA会長、総幹事メッセージ・写真	C..M.Van Asch van Wyck、Charlotte Niven
		2	一面 年会報告	<p>回顧断片(月毎の特記事項)</p> <p>会員全般に互る調べ</p> <p>家庭婦人部</p> <p>有職婦人部 職業婦人クラブ集会</p> <p>有職婦人部 労働婦人集会</p> <p>有職婦人部 実学部</p> <p>学生部</p>	総務
		3	一面 年会報告	<p>回顧断片(月毎の特記事項)続き</p> <p>宗教部</p> <p>英語部</p> <p>少女部学生部</p>	
		4	一面 年会報告	<p>家政部</p> <p>商業部</p> <p>体育部</p> <p>音楽部</p>	
		5	一面 年会報告	<p>カフェテリア</p> <p>寢室部</p> <p>計画部</p> <p>納戸町寄宿舎</p> <p>安藤坂寄宿舎</p> <p>翠香寮</p> <p>国領「憩の家」</p> <p>昭和7年度「地の塩」読物一覧</p>	
		6	一面 奉仕部	<p>クリスマス奉仕一覧表</p> <p>昭和7年12月奉仕事業会計報告</p> <p>朝鮮児童クリスマス</p> <p>感謝状</p> <p>少女部学生部</p> <p>東京市市民館保育部訪問の記</p> <p>市民館クリスマス奉仕</p> <p>感想(ウイステリア宮田紀栄子、チェリー横川千賀子、プラムのだ智津枝、ハーベスト遠藤千賀子)</p>	<p>紅松</p> <p>八田美穂子</p>
		7	<p>おたより</p> <p>個人消息</p> <p>ニュース</p> <p>広告</p>	<p>冬の野尻</p> <p>〃 「リーダーハウス」のために</p> <p>〃 昭和7年度キャンプ諸集会</p> <p>ふれごとの会のこと(文科卒業生で東京の学校に散った友達の新しい集まり発足)</p> <p>日本宗教音楽塾</p>	辻村澄江
		8	一面 広告	<p>国際婦人祈祷日</p> <p>消費組合を御利用下さい</p> <p>駿河台女学院入学案内</p> <p>東京女子大学</p> <p>美津濃</p> <p>杉浦商会</p> <p>日曜学校会館内金子歯科医院</p> <p>藤屋ドライクリーニング</p>	
1933.3.17	56	1		<p>万国YWCA大会: 加盟国世界地図、万国Y本部総幹事室写真</p> <p>〃 : はじめて東洋に開かれる万国YWCA大会について</p> <p>〃 : 第1回～第11回及び今北京大会についての記事</p>	

			目次	年会報告:昭和8年度中心思想について(年会総幹事 加藤タカ)	
		2	一面 年会報告	第27回年会次第 第27回年会報告 年会で承認された連合相談会(設立賛成理由-年会にて演説) 連合相談会規約 8年度幹部委員紹介	一色純子
		3		万国YWCA大会:万国会長及総幹事の動静 " :万国会長及総幹事をお迎へして " :少女部万国会長及総幹事歓迎会 文学会について:文学会のぞき " :英劇"Way-side Piper"を見て 少女部雑祭兼御別れ会 おひなさま	YWCA同盟主任幹事山本琴 スワ ニワ
		4	一面 卒業生に贈る	商業部 榎田孝 家政部 実学部卒業生に語る 感想 神の御国	商業部 榎田孝 渡邊松子 商業部 あをち
		5	個人消息 以下 広告	各部のこと:家庭婦人部 " :少女部学生部 " :万国基督教学生祈祷日  駿河台女学院音楽部 日本宗教音楽塾 消費組合 駿河台女学院入学案内 東京女子大学 美津濃 杉浦商会 藤屋ドライクリーニング 日曜学校会館内金子歯科医院	ライラッククラブ斎藤文子
1933.5.5	57	1	目次	聖画について(上)伝道週「宗教画講演」より	水野恭介
		2		伝道集:伝道週予定 " :復活節早天音楽礼拝 " :一週を通じて " :学生部伝道集会 " :女学生伝道集会 少女部 " :家庭婦人部 各部報告:英語部 " :家政部 " :序にかへて(和歌)	中林 学生部 紅松総子
		3	一面 有職婦人部	クラブ総会 消費組合本年度の方針 クラブ及消費組合総会に列して 第五回有職婦人国際晩餐会 晩餐会に出席して	湧泉 富田喜久枝 オリオン芝木好子
		4	新入会員紹介	つぼみクラブ キャンプ指導者講習会 御礼 体育部から  郊外デー感想	キャンプ協会 野尻キャンプ  家政部有志
		5	広告 " 個人消息 おたより 職員のこと 以下 広告	YW日本同盟労働調査部講習会 新卒業生の皆様へ 映画「新女性線」 万国YWCA会長、総幹事からの手紙  就退職 東京シンフォニック・コーラス演奏会 小瀧寮(堅実な婦人のアパート) 日本宗教音楽塾	
		6	一面 広告	消費組合 福音商会 美津濃 杉浦商会 藤屋ドライクリーニング 日曜学校会館内金子歯科医院	
1933.6.15	58	1	目次	聖画について(下)伝道週「宗教画講演」より 万国委員会及大会延期に就いて	水野恭介 山本琴子
		2	一面 映画の集い	映画鑑賞第一課	時事新報演芸部 平尾郁次

			夏期事業のための映画の集い広告 上映映画解説紹介	
	3		「在米二世女子を語る」座談会 (メリー洋裁学院院長沖度子、基督教矯風会 副会長ガントレット恒子、小幡洋裁学校校長 小幡繁子、在米日本会会長小池はま子、東京 基督教女子青年会総幹事加藤タカ、同会長志 立タキ、海外婦人協会理事西尾好子、家庭婦 人部委員山上信子、同委員山中仙子、同幹 事益田米、ニッポンとアメリカ社小澤氏、同田 中氏) アマキテヤクラブ会員募集	
	4	一面 有職婦人部	入会式 新入会員及勤務先名 歓迎のことば、入会に際して 京浜連合会 労働婦人料理講習会 取引所見学 家庭婦人部移動青年会	ヴィルゴークラブ
	5	一面 少女部学生部	家鴨のディックちゃんと恐い犬 その一(キル バーン原作) *オリブクラブについて 少女部入会式と母の会 学生部母の会報告 つぼみクラブの散歩 遠足 お願い! 都下基督教中等学生協議会	オリブクラブ共訳 塩野 大森 紅松 菊クラブ 前川よし子 四階少女部 つぼみクラブ
	6		各部:商業部 " :英語部 母の日講演 時代の流れと親心	日本女大教授 生江孝之
	7	個人消息 おたより	体育部:水のヴァラエティー " :「水は呼ぶ母よ来たれと」 " :レクリエーション " :神津牧場へ  船中のミス・カフマンより 職員のこと	原口 横山 手塚雪子 山岳会 杉原満子
	8	一面 広告	消費組合 小瀧寮 日本宗教音楽塾 杉浦商会 美津野 藤屋ドライクリーニング 日曜学校会館内金子歯科医院	
1933.7.18	59	1	山は語る 山を語る本	中村テル
		目次		
		2 一面 野尻キャンプは	キャンプと母の心得 野尻湖半キャンプ 詳細 野尻だより	
		3	保田休養所 有職婦人部:第五回夏期講習会(有職婦人のため) 体育部:プール " :山岳会 少女部学生部:夏季子ども学校 奉仕部:年半期奉仕事業報告	
		4	「生ける供物」 商業部:卒業生と就職 英語部:報告(募集二、三) 家政部:稲田登戸へ 夏期修養会 案内	瀬川八重  スノークラブ YWCA同盟
		5	学生中日親善使来朝 報告:家庭婦人部(「母と娘の座談会」他) 御礼:「映画の集い」収支報告 タイピスト大会 蟻(短歌)	T.M.C 井村良子 有職婦人部短歌研究会員
		6	随筆 聲 映画鑑賞第一課(その二) 書籍紹介(合唱楽及指揮法、問題の教師)	東京ヴォランティア・コワイア 指揮者 中田羽後 時事新報演芸部 平尾郁次
		7 樹間水辺の書	野宮 家庭婦人水泳講習会について	山岳会

1933.10.1 夏季事業報告号	60		おたより 個人消息 YMCA広告 "	新入会員紹介 紙芝居改善運動(今井よね女子が中心で) 夏期声楽講習会	
		8	一面 広告	消費組合 小瀧寮 日本宗教音楽塾 杉浦商会 美津野 藤屋ドライクリーニング 日曜学校会館内金子歯科医院	
		1	目次	野尻キャンプを顧て 新秋にのぞむ言葉	白石つぎ 加藤タカ
		2	夏季事業報告(その一)	今秋のYWCA各部:家庭婦人、体育、英語、学生 御殿場修養会出席者の感想(専門部、高等女学生部、一般、有職婦人部)	
		3	" (その二)	今年の保田キャンプ 起きてから寝るまで 保田キャンプ来所者 夏期講習会(詳細表)	渡邊しけ子 川口まさ 有職婦人部
		4	一面 " (野尻キャンプ)	最後の夜、うみのたそがれ、感謝 オフィスブック 今年初めてのキャンパスの感じたこと	7名
		5	一面 " (野尻キャンプ)	管理者より 再び又は三度目のキャンパスの・・・ 思ひ出すこと 指導者感想 お客様の感想 仮装会の夜	ミルドレッドロー 2名 2名 横井貞代
		6	一面 " (その四)	夏季子ども学校 あるグループ記録より 指導者の感想 あるお母様の手紙	
		7	一面 " (その五)	小石川区白山御殿町「私共の家」の夏 神田区小学校女児童水泳 そのおさらい会のこと 夏季子ども学校見たこと感じた事 寄附図書	山野井ゆき
		8	たより	米国留学中の爾見宮子氏手紙紹介(現今のアメリカの様子が分かるので)他 ミス・ペーカーの夏休暇のお話 満州国二人旅の由比、渡邊両氏より 爪哇行(極楽島)第一信 南洋航海記 御殿場修養会出席者の感想	丹羽多嘉子 TS 菊田香
1933.11.30	61	9	夏季事業報告(その六) 個人消息 職員動静 家庭婦人部より	体育部(夜間水泳講習会、夏のプール) カフェテリアより 遠軽行 家庭婦人部より 住所不明会員一覧	安齋
		10	一面 広告	消費組合 YWCAの集会室と寝室 小瀧寮 日本宗教音楽塾 杉浦商会 美津野 藤屋ドライクリーニング 日曜学校会館内金子歯科医院	
		1	一面 第五回全国総 目次	第五回全国総会について 第1回開会式奨励 選ばれたるやから 総会を通して	植村環
		2	一面 第五回全国総	総会プログラム 第一日 講演及協議会 総会に出席して 詩 Tomorrow 英文と翻訳	一色純子

		3	一面 第五回全国総	第二日 朝の礼拝、奨励「如何にして建つべき」 国際心を女学生教育に取入れる方法 志立夫人晩餐懇談会 感想 第五回全国幹事会	粕谷よし子 河井道子
		4		レスター女史の話(イーストロンドンの話) 新渡戸先生を偲びて	渡邊松子
		5	個人消息  たより	鎌倉彫 家庭婦人部: 和洋裁仕立注文依頼 少女部 英語部 商業部 図書室 新京に満州国YW発会式挙行、京都YW職員移動他 新入会員紹介  カーニバル受付にて	荒牧房子
		6	一面 広告	消費組合 YWCAの集会室と寝室 杉浦商会 美津野 藤屋ドライクリーニング 日曜学校会館内金子歯科医院 大日本園芸商会	
記載なし クリスマス号	62	1	目次	輝く嬰兒(降誕日の黙想)	
		2	一面 各国のクリスマス	暑い国のクリスマス 私どものクリスマス行事一覧表 青葉の式	
		3		寒い国のクリスマス(ロシア、仏、ドイツ)	
		4		冬の食卓のために: ロシア料理、支那料理、 日本料理、山小屋や雪中キャンプに向く物 今年のクリスマス奉仕 : 計画 " : 押上市民館に於ける託児所クリスマス」 " : 家庭婦人部	
		5	たより  時候の挨拶	女工さんを国領へお招きした事 (ミキダンシングアカデミ三木照雄)	ヴィルゴークラブ
		6	個人消息  職員動静  以下 広告	新入会員紹介  東京三崎会館25周年、教文館・米国聖書協会 開館式 駿河台女学院入学案内 日曜学校会館内金子歯科医院 美津野 藤屋ドライクリーニング 杉浦商会	
1934.2.11	63	1	目次	日本建国の意義	今泉源吉
		2	昭和八年度事業報告 " " "	世の中では(事業報告に先立って八年度社会 情勢ポイント) 青年会では 有職婦人クラブ 労働婦人 少女部	
		3	以下 昭和八年度事	世の中では、青年会では 続き 宗教事業 体育部 家庭婦人部 学生部 会員全般に互る調べ	会員庶務
		4	一面 昭和八年度事	家政部 商業部 英語部 音楽部 実学部	
		5	一面 昭和八年度事	人事相談部 寝室部 カフェテリア 計画部 翠香寮 安藤坂 国領「憩の家」	



			図書流用計 事務所より	
		6	野尻キャンプカレンダー1933年 クリスマス奉仕を 昭和8年度クリスマス奉仕決算 国際カーニヴァル評価(評価統計表) 好子さん、正子さん(女性遭難に関する記事) 投げられた石(姿勢についての記事)	中村テル 体育部 竹内菊枝
		7	海外通信  職員のこと 個人消息  新入会員紹介	
		8	おたより 広告  駿河台女学院入学案内 美津野 日曜学校会館内金子歯科医院 杉浦商会 藤屋ドライクリーニング 小瀧寮	
1934.2.17 年会報告号	64	1	指導精神 第二十八回年会順序 紀元節式辞  挨拶  祝電	加藤タカ 日本YWCA同盟委員長 辻松子
		2	年会で承認された諸事項 提案、可決された諸件 グループ協議会の前に(昭4~8年度収支表示 グループ協議会 後援者増加運動週間	安齋富得
1934.3.20	65	1	「懼るな、彼處にて我を見る可し」マタイ28:10	宮城春江
		2	目次 一面 後援者増加運動週間  最初の朝 その経過 感想片々 :初めての訪問 " :赤ちゃんの後援者 " :財政を照らす光 " :感謝と懇談の集い	益田米 横山糸子 第三ティーム
		3	一面 後援者増加運動週間 金額一覧、経過一覧 後援者増加運動週間日記集 感謝 中央事務所で泣いたひとを歌う 中央事務所に居りて	会長 志立タキ 総幹事 加藤タカ
		4	若き小鳥に:最後の扉は開く 卒業を前にして... " " " " 学生部クラブ会員として 地の塩は四月から新しい着物に着かへます 英文欄設置に就て 図書室	櫛田孝 家政部速成科 豊原園子 英語部高等科 伊丹さよ子 商業部本科 中野トシ 商業部選科 安部コウ ラウレル 藤井新子  地の塩委員 山中仙子
		5	謎のないスフィンクス オスカア ワイルド作  雪だるま	訳:英語部高等科一年 福本葉子 つぼみクラブすずらん 松田愛子四年
		6	体育部:女の水泳講習 " :体操場へ、プールへ  新入会員御紹介  国際晩餐会 雛まつり 姿勢スタントと水中スタント 招待文芸会	
			個人消息  職員動静 海外からのお客様 ジュネーブ消息	

			少女部「母の会」 学生相談を始める 商業部:就職状態	委員 高田弘子
		7	以下 広告 預告:3月4月予定 〃 :第二回キャンプ指導者講習会 報告:留岡幸助、有馬四郎助両氏追想会 〃 :基督者代議士招待会 英語部 学生寄宿舍 翠香寮 国領「憩の家」	
		8	一面 広告 消費組合 駿河台女学院入学案内 美津野 日曜学校会館内金子歯科医院 杉浦商会 小瀧寮 藤屋ドライクリーニング	
1934. 4. 20	66		表紙 (*以後継続) 大石俊彦氏画	
			広告 翠香寮、第1第2学生寄宿舍、美津濃ラケット	
		1	巻頭言 目次	
		2	イースター早天礼拝、復活節の朝	
		4	説教 可能の我	シェーファー (フェリス女学校校長)
		6	卒業式の日:卒業を祝して	加藤タカ
		7	祝辞	志立タキ
		8	国際晩餐会	有職婦人部
		10	所謂二世のために	いづみ
		11	或る集り(写真あり)	
		12	外交展を見る	
		13	英文ページ 〃 A New Secretary News Items, Announcements	Miyako Sannnomiya Taka Kato
		16	良心的労働人	瀬川八重
		18	伝道週プログラム	
		19	後援者増加運動其の後	
		20	第五回有職婦人部総会	
		23	広告 音楽部、英語部	
		24	小さな女の子	キャサリンマンズフィールド
		28	横浜だより	
		29	少女部より	
		30	水泳講習会	体育部
		30	広告 国領一憩ひの家 第2回キャンプ指導者講習会	基督教キャンプ協会
		32	おたより 職員動静 個人消息 新入会員御紹介 東京YWCA会則の一部 「会員」 昭和9年度幹部委 員一覧	
		34		
		35	編集後記	
			広告 消費組合、日曜学校会館内歯科、小瀧寮、 杉浦商会、藤屋本店、ササヤのみつ豆	
1934. 5. 20	67		広告 ライオン歯磨本舗、YW集会室と寝室、日曜 学校会館内歯科、美津濃	
		1	巻頭言 目次	安齋富得
		2	伝道週講演会 (少女部)なくてはならぬもの	同盟宗教教育部 光静枝
		3	(家庭婦人部)無題	東京女子大学 安井哲子
		6	(学生部)信仰生活の構造	日本神学校教授 桑田秀延
		10	(有職婦人部)宗教的と言うことに就いて	東京YMCA総主事 斎藤惣一
		15	伝道週を終りて	宗教部
		16	各部報告 商業部一新入生を迎へて、新入生感想断片	(牧野)
		17	ゴオゴリ覚え書き*劇催しと関連して	伊井敏
		20	〃「郭公」梗概 *同上広告	
		22	English Section A Happy Vacation、Miss Baker Leaves Tokyo Y.W.C.A Starts Work for American Born Announcements、Guests And Callers Y.W.C.A Hostel	Miyako Sannnomiya
		26	各部報告 英語部 *広告(学生寄宿舍)	
		27	家政部 初印象	
		28	在米通信	爾見みや子
		30	五月のやうな女性—三宅やす子さんの記憶	村岡花子

		33	◇舶来の忠臣蔵	
		34	各部報告 家庭婦人部 『母の教育』一母の会に就て (高島)	
			◇ガイド記 (いづみ)	
		36	体育部 保健表記入に就いて、* 広告 (水泳他) 竹内菊枝	
		37	保健表 昭和九年度調査	
		38	有職婦人部 洋服相談部・消費組合売店・翠香寮 寮広告	
			" 昭和九年度クラブ方針 瀬川八重	
		40	実学部 (在籍及び新入学生状況他)、* 広告 憩いの家	
			" 国領郊外デー (4月29日) * 写真 (記録係高木)	
		42	職員小旅行 犬吠岬の日の出 横山糸子	
			" 銚子旅行記 (第一班行程、第三班遊記) (川口) (横山)	
		44	賛育会の病院を訪ねて (社会部)、函館大 宮原元子	
		45	個人消息	
			職員動静	
			外客往来	
			他の催しいろいろ	
		46	東京YWCA会則「会員」 * 毎号継続掲載	
			昭和9年度幹部委員一覧	
			東京YWCA館外事業一覧	
			東京YWCAの姉妹一覧	
		47	編集後記	
			広告 野尻キャンプ、杉浦商会、藤屋、ササヤ	
1934. 6. 20	68		広告 野尻キャンプ、美津濃、日曜学校会館内歯科、	
		1	巻頭言 目次	内池よね
		2	保健表記入の結果	体育部主任 竹内菊枝
		10	むしば読本 其一 * 広告 (YWCA) YWCA歯科 清水よし子	
		11	夏休みのために 夏休みとキャンプ	丹羽多嘉子
			春の野尻だより	
		15	保田キャンプ	渡邊松子
		17	神の歩みに合せて	瀬川八重
			YWCA夏期修養会	
		19	此の頃の国領 (憩の家)	加藤よし子
		20	米国西部沿岸諸大学部長招待計画に就て	いづみ
		22	ビルマのお客様	受付
		23	ミス・ペーカー	諏訪方枝
		24	各部報告 実学部 * 各諸表あり、長尾半平氏『 (庄田)	
		27	「私共の家」 * 広告 (宮崎)	
		28	劇評 新築地劇団の「検察官」と「郭公」 高見沢轟江	
			劇の催收支報告、* 広告 (学生寄宿舎)	
		30	山田わか女史に聴く 有職婦人部	
		31	各部報告 少女部 (大森)	
			体育部 水泳教習、山岳会他 (川口)	
			「会費納入期変更お知らせ」、お仕事探しています	
		36	小さな写真ニュース	
			ガイド記 みやこ	
		38	個人消息	
			職員動静	
			外客往来	
		39	東京YWCA会則「会員」 * 毎号継続掲載	
			昭和9年度幹部委員一覧	
			東京YWCA館外事業一覧	
			東京YWCAの姉妹一覧	
		40	編集後記	
		40	English Section Eight University Daens Visit Japan	
			Season' s Last Tea Held	
			General Secretary Sails (29頁)	
			一頁常識 お洗濯時季に際して洗濯石鹸の見分け方	
			保田キャンプ、消費組合、杉浦商会、藤屋	
1934. 7. 15	69		広告 季節挨拶、教会音楽夏期講習会 (讃美歌委員会)	
			ライオン (小林商店)、日曜学校会館内歯科、美津濃	
		1	巻頭言 目次	櫛田孝
		2	ジイドの「狭き門」とイエスの「狭き門」 柚木康	
		6	Here are few sugg 野尻キャンプ	
			夏期の諸事業 保田キャンプ	
			御殿場修養会、第6回夏期講習会	
			御殿町林間学校	
			子ども学校	
			児童水泳	
			夏期講習会	
			海や山で遊ぶとき (ゲーム)	体育部 手塚雪

		14		紙魚ならずも（先輩からの推薦図書） 水泳に対する注意	体育部医師 板文子
		15	各部報告	音楽部 人を求めて居ります、仕事を求めて居ます つばみクラブ指導者研究会 青木誠四郎氏 を中心に 小学校時代の子供を育てるために むしば読本 其二	(鹽野) 体育部歯科 清水よし子
		16			
		18		洋上そぞろがき	田村光子
		24		師を送りて（短歌） * 広告（ YWCAホーム	商業部 玻璃子 会館部 河合時尾 家政部
		25		夏向きの飲物とアイスクリームの拵へ方	
		26	各部報告	少女部・学生部 英語部・商業部 山岳会・私共の家・図書室	
		36		御挨拶にかへて	爾見宮子
		37	個人消息 職員動静 新入会員紹介 おたより		
		38		ディーンズ来朝、 「1934年の夏を語る会」	
		39	東京YWCA会則「会員 昭和9年度幹部委員一覧 東京YWCA館外事業一覧 東京YWCAの姉妹一覧	* 毎号継続掲載	
		40	編集後記		
			広告（*以後継続）	消費組合、杉浦商会、藤屋、声楽講習会 （東京YMCA） 一頁常識（ライオン石鹸株式会社）、東京 湾汽船	
1934. 9. 25	70		広告（*以後継続）	小林商店、美津濃	
			口絵（写真）	汎太平洋会議・野尻キャンプ・御殿場修養 会	
		1	扉		
		2	思ひ出をつづる		爾見宮子
		7	三ヶ月の旅を終へて		加藤タカ
		11	関西大風害義捐金募集		
		12	夏の仕事の報告	野尻キャンプ 第一期	キャンプ係
		13		第二期	
		14		妙高登山	
		15	保田キャンプ	山・海・人	牧野綏子
		17		報告とスナップ	
		18	御殿場修養会	高女部	
		20		専門部	
		21		一般及有職婦人部	
		23	「私共のお家」		宮崎貞子
		25	夏のプール		
		27	子ども学校座談会		
		28	夏季講習会		有職婦人部
		30	おとまりのお客様		
		31	よはひ四十に餘りて初めて山の土をふむ		吉原豊子
		36	野兎		中村テル
		38		米国西部大学女子学長を迎へて	
		41	若草物語		草原次夫
		44		YWCA YMCA余暇調査について	
		46		保健表再記入につき	
		48	旅信		エディス ベーカー
		54	英文のページ	English Section	
		55		一九三四年の夏を語る会	
		56	個人消息・職員動静		
1934. 10. 31	71	1	巻頭言		熊野清子
		2	万国祈祷週と国際新	万国祈祷週祈祷題目に就て	
		5		『汝もし知りたらんには』（聖書解説）	
		7		東京YWCAに於ける祈祷週プログラム	
		9		国際コドモまつり（梗概）	
		8		コドモまつりこぼればなし	
		13	三ヶ月の旅を終へて（続）		加藤タカ
		20	各部報告	子供英語会（家庭婦人部） 寮生活の一日（納戸町第一寄宿舎） 山岳会月報（体育部） 保田の冬の家（有職婦人部） 求人求職（人事相談部）	
		21			
		22			
		23			
		25			
		24	十月の歌舞伎へ行く		安齋とみえ

		26	旅信		田村光子
		28	思ひ出をつづる（続）		爾見宮子
		31	日本女性へのメッセージ		北米合衆国羅府父兄教師協 会会長レティシヤ・ジェ・ リツトル
		32 33 33	暴風に損はれた京都YWCA訪問 関西風害義捐金募集の結果 風害地だより		丹羽多嘉子 社会部
		34 35	個人消息、外客来 往、催いろいろ 職員動静		
		37	Children' s International Fete		
1934. 12. 23 クリスマス 号	72	1	扉		
		2 5 7 8	クリスマス メッセージ ヴァージニアへ送る返事（ニューヨーク サン紙「サンタクロースの論説」より） クリスマスの夜の物語（詩） 南ダコタのクリスマス		キヤドマン   寺田みちよ
		10	教会の為に		福田正俊
		14 15 15 16 16 17 18 20	各部報告 家庭婦人部「松沢病院見学」 有職婦人部「婦人と経済座談会」 少女部 寄宿舎 英語部 商業部 体育部「山岳会月報」 国際コードモツリ後記		荒牧照子 紅林芳枝
		24	温かい支那料理		家庭婦人部
		26	洋上五千里の追憶		田村光
		32	「にんじん」のルナル		山下浪子
		35	赤城山のハイキング		中村テル
		36	十二月の音楽会・歌舞伎		
		37 38 39	新刊紹介 おたより 個人消息・職員動 静・その他		
		42 40 41	English Section Children' s English-speaking Society Japan Christmas Gifts		Eiko kawasaki Estber Dayman
		44	編集後記		
1935. 2. 11 年報号	73	1	巻頭言		爾見宮子
		2 3 4 6 8 20 26 30 31 32 35	第二九回年会を迎ふ 年会プログラム 昭和九年度事業報告 一般－総務 会計決算及予算 会員部（家庭婦人部、有職婦人部、学生 部、少女部） 駿河台女学院（商業部、英語部、家政部、 実業部、音楽部） 其他（計画、寝室部、会館部、カフェテリ ア、寄宿舎、「憩の家」） 宗教事業 体育事業 キャンプ事業 社会事業		丹羽多嘉子
		40	東京YWCAの衣	＊役員幹事背景、事業概要の記事等	M・W・
		44		病人の家を訪ねて	磯田いき子
		45		私達で作った人形芝居	鈴木美津子
		46	イエスの弟子道		桑田秀延
		47		第七回全国幹事会	
		50 52	山岳会月報 三宮さんの話		
		54 55 58	おたより、ニュース 個人消息・職員動静 編集後記		
1935. 3. 20	74	1	巻頭言		
		2 5 6 9 10	第二九回年会報告 基督者の愛国 年会に出席して 標語について		帝大教授 矢内原忠雄 一会員 瀬川八重

		13		お互いの姿勢を反省しませう	
		14	花をおくる	学窓を出づる人々に	脇屋義人
		19	鳩の如く蛇の如く	学院卒業生へ	小林文子
		22	各部報告	駿河台女学院各部卒業生感想	
		26		家庭婦人部	
		28		有職婦人部	
		32		少女部	
		35	北海道スキー四人旅		渡邊松子
		43		保田の家	
		44	春は曙におもふ		田村光
		51		体育部（山岳会月報）	
		52	個人消息		
		53	会則、幹部委員		
1935. 4. 29	75	56	A Saturday in Tokyo Y. W. C. A		Emma R. Kaufman
		58	編集後記		
		1	巻頭祈祷		
		2	苦難・復活（詩）		柚木康
		4	罪と救		浅野順一
		15	世界の青年の指導 者モット博士を中心として	モット博士講演会	
		15		鎌倉協議会に出席して	瀬川八重
		18		東山荘協議会に出席して	安齋富得
		19		シヤム舞踏	
		19		イースター早天礼拝	
		20		会員倍加運動をなすに當りて	
		22		卒業生会をつくりませう	
		24	塀		櫛田孝
1935. 5. 23	76	26		四月の歌舞伎座	
		27	第八回国際晩餐会		有職婦人部
		28		われらの使命	河井道子
		30	第六回有職婦人部 クラブ総会		
		36	各部報告	英語部、商業部、計画部 保田カテージ、「私共の家」 三角の窓より 四月から始まる催案内	
		37			
		38			
		39			
		40	春霞猫のねむる間		田村光
		47	海外ニュース其他		
		48	おたより		
		49	個人消息・職員動静		
		52	編集後記		
1935. 5. 23	76	1	巻頭言		
		2	世の凡ての母のため（祈祷）		
		3		父母をおもふ歌	
		4	「我が子等の宗教教育」座談会		
		12	母性保護運動所感		渡邊松子
		19		家庭婦人講座第一回「婦人と社会問題」より	
		20	栄養の常識		板文子
		26	家族キャンプ諸問題		丹羽多嘉子
		30		アメリカ庭園クラブ代表者来館	
		31	卒業生のページ		
		34	会員倍加運動中央日記		
		36	各部報告	家庭婦人部 有職婦人部 体育部山岳会 社会立法協議会委員会に出席して 計画部	山野井ゆき子
		38			
1935. 6. 28	77	40			
		44			
		45			
		46	今ぞ昔御苑の早夏		田村光
		48	不思議なばら（小さな劇）		つばみクラブ
		50		「私共の家」	
		51		『お友達になりたし』	
		52	個人消息・職員動静		
		54	English Section		
		56	編集後記		
		1	巻頭言		
		2	会員倍加運動報告		
		6	健康な生活の為に	青年のころ 健康 キャンプに於ける保健 家族キャンプ（其の二）	神戸女学院専門部 教授 實生すぎ 竹内菊枝 医学博士 長谷川雅雄 丹羽多嘉子
		12			
		16			
		21			

		26		米	中島千鶴子
		28	第二世に就いて		秋吉米
		30	労働週間講演の旅より		谷野節子
		33	諸集会より	母の集い（倉橋惣三氏講話）	母の会
		36		新聞経済記事の読方（小汀利得氏講和）	有職婦人部
		38		山の講座実習記（地図の見方と写真の写し方）	山岳会
		40	卒業生のページ		
		41	各部報告	有職婦人部 第二回関東部会其他	
1935. 7. 19	78	44		社会部 奨学金、台湾震災義金など	
		45		体育部 山岳会月報	
		48	おたより		
		49	個人消息、職員動		
		52	静、三面鏡		
		52	編集後記		
		1	巻頭「沈黙の信頼」		
		2	夏期諸事業紹介	御殿場修養会	
		5		野尻キャンプ	
		6		保田キャンプ	
		7		国領「憩の家」	
		8		講習会	
		9		こども学校、児童水泳	
		10		白山林間学校	
		11	冷たい飲み物とプディング		金森久和子
		12	婦人と世界の動き	ガンドレット恒子氏のお話	
		13	各部報告	蕨を持つ石膏と職業	商業部
		14		小さい贈り物、その他	社会部
		15		児童英語会、めぐみ会、その他	家庭婦人部
		16		卒業生会	
		18		消費組合問題、その他	有職婦人部
		22		入会式、つばみクラブ、指導者研究会	少女部
		33		新刊紹介	図書部
		34	随筆	マリーピエロのSan Francesco d' Assisi	津川主一
1935. 7. 19	78	37	ちぎれ雲		田村光
		45	「名講義」		一聴講生
		47	おたより		
		48	故加納夫人追悼会		
		49	職員動静、個人消息、其他		
1935. 9. 14	79	1	巻頭	祈祷	
		2	夏を送り新秋を迎ふ		
		2	夏期諸事業報告	御殿場修養会感想	
		9		野尻キャンプ（附 水穴村託児所）	
		16		保田の一日	
		18		共同キャンプ（社会部）	
		21		「私共の家」	
		23		体育部	
		25		こども学校	
		28		講習会、受付、寝室	
		30		数字に表はれたる夏期事業	
		32	第一回全国有職婦人連盟総会		
		35	卒業生のページ		
		36	「ゲーテの夕」	開催に際して	
		38		ゲーテと一幕物「兄妹」	竹越和夫
		42		「ヘルマンとドロテア」上演に就いて	番匠谷英一
1935. 9. 14	79	45	パナマを行きつつ		渡邊松子
		52	おたより		
		54	個人消息、職員動静		
		56	編集後記		
1935. 10. 25	80	1	巻頭言		内池ヨネ
		2	第六回全国総会に先だちて		安齋富得
		4	万国基督教女子青年会祈祷及国際親善週	祈祷題目「基督の使者」	
		7		万国祈祷週に際して	瀬川八重
		9		如何にして子供を神様に導くか	D・F・ウィルソン
		14		国際子供デー	
		17	最近の欧州事情		町田梓楼
		23	更生のドイツ	永井前駐独大使講話	
		25	YWCAに豪州女学生団を招待して		
		28	各部報告	卒業生のページ	
		30		有職婦人部	
		31		私共の家・社会部	

		32	ルンペンの生活と 教護	草間八十雄氏講話	
		36	サミットレークより		渡邊松子
		40	おたより		
		41	個人消息、職員動静		
		42	新入会員氏名録		
		48		「所かはれば」	
		41, 49		「ゲーテの夕」感想	
1935. 11. 27	81	52	編集後記		
		1	巻頭言		森智恵子
		2	万国祈祷及国際親善	早天礼拝	
		3	平和記念日礼拝	「国際情勢の認識」	海老沢亮
		5		如何にして子供を神様に導くか（承前）	
		9	日本基督教女子青年会 第六回総会	プログラム、開会式、組織会、議事、分科会、感想、中華民国YWCA総幹事丁淑静女史演説	
		23	聖誕劇『世界の光』		
1935. 12. 20	82	27	報告	家庭婦人部、少女部、卒業生会、「ゲーテの夕」	
		30	おたより		
		31	個人消息、職員動静		
		32	Come, Children		yuki Tetsuka
		34	編集後記		
		1	巻頭言		宮城春江
		2	信仰の従順		熊野義孝
1936. 211	83	5		クリスマス・ライブラリー	
		6		クリスマスに歌へる（詩）	
		7		私のクリスマス・パーティー	
				クリスマス・ディナー	
				創作版画のやり方	
				聖夜に聴くレコード	
		18	クリスマスの頃		田村光 谷ロフミエ 深川主一 爾見宮子
		20		蠟燭（詩）	
		19	各部及諸催報告と展望	社会部 有職婦人部 駿河台女学院音楽会を聴く 家庭婦人部 「私共の家」 卒業生のページ お汁粉デー 国際子供デー感想 「世界の光」を終りて 我は始めなり終わりなり（詩）	
		21			
		25			
		26			
		27			
1936. 211	83	28			
		29			
		31			
		32			
		33	創立第三十年記念 事業について		
		35		クリスマスゆゑ（詩）	
		36		“Dusty Answer”の紹介	英語部高等科二年 吉田美恵子
1936. 211	83	41		吾あやまてり	
		42	個人消息		
		44	編集後記		
				表紙画：石井三冬 題字：加藤タカ（＊以後継続）	
		3	巻頭言		志立タキ 安齋富得
		4	第三十回年会を迎ふ		
		7	東京基督教女子青年会に贈られし祝辞	紀元節礼拝、第三十年年会事務会、創立三十年祝賀の歌 阿部義宗（青山学院院長）安井哲（東京女子大学学長）斎藤惣一（日本基督教青年会同盟総主事）山本琴子（基督教女子青年会日本同盟総幹事）横浜基督教女子青年会 平田道子（京都基督教女子青年会会長）伊津野いつゑ（神戸基督教女子青年会会長） 創立三十周年記念祝賀週プログラム	
1936. 211	83	13	祝賀週プログラム		加藤タカ
		14	三十年の回顧		
		20	昭和十年度事業報告	会計決算報告 会員全般に亘る数字的調査 宗教事業 体育事業 野尻キャンプ 会員事業（家庭婦人部、有職婦人部、少女部、卒業生会） 駿河台女学院（商業部、英語部、家政部、実学部、音楽部）	
		21			
		22			
		24			
		28			
1936. 211	83	30			
		44			



		51	其他（会館部、計画部、寝室部、キャフエテリア、寄宿舍、「憩の家」、体育部山岳会、社会部	
		60	病人栄養料理	中島千鶴子
		63	風邪に就いて	竹内菊枝
		64	ハリスバーグ警見記	渡邊松子
		70	個人消息、職員動静	
		75	An Outline of the Vocational Opportunities Open to the Girls Trained in Home Economics	M. Hockin.
		76	編集後記	
1936. 3. 11	84	3	受難週のため	阿佐谷教会牧師 大村勇
		4	「赦の宣言」	東京オラトリオ協会指揮者 津川主一
		9	セバスチアン・バッハの受難楽に就いて	
		13	学院のページ	駿河台女学院幹事爾見宮子
		17	駿河台女学院を卒業するに臨みて	学院各部生徒
		20	第三十回年会祝賀	二月十一日のこと
		23	紀元節式辞	加藤タカ
		25	創立三十周年記念式に列して	安井てつ
		31	年会事務会	
		34	現代と神の国	同盟宗教部委員長植村環
		35	分科会報告	各グループ
		38	女性講演会	
		38	最近婦人運動の動向	文化学院教授 河崎なつ
		42	婦人と文化運動	婦人評論家 神近市子
		45	文芸会の劇二つ	
		47	報告	有職婦人部、少女部、卒業生会、山岳会
		50	会員動静	
		51	冬山、スキー関連用具貸出及び販売のお知らせ	
		52	標語について	宗教部幹事 小林文子
		56	体育部師範科新設に際して	体育部幹事 竹内菊枝
		60	入学案内	駿河台女学院各部
		62	病人食餌調理法	実学部料理科 主任中島千鶴子
		66	国際交友部報告	
		69	The True Health Education	Marjorie Bouve
		70	おたより、ニュース個人消息、職員動静	
		73	編集後記	
1936. 4. 10	85	3	巻頭「主の愛」	
		4	新入生に	加藤タカ
		6	復活節を迎へて	牧師、農学士本間誠
		10	The Sky	Rlizabeth W. Aurell
		11	復活祭の音楽と絵画	津川主一
		15	春の行事一覧	
		16	卒業生のページ	
		18	各部報告	有職婦人部（消費組合総会、劇の夕）
		22	少女部	
		23	語学部	
		24	社会部	
		26	アメリカ職業婦人氣質	渡邊松子
		30	民衆娯楽改善講習会に出席して「体育部師範科」の事を考ふ	京都YW総幹事 内藤幸
		35	病人食餌調理法	中島千鶴子
		41	新会員紹介	
		42	外国だより、個人消息、職員動静	
		47	編集後記	
1936. 5. 10	86	3	巻頭言	安齋富得
		4	MY MADONNA	
		5	ああ、そは我が母なり	
		6	母の日の礼拝プログラム	津川主一
		10	母と子の問題（第一講）	霜田静志
		16	彼等は如何に思ひしか	
		18	クランストン女史を招きて	
		20	伝道週報告、新会員歓迎お茶の会	
		24	各部報告	少女部（十周年記念週）
		26	有職婦人部（第七回クラブ総会、此の頃のクラブ）	

1936. 6. 10	87	30	「憩の家」	
		31	社会部	
		34	家庭婦人部	
		35	体育部	
		36	卒業生のページ	
		37	「映画の夕」開催に就いて	
		41	紐育だより	渡邊松子
		45	病人食餌調理法（つづき）	中島千鶴子
		48	姿勢常識	櫻井恵美子
		49	個人消息	
1936. 6. 10	87	50	おたより、職員動静	
		52	編集後記	
		3	巻頭言「人間機械」	竹内菊枝
		4	文化の福音的理解	日本神学校教授桑田秀延
		9	所感	内池ヨネ
		10	母と子の問題（第二講）	「子供の家」相談所所長
		17	お人形の仕立屋さん （ディケンズ「お友達同志」より）	霜田静志
		18	少女部十周年記念週	
		24	各部より	家庭婦人部（クラブの紹介）
		27		有職婦人部（夏の計画、母の会）
1936. 6. 10	87	28		体育部（水泳講習会のお知らせ）
		29		体育師範部（生徒感想）
		32		社会部（夏季事業予告、漬物の会、地区瞥見）
		35	卒業生のページ	
		38	料理	カフェテリア主任幹事
		39		田村光
		40	洋装講座	家政部西洋料理教師マーガレット・ホツキン
		47	おたより	
		50	お客様	
		51	個人消息	
1936. 6. 10	87	53	編集後記	
		3	巻頭言	
		4	墨絵の聖画	阿部義宗
		6	訂正（文化の福音的理解）	
		7	洋装講座	マーガレット・ホツキン
		12	母と子の問題（第三講）	霜田静志
		18	夏期事業	感謝と夏期事業一束
		19		富士は招く（御殿場修養会）
		23		保田キャンプ
		24		野尻キャンプ
1936. 6. 10	87	24		初秋の集ひ（夏期事業報告会）
		25		夏期十二回講習
		26		第八回夏期講習
		28		第四回夏期子ども学校
		29		プールの夏
		30	第三回労働週間	
		32	各部報告	家庭婦人部（講座、見学）
		34		少女部（いろいろ）
		35		有職婦人部（関東部会の事）
		36		商業部（生徒募集）
1936. 6. 10	87	37		語学部（日記片々）
		37		音楽部（生徒募集）
		38		社会部（花の日）
		39		寝室部（水の少女達、六月のお客様）
		40		憩の家
		41		山岳会
		44	ブック・レビュー	デイスフリーダム、福音主義的教育観、ボロ哲学
		47	おたより、個人消息、職員動静	
		51	浴衣御礼	
		51	編集後記	
1936. 9. 18	89	1	巻頭写真	「グレン・バーナード キャンプ」
		2	夏期事業報告	御殿場夏期修養会
		16		キャンプ（野尻、保田）
		33		講習（十二回講習、夏期講習）
		36		子ども学校座談会
		43		夏の体育事業
		51	会館部、山岳会	
1936. 9. 18	89	52		「私共の家」の夏（社会部）

		60	第三回全国有職婦人連合総会	
		61	個人消息、職員動静	
		63	消費組合の動き、渡邊先生歓迎会	
		65	秋の計画	
		65	米国学生団歓迎	受付風景
		68	海外より	キャンプカベル便り
		69		セイロン会議
		70		丁淑静女史
		72		Welcome Dinner for the Church Federation
		74		Vacationing in Hokkaido
1936. 10. 16	90	76	編集後記	
		3	巻頭 写真「牧羊者」	
		4	萬国祈祷及国際親善週	
		5		萬国祈祷週の意義
		9		早天礼拝予告
		6		皆様国際親善の日が参ります
		4	予告（十月—十二月）	
		10	オストロフスキーに就いて	新協劇団文芸部
		12	演出に就いて	村山知義
		12		「雷雨」と「熊」梗概
1936. 11. 9	91	15	思ひ出くさぐさ	今村寿々代
		20	ロビーの片隅より	××××
		25	ブック・レビュー	
		26	各部報告	少女部、社会部
		28		International Children' s Day
		29		Japan as I First saw It
		30	個人消息、職員動静、新会員紹介	I. Mizoguchi
		31	会則、其他	Mary H. Macauley
		32	編集後記	
		3	扉 写真「ダマスコ門」	
1936. 12. 19 クリスマス号	92	4	巻頭言「アンデスの基督」	渡邊松子
		6	萬国祈祷週	
		11		国際子供デー後記
		13	亜米利加に於ける体育の発達	エヴリス・ウエーレン
		15	体育部師範部懇談会	*参加者一覧掲載
		19		楽しく遊べる室内ゲーム
		20	各部報告	家政部（箱根、熱海ホテル見学）
		20		卒業生のページ
		22		少女部
		25	思い出くさぐさ（二）	今村寿々代
		34	ロビーの片隅より	××××
		41	個人消息、職員動静	
		43	編集後記	
		3	巻頭言	小林文子
		4	クリスマス・ページ	その名をイエスとなづくべし
		6		ナザレの夜（訳詩）
		7		合同クリスマス祝会
		8		ロマン・ローランの教ゆるもの
		14		クリスマス・レクリエーション・パーティ
		18	年末随筆	クリスマス・年末の頃
		19		ひるやすみ
		20		"The Old Maid"のこと
		25	スケート入門	
		27	ロシア劇報告、	
		28	結核予防婦人会	
		31	セイロン会議報告	
		31	十一月三日、その夜の景気	語学部幹事ミルドレッド・ロー
		34	特別週間報告	キャンプ幹事 白石つぎ
		35		聖旨と我等の生活態度
		37		社会思想より観たる国際情勢
		42		現時の国際状況
		50		栄養週間
		50		栄養講話（佐伯博士、金子女史、中島）
		72	ブック・レビュー	
		74	思い出くさぐさ（三）	今村寿々代
		81	ロビーの片隅より	××××
		91		Czechoslovakia, Letter
		92	個人消息、職員動静	
		94	編集後記	

1937. 2. 11 年報号	93	3	巻頭	東京YWCA標語原案及YWCA目的	
		4	第三十一回年会順序	年会を迎へて	渡邊松子
		4	東京基督教女子青年会 昭和十一年度事業報告	総務	
		6		会計決算	
		8		会員全般に亘る数字的調査	
		9		宗教事業	
		10		体育事業（附、山岳会）	
		12		キャンプ事業（野尻、保田）	
		15		会員事業	
		16		家庭婦人部（既婚婦人、未婚婦人）	
		16		有職婦人部（附、消費組合、洋服相談部）	
		19		少女部（女学生、つぼみクラブ）	
		22		卒業生会	
		24		駿河台女学院	
		25		商業部	
		27		語学部	
		28		家政部	
		29		実学部	
		30		音楽部、体育師範部	
		31		国際交友事業	
		33		社会事業	
		34		其他諸施設（食堂、寢室、図書室、寄宿舎、「憩の家」）	
		36			
		38		セイロンより帰って	櫛田孝
		42		加藤総幹事ジェネバへ	
		42		合同クリスマス礼拝、クリスマス奉仕	
		43		すすはらひ、全国幹事会	
		44	おたより		
		45	個人情報、職員動静		
		48	編集後記		
1937. 3. 20	94	3	巻頭言		宮城春江
		4	受難・復活	視よ、この人なり	東京諸聖徒教会牧師 須貝止 中央会堂牧師 武藤健
		7		復活の福音	
		10	予告	イースター早天礼拝・受難日礼拝・伝道週他	
		11		瑞典のプリンセス・セダグレン夫人	
		12	第三十一回年会報告	標語について	熊野清子
		12		一日のプログラム	
		14		奨励、報告、挨拶	
		17		分科懇談会	
		17		「東亜に於ける基督教の指導精神」	
		19		「婦人の社会的地位と其の貢献」	
		22		「国際関係」	
		28	体育部師範部発表会		櫛田孝 渡邊松子
		29	各部報告	愛市連盟婦人部の活躍	
		30		学院、卒業生会、国際交友部報告	
		31		セイロンより帰って一会議のプロフィール（ジェネバ）	
		34			
		36	個人消息、職員動静		
		37	東京YWCA会則の一部、幹部委員		
		38	編集後記		
1937. 4. 23	95	1		伝道週	柳下道子
		3	巻頭言		
		4		遠くジェネバへ立つに際して	加藤タカ
		5		加藤総幹事とウツズモール総幹事	
		6	神を慕ふ心（序）		城南教会牧師 岡田五作
		10	訳詩五つ		
		12	旅信	満支旅行から ワシントンから	宮城春江、安齋とみえ 大森松代
		17	各部報告	少女部、有職婦人部、卒業生会	
1937. 5. 23	96	21	個人消息・職員動静		
		22	会則・幹部委員		
		23	編集後記		
		3	巻頭言	「薔薇を植うる人」	
		4	シオンの大路にある者		岡田五作
		8	母子ホーム及母子保護法		高木栄子
		11		工場へ売られて行った女たち	
		12	旅日記より		宮城春江 白石つぎ
		16		世界の女性ヘレン・ケラーを聴きて	
		18	キャンプ		
		22	訳詩五つ		

		24 四つの映画について	平尾郁次
		29 「書道講話」婦人と書道	金子玉山
		32 各部報告 (有職婦人部、少女部、卒業生会)	
		35 個人消息、職員動静	
1937. 6. 10	97	38 編集後記	
		3 巻頭「指導者の要望」	渡邊松子
		4 至上の幸福 (詩篇講義)	岡田五作
		7 魯女士は語る	
		8 旅日記より	安齋とみえ
		14 ソヴィエツト、波蘭、ドイツを過ぎて	加藤タカ
		18 訳詩三つ	
		20 アメリカのキャンプ	白石つぎ
		26 婦人と書道 (その二)	金子玉山
		28 田園調布の発会 (もより会)	
1937. 7. 10	98	30 卒業生大会	
		32 関東部会修養会 (有職婦人部)	
		33 日本の職業婦人へ	元大阪YW商業部幹事 E・J・デーヴィス
		36 新入会員御紹介	
		41 会則其他	
		42 編集後記	
		3 巻頭写真 スイスの花	
		4 力と愛と神 (詩篇講義)	岡田五作
		12 夏期事業案内	夏期修養会
		14 講習いろいろ	
1937. 9. 10	99	15 キャンプ	
		17 児童水泳	
		18 社会事業	
		19 「憩の家」	
		20 訳詩五つ	塩野幸子
		22 随筆	東京女子大学講師 石村貞吉
		24 街路樹	実学部習字講師 山崎光子
		25 シェイクスピア戯曲に現れた悲劇の観念に就いて	東京女子大学講師 中野好夫
		28 旅日記より	横山糸子
		34 歐羅巴通信	加藤タカ
1937. 10. 10	100	39 総会のページ	
		40 各部だより	新緑の国領 雨もまたよき日 (家政部)
		44 ハンドシェーク・クラブ (家庭婦人部)	
		44 デパートクラブ連合 (有職婦人部)	
		45 クラブの感想 (少女部)	
		47 婦人と書道 (書道講話)	
		51 新入会員御紹介	
		54 会則、幹部委員名簿	
		55 個人消息、職員動静	
		56 編集後記	
1937. 9. 10	99	3 巻頭写真「沙翁生地の園」	
		4 北欧通信	加藤タカ
		10 我がYWCAの夏	
		11 世界教育会議に出席して	爾見宮子
		15 御殿場修養会 (各部講演、日記等)	
		25 プールの活躍	
		26 夏の社会事業	
		26 講習会	
		30 世界人の宿	
		33 秋の笛 (訳詩)	塩野幸子
1937. 10. 10	100	34 部だより	少女部
		37 有職婦人部	
		39 卒業生会	
		40 残暑の昼どき (料理)	中上すま子
		41 会則、幹部委員氏名、各市YW所在地其他	
		42 編集後記	
		3 巻頭言	安齋とみえ
		4 報告	キリストを仰ぎて (萬国祈祷週)
		5 第七回全国総会	
		6 パリの宿にて	加藤タカ
1937. 10. 10	100	11 世界を東京に持ちて	千葉幽香
		19 来年のために	白石つぎ
		24 料理	菊と薯
		25 秋の晩餐	内池よね 大賀とみ子



		60		天ぶら	
		62	少女部のページ		
		64		吉岡女史祝賀会	
		65		新式ローマ字	
		67	個人消息 職員動静		
		68	編集後記		
1938. 3. 7	104	6		非常時と神の全能の信仰	日本基督教蒲田教会 牧師 栗原久雄
		12	第三十二回年会の報告		
		18	パネル懇談会		
		23	我等の指導精神		加藤タカ
		26	「時局とYWCA」のページ		
		27		東京YWCAにおいでになりませんか	
		30		拾いたいもの捨てたいもの	家政部幹事 大森松代
		33	鍋の料理		古賀つる
		34	破れ靴 (翻訳短編)		塩野幸子
		39	少女部のページ		
		45	図書室月報		
		46	個人消息、お知らせ		
		47	編集後記		
1938. 4. 10	105	1	巻頭言		渡邊松子
		2	宗教	苦難と栄光	新生基督教会牧師 白戸八郎
		6		復活節の朝に	日本組合駒沢教会 主任教役者 宮沢愛子
		10		非常時と摂理の信仰 (連続講話)	栗原久雄
		16		生命の御言たへなるかな	
		18	「黄ばらの思い出」	座談会 (ミス・カフマンを中心に)	
		26		白米食を止めませう	中島千鶴子
		30	少女部のページ		
		32	卒業生会のページ		
		33	図書室月報		
		35	劇場通信		
		36	会員消息 職員動静		
		37	集会一束		
		38	編集後記		
1938. 5. 10	106			表紙画 山下品蔵 同字 加藤タカ (*以後継続)	
		1	巻頭言		研究部幹事 渡邊松子
		2	連続講話	イエス・キリスト	栗原久雄
		8	農村少女を思ふ		会員教育幹事 安齋トミへ
		10		皆様に急告	
		11	ヨブ記 (良書紹介)		宗教部委員 竹森トヨ
		12	母の日	母もうたへる (訳詩)	塩野幸子
		14		母のうた子のうた	
		18	人待つ晩餐 (翻訳短編)		キャンプ教育部幹事 白石つぎ
		28	魅惑の四作品		東宝映画課長 平尾郁次
		32	春の粧ひ	吉行あぐり氏のお話	
		34	少女部のページ		
		36	会員消息、集会一束		
		37	会則、幹部委員氏名、其他		
		38	編集後記		
1938. 6. 7	107	1	巻頭言		渡邊松子
		2	連続講話	基督教生活の強調点二つ	栗原久雄
		7		母の日に献堂した翠香母子寮	
		12	夏休みの過し方座談会		
		20	翻訳	花の詩二つ	出版部幹事 塩野幸子
		22		人生の意義について	語学部講師 三谷松子
		26	朝鮮料理二つ		朝鮮YW連合会幹事 崔寶卿
		29	ブック・レビュー		宗教部委員長 熊野清子他
		30	少女部の頁		新藤幸子、他
		33	卒業生会の頁		
		34		西洋のお客様をご案内して	狩野、土方
		35	ニュース		
		36	おたより		
		37	個人消息 職員動静		
		38	会則、幹部委員氏名、其他		
		39	編集後記		
1938. 7. 10	108	3	巻頭祈祷		小林文子
		4	時局に思ふ		渡邊松子
		6	連続講話	基督教生活の強調点二つ	栗原久雄
		12	YWCAの為し得る貢献		YW[婦人の地位と社会的貢献] 研究員会委員長 藤田タキ

		14		反省し要望す	加藤タカ
		16	前期検討会の報告		
		17	農村の娘		
		22	野尻キャンプ	野尻の朝から夜まで	白石つぎ
		24		湖畔にて	出版部委員 小泉照子
		26	初夏の軽い晩餐（料理）		古賀つる
		29	職業婦人の生活調査		
		31	ブック・リヴィウ		石黒、吉阪、片平
		32	翻訳	人攫ひ（マンスフィールド）	高木淑
		37		田園調布に憧れて（ある百姓生活者の手記）	塩野幸子
1938. 9. 10 東京YW紹介 号	109	42	ニュース片々		
		45	国際交友部		
		46	卒業生会の頁		
		49	個人消息 職員動静		
		50	会則、幹部委員氏名、其他		
		51	編集後記		
			口絵	林間学校、野尻キャンプ、多摩川キャン プ、 プール	
		3	我等の所信（巻頭言）		
		4	我等のとり態度		加藤タカ
		6	東京YWCAの教育	与へて得るところ 体育の重要性 YWCAの世界性 YWCAの学校教育	
1938. 11. 10	110	12			
		17			
		22			
		28	東京YWCAの財政		
		32	YWCA萬国大会		光静枝
		35	事変下に於ける東京YWCA		
		40		二つのユニークなもの	文化学院女学部長 河崎なつ
		42		YWCAと私	元国際連盟国際労働機関 吉阪俊蔵
		44		女子青年	日本労働科学研究所長 暉 峻義等
		31	御殿場修養会		
1938. 12. 10 クリスマス 号	111	38	林間学校		
		46		英文日本作法の書	
		47		保田、母子ホーム、講習など	
		26	東京YWCA各部、 幹部委員氏名		
		48	編集後記		
		1~4	口絵写真		
		4	巻頭「今日」の祈り		
		6	山上の垂訓		京都組合教会牧師 田崎健作
		12		日本に於ける基督教婦人の地位	青山学院神学部教授 比 屋根安定
		15		今年の国際子供デー	
1938. 12. 10 クリスマス 号	111	16		国際親善萬国祈祷週（祈祷題目と行事）	
		18	東京YWCAの日本の お友達へ	世界大戦中の英国婦人	シーラ・ブッシュ
		21		シャムの学校	B ・ナビン
		23		シャムの婦人と教育	P ・サンカジェキャ
		23		シャムの婦人	チャーサン・ナンダスタ
		25		ムアングタイ	ハタジツ芙蓉子
		26	九十日世界旅行		語学部講師 北島メリー
		29		出征家族慰問記	立川美智子
		30	萬国大会通信		光静枝
		34	世界大会について		小林文子
1938. 12. 10 クリスマス 号	111	36	近頃読んだ書物		宮城春江
		38	壁の顔（翻訳短編）		平尾初子
		42	少女部の頁		
		46	卒業生会のページ		
		47	おたより		
		48	個人消息 職員動静		
		50		不用品交換会の記	
		51	会則、幹部委員氏名、其他		
		52	編集後記		
			口絵	ベツレヘム ホルマン・ハット筆、 世界仲よし旅行、クロイツアー独奏会	
1938. 12. 10 クリスマス 号	111	2	巻頭言		加藤タカ
		4	宗教	山上の垂訓（3）	田崎健作
		8		我が目は、はや主の救を見たり	白金日本基督教会副牧師 竹森満佐一
		12		晩秋雑詠（短歌）	柚木康



		14	クリスマスにおもふこと	ベティー・クイギン
		16	冬の花	岡田廣山
		18	刀を捧ぐ（短歌）	四賀光子
		19	伯林のクリスマス	石川鍊次
		22	クイーンズ・クリスマス・カロール	草原次夫
		24	ナザレの夜に（訳詩）	塩野幸子
		26	ピアノ曲目解説 ヘンデル、ベートーベン、シューマン、 ショパン	吉川英士
		31	後期検討会報告	爾見宮子
		32	マスコカ会議の要点	
		38	ブック・リヴィウ	熊野清子
		40	翻訳短篇	語学部英語科講師 古莊みや 李如雲
		46	ごあいさつ	
1939. 2. 10	112	52	スープ料理	会員 神田夏子
		54	保健知識テストに就いて 二つの発表会	前体育部主任 平尾初子
		37		
		59	卒業生会の頁	
		60	有職婦人部	
		62	ニュース片々	
		51	東京YWCAクリスマス行事	
		62	個人消息 職員動静	
		64	会則、幹部委員氏名、其他	
		65	編集後記	
			*表紙画なし題字のみ	
		2	巻頭言	加藤タカ
		4	宗教事業 体育事業	
		6		
1939. 2. 10	112	13	昭和十三年度主なる行事	
		14	同数字的報告	
		15	会員事業	
		18	駿河台女学院	
		26	国際交友事業	
		28	社会事業	
		34	第七回全国総会申合せ実行経過	
		36	後援者増加運動経過	
		37	研究部第一小委員会	
		39	検討会二回	
		25	東京YWCAと婦人団体連盟	
		40	「現在有職婦人の合理的服装に就いて」座 談会	宗教部委員 宮澤愛
		44	良書紹介	
		46	会則、幹部委員氏名	
1939. 3. 20	113	47	編集後記	
		3	新年に序す（巻頭）	加藤タカ
		4	『キリストすでに世に勝てり』	日本同盟委員長 植村環
		6	昭和十三年決算	
		8	『明日のYWCAを語る』座談会	
		13	議事会決議事項	
		12	今年の定期総会	楠定子 塩野幸子
		14	青年運動小見	
		15	永遠なるもの	
		18	少女部の頁	武田誠子
		20	女学校卒業の皆様へ	
		21	国際有職婦人の夕	
		22	ブック・リヴィウ	
		22	世界風俗子供絵本発行に就いて	
		24	個人消息 職員動静	
		25	会則一部及幹部委員	
		26	編集後記	

巻末資料 3 (1) 東京YWCA幹事一覧

幹事 氏名	機関紙発行日 / 記事
安斎トミエ (旧：鈴木富得)	1926. 7. 24 7/19～23関西工場視察、帰京後保田休養所に出張
	1927. 2. 26 1927. 2有職婦人部幹事渡英
	1927. 2. 26 商工部幹事2月英国へと出航、商工方面の研究及び視察、落ち着く処はYWCA College, Selly Oak, Birmingham, England
	1927. 6. 10 英国バーミンガムで元気に学んでおられます
	1927. 11. 15 ボンビル・チョコレート会社の協議会出席のためジュネバに来了。訪ねたかった国際労働局を訪問。13か国から60人近く女工・職工・女工長・職工長・学校の校長・新聞記者・大学教授・平和運動家・組合運動家・労働者・教育者・工場監督官に主催会社の社長、その間なんらの隔たりもなく甲論じ乙弁じ大学教授また時に職工によってやり込められる有様、随分面白い会合です。一週間の滞在は欧州各国よりの代表者をまるで兄弟の如くに結び付けました。外国の近い欧州は国際的に恵まれて居る事を羨ましいと思います。
	1928. 11. 5 有職婦人部幹事、1年半英国に於いて勉学、 <u>米国</u> を視察し11月帰国予定
	1929. 5. 25 児童愛護デー (5/5) 講演者、本所方面出張
	1935. 4. 25 移動：有職婦人部幹事⇒会員教育幹事として会員全般に関する働きをする
	1937. 3. 20 満支視察旅行、約1か月の予定
	1939. 3. 20 転職、大阪YW総幹事へ。在職20年、労働婦人・有職婦人に対し働きかけ、有職婦人部や保田休養所の基礎を固め、白山御殿町に地区事業を営み、30年記念事業「母子ホーム」に尽くされた。謡曲、演劇に興味豊かで度々隠し芸として発表され同氏への親しみを増すものであった
河野 静子	1939. 3. 20 退職、会員部 20年4か月
	1926. 7. 24 7/18保田休養所に行かれた
	1927. 2. 26 1927. 1家庭部幹事辞職
	1927. 2. 26 家庭部幹事、油橋氏とご結婚の為1月限り止められた
渡邊松子	1932. 12 元家庭部幹事5年間モスコーに滞在後帰国
	1926. 7. 24 5月から商工部就任。今年3月目白女子大学社会科卒業
	1927. 2. 26 1926. 4日本女子大学社会科出身、有職婦人部に就職
	1935. 5. 23 有職婦人事業視察勉学の為、ミセス・バットと同船出帆、1ヶ年予定*研修の様子記事あり81号. 83号84号85号
	1936. 7. 10 7月帰国予定
大石ふか子	1936. 11. 9 帰朝後研究部として。事業足跡を検討し、能率問題を考え社会情勢をも研究しつつ基督教婦人運動としてYWの方針政策を鮮明にする為常に研究していこうとする部門
	1926. 7. 24 4月から英語部に就任。今年3月女子英学塾卒業
	1927. 2. 26 1926. 4英学塾出身、英語科に就職
	1928. 3. 25 2年の約束で英学塾卒業後すぐ英語部に就任、ミス・マクノートンと一緒に静かにやさしく生徒を育まれた。ご都合上辞職
中西司娜子姉	1927. 2. 26 1926. 6学生部幹事、結婚の為辞職
金子喜美子	1927. 2. 26 1926. 「昭和元年」. 12少女部幹事離職
	1927. 2. 26 少女部幹事、家事上の都合により辞任、同氏の健康を祈っている

河西はつ子	1927. 4. 26	4月から体育部主任ミスギボンスとご活動、先年女子英学塾御出身
	1928. 2. 25	4月女子英学塾出身、体育部幹事として就職
	1928. 2. 25	体育部幹事、9月NY女子青年会幹事養成学校入学の為渡米
	1929. 10. 15	NYセントラル体育専門学校で2か年の研究を了へ9月帰朝、直ちに体育部に
	1932. 3. 9	結婚後も体育部で勤務
	1932. 10. 7	退職、3か年体育部幹事、結婚(新：平尾)
金森久和	1927. 8. 2	2年前米国の家政大学（*10号記事：カナダオンタリオン家政大学となっている）に勉学、處去6月中旬卒業、7月中旬帰国中、9月から家庭部に就職
	1928. 2. 25	9月オンタリオ農科大学家政科卒業帰朝後家庭部幹事として就職
	1935. 7. 19	退職、家政部速成科生みの親、雑誌の料理界にも幅をきかせていた方。9年勤務。今後は講師の格で助けてくれる
	1936. 3. 11	結婚(新：宇佐川) 後も家政部責任を取っていたが3月で退職
加藤タカ	1927. 11. 15	ミス・カフマンと共に6月初めハワイに出立、引き続きアメリカ、カナダに滞在、今月末帰国
	1933. 10. 1	8/23上海9/9帰朝
	1934. 9. 25	視察勉強の他、ホノルルで開催の汎太平洋婦人会議に代表として出席
	1934. 10. 31	総幹事、疲労からの風邪、聖ルカ病院入院。ミス・カフマン寄附により職員の療養の為同病院にはベット一床が予約されている。
	1936. 2. 11	冬期休暇利用し台湾に遊ばれた
	1937. 5. 23	シベリア列車中よりたよりあり。現在ジェネバで仕事を始めている
	1937. 7. 10	スケジュール：5月ジェネバ到着、万国YW事務所、ベルギー、オランダ、パリ又はジェネバ。6月万国YW事務所で委員会、職員会、その報告実行など。7月英国オックスフォード会議、デンマーク北部地方会議。8月デンマーク・瑞典・ドイツ訪問。9月ジェネバ。10月近東地方旅行。11月ポートサイド出帆、上海
	1937. 12. 15	万国YW幹事として職務を果たされ帰朝
丹羽多嘉子	1927. 4. 26	少女部にミス・ローとご一緒にお働き、今春神戸女学院大学卒業
	1928. 2. 25	4月神戸女学院大学部出身少女部幹事として就職
	1930. 5. 5	少女部幹事、5月米国に向けて出港。6/23～29トロント国際宗教教育大会に出席後、勉学の傍ら青年会事業の視察見学。来夏帰国
	1931. 5. 29	渡米1年帰国
	1933. 10. 1	万国基督教学生連合大会へ出席、ジャワへ
	1934. 10. 30	少女部、9月夏休みに朝鮮へ帰郷。昨年来館された梨花女子専門学校の金活蘭女子と会談、同校新校舍訪問。10月にはDKより「蘭領印度ジャバ極楽島」と題する講演放送、帰京の途中では風害の関西各地を視察慰問
	1935. 10. 25	同盟少女部幹事として、ミス・ローを助けることに。来年3月まで。
	1936. 5. 10	4月より月金土を同盟、火水木を当会に勤務となった

由利郁子	1928. 2. 25	9月東京女子大学出身、体育部に就職
	1928. 5. 10	昨年9月から東京女子大学の方をお手伝いの側ら、ミスギボンスを助け半日づつ体育部にお尽くしくださったが3月で退職
山添通子	1928. 2. 25	9月前京都女子青年会幹事、有職婦人部に就職
	1928. 10. 5	商工部を都合により8月で辞任
竹内菊枝	1928. 5. 10	東京女子大学英語専攻部卒業、由利姉の後を受けて体育部に就職
	1929. 10. 15	8月で体育部辞任
	1930. 6. 10	ボストンの体育専門学校に3か年の予定で勉学
	1930. 9. 25	この夏NY近くのバイン・ログキャンプで過ごす、2人の指導者で（私とカレジを出た人）4人の子どもを担当、子供を英語で叱るのと冗談を言うのに苦心。
	1933. 10. 1	体育部主任就任。ブーヴェーボストンスクールオブフィジカルエジュケーションにて体育研究、卒業後帰国。東京女子大学体育専任を兼ねる
柳田 元	1928. 5. 10	女子英学塾出身、英語部に就職
	1929. 5. 25	英語部児童科、都合により辞任
酒井愛子	1929. 5. 25	児童愛護デー（5/5）講演者、深川方面出張
	1930. 9. 25	商業部結婚のため退職
岩井益恵	1930. 5. 5	体育部、女子英学塾出身
	1930. 10. 30	退職、体育部1年満たず
田中婦美子	1930. 5. 5	体育部、日本体育会体操学校女子部出身
塩野幸子	1930. 5. 5	少女部、神戸女学院大学部英語師範科出身
湯川晃子	1930. 5. 5	有職婦人部、日本女子大学校社会事業学部女工保全科出身
	1931. 10. 1	労働部1年半で退職（やむない都合）
風戸秀	1930. 5. 5	家政部、日本女子大学校家政学部出身、4月就職
	1931. 4. 28	家政部退職、1年
	1936. 2. 11	元家政部職員、昨年11月よりロスで勉学中
堂本菊子	1930. 6. 10	体育部就任、カリフォルニア大学で体育専攻、今春卒業5月帰国
	1931. 5. 29	アメリカから1年の約束でお手伝いそろそろ帰国
櫛田孝	1930. 10. 30	商工部幹事として就職、酒井氏後任、9月より、女子英学塾出身
	1931. 4. 28	半年の予定で米国中を視察旅行（カフマンと同じ船で）
	1932. 2. 9	帰国
	1935. 9. 14	入院手術、9月から出勤
	1937. 10. 10	病気療養中
横倉ヒロ	1930. 10. 30	退職、会員部、8年勤
伴薫子	1930. 10. 30	会員部手伝い、11月より、プリンマカレヂ卒
	1930. 12. 2	会員部手伝い、11月で辞めた
石川（旧：近本）春子	1931. 2. 10	英語部幹事、結婚後も引き続き仕事
	1931. 9. 21	2か年半の幹事生活（英語部主任）を辞任
益田米	1931. 3. 24	NYコロンビヤ大学、女子青年会トレーニングスクールで勉学後、ケンタッキーのレイビル女子青年会で実際にあたられ、2月に帰国。3月から会員部に就任。元大阪女子青年会教育部で働いていた
	1934. 12. 23	家庭婦人部幹事、4年勤務、結婚（秋吉海軍中佐）のため辞職
根本静枝	1931. 3. 24	健康すぐれず休暇静養中
	1931. 5. 29	退職、学生部幹事として1ヶ年勤務
西村壽美	1931. 4. 28	英語部就任、日本女子大学校英文科出身
	1932. 3. 9	退職、英語部1年在職
弘瀬晴	1931. 4. 28	商業部就任、女子英学塾出身
片岡静	1931. 4. 28	商業部就任、女子英学塾出身
蒲生文子	1931. 4. 28	家政部就任、活水女学校家政科出身

	1933. 12	家政部退職、結婚
大森松代	1931. 4. 28	体育部就任、東京女子大学英語専攻部出身
	1931. 4. 28	盲腸のため入院
	1935. 5. 23	少女部幹事、昨夏の学長招待が良き実を結び、米国ワシントン州立大学から2ヵ年の奨学金支給を申越されたので大森氏留学と決定。同大学家政科に2ヵ年勉学の予定
	1938. 2. 11	家政部幹事。二年間のワシントン州立大学家政科を修了し帰朝。
爾宮宮子	1931. 9. 21	英語部主任後任として就任、元神戸Y教育部幹事経験者
	1933. 5. 5	英語部幹事勉学の為渡米、来年夏帰国予定
	1934. 7. 15	1年の米国留学を終へ帰朝
	1935. 4. 29	移動：昨秋帰朝後青年会事業に関する研究中⇒駿河台女学院学監として学院及び卒業生の方面の仕事
	1938. 6. 7	学監、療養中であったが全快出勤
内海ちゑ	1931. 9. 21	野尻キャンプ水泳指導、東京女子大学卒業後米国ウエスレー大学で3ヵ年体育専攻、帰国後すぐに
岡田美喜	1932. 2. 9	会計事務幹事、10年一日の如くしっかりと働いてくれた。結婚（鳥海）のため退職
武部誠子	1932. 3. 9	家庭婦人部事務として就職
	1934. 4. 20	家庭婦人部から会全体音楽方面の責任者へ移動
	1935. 4. 29	移動：学院庶務及び音楽部事務担当⇒少女部
原口佐典子	1933. 3. 17	体育部就職、二階堂先生の体育専門学校卒
	1934. 10. 31	体育部辞職、昨年4月から9月限りで、家の都合
手塚雲	1933. 5. 5	体育部就職、NYナショナルリクリエーションスクール卒業、会全体のリクリエーションの先生、ずっとアメリカでお育ちの割には日本語出来るので安心
	1938. 6. 7	体育部、主に恵泉女子学園で教える。体育部も手伝う
高木淑	1933. 5. 5	英語部就職、主に午前の部を教える。東京女子大学大学部英文科卒
	1937. 2. 11	語学部高等科担当⇒主任（高杉氏後任）
千葉幽香	1933. 5. 5	英語部就職、英語部午後の組受持ち、児童科の面倒もみる。東京女子大学英語専攻部卒
	1934. 9. 25	東京女子大学安井先生のお伴で奉天、新京、ハルビン、安東、京城とを旅行。鄭総理、菱刈大使他とゆっくり話が出来た。また昨年生まれた新京YWの方30名と懇談
	1936. 3. 11	英語部、帝大病院に入院中
	1936. 7. 10	退職、病氣療養健康回復の為
	1937. 2. 11	国際友好部に復帰。昨年退職後休養を取った
	1938. 7. 10	国際友好部幹事、名尾・伊藤両氏と三人で7/3夜海外放送をした
田山栄	1933. 5. 5	英語部就職、主として英語部や文の組教える。女子英学塾本年卒業
	1939. 3. 20	退職、実学部 6年
岡田孝子	1933. 10. 1	家庭婦人部勤務、日本女子大学師範家政科卒業後移動青年会の料理の先生でいらした
	1935. 9. 14	移動：会員庶務⇒家政部
	1935. 10. 25	会員庶務の仕事を退き家政部の料理を受け持つ
	1937. 12. 15	家政部幹事退職、オレゴン州立大学家政科にて家政研究の為渡米
小林文子	1934. 4. 20	英語部就職、東京女子大学英語専攻部卒、 <u>ロンドン</u> 教区女子神学校2ヵ年修了、東京東部ミッション基督教社会事業連盟根岸会館少女部に1年半経験のある方

	1936. 2. 11	移動、英語部主任⇒瀬川氏後任宗教部幹事。論同 教区女子神学校に2年学ばれた経歴あり
	1938. 11. 10	印度マドラスで開催される世界宗教大会に代議員 の一人として出席神戸出帆
	1938. 3. 20	マドラス会議報告の為島村横浜YW総幹事と共に名 古屋・京都・大阪・神戸各市YW訪問
牧野綏	1934. 4. 20	商業部就職、東京女子大学大学部英文科本年卒
	1939. 3. 20	留学、駿河台女学院商業部。北米合衆国基督教女 子青年会の招へいにより年間留学、3月出帆
仲山千代	1934. 4. 20	体育部就職、東京女子大学英語専攻部本年卒
	1935. 4. 29	移動：体育部⇒商業部
	1937. 4. 23	退職、商業部、結婚
庄田さだ	1934. 4. 20	実学部就職、日本女子大学専門部社会事業学部卒 後社会事業学部指導者として5か年の経験ある方
	1936. 11. 9	実学部統制⇒会計へ
	1938. 6. 7	会計、退院後信州で療養中
三宮都	1934. 4. 20	家庭婦人部就職、米国生まれ、加洲大学卒、邦字 新聞「日米」英文欄を主宰し、所謂二世青年子 女指導にあたられた方
	1934. 10. 31	在外二世教育主任、母（在桑港）見舞いと西部 地方二世調査を兼ね米国へ出発。1月中旬に帰 京予定
	1935. 2. 11	一月日本に帰ってきた
	1935. 4. 29	退職、転職
紅松總子	1934. 4. 20	学生部幹事退職、
	1934. 6. 20	結婚後農村伝道に従事
宮崎貞子	1934. 4. 20	社会部就職、日本女子大学専門部社会事業学部児 童保全課本年卒、根岸会館で児童保全の実習をつ まれた方
	1934. 10. 31	本年4月白山御殿町の子どものおき相手となって くれていたが函館の家に帰られる。9月で辞職
寺田三千代	1934. 9. 25	家庭婦人部に就任、神戸Y少女部に4年、 <u>米国南ダ コタ州ヒューロン大学3カ年修了後インディアナ 州アップランドテイラー大学に転学し社会学心理 学を専攻、本年7月帰国</u>
	1939. 3. 20	退職、家庭部 4年7か月
田村光	1934. 9. 25	食堂部主任、保養のため渡米にその豪盛に一同を アット言わせたが、今度は桑港からNYまで一気に 飛びなすった。11月まで御勉強。お羨ましい限り
	1935. 9. 14	聖ルカ病院に入院
	1936. 3. 11	カフェテリア主任、4月より家政部主任を兼務
	1938. 7. 10	家政部幹事、病気療養中
山中志摩子	1935. 2. 11	急性盲腸炎で入院
	1935. 3. 20	盲腸全快
	1937. 5. 23	社会部、病気の為数か月休養
	1937. 10. 10	信州小布施で療養中
瀬川八重、丹羽多嘉子、渡 邊松子、竹内菊枝	1935. 2. 11	冬休み利用し北海道ニセコアン スプリまで、2 月は週末を霧ヶ峰へ、スキー旅行、山スキー練習 をされた
水口百合子	1935. 4. 29	交際友好部就職、米国コロラド州実学学校卒
	1937. 2. 11	退職、国際友好部に2年、二世の世話。結婚
村田愛子	1935. 4. 29	学院庶務就職、津田女子英学塾卒
山野井ゆき	1935. 4. 29	社会部及有職婦人婦人部就職、日本女子大学社会 事業学部卒
	1938. 11. 10	有職婦人部幹事、パラチフスで入院療養中
	1938. 12. 10	退院自宅療養中
櫻井恵美子	1935. 4. 29	体育部就職、東京女子大学国語専攻部卒
	1937. 4. 23	退職、体育部職員であったが志を立て体育師範部 に入学(吉田美和子も同様)

	1938. 7. 10	体育部職員、当会留学生としてボストンのブーヴェ・スクールに体育を勉強の為出帆
今村壽々代	1935. 5. 23	元東洋英和音楽及英語担当、当会の為音楽とパジエント研究の目的でカフマンと同船出帆、1ヶ年米国留学。＊留学の様子カナダ最初の頃の記事あり78号
	1936. 7. 10	昨年5月東京YWCA奨学金を受けて渡米され、このたび帰国。 <u>シアトルのコーニツシスクールオブドラマテイクで二学期間劇の方を、ワシントンDCのYW音楽部でカミュニティミュージックで指導を受けつつ指導に当たり、NYナショナルレクリエーションスクールのグループミンキングの講習も受けた</u>
	1937. 2. 11	昨夏帰朝、1月改姓(新：山田)、劇教育部として仕事をなされる
石畑とめ子	1935. 11. 27	社会部就職。日本女子大学社会事業学部児童保全科出身、同仁ハウスの事業に長く経験をつまれた方
	1939. 3. 2	退職、社会部 3年6か月
瀬川八重	1936. 2. 11	宗教部幹事、学院聖書の先生、会の宗教事業を負う等7年間勤務(明治学院神学部卒)、基督教社会事業家(病院経営)加藤三郎と結婚
高杉和枝	1936. 2. 11	英語部主任に就任。東京女子大学英語専攻及大学部英文科卒業後2か年半女子学院に教えられる。1932年夏渡米、 <u>インディアナ州デボウ大学にて英語及英文学を専攻2か年、その後1ヶ年クローザー神学校とペンシルバニア大学に聖書と社会学を勉強、昨年9月帰朝</u>
	1937. 2. 11	退職、語学部主任都合により、1年未満
十和田八重子	1936. 2. 11	音楽部幹事補、勉強の都合で退職
青野富美恵	1936. 5. 10	少女部就職、津田英学塾卒
	1937. 4. 23	退職、少女部、結婚
有岡美代子	1936. 5. 10	食堂部就職、青山学院家政部卒
	1936. 7. 10	退職、食堂部事務
石川百合子	1936. 5. 10	音楽部就職、宮城女学校音楽部卒
堀芳枝	1936. 5. 10	家政部就職、津田英学塾卒
	1937. 2. 11	聖ルカ病院に入院
三谷松子	1936. 5. 10	語学部就職、津田英学塾卒
	1938. 4. 10	退職、語学部
永井晃子	1936. 5. 10	キャンプ部就職、東京女子大学英語専攻部卒
	1936. 9. 18	退職(野尻キャンプ事務手伝い)、府立第一高女のお仕事に就く
	1937. 2. 11	病気の為少女部指導者を止める
菊池ただ	1936. 12. 19	旧家政部幹事、仙台常盤木学園専攻部で教えている(日本女子大学家政科出身)
白石つぎ	1937. 2. 11	在NY. ミセス・カーネギーのお茶に招かれた。ミセス・ドッチのお茶の会に行った。私が帰ってからキャンプのダイレクターとして仕事を始めるのかと思うと不安になる
	1937. 3. 20	<u>キャンプ教育の視察研究の為渡米中であつたが帰国。キャンプ委員長として幹部委員の一人だったが、今後はキャンプ教育幹事として働く</u>
	1938. 7. 10	キャンプ教育部幹事、古賀都留・澤井千恵他4名と今夏野尻キャンプ開くため先発
西川環	1937. 4. 23	就職、宗教事業部幹事補、青山学院神学部女子部卒
永島愛子	1937. 4. 23	就職、少女部幹事補、津田英語塾新卒
清水有楽	1937. 4. 23	就職、商業部幹事補、同志社・英
堀内信子	1937. 4. 23	就職、商業部幹事補心得、東京女子大・英新卒
	1939. 3. 20	退職、商業部 2年

河野勝子	1937. 4. 23	就職、商業部幹事補心得、東京女子大・英新卒
二股みのり	1937. 4. 23	就職、家政部幹事補、日本女子大・家・新卒
	1938. 4. 10	退職、家政部
小出法子	1937. 4. 23	就職、体育師範部幹事補、東京女子大・英・新卒
	1937. 7. 10	退職、家庭都合
菊池ハツ	1937. 7. 10	社会部に臨時手伝い、日本女子大学社会事業学部出身後長らく前橋県社会課主事として主に女工さんの身の上相談を受け持ち工場に出入りされその教化功績をあげていた方
	1939. 3. 20	退職、社会部 2年2か月
矢島眞	1937. 10. 10	主に体育師範部ミス・アンダーソンの通訳として就職、東京女子大英専出身
杉田薫	1937. 10. 10	云貝照務（月村氏後任）に就職、東京女子大英専出身
山地延枝	1938. 4. 10	就職、有職婦人部
	1939. 3. 20	退職、有職婦人部 1年
ミス・ミルドレッド・ロー	1926. 7. 24	5月来朝。スミス大学出身、米国女子青年会で幹事として78年の努力が続けられ博学多才経験のある方、コロンビア大学にてMA取得。本会少女部主任として就職
	1927. 2. 26	1926. 4米国より来朝、新しく少女部主任として就職
	1930. 2. 10	幹事、9か月の休暇ミセス・ローと帰国
	1930. 10. 30	休暇を得て11月帰来予定
	1933. 10. 1	東洋諸国青年会と万国同盟の諸氏との会議に、日本の青年界を代表して辻松子とともに出席のため上海に出発
	1934. 3. 20	1年の休暇で帰米
	1934. 7. 15	今夏の予定、6/20～30レークジニーヴァ（米国）学生修養会出席、8/4～10欧州ジュネバ万国基督教学生連盟会議出席、8/12～19国際連盟主催国際問題研究会、8/24～9/7万国基督教女子青年会委員会、8/29オーバーラマガン（独）のキリスト教劇、9月中旬以降NYコロンビア大学にて研究の予定
	1935. 4. 29	1年休暇（昨年3月まで少女部幹事）の後同盟幹事として再来朝
ミス・デビス	1926. 7. 24	4月から商業部。コロンビア大学出身、大学卒業後同州ウオタータウン及NYの女子青年会商工部で、主として女工方面の調査研究
	1927. 2. 26	1926. 2米国より来朝、商業科主任として就職
ミス・ギボンス	1926. 9. 25	9月体育部主任として就任
	1927. 2. 26	1926. 9来朝、体育部主任として就職
	1927. 7. 15	都合により8月で辞任
ミス・ルー・リン	1926. 12. 15	今回来朝、商工部幹事就任
	1927. 2. 26	1926. 11来朝、有職婦人部主任として就職
	1929. 2. 11	都合により6月で辞任*8p 写真記事あり
ミス・ロバートソン	1927. 2. 26	1926. 6家庭部幹事、帰国
ミス・マキナム	1927. 6. 10	ながい間本部の（日本Y）学生部主任であったがこの旅帰国
ミス・タワー	1927. 6. 10	ロバートソン様の後にお出下さいいまして料理を教えてくれたが、帰国の為4月までで中止
ミセス・ケルド	1927. 6. 10	ミスタワーの後任
ミス・マーガレット・マクノート	1929. 7. 15	5年間英語部に尽くしたが7月帰国
	1934. 9. 25	旧職員、休みを利用し来朝
ミス・エディスベーカー	1929. 10. 15	カナダモントリオール・マギール大学出身（Bachelor of Arts）モントリオールYW教育部2年間担当。ミス・マクノートンの後任
	1934. 5. 20	5/18神戸出帆カナダへ帰国



ミス・エスターロバーツ	1929. 10. 15	コロラド・ウエスタン・ステイツ大学出身、コロラドハイスクールで2年間教鞭、ミス・デビスの後任とし、商業部に就任
ミス・エマ・R・カフマン	1929. 11. 5	NYYW同盟外国部にて研究調査中、ミス・デビス、ミス・レオナ、スッコット、粕谷、佐々木愛子、横浜のミス・ベリー、赤の益田さん達と旧鍋パーティーを開かれるそうだ
	1930. 3. 30	天盃拝受祝賀会挙行
	1932. 2. 9	御帰りになられた
	1933. 10. 1	7月甥と姪を連れて帰朝
	1934. 2. 11	カナダ協会会長に選出、婦人として初めて
	1934. 9. 25	3週間南京へ、お休みがてら視察
	1934. 10. 31	カナダの政治家C・C・Fの（労働党党首）ウツド・ウオース夫妻、神戸女学院ミス・マコーズランド等と一緒に上海、南京にまた支那のウーシーの大運河を視察、12日帰京
	1935. 2. 11	毎週金曜日芝浦でスケートに御精励
	1935. 5. 23	母訪問とカナダYW全国総会出席を兼ね出帆。10月帰朝
	1935. 10. 25	10月帰朝。ミス・ブベ（ボストン体育学校長）、ミス・ホツキン（当会成人教育幹事の予定）と一緒に。
	1936. 2. 11	冬期休暇利用し台湾に遊ばれた（加藤、竹内同行）
	1936. 9. 18	セイロンの万国YW実行委員会に植村環、ミス・ローと同行出席のため出発（櫛田同行）
	1937. 10. 10	仙台から朝鮮までミス・ウツドと共に旅行
	1938. 2. 11	来朝25年お礼のお茶の会を年会当日に
	1938. 3. 7	休暇でカナダへ帰国
	1938. 4. 10	カナダ帰国中次の集会に出席予定。北米合衆国Y全国総会、同全国幹事会、万国Y常務委員会
ミス・ボイス	1929. 12. 5	家政学を研究、実習に深き経験。カフマンと共にご来朝、向う一ヶ年当会館のためお働きに
ミス・フェリス	1930. 2. 10	震災前当会体育部主任、日本に於いて最初的女子競技会の指導者、3月来朝後会館に元気な顔を見せられた
ミス・ボイル	1930. 6. 10	昨年11月カフマンとカナダから来朝、以来家政部のお料理、英語部児童の組等を受け持つ。母病気の為帰国
ミス・ルシイル・ウイルカックス	1930. 10. 30	体育部囑託として9月就任、自由学園・日本女子体育専門学校に出張教授なさる
	1932. 10. 7	退職、2年間体育部水泳ダンス、体操と指導、米国へ帰国
ミス・リーダー	1930. 12. 2	少女部医年間手伝う。カフマン先生の友人の御嬢さん、カナダより来て下さり
ミス・ダンカン	1932. 3. 9	京都女子青年会で長い間ご尽力、家族の都合で帰国
	1936. 10. 16	5年前まで京都YWの幹事であった。現在豪州の官吏、著名な放送家。米国ヨセミテで開かれた汎太平洋会議に出席、帰国の途中に来館。会議の主要問題2, 3について、特に羊毛とレーヨンの貿易をめぐる日豪間のことを少し話した。
ミス・メーベルオールデン	1932. 10. 7	新任体育部幹事、米国マサチューセッツのサージ・エンドスクール体育専攻後、コロンビア大学でMA取得。女子青年会体育部幹事として経験深い、立派なキャンプディレクター
	1933. 6. 15	体育部を退き上海へ、結婚ミセスハンターとなる
ミス・ハッキン	1936. 5. 10	4月より家政部西洋料理を教える
デゲー・ジャン	1936. 5. 10	体育師範部就職、神戸女学院大学部英文科卒

	1938. 4. 10	退職、体育師範部
ミス・エブリス・ウエーレ	1936. 7. 10	文化交換講師として後期専門学校より東京YWCAに派遣、1ヶ年滞在。ブーベエボストン体育専門学校教頭（8年）同キャンプ管理長
ミス・ロウイナ・ローズ	1936. 7. 10	同上文化交換講師、2年滞在。ブーベエボストン体育専門学校本年卒業
ミス・ウツド	1937. 10. 10	米国カンサス州立大学家政科教授、休暇でカフマン宅に滞在。学院家政部アドヴァイザーとして家政学指導者養成のため助けてくれた
ミス・クィギン	1938. 11. 10	東京YWCA語学部その他の仕事手伝う傍ら日本の事情研究の為カフマンと同船来朝。カナダの方

巻末資料3 (2) 東京YWCA職員・講師一覧

職員・講師 氏名	機関紙発行日	記事
平澤英子	1926. 9. 25	9月から受付を手伝う
	1934. 10. 31	休暇を利用し周遊きっぷで博多、別府、神戸、大阪、京都、名古屋を旅行、各都市青年会を訪問して帰京
坂本田鶴	1926. 9. 25	9月からタイプライター科を手伝う
清原英子	1926. 10. 15	英語商業科お手伝い。日本女子大学出身、長らく夫君の・・・たすけてシカゴにいらした方
三浦節子	1927. 2. 26	12月商業科を手伝う
中元菊代	1928. 2. 25	事務、結婚のため辞職 (7月)
林田愼	1928. 2. 25	病気のため辞職 (9月)
荻村操	1928. 2. 25	9月府立第一高等女学校出身、受付事務係として就職
金井千代	1928. 2. 25	会計、胆嚢炎で聖ルカ病院入院手術。経過の良好を祈る
	1934. 10. 31	元気に再び出勤
	1935. 3. 20	会計、退院出勤
	1936. 3. 11	退職 (会計)、少女時代は水道町寄宿舎から学校に通い、卒業後は青年会に勤められ10年になろうとしている。都合による
小野塚とも	1936. 11. 9	東洋英和女学校出身、国領「憩の家」取締役として就職
野呂景子	1928. 2. 25	5年間学期初めのオリエンテーションや年一度の活動写真のこと全部、「地の塩」のため色々骨折られた。結婚のため辞職
本間信子	1928. 3. 25	4月から毎日半日英語部事務の手伝い
河合時尾	1928. 5. 10	奥氏の後任として11月就職
	1928. 12. 5	移動、計画部に (吉澤氏後任)
橋本君子	1936. 7. 10	結婚のため辞任
貞島トミ	1929. 7. 15	食堂会計、病気のため辞任
鶴田定子	1929. 10. 15	保田キャンプで活躍、引き続き有職婦人部事務を手伝う
	1929. 10. 15	ワシントンに約3か年種々と経験を積まれる予定
佐藤露子	1929. 11. 5	今学期からクラブ指導員としてご尽力くださる
島崎とめ	1929. 11. 5	今学期からクラブ指導員としてご尽力くださる
太田とし	1929. 11. 5	今学期からクラブ指導員としてご尽力くださる
荒井英子	1929. 11. 5	少女部つぼみクラブを今春以来指導、結婚
奥キク子	1929. 11. 5	会館取締役として一ヶ年勤務、家事都合により11月退職
山賀富枝	1930. 3. 30	病気静養中のところ全快され復帰
	1934. 2. 11	神経衰弱で入院後、国領で保養中
	1934. 9. 25	長い静養の後新学期より商業部邦文タイプライター科の講師となった
横井貞代	1930. 3. 30	安藤坂寄宿舍の先生、長くご不快でお休みでしたが元気に復帰
	1938. 7. 10	第二寄宿舎舎監、病気療養中
山下俊子	1930. 5. 5	商業部、当会経営駿河台女学院商英両部出身、4月就職
山口綾子	1930. 5. 5	受付事務、東京女子大学英语専攻部出身、4月就職
	1931. 3. 24	受付から会員部へ (大島さんの後任)
	1932. 2. 9	結婚退職
安井寛子	1930. 5. 5	受付事務、勉学のため退職 (同志社専門学部英文科)
平山英子	1930. 5. 5	商業部、家の都合で退職、週1で音楽部オルガン科の先生で来る
驢はる	1930. 5. 5	電話交換手、前浪花分局勤務、4月就職
	1935. 6. 28	電話交換退職、5年1か月ご都合による
玉木愛子	1930. 5. 5	電話交換手、病気のため退職
高木美代子	1930. 5. 5	実学部洋裁の組講師に就任、3か年欧米各国の洋服研究を了へ帰朝
後藤栄子	1930. 6. 10	電話交換手、1か年従事都合により退職
金山マサ	1930. 6. 10	電話交換手伝い、元浪花分局勤務、6月より
	1931. 10. 1	1年2か月で退職

諏訪方枝	1930. 10. 30	英語部事務手伝い就職、9月より、駿河台女学院商業部出身
	1935. 5. 23	英語部事務退職、母死亡母代りの為。有職婦人の一人として消費組合に尽力、職員の劇研究発表等多方面で活躍、残念
横倉ヒロ	1930. 10. 30	退職、会員部、8年勤
米村きみ	1930. 12. 2	国領憩の家退職（2年）、
堀内つた子	1930. 12. 2	12月に結婚したが今年いっぱいお手伝い下さる
	1931. 2. 10	都合により12月辞任
三浦とわ	1931. 2. 10	都合により12月辞任
奥村こと	1931. 2. 10	病気療養中であつたが退職
山縣三喜重	1931. 2. 10	受付で2年間勤務、1月で辞任(日本女子大英文科)
太田みね	1931. 4. 28	英語部退職、2年勤務
山上信子	1931. 4. 28	商業部退職、4か年タイプの先生
大島貞子	1931. 3. 24	神保町時代から会員部の仕事して下さったが今度会計の手伝いに
	1932. 3. 9	退職、会員事務、会計事務など3年半勤務
小林陽	1931. 3. 24	3月から受付事務
恒吉隆子	1931. 5. 29	体育部ダンスの先生、8月で辞任
阿辻わか	1931. 5. 28	体育部就任、駿河台女学院英語部高等科出身
	1933. 5. 5	退職、体育部に2年間在職、勉学の為
松山鶴	1931. 10. 1	受付事務として就職
	1931. 11. 9	先月盲腸手術
	1932. 3. 9	移動、受付事務から会計事務へ、大島氏の後任
中條八重子	1931. 10. 1	少女部事務手伝いとして就職
	1935. 3. 2	助膜炎にて聖ルカ病院入院
	1935. 4. 29	退職、病気
佐藤さい	1931. 10. 1	電話交換手として就職
	1932. 3. 9	退職、電話・受付在職半年、結婚の為
湯川栄子	1931. 10. 30	有職婦人部実学部事務として就職
近藤一三	1931. 11. 9	国領「憩の家」手伝ってくれた、結婚のため退職
土橋富子	1932. 2. 9	ミスカフマン秘書・商業部速記の先生、彼国生まれの方日本語おかしいくらい。
	1933. 3. 17	帰米、1年後一緒に、ようやく日本語も分かるように・・・
	1934. 6. 20	昨年夏米国に帰国、ロスアンジェルスYWで働くことに、寄宿舎・クラブ・料理級での通訳等
中島千鶴子	1932. 2. 9	有職婦人部事務就職
	1938. 6. 7	実学部、聖ルカ病院で療病中
佐藤たま	1932. 2. 9	有職婦人部労働方面のお手伝い就任
	1933. 6. 15	労働部退職、萌芽時代から愛をもって育てた、「私の家」寂しくなる
多文枝	1932. 2. 29	少女部事務就職
	1933. 12.	少女部退職、奉天医科大学に勤務
	1938. 3. 7	旧少女部職員、満州医科大学に勤務であつたが昨秋辞職
立花緑	1932. 3. 9	家政部事務として就職
	1934. 12. 23	家政部事務、結婚の為3月で退職
	1935. 7. 19	結婚後も家政部に勤務していたが夫君転勤により退職。3年4か月勤務
小渡菊枝	1932. 3. 9	電話交換事務として就職
	1933. 3. 17	移動、電話事務から受付へ
	1935. 6. 28	退職、電話交換、受付事務、庶務タイプ等3年2か月勤務。「見聞をひろめ修行に行く」と南米サンパウロに出帆、3年くらいの予定
加藤よし子	1932. 3. 9	国領憩の家おばさんに女儿誕生
藤木里子	1932. 3. 9	会員事務として就職
	1933. 3. 17	退職、会員庶務、名古屋青年会へ
山橋喜代	1932. 3. 9	受付事務として就職
	1934. 2. 11	結婚、代わりが落ち着くまで手伝う
	1934. 3. 20	退職、受付2年、結婚
山田文子	1932. 3. 9	退職、家政部1年在職
湯浅千穂子	1932. 5. 25	実学部日本画の先生、3年間御指導、結婚で大阪へ

山田文子	1932. 5. 25	家政部事務、結婚
中林孝子	1932. 10. 7	体育部就職、神戸女学院出身
	1933. 6. 15	退職、体育部で1年未満、結婚
中島英子	1933. 5. 5	商業部就職、櫻井女塾卒業後英語の専検を取った方
中山ツヤ	1933. 5. 5	電話事務、志村さん後任
志村けい子	1933. 5. 5	退職、臨時に電話をお願いしていたが
吉尾静子	1933. 5. 5	退職、英語部に1か年在職、宮城女学校専門部教授に栄転
	1934. 9. 25	英語部旧職員、仙台で東北帝大教授とご結婚
谷喜久枝(恵?)	1933. 6. 15	会計事務へ就職
	1934. 2. 11	会計事務より受付へ移動
田中光	1933. 6. 15	会計事務へ就職
近藤壽満子	1933. 6. 15	体育部へ就職
	1935. 4. 29	退職、都合で
川口正子	1933. 6. 15	体育部へ(6~8月間)就職
	1938. 6. 7	体育部退職、結婚
香月つね	1933. 12.	翠香寮舎監退職、8年1か月勤務、孫の面倒
萩谷けい	1933. 12.	納戸町寄宿舍舎監就職
岡林たねを	1933. 12.	納戸町寄宿舍舎監退職、1925年から勤務、孫の面倒見る為
田中勝世	1933. 12.	家政部就職
	1939. 3. 20	退職、家政部 5年3か月
清水みどり	1933. 12.	翠香寮舎監就職、香月先生後任
	1936. 7. 10	移動、翠香寮寮監⇒河合氏後任
	1936. 9. 18	病気の為2~3か月休養
澤井千恵	1934. 4. 20	退職、プールの主お婆さんは家庭の事情で
富山美歌子	1934. 4. 20	商業部(半日)就職、神田英学塾本年卒
	1934. 12. 23	結婚の為12月で退職
	1935. 2. 11	辞職、結婚
梅野富美子	1934. 4. 20	少女部半日手伝い(つばみクラブ指導者)、学生部会員、女高師付属専攻科卒
	1935. 10. 25	家政部事務手伝い。少女部学生部時代からお馴染みの
	1937. 4. 23	退職、家政部、結婚
藤井新子	1934. 4. 20	少女部半日手伝い(つばみクラブ指導者)、学生部会員、女高師付属専攻科卒
網代恂	1934. 4. 20	受付就職、日本女子大学専門部英文学部1932年卒
久米悦	1934. 4. 20	宗教事業部・学生部就職、神田英学塾本年卒
	1937. 3. 20	移動、宗教部事務兼図書係⇒商業部
	1937. 5. 23	宗教部、病気の為休職
熊取谷松江	1934. 4. 20	少女部半日手伝い(つばみクラブ指導者)、学生部会員、青山女学院専門部卒
	1938. 3. 7	旧少女部クラブ指導員、結婚
中根登志子	1934. 4. 20	つばみクラブ指導(2年)者辞任、結婚
紀川武子	1934. 4. 20	実学部和裁科助手(辞任?)、結婚、旧館時代から有職婦人部クラブ員、最近2年間は助手として
今野恵美	1934. 7. 15	少女部指導者辞任、東京女子大学の会計に就職
平野ヒサエ	1934. 7. 15	つばみクラブ指導、都合でカナダへ帰国
紅松冬子	1934. 9. 25	体育部児童科ダンスでピアノを受けもっていた、結婚で札幌へ
吉澤夏	1934. 10. 31	計画部、疲労からの風邪、聖ルカ病院入院
上野花子	1934. 12. 23	国領憩の家で3年間働いたが11月で辞められる
井上いふ子	1934. 12. 23	少女部クラブ指導員となる
土方すみ子	1934. 12. 23	少女部クラブ指導員となる
桐澤愛子	1934. 12. 23	少女部プログラム指導者、都合により辞された
牧野延子	1935. 2. 11	少女部クラブ指導員を家の都合で辞めた
大澤綾子	1935. 2. 11	つばみクラブ指導者辞任、家の事情で帰郷
村田愛子	1935. 4. 29	学院庶務就職、津田女子英学塾卒
江越春子	1935. 4. 29	実学部就職、共立女子専門学校卒
荒木道子	1935. 5. 23	学院庶務の臨時手伝いであったが諏訪氏の後任として英語部事務職員として就職。英語部及商業部卒
	1937. 3. 20	退職、語学部英語高等科を出てすぐ語学部事務を2年たらず。家事上の都合で
永井むつみ	1935. 6. 28	学院庶務に就職、本年商業部卒

星野ちよ	1936. 2. 11	電話交換事務就職
窪川正子	1936. 2. 11	電話交換事務就職
	1936. 7. 10	退職、電話事務
小和田八重子	1936. 2. 11	音楽部就職、東京音楽学校ピアノ研究科在学中
大山美子	1936. 2. 11	商業部事務就職
	1936. 7. 10	退職、商業部事務
清水美歌子	1936. 2. 11	少女部クラブ指導員、転居
月村静江	1936. 2. 11	会員庶務就職
	1937. 10. 10	2ヵ年同労者として苦楽を共にしたが7月で辞職（会員庶務）
吉田敬子	1936. 2. 11	夏はキャンプ平生は少女部指導員、結婚
早川英子	1936. 2. 11	夏はキャンプ平生は少女部指導員、結婚
吉澤ナツ	1936. 4. 10	退職、1920年12月神保町旧会館取締りとして就職以来15年と2か月勤務。
喜多島和子	1936. 5. 10	商業部就職、駿河台女学院商業部卒
	1939. 3. 20	退職、学校庶務 3年
三橋敦子	1936. 5. 10	商業部就職、駿河台女学院商業部卒
有岡美代子	1936. 5. 10	食堂部就職、青山学院家政部卒
	1936. 7. 10	退職、食堂部事務
石川百合子	1936. 5. 10	音楽部就職、宮城女学校音楽部卒
伊東花子	1937. 4. 23	就職、語学部事務、商業部新卒
高木栄子	1936. 7. 10	翠香寮寮監就職、長い間「ベタニヤホーム」で働いた方で、30年記念事業翠香寮を知識階級母子ホームに遷都する折から適任者が与えられた
	1938. 3. 20	退職、社会部 2年11か月
鹿島こと	1937. 3. 20	体育部看護婦就職。長野県飯田高女、日本赤十字社病院救護看護婦養成所卒業、軽井沢サナトリウムに3年世の経験あり
	1937. 10. 10	赤十字に籍を置き体育部看護婦であった氏は、7月下旬応召された
島居英美子	1937. 3. 20	語学部事務就職。ロンドン生まれ、小学校前半はあちらで、女子学院、当会欧文タイプを了へ2年ほどタイピストの経験あり
山内正子	1937. 4. 23	就職、会館取締、大手前高女卒
青山宮子	1937. 4. 23	就職、有職婦人部事務、日本女子大・家・新卒
	1938. 2. 11	有職婦人部職員都合により退職
薄茂子	1937. 4. 23	就職、体育師範部事務、商業部新卒
三橋敦子	1937. 4. 23	退職、商業部、結婚
牟田きよ子	1937. 4. 23	就職、少女部事務、成女高女新卒
	1939. 3. 20	退職、庶務 2年
二橋澄子	1937. 4. 23	就職、実学部事務、女子聖学院新卒
小野寺アイ	1937. 4. 23	就職、家政部事務、日本女子大・英
鯨井俊子	1937. 5. 23	就職、受付、日本女子大英文科今春卒業
	1939. 3. 20	退職、受付 7か月
馬場茂子	1937. 10. 10	実学部事務（二橋氏後任）就職、同志社専門部出身
菊池ハツ	1937. 7. 10	社会部に臨時手伝い、日本女子大学社会事業学部出身語長らく前橋県社会課主事として主に女工さんの身の上相談を受け持ち工場に出入りされその教化功績をあげていた方
	1939. 3. 20	退職、社会部 2年2か月
井家喜代	1938. 4. 10	就職、語学部
	1939. 3. 20	退職、語学部 1年
小林節子	1938. 4. 10	就職、体育師範部
大野陽子	1938. 4. 10	就職、庶務受付事務
	1939. 3. 20	退職、受付 11か月
佐々木いね	1938. 3. 20	退職、託児 8か月

大木櫻子	1938. 4. 10	就職、体育部
	1938. 12. 10	体育部、受洗
柴田道子	1938. 4. 10	就職、家政部
齋藤和子	1938. 4. 10	就職、学院庶務
田中たか子	1938. 4. 10	就職、電話交換手
内村ニワ	1938. 4. 10	就職、体育部（看護婦）
山本金子	1938. 4. 10	就職庶務邦文タイピスト
	1939. 3. 20	退職、庶務 1年2か月
北島メリー	1938. 6. 7	語学部講師、ロータリー世界大会に父君と出席米国へ
大木梅子	1939. 3. 20	退職、体育部 9か月
ヴォランティア	1938. 6. 9	YWのお仕事を沢山の方が手伝って下さるようになった。図書館には7人の若い会員が、その他体育部・庶務・家政部・少女部・家庭婦人部・国際友好部等各部でも事務を手伝っている

巻末資料4 日本YWCA修養会一覧

	年月日	開催場所他	講師	参照号
第1回	1906.7.14-19	夏期修養会(青山女学院)28校165余名	平岩愼保、元田作之進、星野光多、奏庄吉、田川大吉郎、奥野昌綱、小松武治、外村義郎、小崎千代子、留岡幸助他	日本YWCA100年史 p5 『女子青年界』22巻10号p634:「ミス、ステラ・フイツシャーや本多貞子その他の方々と協力して河井先生が修養会リーダーとなって修養会が開かれた」
第2回	1907.7.1	夏期修養会(青山女学院)26校139名	植村正久、山室軍平、新渡戸稲造「超自然」、本田庸一他	日本YWCA100年史p5 『女子青年界』22巻10号p634 渡邊百合子(英学塾生徒)出席 p633
第3回	1908.7.14-21	夏期修養会(青山女学院)26校139名	山本邦之助「基督教の世界的運動」 元田作之進「基督教倫理」 新渡戸稲造「エスキリストの友誼」 井深花子「基督教家庭」 丹羽清次郎「朝鮮伝道」 山室軍平「素人伝道」	『女子青年界』第37巻第7号「修養会創業時代 河井道子」 『明治の女子』第5巻第5号「再び夏期講習会に就いて」 各地方に於ける諸種の学校を網羅し之を一堂に集めてその間溢る斗りの熱誠と友情とを温めむ一手段
第4回	1909.7.1	夏期修養会(神奈川県羽田)	井深梶之助「祈りの修養」 安井 哲「価値ある生活」 松永文雄「人格となりたる真理」 宮川寿美子「家庭教育と宗教」 服部綾男「日本の法律上に於ける女子の地位」 鶴崎庚午郎「時代精神と基督教」	『明治の女子』第6巻第7号「第4回夏期講習会講演」古田とみ子、松本松枝、山本琴子、村岡花子も学生として参加(22巻10号p634)
第5回	1910.7	夏期修養会(鶴沼東屋旅館)		
第6回	1911.7.12	夏期修養会(鶴沼東屋旅館)	井深梶之助「家庭に関するイエスの教訓」 留岡幸助「生命の生命」 ジョルダン博士の講演	『明治の女子』第8巻第9号「各地に行はれたる修養会会報」 妙義山上に於ける外国人の修養会盛岡女子青年会主催の夏期修養会米国女子青年会夏期修養会 英国学生青年大会の記 河井渡英中、三谷民子(女子学院)がリーダー。第6回女子青年会専用の修養会場の必要を出席者全体が痛感(22巻10号p635)
第7回	1912.7.23	夏期修養会(横須賀勝男館)26校228名	今井壽道(聖公会神学院院长)「信頼と生活」 今井革(バプテスト教会牧師、仏教教役から転)「祖先と宗教」 長尾半平(鉄道員技師、大学在学中よりYMに尽力)「先ず神の国と其義とを求めよ」 宮川経輝(大阪教会牧師、雑誌『大阪講壇』主筆)「霊的修養」 廣岡浅子(実業家、女子大創立に尽力)「基督の教訓と婦人問題」 元田作之進(立教大学校長)「基督の忠婢」 植村正久(富士見町教会牧師) 山室軍平(救世軍大佐補) 山田千代子(捜真女学校教頭) 安部清蔵(岡山教会牧師、YM他誌上に論説)	『明治の女子』第9巻第7号「日本基督教女子青年会夏期修養会近く」第9巻8号「日本基督教女子青年会夏期修養会講演」
第8回	1913.7.22-28	夏期修養会(横須賀勝男館)26校212名	井深花子「歓迎の辞」 山室軍平「基督は昨日も今日も永遠代わらざる也」 那須照子「修養会所感」 高木壬太郎「永遠の道」 井上友子「健康の道」 田島進「修養会所感」 エ・シ・マクドナルド「修養会所感」 指田静子「救済事業に就いて」 田島進「日本将来の婦人と基督の犠牲」 植村正久「新生命の根底」 佐俣愛「修養会所感」	『女子青年界』第10巻第8号「第八回夏期修養会講演」
第9回	1914.7.21-28	夏期修養会(横須賀勝男館)206名	井深花子「開会の辞」 山室軍平「神の選民」 小崎弘道「国家と基督教」 森村市左衛門「国家を救ふの道」 植村正久「信仰生活に於ける三つの要点」 笹尾桑太郎「福音の力」 吉崎彦一「実を結ぶ修養」 外村義郎「生けるキリスト」 赤星仙太「日曜学校の使命」 横田貞治「如何にして実を結ぶべきか」 木岡甲子男「個人伝道」 井上友子「衛生法」	『女子青年界』第11巻第8号「第九回夏期修養会講演」
第10回	1915.7.21	夏期修養会(横須賀勝男館)34校183名	井深花子「歓迎の辞」 今井壽道「信仰生活に於ける軍国主義」 星野光多「祈祷の性質と価値」 石原謙「我弱き時に強し」 山室軍平「献身論」 テラー「印度みやげ」 木岡莞爾「愛の苦痛」 林静太訳「理想」の婦人 河井道子「天使島の一日」 平岡けい子、袖山あい「修養会感想」	『女子青年界』第12巻第8.9号「第十回夏期修養会講演」



第11回	1916.7.21-28	夏期修養会(フェリス女学校)275名	植村正久「永遠の道に生きよ」 稲垣陽一郎「献已奉仕の光栄」 星野光多「クレネのシモン」	『女子青年界』第13巻第8号「第十一回夏期修養会講演」フェリス女学校(22巻10号p635)
			廣岡浅子「基督と婦人」	
			高田慎吾「我国に於ける社会救済事業」	
			今井壽道「生命の死活」	
			志立たき子「重要な婦人の働」	
				1916.8.1-11太平洋沿岸の大学女学生の為の米国YWCA夏期修養会に渡邊百合子他4名参加
第12回	1917.7.18-25	夏期修養会関西地区(神戸女学院)35校314名	長坂鑑次郎、森淑次郎、青木澄十郎、日野原善輔、新渡戸稲造、原田助、宮川経輝、林歌子(終日有益に)	『女子青年界』第14巻第8号「第十二回夏期修養会講師及教師」
	1917.7.24-31	夏期修養会東北地区(宮城女学院)32校191名	梶原長八郎、稲垣陽一郎、城戸順子、星野光多、岩崎重三、矢野猪三郎、留岡幸助、井深梶之助、岩崎時子「自治の精神」	『女子青年界』第14巻9号
第13回	1918.7.16-23	夏期修養会(神戸女学院)34校263名		
	1918.7.23-31	夏期修養会(尚綱女学校)34校196名		
第14回	1919.7.22-30	夏期修養会(東洋英和女学校)59校(内学生Y23校)、5市Y472名	「朝鮮基督教会再建の為」(『女子青年界』16巻8号):修養会最終日に山本忠実牧師「朝鮮問題と基督教」	1919.9.5-7全国幹事修養会(御殿場)外国人幹事20名、日本人幹事14名
第15回	1920.7.22	夏期修養会(フェリス女学校)39校(内学Y23校)、5市Y413名		
第16回	1921.7.28-8.5	夏期修養会(御殿場東山荘)		
第17回	1922.7.12-19	夏期修養会(御殿場東山荘)25校5市204名		『女子青年界』第19巻第11号「修養会の必要に就いて」「修養会の影響」
第18回	1923.7.13-20	夏期修養会(広島女学校)		
	7.24-31	夏期修養会(尚綱女学校)		
第19回	1924.7.19-22	夏期修養会(富士岡荘)第1回26校188名	佐藤定吉「純信仰の科学的価値」 西野貞子「女性と修養」	『女子青年界』第21巻第7号「第十九回夏期修養会講演の中から」
	7.24-31	夏期修養会(富士岡荘)第2回職業婦人、一般婦人148名		
第20回	1925.7.10-17	夏期修養会(富士岡荘)専門学校生の部		『女子青年界』第22巻第10号渡邊百合子「夏期修養会について」
	7.20-27	高等女学校生徒の部		* 夏期修養会20回の記録
	7.29-8.5	一般職業婦人、家庭婦女子の部	(聖書の組)松尾造酒蔵、樋田豊治、浅井治子(その他)田川大吉郎、遊佐俊彦、佐波亘(明治学院神学部教授)、高島音羽	
第21回	1926.7.2-9	夏期修養会(富士岡荘)一般婦人の部、4市部、同盟43名		
	-20	専門学部20校、2市部他141名		
	7.23-30	女学部、45校3市部他246名		
	8.8-13	有職婦人部、5市部、同盟他118名		
第22回	1927.7.15-25	夏期修養会(富士岡荘)専門学校生の部29校139名		
	7.27-8.3	女学部35校3市部173名		
	8.6-12	有職婦人、一般婦人の部5市部6校他121名	修養会指導者:時田たづ子 聖研指導者:長谷川初音、勝部武雄、桑田秀延、佐波亘 音楽指導者:津川主一 長尾半平「職業意識と婦人の自覚」 前田多門「国際労働問題」 植田タマヨ「法より愛へ」 佐波亘「大いなる拒絶」	『女子青年界』第24巻第6号「第三部有職婦人及一般婦人修養会」

第23回	1928.7.11-18	夏期修養会(富士岡荘)専門学校部17校119名		
	7.19-25	一般婦人部5市部他100名		
	7.26-8.2	女学校部36校他251名		
第24回	1929.7.12-19	夏期修養会(富士岡荘)専門学校の部13校85名		
	7.22-29	女学校の部第1回35校3市部168名		
	8.2-8	有職婦人部、92名		
	8.24-30	女学校の部第2回3校17名		
				7.12-14第1回関西職業婦人夏期修養会(紀州淡の輪)30名
第25回	1930.7.14-21	夏期修養会(富士岡荘)専門学校の部12校48名		
	7.23-30	女学校の部生徒72教師19名		
	8.4-	一般婦人の部82名		
				7.16-19第1回西南地方学生の部修養会(福岡県社会教育会館、福岡女学校)
第26回	1931.7.13-20	夏期修養会(富士岡荘)専門学校の部15校73名教師11名		
	7-23-30	高等女学校の部20校148名教師他25名		
	8.4-9	有職婦人、一般婦人の部6市部93名	修養会指導者:山本琴子 講師及び指導者10名、参加者93名 (東京49・横浜7・名古屋2・京都5・大阪6・神戸5・個人9) 事務会:会期中の心得及び事務規定等の打合せ、聖書と協議会の組分、各係員選定等 協議会:加藤高子指導—時事問題、安齋とみえ指導—結婚問題、木村ゆき子—婦人と法律、宮原きく子—職業婦人問題 講演:久布白落実—「婦人問題」略「禁酒問題、魔娼問題、平和問題は今日婦人の最も多く感心すべき問題である。」 鈴木文治(労働総同盟)—「社会及び労働問題」 座談会:各女子青年会より弁士選定して意見の発表「関西人と関東人との相違」「職業婦人の服装問題」「国営鉄道従業員の共済組合に就いて」等 全国有職婦人婦人連合会総会 その他、礼拝、聖書研究、プール、運動、キャンプファイヤー、親睦会、娯楽指導、遠足、村の夕(今季は村の児童の会)	『女子青年界』第28巻第9号「第26回夏期修養会」) 一般婦人及有職婦部、修養会日記 * 詳細プログラムあり
第27回	1932.7.13-20	夏期修養会(富士岡荘)専門学校の部10校東京他75名	中心思想「平和」	
	7.25-8.1	高等女学校部16校他153名		
	8.6-11	一般婦人、有職婦人部5市部他61名	中心思想「社会人としての婦人」	
第28回	1933.7.12-19	夏期修養会(富士岡荘)専門学校部15校69名	中心思想「神による我等の世界」	
	7.25-8.1	高等女学校部150名		
	8.4-9	一般婦人、有職婦人部6市部他67名		

第29回	1934.7.12-19	夏期修養会(富士岡荘)専門学校部86名	中心思想「信仰と生活」	
	7.14	学生連盟第1回總會	中心思想「平和」	
	7.24-31	高等女学校部18校3市部他168名		
	8.3-9	第10回一般、有職婦人部5市部、小金井青葉会94名	修養会中、各市Y有職婦人クラブ代表会合、全国有職婦人連盟につき協議、規約作成し、正式に連盟を組織	『女子青年界』第31巻第9号「夏期修養会一般及有職婦人修養会の毎日」*プログラム詳細有
第30回	1935.7.11-18	夏期修養会(富士岡荘)専門学校部122名、朝鮮女学生2名招待	中心思想「服従の生活」	
	7.23-30	高等女学校部23校4市部他197名	中心思想「愛と奉仕の生活」	
	8.9-15	第11回家庭婦人有職婦人夏期修養会116名	中心思想「新しき地を望む」	
第31回学生部夏期修養会	1936.7.13-20	14校98名		
	7.23-30	女学校部修養会21校3市部他155名	中心思想「キリストに依る協力」	
第12回家庭有職婦人部夏期修養会	8.4-10	123名	中心思想「信仰と使命」 会期中に第2回全国有職婦人連盟総会5市Y51名参加	『女子青年界』第31巻第9号「夏期修養会一般及有職婦人修養会の毎日」*プログラム詳細有
第32回学生部夏期修養会	1937.7.14-21	89名	中心思想「現代社会情勢と我等の態度」	
	7.23-30	女学校部修養会164名	中心思想「基督教と指導者」	
第13回家庭婦人部夏期修養会	8.4-11	35名	中心思想「現代に於ける婦人の地位」	『女子青年界』第34巻第7号「第13回有職婦人部修養会、第13回家庭婦人部夏期修養会」
第13回有職婦人部夏期修養会	8.7-11	91名	中心思想「現代社会情勢と我等の態度」	有職婦人(8/7~8/11)と家庭婦人(8/4~8/11)別開催 * 簡単プログラムあり
第33回学生部夏期修養会	1938.7.13-20	103名	中心思想「基督による団結」	
	7.26-8.2	女学校部夏期修養会158名	中心思想「基督教と奉仕」	
第14回家庭婦人部夏期修養会	8.5-11	38名	中心思想「非常時に於ける我らの使命」	
第14回有職婦人部夏期修養会	8.7-11	79名(費用9円)	中心思想「基督による団結」 修養会指導者:成尾かつ子(神戸Y幹事)  礼拝・聖研:田崎健作(日本組合京都教会牧師)、櫛田孝(東京Y幹事)、成尾かつ子 講演:市川房江「社会の変遷と婦人の地位」加藤タカ「欧州のYを巡って」 渡邊松子「YWCA研究」 協議会:神戸・横浜・東京・京都・同盟各幹事 音楽指導:有田敏子(元神戸女学院音楽部教授) リクリエーション指導:竹内菊枝(東京Y幹事)、中島孝子(津田英学塾教授)	『女子青年界』第35巻第7号「第14回有職婦人部夏期修養会」
第34回学生部夏期修養会	1939.7.17-24	190名	中心思想「基督教青年の自覚と使命」	
	7.31-8.7	女学生修養会195名	中心思想「新しき時代を負ふ者」	
第15回家庭婦人修養会	8.10-15	60名	中心題目「時局と婦人の生き方」	『女子青年界』第36巻第8・9号「現代の家庭婦人は何を考え何を悩んでいるか」アンケート調査
第15回有職婦人修養会	8.11-15	87名	中心題目「時局と婦人の生き方」	「家庭婦人修養会を終わって」西川環(東京Y幹事)  「有職婦人部修養会を指導して」島村ヤマ(横浜Y総幹事)

第35回学生部夏期修養会	1940.7.17-24	140名	中心思想「基督の勝利」	
	8.1-8	女学部修養会144名	中心思想「信仰の勝利」	
	8.26-30	一般女学生修養会105名(女学部修養会は代表者制のため)		
	8.10-15	50名	中心思想「我が生くるは基督」 講演:東亜問題と青年婦人への期待 駒井静江(同盟地方委員)	『女子青年界』第37巻第9号
	8.18-22	111名	中心思想「苦難をとほして希望へ」 講演:田川大吉郎(代議士)「激変する世界と日本の位置」 安斎トミエ「来るべき社会と職業婦人の役割」	
報国団青年部夏期鍛錬会	1942.7.24-31	(野尻)32名	聖書研究、生活訓練	
第17回有職婦人夏期修養会	7.25-	関西琵琶湖畔・復活学園キャンパス31名 関東部国領憩の家44名	中心思想「基督教勤労観」	『女子青年界』第39巻第7号「第17回有職婦人夏期修養会」